宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集

やまさきうえのはる
山崎上ノ原第２遺跡
やまさきしものはる
山崎下ノ原第１遺跡

主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集
『山崎上ノ原第2遺跡　山崎下ノ原第1遺跡』正　誤　表

ページ・図番号	誤	正
p55－5行目	憶5・6号墳周壕内	憶5・6号墳周濠内

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集

やまさきうえのはる
山崎上ノ原第２遺跡
やまさきしものはる
山崎下ノ原第１遺跡

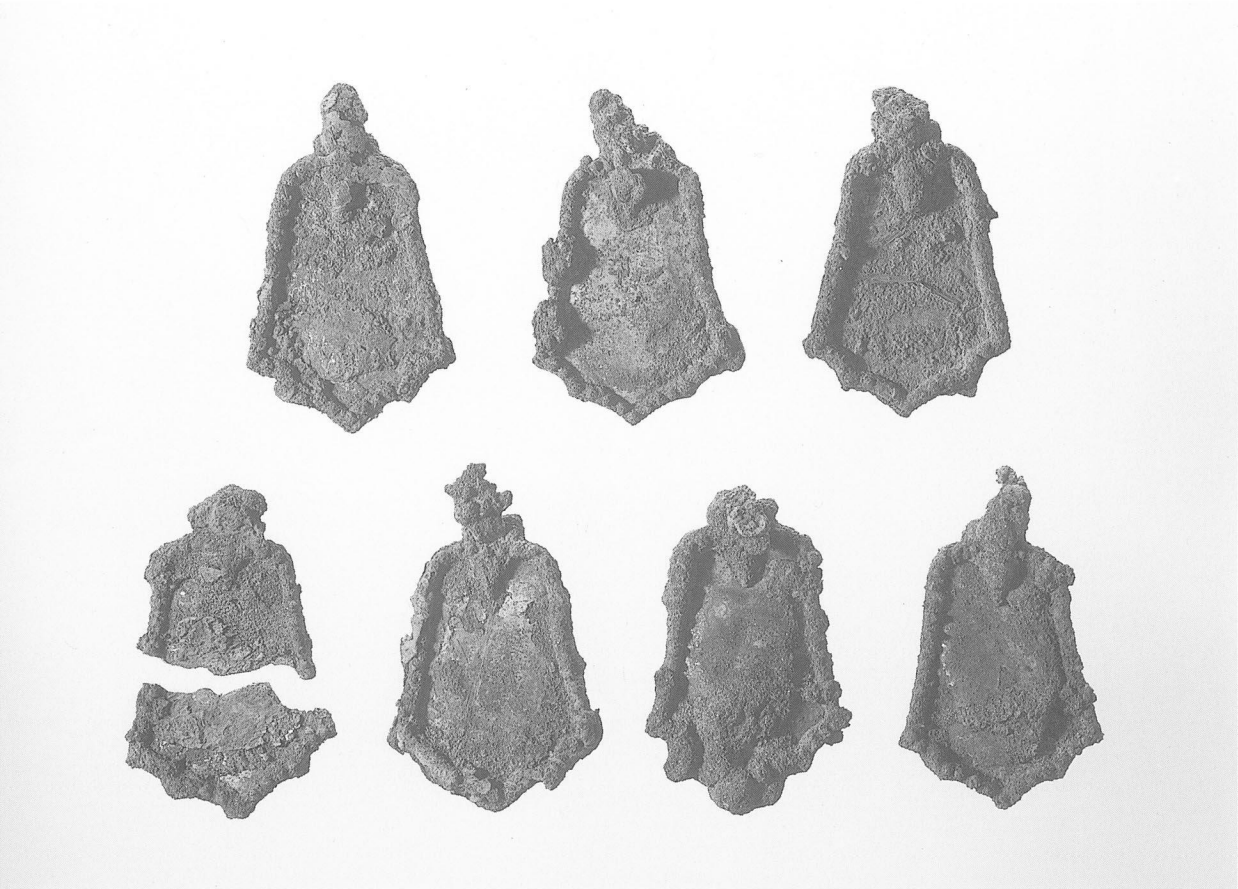
主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

2003

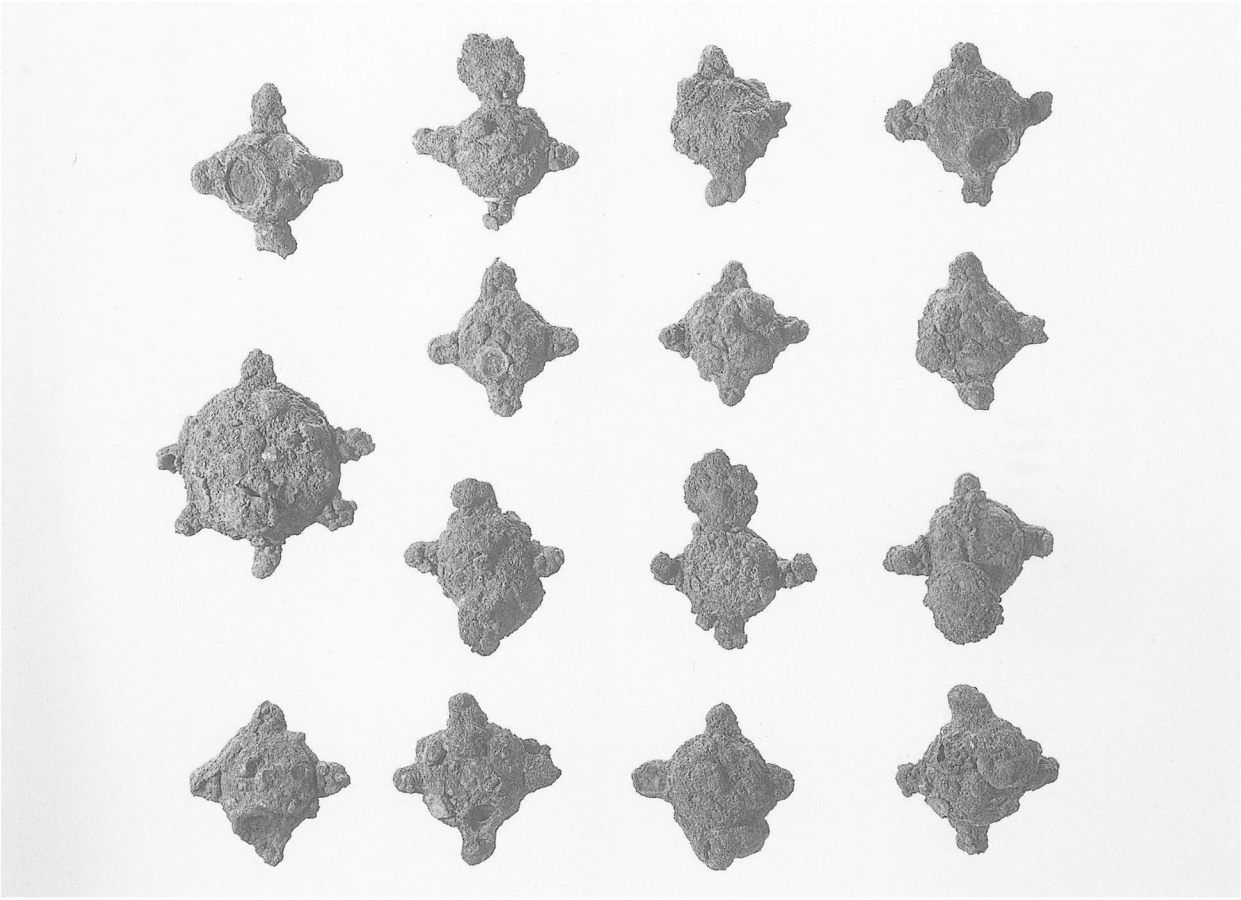
宮崎県埋蔵文化財センター

山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡調査区全景（南から）

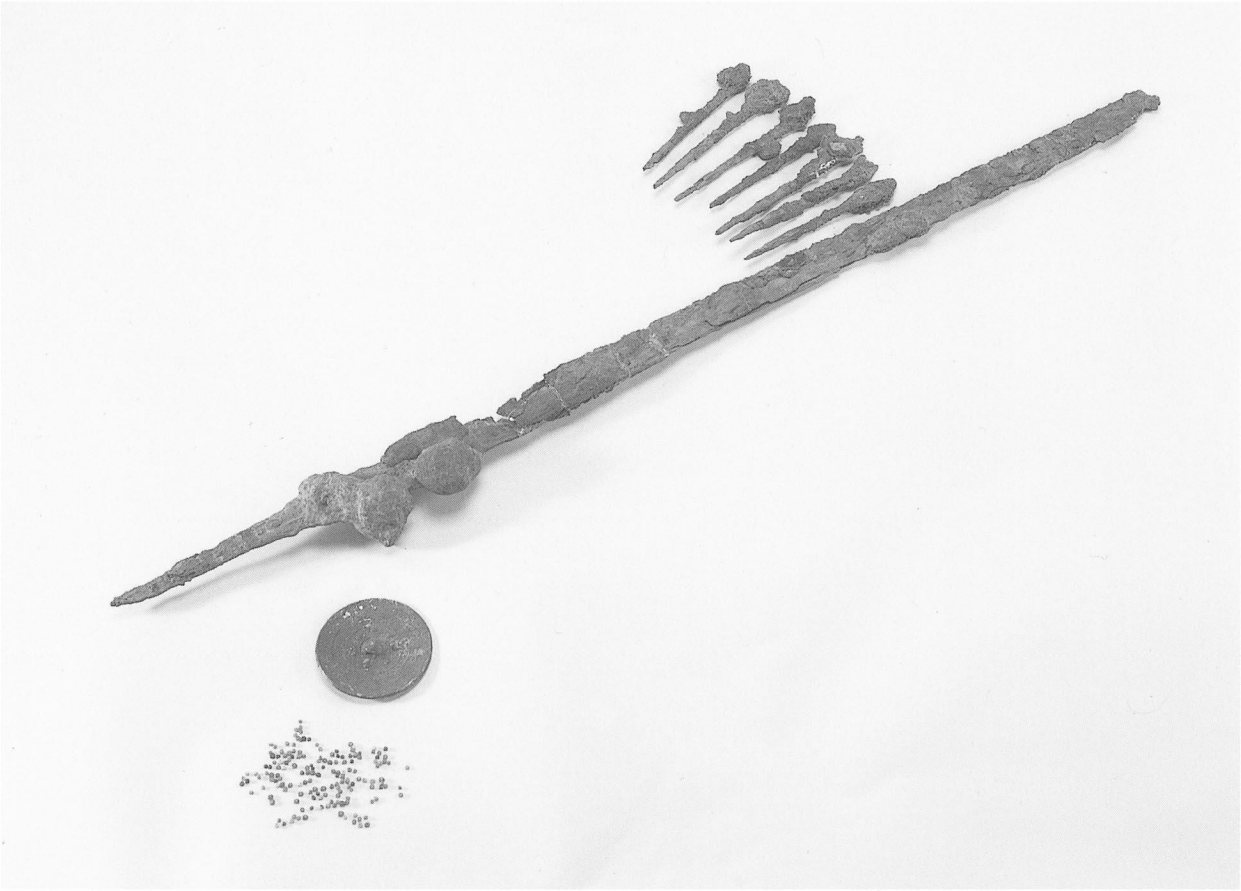
山崎下ノ原第１遺跡SC16出土馬具ー１



山崎下ノ原第１遺跡SC16出土馬具ー２



山崎下ノ原第１遺跡SC16出土馬具ー３



山崎下ノ原第１遺跡第２号墳主体部出土大刀・鏡・ガラス小玉・鉄鏃

序

宮崎県教育委員会では、主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴い、平成13年度から山崎上ノ原第２遺跡および山崎下ノ原第１遺跡の発掘調査を実施しております。今回報告するものはそのうちの平成14年度第２次調査分までの記録です。

今回の調査では、古墳時代の竪穴住居跡や古墳の周溝・土坑など貴重な遺構・遺物が多数検出されました。中でも、馬埋葬土坑から鉄地金銅張製馬具がセットで一括出土したことは特に注目されます。このような先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料が多数得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導・御助言いただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方に心より謝意を表します。

平成15年10月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長　米　良　弘　康

例　言

1　本書は、主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴う事前調査として、宮崎県教育委員会が実施した「山崎上ノ原第２遺跡」「山崎下ノ原第１遺跡」の発掘調査報告書である。遺跡名は、当初「上ノ原第１遺跡」としていたが、調査中に遺跡名が正確でないことが判明し、文化課と宮崎市文化振興課を交えて協議した結果、県内に同名の遺跡が複数あることもあり、字名を頭に付けて北側を山崎上ノ原第２遺跡（A区からE区）、南側を山崎下ノ原第１遺跡（F区からI区）と、遺跡名を変更した。調査は、宮崎県土木部宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

2　発掘調査は、第１次調査を平成13年８月１日から平成14年２月28日、第２次調査を平成14年４月15日から平成14年５月24日まで２か年にわたって実施した。この２次調査分までの整理作業及び報告書作成は平成14・15年度で実施した。

3　本書で使用した位置図は、国土地理院発行の２万５千分の１図『宮崎市』を、遺跡の周辺地形図等については宮崎市都市計画図の１万分の１図を基に作成した。

4　現地における実測図の作成は主として、南正覚雅士、丹俊詞が担当し、檍５号墳の墳丘測量は甲斐貴充、古屋美樹がおこなった。なお。墳丘測量に当たっては、地権者である井野範男氏の協力を得た。

5　本書で使用した写真は南正覚、丹、今塩屋毅行が撮影し、空中写真については(有)スカイサーベイ九州に委託した。

6　本遺跡における自然科学分析は(株)古環境研究所、金属製品の応急処置は(株)京都科学に委託した。

7　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成・遺物実測及びトレースは、南正覚、丹が担当し、今塩屋、成相景子、森本征明、嶋田史子、小宇都あずさ、整理作業員の協力を得た。

　また、センター内での金属製品の応急処置は主として丹が行い、日高敬子、古屋、成相の協力を得た。

8　本書の執筆は、各調査員が分担して担当し、文責は目次に明記した。編集は南正覚・丹が担当した。

9　土層及び土器の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修）に拠った。

10　本書で使用した方位は、主に座標北（座標第Ⅱ系）で、一部磁北（M．N）を用いている。レベルは海抜絶対高である。

11　本書で使用した遺構略号は次のとおりである。

竪穴住居跡（SA）　土坑（SC）　土壙基（SD）　溝状遺構（SE）　ピット（SH）

12　出土遺物・その他諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

13　独立行政法人奈良文化財研究所には、本遺跡出土の『馬具』及び『鏡』について応急処置前の調査を依頼したところ、数か月にわたって詳細な調査を行っていただいた。また、その後、調査結果並びに保存処理法等について指導・助言を賜った。このほか、調査及び報告書の作成にあたり次の多くの方々に指導や助言をいただいた。ここに厚く謝意を表する。

稲岡洋道(宮崎市文化振興課)　置田雅昭(天理大学教授)　高妻洋成(独立行政法人奈良文化財研究所)
杉井　健(熊本大学助教授)　橋本達也(鹿児島大学総合研究博物館)
松井　章(独立行政法人奈良文化財研究所)　村上恭通(愛媛大学助教授)　柳沢一男(宮崎大学教授)

［五十音順　敬称略役職名は当時］

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯……（飯田博之）　1

第２節　調査の組織……（南正覚雅士）　1

第３節　遺跡の位置と環境……（南正覚雅士）　2

第４節　調査の経過……（南正覚雅士）　5

第５節　基本層序……（南正覚雅士）　6

第Ⅱ章　山崎上ノ原第２遺跡の調査……（南正覚雅士）　7

第１節　Ａ区の調査

1　調査の概要……7

2　遺構と遺物……7

第２節　Ｃ区の調査

1　調査の概要……25

2　遺構と遺物……25

第３節　Ｄ区の調査

1　調査の概要……32

2　遺構と遺物……32

第４節　Ｅ区の調査

1　調査の概要……44

2　遺構と遺物……44

第５節　まとめ……52

第Ⅲ章　山崎下ノ原第１遺跡の調査……（丹　俊　詞）　57

第１節　調査の概要……57

第２節　遺構と遺物……57

1　周濠の調査……57

2　滅失古墳の調査……62

3　土壙墓の調査……70

4　馬埋葬土坑の調査……80

第３節　まとめ……96

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡周辺地形図…… 3
第３図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡グリッド配置図…… 4
第４図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡基本土層柱状図・確認トレンチ地層堆積状況図… 6

【山崎上ノ原第２遺跡】

A区

第５図　Ａ区遺構分布図…… 7
第６図　ＳＡ１平面・遺物出土状況図…… 9
第７図　ＳＡ１出土関連遺物図…… 9
第８図　ＳＡ２・３平面図…… 10
第９図　ＳＡ４平面図…… 10
第10図　遺構平面図及び遺物出土状況図…… 10
第11図　溝状遺構断面図…… 10
第12図　ＳＡ１出土遺物実測図（１）…… 11
第13図　ＳＡ１出土遺物実測図（２）…… 12
第14図　ＳＡ１出土遺物実測図（３）…… 13
第15図　ＳＡ１出土遺物実測図（４）…… 14
第16図　ＳＡ１出土遺物実測図（５）…… 15
第17図　ＳＡ２出土遺物実測図…… 16
第18図　ＳＡ３出土遺物実測図…… 17
第19図　ＳＡ４出土遺物実測図…… 17
第20図　ＳＥ１・２出土遺物実測図…… 17
第21図　ＳＡ１出土遺物実測図及び包含層出土遺物実測図… 18
第22図　ＳＡ５（？）出土遺物実測図…… 19

C区

第23図　Ｃ区遺構分布図…… 25
第24図　ＳＡ１・２平面図…… 26
第25図　ＳＡ３及びＳＤ１平面図…… 26
第26図　ＳＤ２～４及びＳＣ１平面図…… 26
第27図　ＳＣ１出土軽石製品実測図…… 27
第28図　ＳＤ１～４出土銭貨拓影…… 29
第29図　ＳＡ１～３出土遺物実測図…… 30
第30図　ＳＤ２及び包含層出土遺物実測図… 30

D区

第31図　Ｄ区遺構分布図…… 32
第32図　ＳＡ１～３平面図…… 35
第33図　ＳＡ４～８平面図…… 36
第34図　ＳＡ９及びＳＤ１平面図…… 37
第35図　ＳＡ９出土遺物実測図…… 37
第36図　ＳＤ１平面図及び土層断面図…… 37
第37図　ＳＤ１出土遺物実測図…… 37
第38図　ＳＤ２平面図・見透断面図…… 38
第39図　ＳＡ４・ＳＤ２出土遺物接合関係図… 39
第40図　ＳＤ２出土遺物実測図（１）…… 39
第41図　ＳＤ２出土遺物実測図（２）…… 40
第42図　ＳＡ４出土遺物実測図（１）…… 40
第43図　ＳＡ４出土遺物実測図（２）…… 41
第44図　ＳＡ１出土遺物実測図…… 41
第45図　ＳＡ５出土遺物実測図…… 42

E区

第46図　Ｅ区遺構分布図…… 44
第47図　ＳＡ１・２平面図…… 45
第48図　ＳＤ１平面図及び土層断面図…… 45
第49図　ＳＣ１平面図…… 46
第50図　ＳＡ１出土遺物実測図…… 48
第51図　ＳＡ２出土遺物実測図…… 48
第52図　ＳＤ１及びＳＣ１出土遺物実測図… 48
第53図　ＳＣ１出土遺物実測図…… 49
第54図　ＳＥ１・２出土遺物実測図…… 49
第55図　包含層出土遺物実測図…… 49
第56図　山崎上ノ原第２遺跡出土土錘実測図… 50

【山崎下ノ原第１遺跡】

第57図　山崎下ノ原第１遺跡遺構分布図Ⅰ… 58
第58図　山崎下ノ原第１遺跡遺構分布図Ⅱ… 59
第59図　檍５号墳墳丘測量図…… 60
第60図　檍５号墳周濠土層断面図…… 61
第61図　檍６号墳周濠平面図・土層断面図… 61
第62図　第１号墳周濠平面図・断面図…… 62

第63図　第２号墳平面図・断面図…… 64
第64図　第２号墳周溝内遺物出土状況…… 64
第65図　第２号墳主体部平面図・断面図…… 65
第66図　第２号墳主体部出土遺物実測図Ⅰ… 65
第67図　第２号墳主体部出土遺物実測図Ⅱ… 66
第68図　第２号墳周溝出土遺物実測図…… 67
第69図　ＳＤ１平面図・土層断面図…… 71
第70図　ＳＤ１出土遺物実測図Ⅰ…… 71
第71図　ＳＤ１出土遺物実測図Ⅱ…… 72
第72図　ＳＤ２平面図・土層断面図…… 74
第73図　ＳＤ２出土遺物実測図…… 74
第74図　ＳＤ３平面図・土層断面図…… 75
第75図　ＳＤ３出土遺物実測図…… 75
第76図　ＳＤ４平面図・土層断面図…… 76
第77図　ＳＤ４出土遺物実測図…… 77
第78図　ＳＤ５平面図・土層断面図…… 78
第79図　ＳＤ５出土遺物実測図…… 79
第80図　ＳＣ４平面図…… 80
第81図　ＳＣ５平面図・断面図…… 81
第82図　ＳＣ５出土遺物実測図…… 81
第83図　ＳＣ８平面図・断面図…… 82
第84図　ＳＣ８出土遺物実測図Ⅰ…… 82
第85図　ＳＣ８出土遺物実測図Ⅱ…… 83
第86図　ＳＣ15平面図・土層断面図…… 84
第87図　ＳＣ15出土遺物実測図…… 84
第88図　ＳＣ16平面図・断面図…… 85
第89図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅰ…… 86
第90図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅱ…… 87
第91図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅲ…… 88
第92図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅳ…… 89
第93図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅴ…… 90
第94図　ＳＣ19平面図・断面図…… 92
第95図　ＳＣ19出土遺物実測図…… 92
第96図　山崎下ノ原第１遺跡出土遺物実測図Ⅰ… 93
第97図　山崎下ノ原第１遺跡出土遺物実測図Ⅱ… 94

表　目　次

【山崎上ノ原第２遺跡】

第１表　Ａ区出土遺物観察表（１）…… 20
第２表　Ａ区出土遺物観察表（２）…… 21
第３表　Ａ区出土遺物観察表（３）…… 22
第４表　Ａ区出土遺物観察表（４）…… 23
第５表　Ａ区出土遺物観察表（５）…… 24
第６表　Ｃ区土壙墓出土銭貨計測表…… 28
第７表　Ｃ区土坑計測表…… 29
第８表　山崎上ノ原第２遺跡出土装飾具計測表…… 31
第９表　Ｃ区出土遺物観察表…… 31
第10表　Ｄ区土坑計測表…… 34
第11表　山崎上ノ原第２遺跡出土金属製品計測表…… 35
第12表　Ｄ区出土遺物観察表（１）…… 42
第13表　Ｄ区出土遺物観察表（２）…… 43
第14表　山崎上ノ原第２遺跡出土土錘計測表…… 47
第15表　Ｅ区出土遺物観察表（１）…… 50
第16表　Ｅ区出土遺物観察表（２）…… 51

【山崎下ノ原第１遺跡】

第17表　第２号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅰ…… 68
第18表　第２号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅱ…… 69
第19表　馬埋葬土坑計測表…… 80
第20表　ＳＣ16出土遺物計測表…… 91
第21表　山崎下ノ原第１遺跡土坑計測表…… 94
第22表　山崎下ノ原第１遺跡出土鉄器計測表…… 95
第23表　山崎下ノ原第１遺跡出土土器観察表（１）…… 99
第24表　山崎下ノ原第１遺跡出土土器観察表（２）…… 100
第25表　山崎下ノ原第１遺跡出土土器観察表（３）…… 101
報告書抄録…… 111

図　版　目　次

口絵１　山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡調査区全景（南から）
口絵２　山崎下ノ原第１遺跡ＳＣ16出土馬具―１・２
口絵３　山崎下ノ原第１遺跡ＳＣ16出土馬具―３
口絵３　山崎下ノ原第１遺跡第２号墳主体部出土大刀・鏡・ガラス小玉・鉄鏃
図版１　A区完掘状況／C区完掘状況／C区ＳＡ１・２及びＳＣ１完掘状況／C区ＳＣ１遺物出土状況／D区完掘状況／D区ＳＡ４（手前：ＳＤ２）／D区ＳＤ２検出状況／D区ＳＤ２検出状況…… 102
図版２　D区埋甕出土状況／D区ＳＡ５遺物出土状況／D区ＳＡ９完掘状況及びＳＤ１遺物出土状況／E区ＳＡ２遺物出土状況／E区ＳＤ１遺物出土状況／E区ＳＣ１遺物出土状況／F区完掘状況／F区ＳＤ１遺物出土状況…… 103
図版３　F区ＳＣ５馬具出土状況／F区ＳＣ８馬具出土状況／F区ＳＣ８馬具出土状況／G区完掘状況／G区檍５号墳周濠完掘状況／G区ＳＤ２完堀状況／G区ＳＤ２遺物出土状況／G区ＳＤ３遺物出土状況…… 104
図版４　G区ＳＤ４遺物出土状況／G区ＳＣ15馬具出土状況／G区ＳＣ16馬具出土状況／G区ＳＣ16馬具出土状況／H区檍６号墳周濠完掘状況／H区完掘状況／H区第２号墳完掘状況／H区第２号墳主体部遺物出土状況…… 105
図版５　H区第２号墳主体部遺物出土状況／H区第２号墳周溝内遺物出土状況／H区ＳＤ１遺物出土状況／H区ＳＤ１遺物出土状況／A区ＳＡ１出土土器／A区ＳＡ２出土土器／A区ＳＡ５出土土器／A区出土土器（１）…… 106
図版６　A区出土土器（２）・（３）・（４）／C区ＳＡ１～３出土土器／D区ＳＤ２出土土器／D区ＳＡ４出土土器／D区出土土器／E区出土土器…… 107
図版７　E区出土墨書土器／E区出土土錘／F区ＳＤ１出土土器／G区ＳＤ２出土土器／G区ＳＤ３・４出土土器／H区ＳＤ５出土土器／H区第２号墳周溝内出土土器／A区出土装飾具…… 108
図版８　A区出土鉄滓／A区出土粒状滓・鍛造剥片／A・D・E区出土鉄鏃・刀子／F区ＳＤ１出土馬具・鉄鏃・刀子／F区ＳＣ５出土馬具／F区ＳＣ８出土馬具／G区ＳＤ２～４出土鉄器／G・H区出土馬具…… 109
図版９　H区第２号墳主体部出土鏡／H区第２号墳主体部出土鏡付着有機質物質（顕微鏡写真）／G区ＳＣ16出土馬具付着有機質物質（顕微鏡写真）…… 110

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業が実施される県道宮崎島之内は、海岸線に沿って幾重にも連なる砂丘列の上にある。周辺には宮崎市教育委員会が実施した石神遺跡など幾多の遺跡が所在することで知られている。

本事業に伴い、平成４年度から宮崎土木事務所と文化課で協議を開始し、まず平成５年に発掘調査を実施している。その後も本事業と遺跡の取扱いについての協議が継続され、今回報告する地点については、平成９年度に宮崎土木事務所から照会があり、文化課が平成10年２月に現地踏査、翌年12月には確認調査を実施している。用地買収が平成12年度内に終了する予定となり、本発掘調査について具体的な協議を行い、平成13年８月から調査を開始するに至っている。

第２節　調査の組織

山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡の発掘調査は下記の組織で実施した。

調査主体　宮崎県教育委員会

調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

発掘調査〈平成13・14年度〉

所　長	矢野　剛
副所長兼総務課長	菊地　茂仁
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課総務係長	亀井　維子
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
同　主　査（調査担当）	南正覚雅士
同　調査員（調査担当）	丹　俊詞

整理〈平成14年度〉

所　長	米良　弘康
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課総務係長	野邊　文博
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
同　主　査（調査担当）	南正覚雅士
同　調査員（調査担当）	丹　俊詞

整理・報告書作成〈平成15年度〉

所　長	米良　弘康
副所長兼総務課長	大薗　和博
副所長兼調査第二課長	岩永　哲夫
総務課主幹兼総務係長	石川　恵史
調査第二課調査第三係長	菅付　和樹
同　主　査（調査担当）	南正覚雅士
同　調査員（調査担当）	丹　俊詞

第３節　遺跡の位置と環境 (第１図)

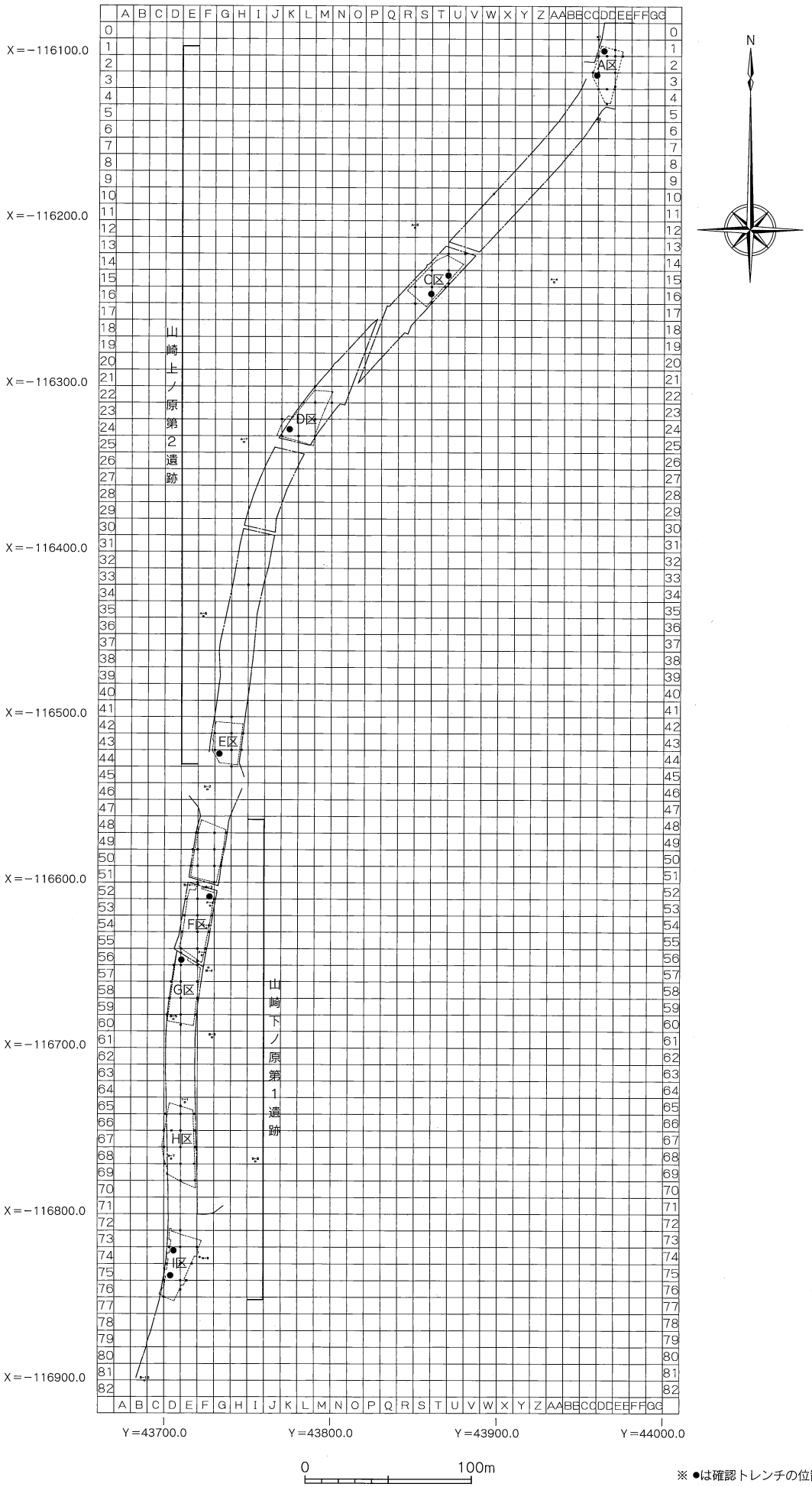
山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡(第１図－１)は宮崎(沖積)平野の北西部、宮崎市山崎町字上ノ原から字下ノ原にかけて所在する。東流して日向灘に注ぐ大淀川左岸から北へ約６km、日向灘より西へ約1.4km、標高約８～12mの砂丘上に位置する。この砂丘は第２砂丘と呼称され海岸線に沿って形成された４列の砂丘列(海岸線から内陸へ第１～第４砂丘)の一つである。当該地は住宅地及び耕作地として利用されていた。

本遺跡の周辺遺跡について時代別に概略を述べる。弥生時代の遺跡としては檍遺跡(第１図－２)や石神遺跡(第１図－３)がある。檍遺跡では甕棺墓、積石墓、さらに県内では最古と言われる弥生土器が確認されている。石神遺跡では、壺棺墓、甕棺墓、竪穴住居跡が検出されている。古墳時代の遺跡としては、檍１号墳(第１図－４)、猿野遺跡(第１図－５)、浄土江遺跡(第１図－６)、さらに国指定の史跡蓮ヶ池横穴墓群(第１図－７)がある。檍１号墳では国内最大級の「木槨」の発見が報告されている(2002)。猿野遺跡では竪穴住居跡や布留式土器に並行する土器が確認されている。浄土江遺跡では竪穴住居跡、溝状遺構が検出されている。また、本遺跡の隣接地には２基の円墳が存在し、北から「檍５号墳」(第１図－８)・「檍６号墳」(第１図－９)と呼称されている。遺跡の北側には『延喜式』に記載されている式内社である江田神社(第１図－10)が鎮座している他、遺跡周辺は日向十六駅の一つ江田(石田)駅に推定される地でもある。

1　山崎上ノ原第２遺跡（北）・山崎下ノ原第１遺跡（南）　2　檍遺跡　3　石神遺跡　4　檍１号墳
5　猿野遺跡　6　浄土江遺跡　7　蓮ヶ池横穴墓群　8　檍５号墳　9　檍６号墳　10　江田神社

第１図　遺跡位置図（S=１／100,000）

第２図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡周辺地形図（S=１／10,000）



※ ●は確認トレンチの位置を示す

第３図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡グリッド配置図（S=１／3,500）

第４節　調査の経過

山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡の調査対象面積は13,000㎡である。

主要地方道宮崎島之内線ふるさと県道整備事業に伴って平成13年８月１日より調査を開始した。まず調査範囲が道路予定路線内にあり、全長約900m・幅約20m前後と細長い形を呈するため、調査の便宜上、９区に分割し北側からＡ～Ｉ区とした(但し、Ｂ区は未買収地のため今回の調査から除く)。Ｆ区から調査を開始するが、調査区の遺構及び遺物包含層の詳細な確認を行うため試掘を行った。その結果、遺構・遺物が確認できなかった5,300㎡を調査対象面積から除外し、残り7,700㎡について調査を実施することとした。調査では、バックホーによって第Ⅰ・Ⅱ層を剥ぎとったのち、第Ⅲ層上面から人力で掘り下げを行った。なお、調査期間は平成13年８月１日から平成14年２月28日(第１次調査)、平成14年４月15日から平成14年５月24日(第２次調査)と２か年にわたっている。

各調査区の位置関係を把握し測量実測の基準とするため、国土座標に合わせた10mグリッドを設定した。以下、作業日誌によって概要を記す。

H13　8／ 1　１次調査開始。

8／22　Ｆ区：土師器・須恵器が出土し始める。南端で古墳の周溝を確認。

8／28　Ｆ区の調査を中断して、調査区全域の詳細な確認調査を行う。

9／19　Ｆ区：調査再開。周溝及び土坑の掘り下げ。土壙墓(１基)・馬具を伴った馬埋葬土坑(３基)を確認。

11／ 6　Ｄ区：竪穴住居跡(６軒)を検出。１軒の住居の床面から土器床(仮称)を施した土壙墓(１基)を検出。

11／20　Ｄ区：さらに竪穴住居跡(３軒)、土壙墓(１基)を確認。

12／ 5　Ｃ区：竪穴住居跡(３軒)、土壙墓(４基)、溝状遺構(１条)を確認。土壙墓からはいずれも洪武通宝が出土。中世の土壙墓と思われる。

12／14　Ａ区：竪穴住居跡(４軒)を確認。住居内より多量の土師器・須恵器が出土。
Ｅ区：竪穴住居跡(３軒)、土壙墓(１基)、溝状遺構(２条)を確認。

H14　1／ 5　Ｈ区：土壙墓(２基)、馬埋葬土坑(１基)等を検出。檍６号墳の周濠の一部の掘り下げを行う。

1／ 7　Ｉ区：調査区中央南側でピット15基を確認、出土遺物はない。

2／19　Ｈ区：調査区に東西方向のトレンチを２本いれる。南側に設定したトレンチの中央から大刀(１振)・鏡(１枚)・ガラス小玉(150数個)が出土する。

2／21　Ｈ区：北側で滅失古墳の周溝が確認された。大刀等が出土した土壙墓は滅失古墳の主体部であることが判明した。

2／28　１次調査終了。

4／15　２次調査開始。

4／24　Ｇ区：周溝(Ｆ区で確認された周溝の続きである)、土壙墓(４基)、馬埋葬土坑(１基)を確認する。

5／16　Ｇ区：檍５号墳の周濠の一部の掘り下げを行う。

5／17　Ｇ区：周溝縁辺で馬埋葬土坑を確認。鉄地金銅張製馬具を含む馬具一式が出土。

5／24　２次調査終了。

第５節　基本層序（第４図）

本遺跡は、調査前まで住宅地もしくは耕作地として利用されていたため、調査区内の殆どの部分が平坦に造成された上に盛土を施され、上層においては本来の層序をとどめていない箇所もある。しかし、下層の堆積状況は良く、基本層序は大きく第Ⅰ層～Ⅴ層の５層とした。ここでは基本層序と本調査に先立って行った確認調査の結果も併せて記載する。

基本層序

第Ⅰ層
第Ⅱ層
第Ⅲ層
第Ⅳ層
第Ⅴ層

第Ⅰ層　褐色～黒褐色層。平均20cm程度の厚さ(最大で80cm近く)で堆積する。砂質が低く、ブロック状の褐色～黒褐色土を含む。攪乱のためか遺物(土器片)を多く含む。造成土・耕作土と考えられる。

第Ⅱ層　黒褐色砂質土層。厚さ20～60cm程度の厚さで堆積する。他の砂質土に比べて砂粒が細かく、土の混入割合が高い。色調はチョコレート色に似ている。

第Ⅲ層　褐色砂質土層。厚さ20～60cm程度の厚さで堆積する。第Ⅱ層と似ているが、色調が明るく、砂粒が少し粗くなっている。

第Ⅳ層　青灰砂層。かなり厚く堆積している。砂粒は粗く、砂のみで構成されている層である。

第Ⅴ層　暗青灰砂層(基盤層)

《確認調査の結果》

A区

①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。宅地跡。	① 20cm
②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。	② 40cm
③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。	③ 20cm
④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。	④ 60cm

C区

①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。	① 20cm
②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。	② 10cm
③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。	③ 40cm
④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。	④ 60cm

D区

①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。	① 20cm
②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。 ③青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。	② 20cm
	③ 60cm

E区

①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。宅地跡。	① 80cm
②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。	② 35cm
③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。	③ 30cm
④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。	④ 30cm

F区

①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。	① 10cm
②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。	② 5cm
③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。	③ 25cm
④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。	④ 15cm

G・I区

①黒褐色土(第Ⅰ層)表土。耕作土。	① 20cm
②黒褐色砂質土(第Ⅱ層)遺物を含む。	② 20cm
③褐色砂質土(第Ⅲ層)遺物を含む。	③ 50cm
④青灰砂質土(第Ⅳ層)遺物なし。	④ 40cm

※Ａ区～Ｉ区の試掘地点については、第３図山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡グリッド配置図を参照。

第４図　山崎上ノ原第２遺跡及び山崎下ノ原第１遺跡基本土層柱状図・確認トレンチ地層堆積状況図

第Ⅱ章　山崎上ノ原第２遺跡の調査

第１節　Ａ区の調査（第５図）

１　調査の概要

調査面積は260㎡である。標高は約12.0ｍで本調査区の中で一番高く、地形は平坦である。

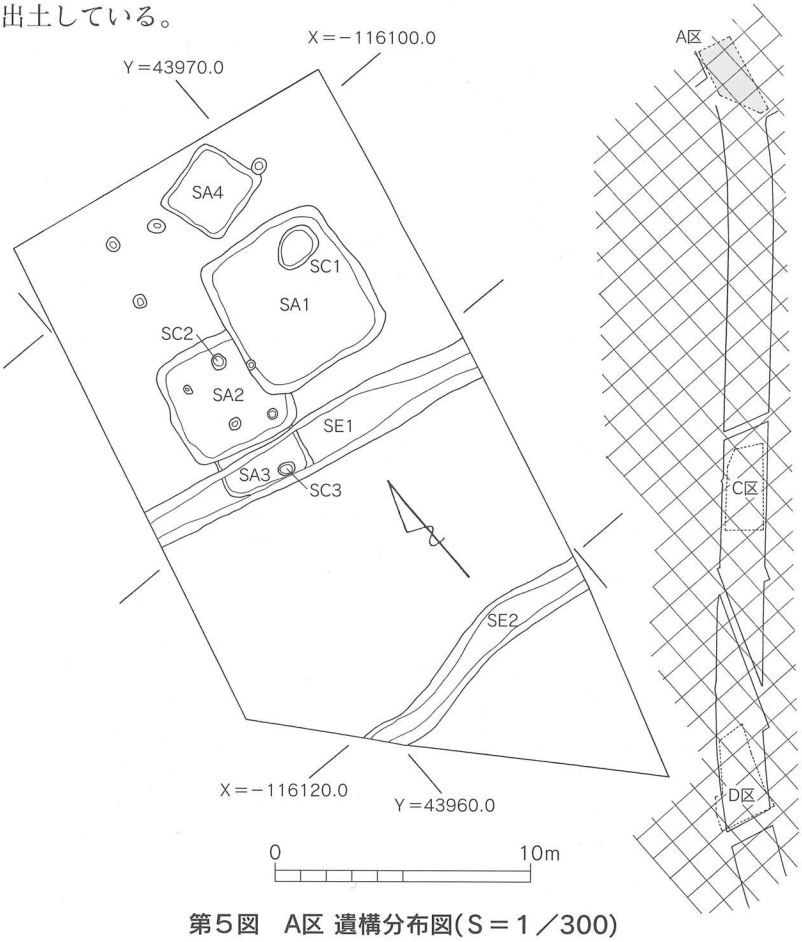
古墳時代の竪穴住居跡４軒、時期不明の溝状遺構２条、土坑３基、ピット８基が確認された。検出面は第Ⅲ層の褐色砂質土層である。竪穴住居跡は北端部で１軒、調査区中央北側では３軒が切り合った状態で確認されている。遺物は殆どが住居跡から出土し、土師器、須恵器、勾玉の滑石製模造品(１点)、管玉(１点)、ガラス小玉(３点)、滑石製小玉(５点)、金属製品(４点)、土錘(１点)等が出土している。さらに鞴の羽口やまとまった量の鉄滓が出土している。

２　遺構と遺物

(１)竪穴住居跡(SA)

SA１（第６図）

調査区北側のやや東側に位置し、ＳＡ２を切っている。長軸約6.0ｍ、短軸約5.8ｍの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約50～60㎝、床面積は約29.4㎡を測る。長軸方向はＮ―28°―Ｅを指す。なお、住居跡に伴う主柱穴は検出されていない。また、北東隅には土坑(ＳＣ１)が掘り込まれており、規模は長軸約180㎝・短軸約130㎝・深さ約37㎝の楕円形プランで、出土遺物はない。住居跡内からは土師器、須恵器など約500点余りが検出面から床面の間で出土し、90％が土師器、５％が須恵器である。さらに、検出面や埋土中から鉄滓が検出されたため、住居跡内の覆土を篩(ふるい)にかけたところ鉄滓に混じって、粒状滓や鍛造剥片も確認された。さらに勾玉の滑石製模造品(１点)、管玉(１点)、ガラス小玉(３点)、滑石製小玉(５点)、金属製品(４点)、鞴の羽口も出土している。なお、勾玉の滑石製模造品・管玉・ガラス小玉・滑石製小玉については第８表『山崎上ノ原第２遺跡出土装飾具計測表』を、金属製品については第11表『山崎上ノ原第２遺跡出土金属製品計測表』を参照いただきたい。



第５図　A区 遺構分布図(Ｓ＝１／300)

【出土遺物】第12～16図ＳＡ１出土遺物実測図(１)～(５)　第21図　ＳＡ１出土遺物実測図及び包含層遺物実測図　１～68(Ａ区出土遺物観察表)

SA２（第８図）

ＳＡ３の北側を３分の１程を切り、ＳＡ１により住居跡の北東部を切られている。長軸約4.9ｍ、短軸約4.5ｍの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約60㎝、床面積約18.4㎡を測る。長軸方向は

N—32°—Eを指す。住居跡内で土坑(ＳＣ２)、ピット３基を検出したが中から遺物は出土していない。なお、主柱穴は確認できなかった。遺物は殆どが土師器で検出面から床面の間で約230点が出土している。
【出土遺物】第17図ＳＡ２出土遺物実測図　76～92(Ａ区出土遺物観察表)

SA3(第８図)

ＳＡ２により住居跡の北側部分を切られ、さらに南側もＳＥ２によって切られている。長軸約3.5m短軸約3.0mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約60㎝、床面積は約10.2㎡である。長軸方向はN—32°—Eを指す。ＳＡ２とＳＡ３の床面はレベル差がありＳＡ３が10㎝程低い。南東隅の壁際で土坑(ＳＣ３)、北側でピット２基を検出したが、中から遺物は出土していない。なお主柱穴は確認されていない。遺物はほぼ床面で土師器、須恵器等が約60点出土している。
【出土遺物】第18図ＳＡ３出土遺物実測図　93～99(Ａ区出土遺物観察表)

SA4(第９図)

ＳＡ１の北側に位置する。規模は長軸約3.0m、短軸約2.8m、床面積約7.6㎡を測る。平面プランは隅丸方形を呈し、検出面からの深さはＳＡ１～３に比べて浅く約20㎝を測る。長軸方向はN—6°—Wを指す。主柱穴は確認されていない。遺物は土師器、須恵器等が約50点が出土し、検出面から床面の間で確認されている。
【出土遺物】第19図ＳＡ４出土遺物実測図　100～104(Ａ区出土遺物観察表)　105(第14表『山崎上ノ原第２遺跡出土土錘計測表』)

(２)溝状遺構(SE)

SE1(第10･11図)

長さ約14.4m、溝幅約1.6～2.2m、検出面からの深さは約20～40㎝を測る。溝の断面形態はＵ字状を呈する。調査区外に延びるため溝の走行については不明である。
【出土遺物】第20図ＳＥ１・２出土遺物実測図　106・7(Ａ区出土遺物観察表)

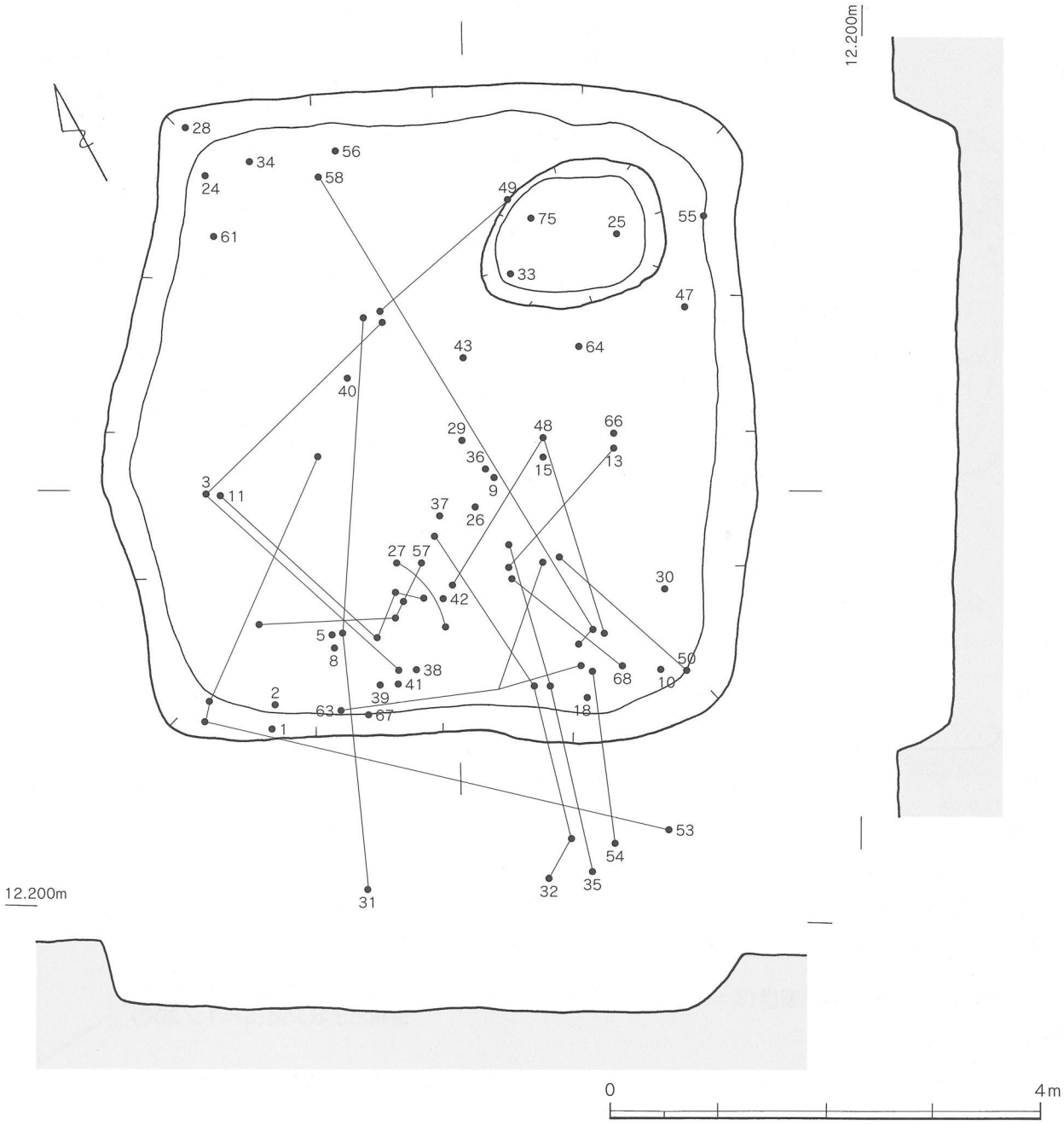
SE2(第10･11図)

長さ約11m、溝幅約1.7m、検出面からの深さは約45～60㎝を測る。溝の断面形態はＵ字状を呈している。調査区外に延びるため走行については不明である。なお、ＳＥ１・２ともに古墳時代の遺物が出土しているが、これらは流れ込みによるものと思われ、ＳＥ１・２の構築時期については不明である。
【出土遺物】第20図ＳＥ１・２出土遺物実測図　108・9(Ａ区出土遺物観察表)

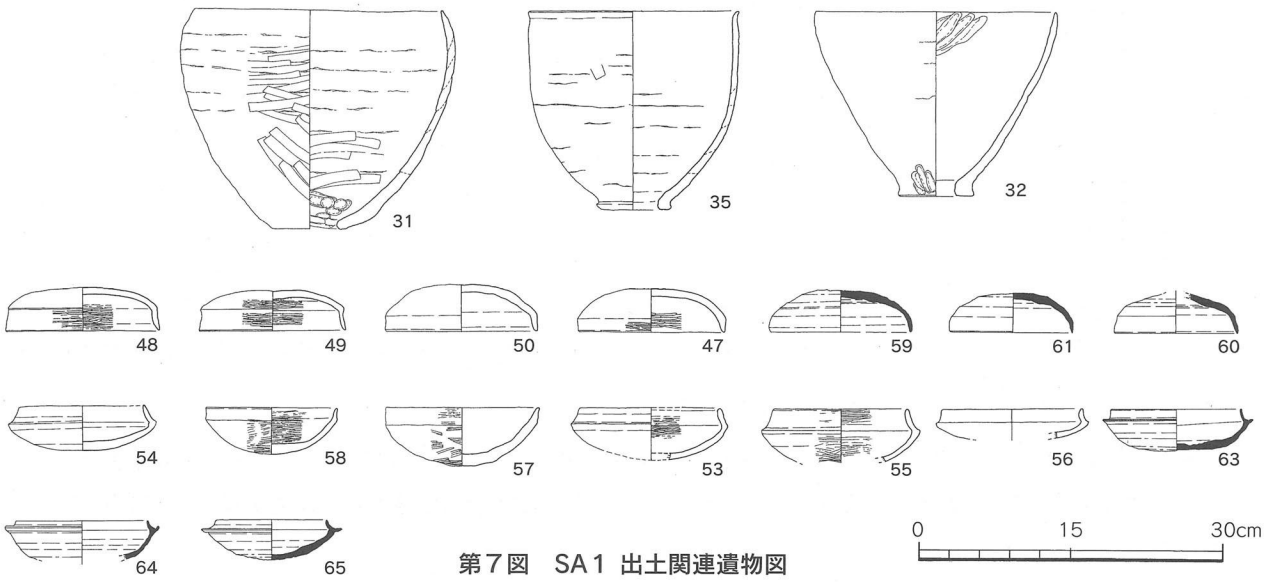
(３)包含層(第10図)

包含層出土遺物は、須恵器の坏身・蓋、高坏、土師器の坏身・蓋、ミニュチュア土器等の祭祀儀礼に関連した遺物が出土している。詳細は『第21図ＳＡ１出土遺物実測図及び包含層出土遺物実測図』及び『Ａ区出土遺物観察表』の110～132を参照いただきたい。

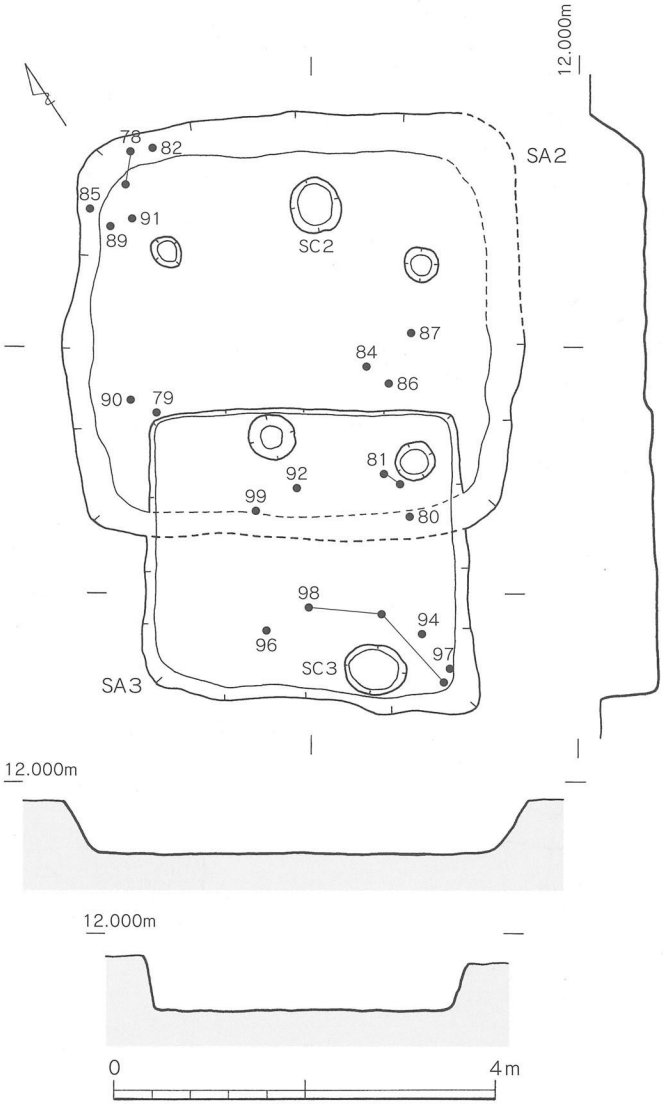
なお、調査区南側の西壁付近では完形品に近い土器が数点出土している。これらはおそらく調査区外に広がる竪穴住居跡(遺構の一部を調査区土層断面にて確認)に伴う遺物と思われたため、第22図に参考資料として掲載した。



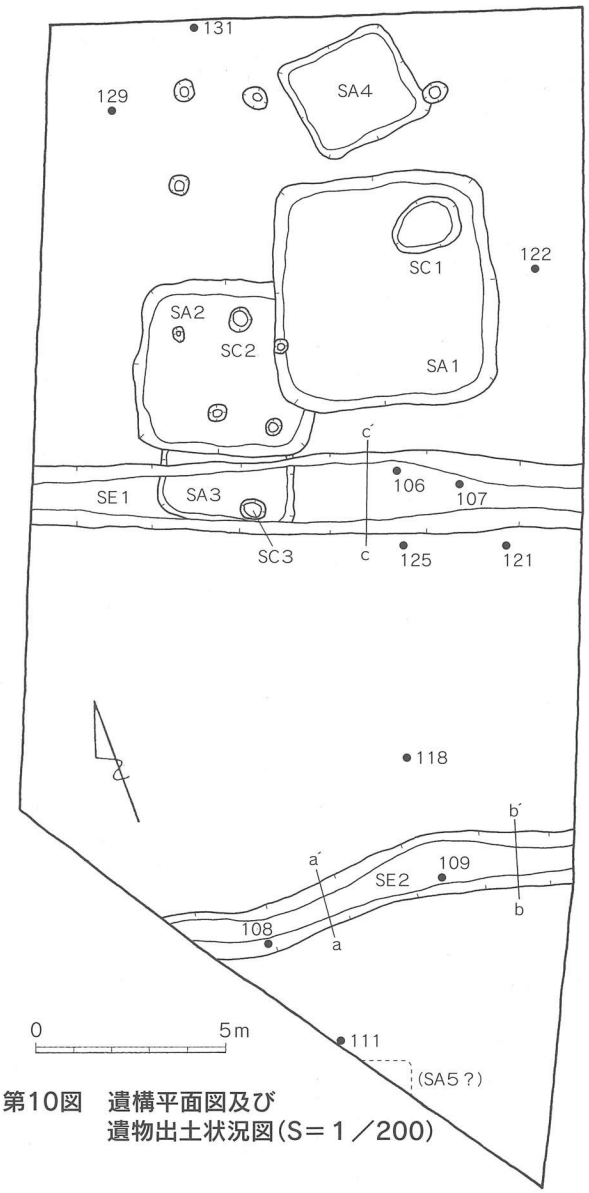
第６図　SA１平面・遺物出土状況図(S＝１／60)



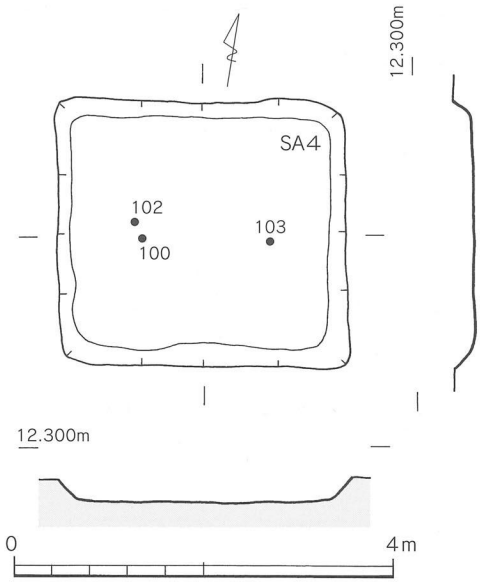
第７図　SA１ 出土関連遺物図



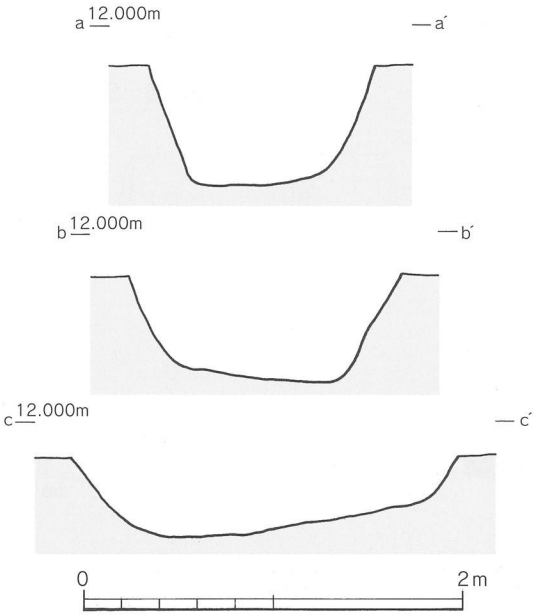
第８図　SA2・3平面図(S＝1／80)



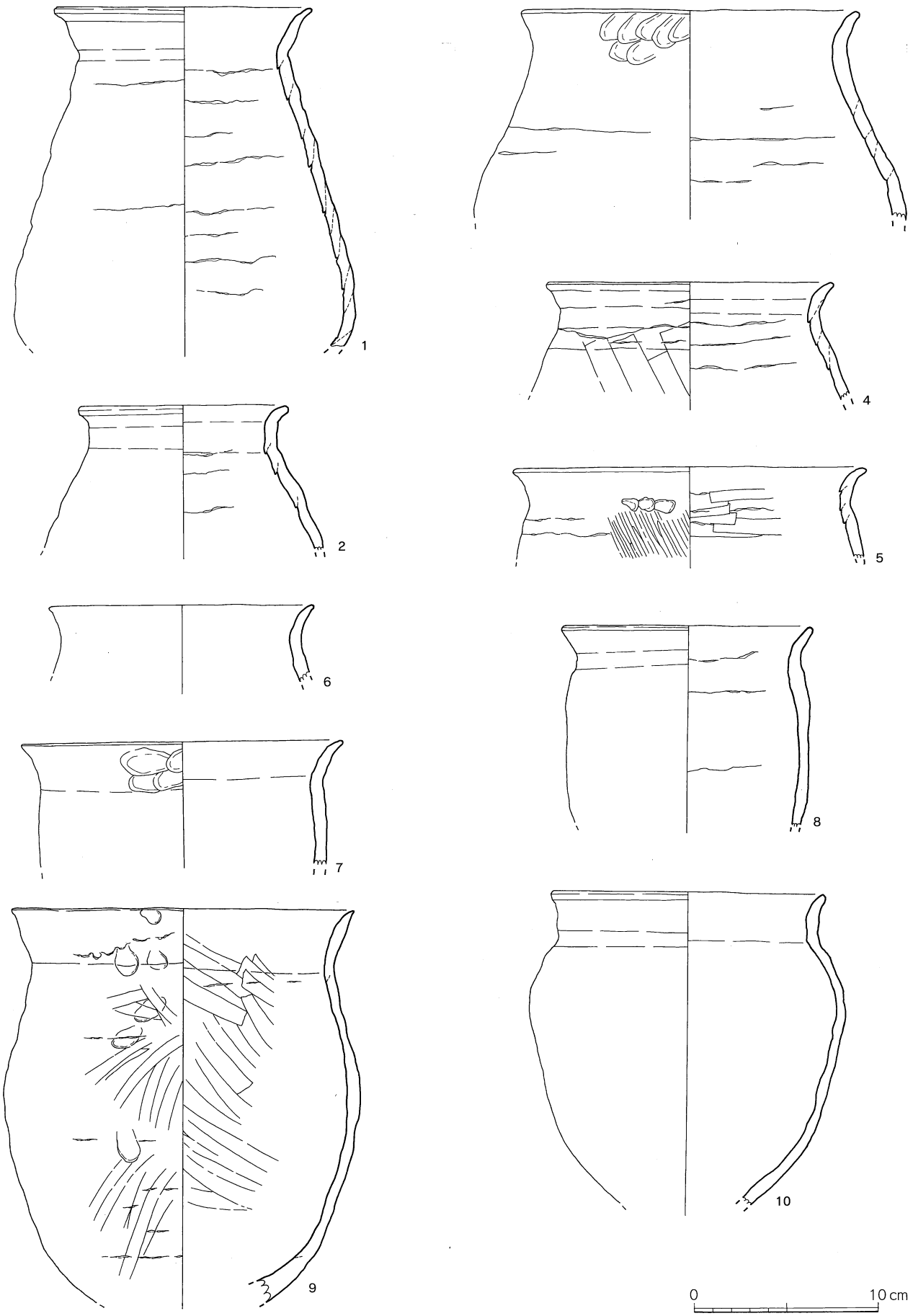
第10図　遺構平面図及び
遺物出土状況図(S＝1／200)



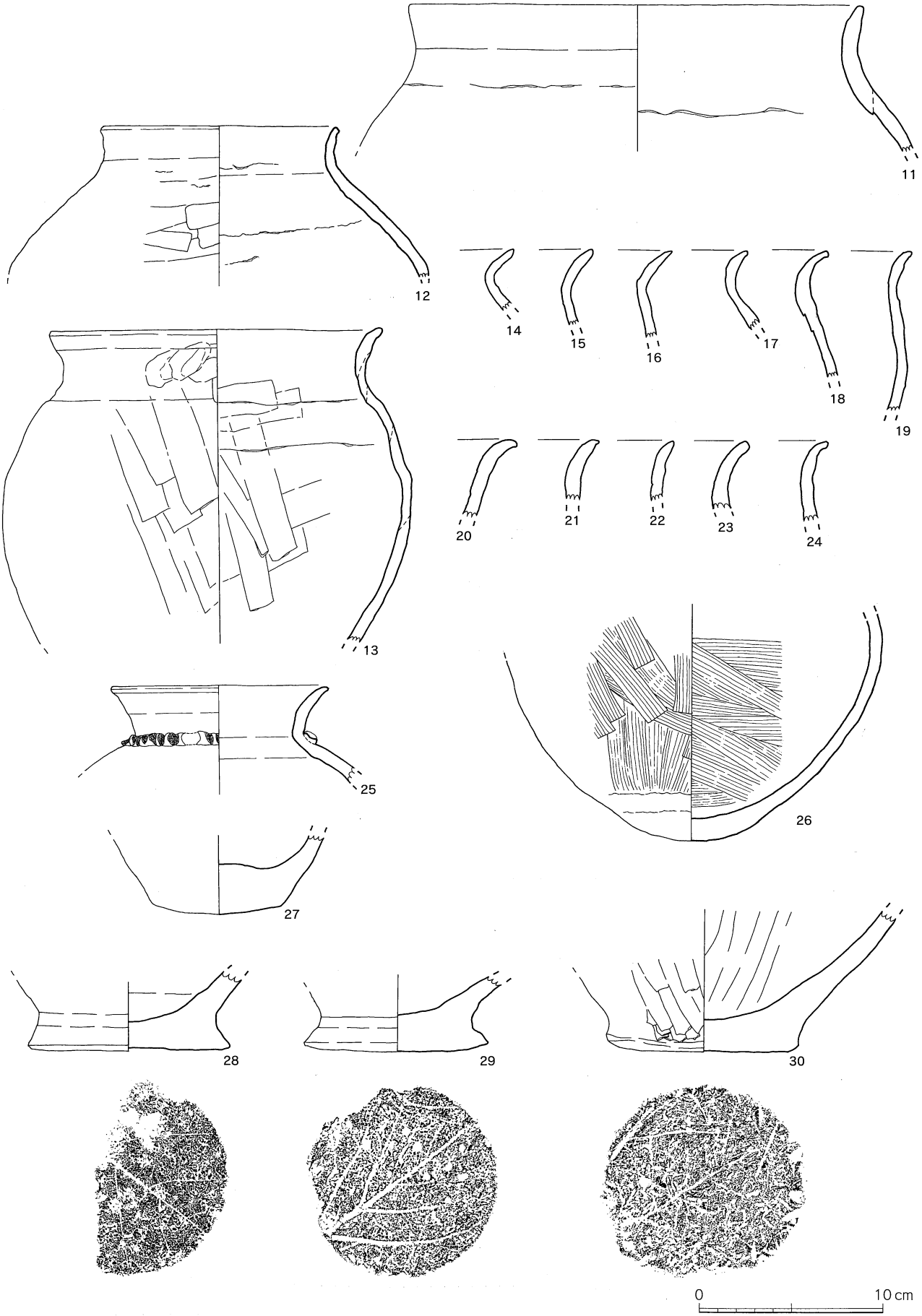
第９図　SA4平面図(S＝1／80)



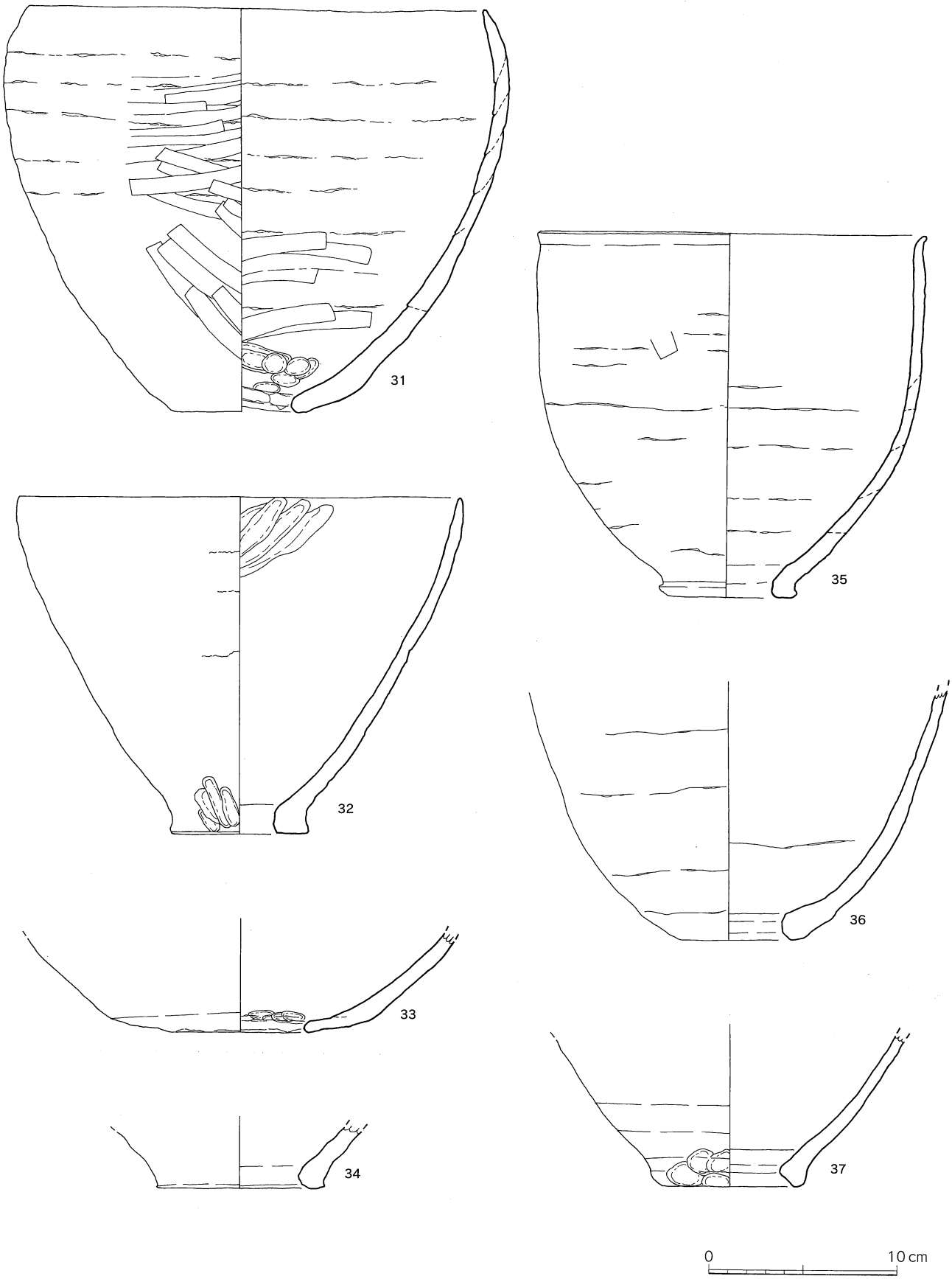
第11図　溝状遺構断面図(S＝1／40)



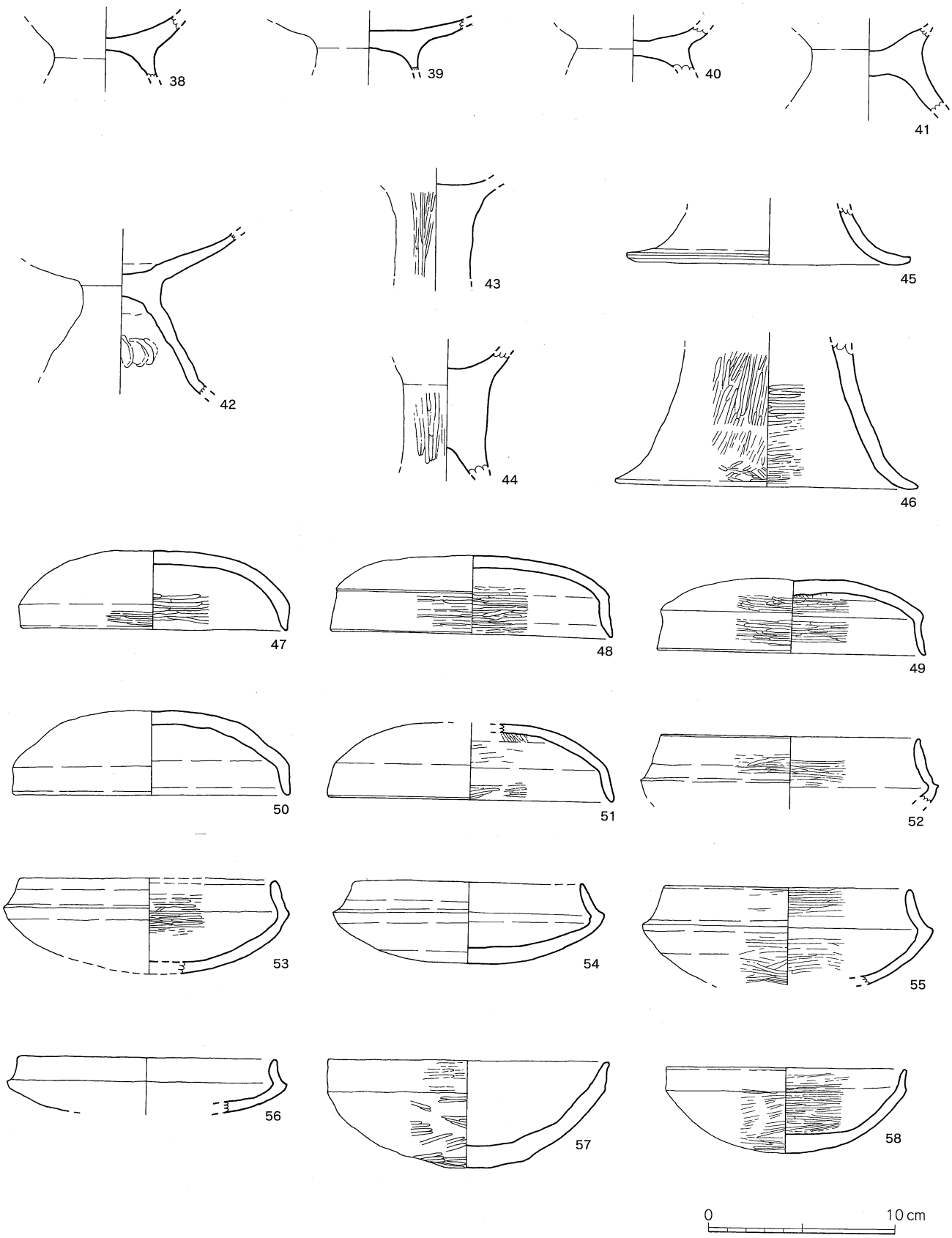
第12図　SA１出土遺物実測図（１）（S＝１／３）



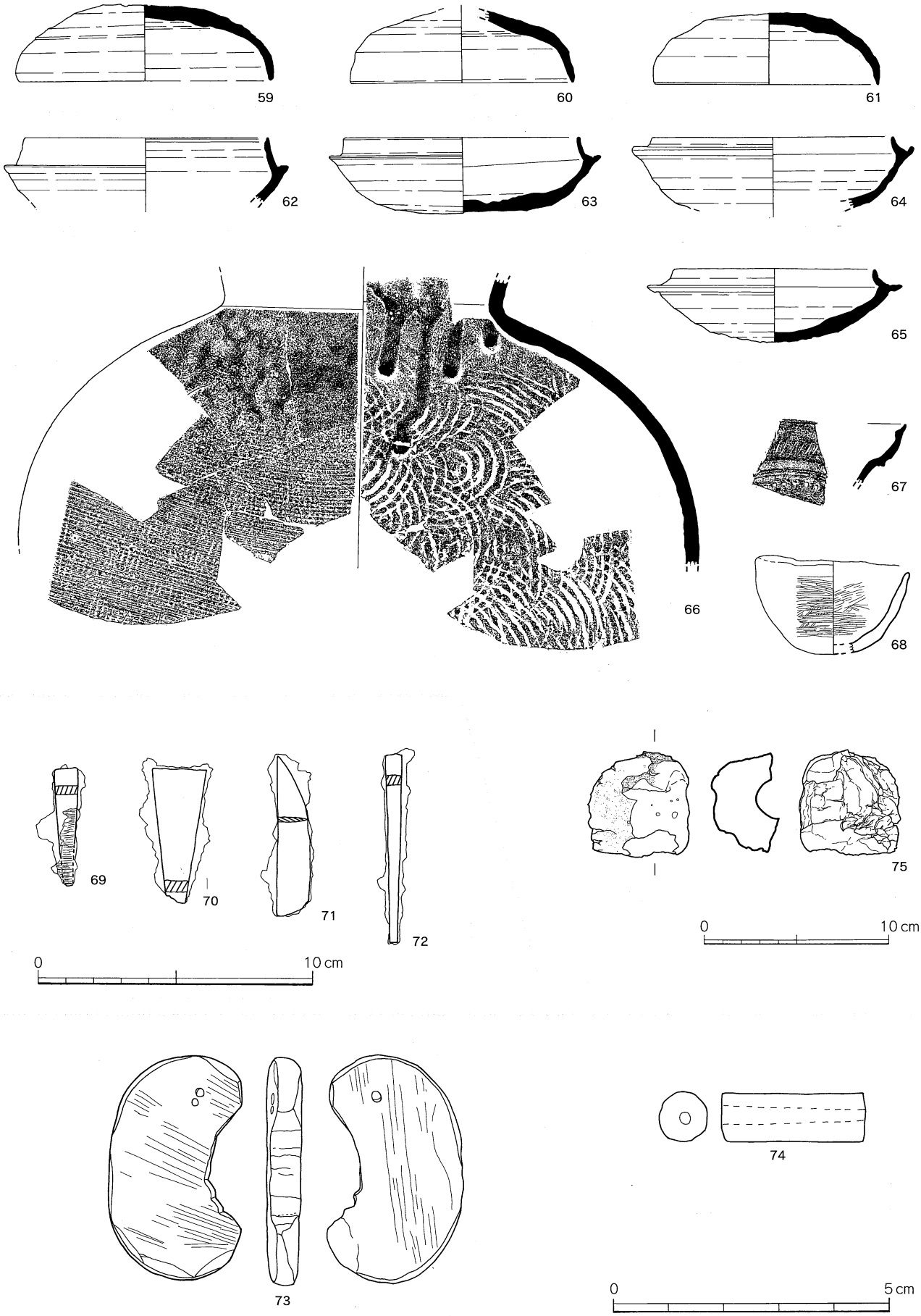
第13図　SA１出土遺物実測図（２）（S＝１／３）



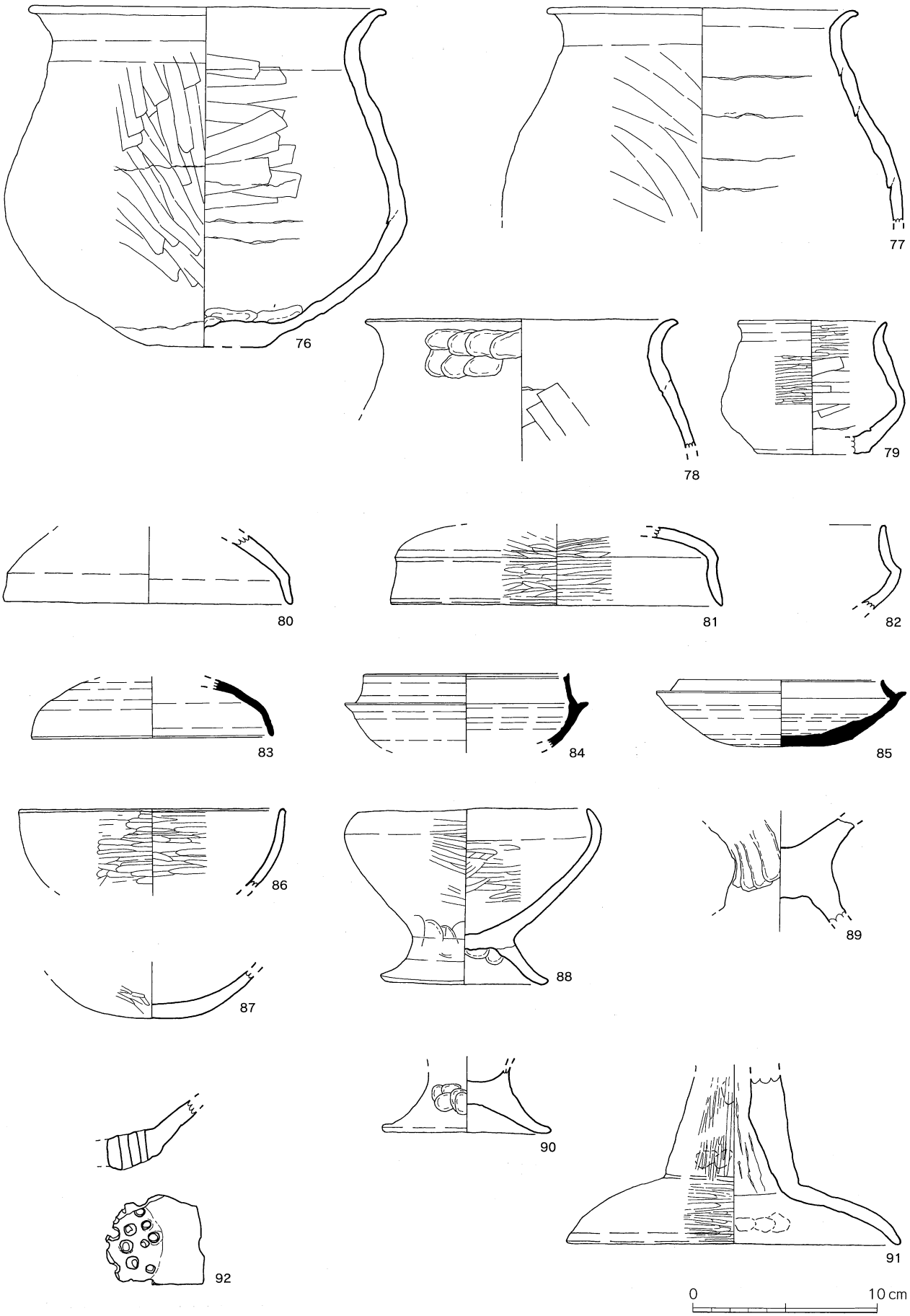
第14図　SA１出土遺物実測図（３）（S＝１／３）



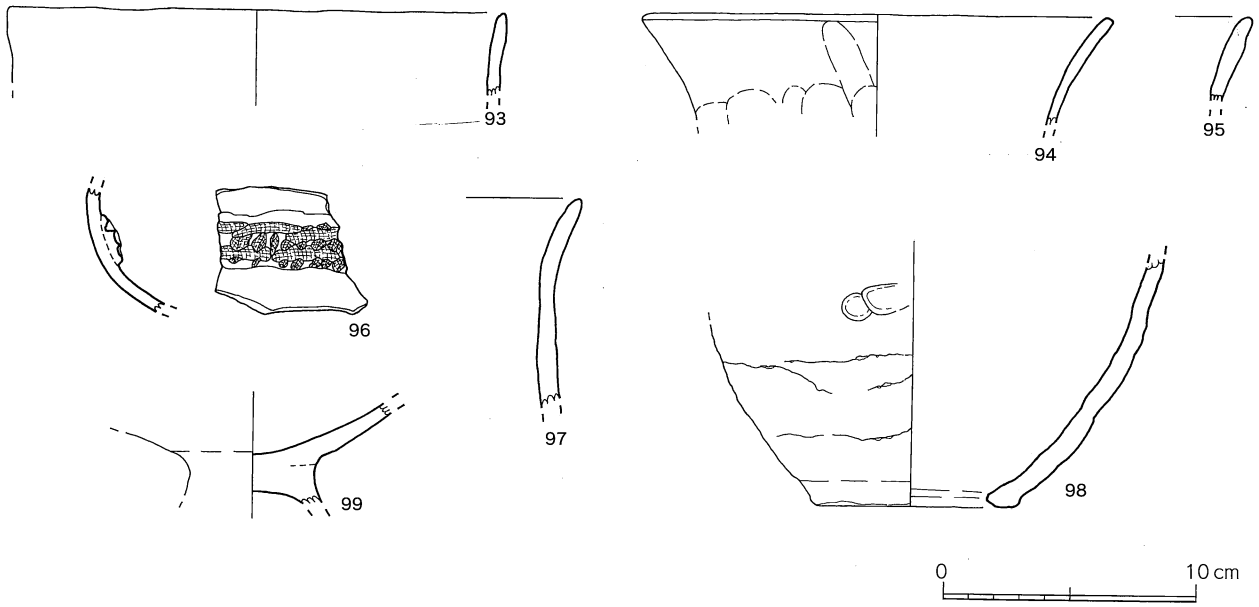
第15図　SA１出土遺物実測図(４)(S＝１／３)



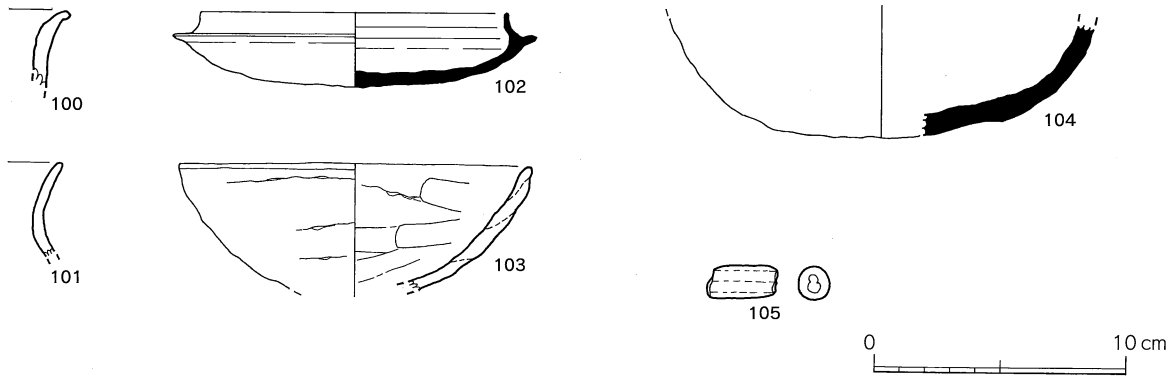
第16図　SA1出土遺物実測図(5)(59～68･75 S＝1／3　69～72 S＝1／2　73･74 S＝1／1)



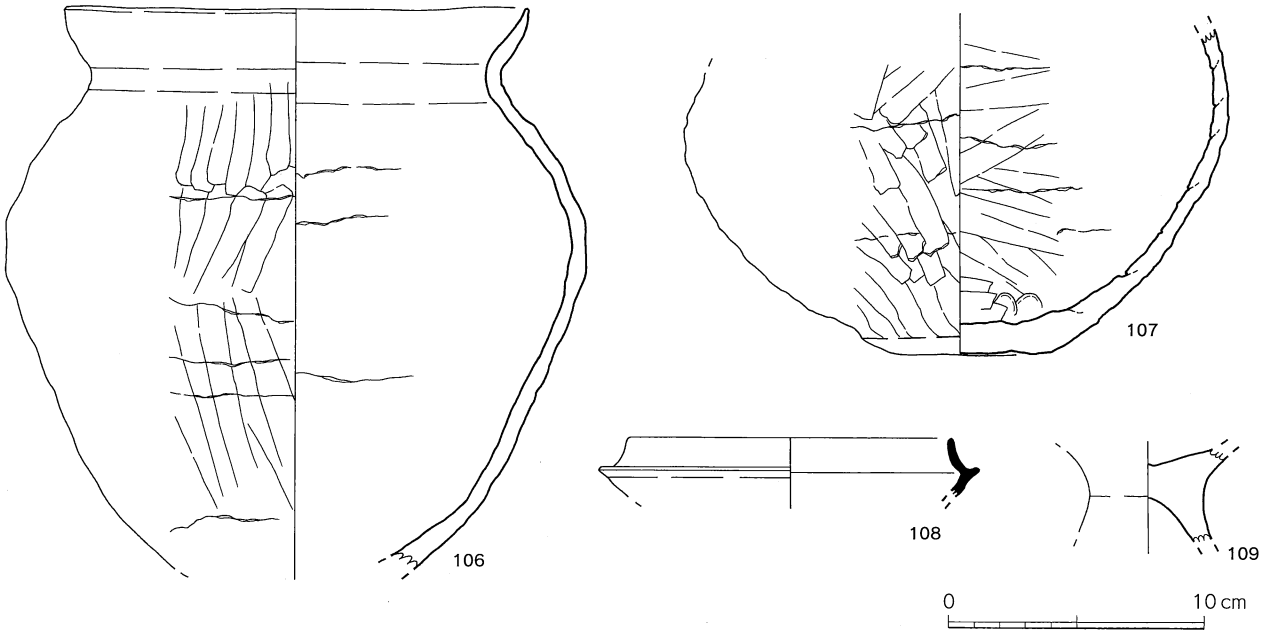
第17図　SA2出土遺物実測図(S＝1／3)



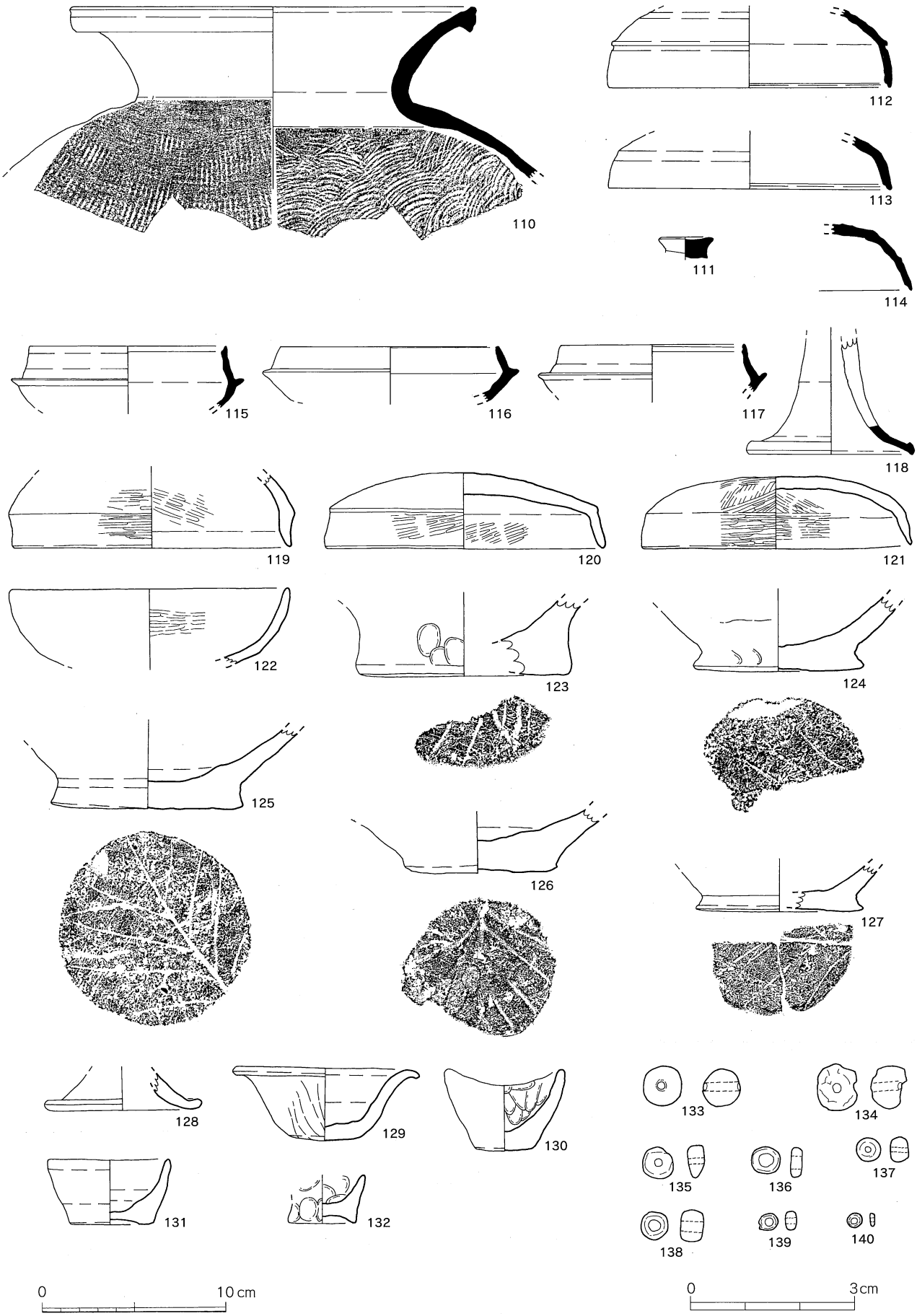
第18図　SA３出土遺物実測図(S＝1／3)



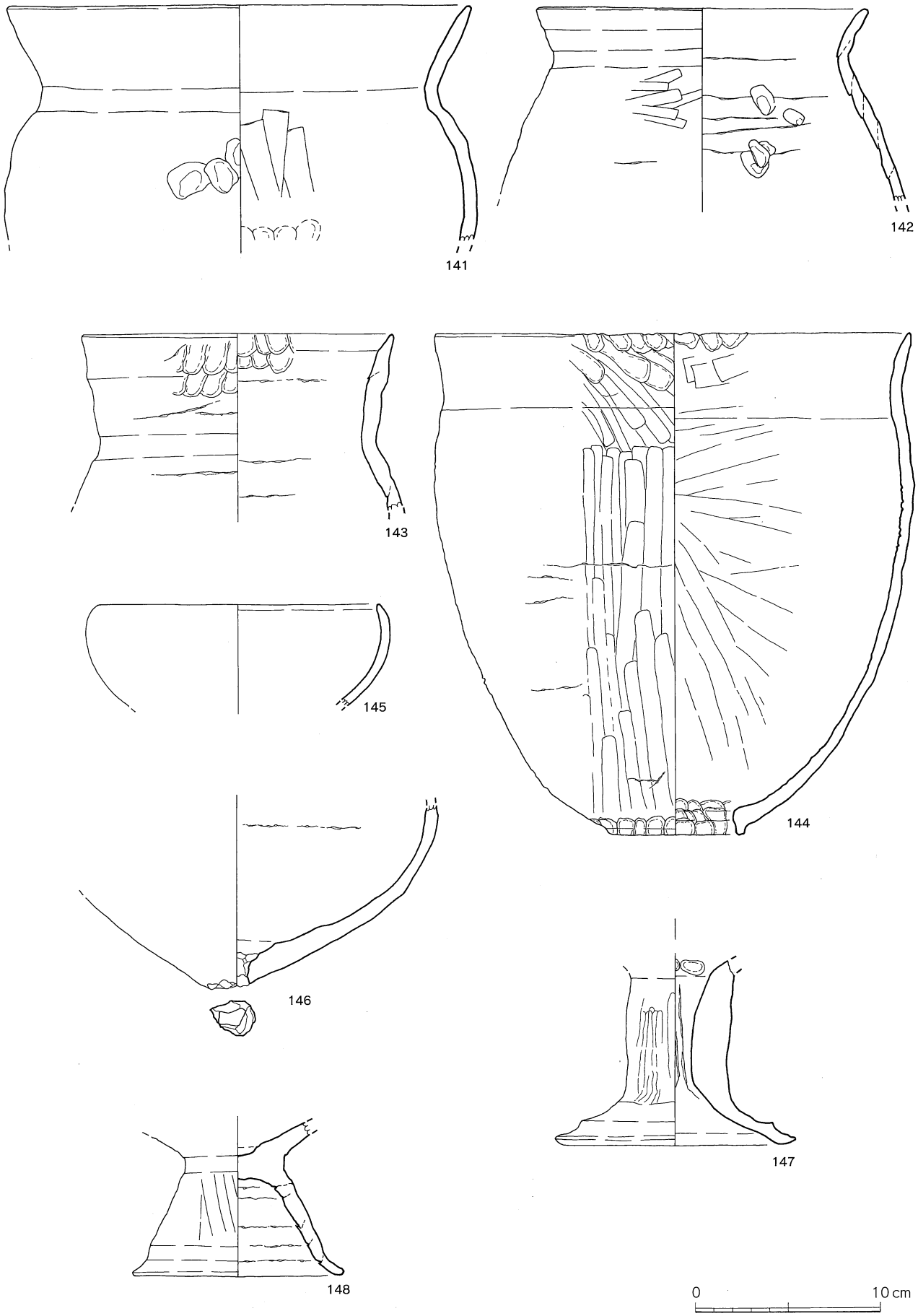
第19図　SA４出土遺物実測図(S＝１／３)



第20図　SE１・２出土遺物実測図(S＝１／３)



第21図　SA１出土遺物実測図及び包含層出土遺物実測図（110～132 S＝1／3　133～140 S＝1／1）



第22図　SA5（？）出土遺物実測図（S＝1／3）

第１表　A区出土遺物観察表（１）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内　面	外　面	胎　土（混和材・混入物）	焼成	色調 内　面	外　面	備　考
1	SA1	土	甕	口縁～ 胴部下	13.8			上位:ナデの痕跡 下位:調整不明	上位:横ナデ 下位:工具による ミガキ状のナデ？	1～5mmの暗褐・灰黄褐・灰白色粒	良好	にぶい黄橙 黄灰	にぶい黄橙	内面:風化著しい
2	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	11.3			ナデ 斜め方向の工具痕	調整が粗く凸凹が 目立つ　スス付着 上位:横方向のナデ 下位:ナデ	1～4mmの褐・無色透明光沢粒	良好	橙	橙	
3	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	18.3			上位:横方向のナデ 下位:炭化物付着	上位:横方向のナデ スス付着 下位:粗いナデ	1.5～7.5mmの赤褐・灰白・黒色光沢粒	良好	橙	橙	外面:風化気味
4	SA1	土	甕	口縁～ 胴部上	15.6			上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:横方向のナデ 下位:工具状のナデ (単位不明)	2～5mmの褐灰色粒	良好	橙	橙	
5	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	20.0			横方向のナデ	上位:横方向のナデ 下位:刷毛目	1～4mmの黒褐・灰褐・黒色粒	良好	橙	橙	
6	SA1	土	甕	口縁部	14.2			横方向のナデ 僅かにスス付着	横方向のナデ 僅かにスス付着	1～8mmの黒・褐・褐灰色粒	良好	にぶい橙	橙	
7	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	17.4			上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:横方向のナデ 下位:ナデ　ヘラに よる縦方向のナデ	1.5～8mmの褐・黒・灰白色粒	良好	橙	橙	
8	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	13.4			上位:工具による横 ナデ 下位:ナデ　一部工 具痕	上位:横ナデ　僅か にスス付着 下位:ナデ	1.5～5mmの赤褐色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	外面:風化気味
9	SA1	土	甕	口縁～ 底部	18.8			工具によるナデ	工具によるナデ 指頭痕による凹凸 が顕著	1～5mmの黒褐・灰褐・黒色粒	良好	橙	橙	
10	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	14.8			上位:横・斜め方向 のナデ 中位:横方向のナデ 下位が黒変	上位:横方向のナデ 下位:ナデ　スス付 着	2mm以下の暗褐色粒 3～5mmの極暗褐色粒	良好	橙	にぶい橙 暗褐色	
11	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	25.2			上位:横方向のナデ 下位:ナデ(全体に 粗い調整)黒変	上位:横方向のナデ 下位:ナデ　斜め方 向の工具痕	3mm以下の褐・灰・黒色粒	良好	橙	橙	
12	SA1	土	甕	口縁～ 頸部	12.6			ナデ	横方向のナデ	5mm以下の暗褐色粒 3mm以下の黒色粒	良好	橙	橙	
13	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	17.4			ナデ	全体的にスス付着 上位:横方向のナデ 下位:ナデ	2～5mmの暗褐色粒	良好	褐	にぶい褐 褐	
14	SA1	土	甕	口縁～ 頸部				上位:横方向のナデ 下位:斜め方向のナ デ	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	2～3mmの暗赤褐色粒	良好	橙	橙	
15	SA1	土	甕	口縁～ 頸部	15.0			上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:ナデ 下位:横方向のナデ	1～4mmの黒褐・極暗赤褐色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
16	SA1	土	甕	口縁～ 頸部				ナデ	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	2～6mmの暗赤褐・灰褐色粒 微細な灰白色粒	良好	橙	橙	
17	SA1	土	甕	口縁～ 頸部	13.5			ナデ	ナデ	3mm以下の灰褐色粒	良好	明赤褐	明赤褐	
18	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	12.5			上位:調整不明 下位:ナデ	ナデ 一部スス付着	3mm以下の暗褐・褐灰・灰白色粒 1mm以下の透明光沢粒	良好	橙	橙 灰黄橙	内面:風化著しい
19	SA1	土	甕	口縁～ 胴部	33.8			上位:横方向のナデ 下位:斜め方向の工 具によるナデ	上位:横方向のナデ ススが僅かに付着 下位:斜め方向の工 具によるナデ	1～4mmの褐・黒色光沢・無色透明光沢 粒	良好	にぶい黄橙	橙	
20	SA1	土	甕	口縁				上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:板状工具によ る横ナデ 下位:ナデ	0.5～6mmの茶褐色、黒色柱状光沢粒	良好	橙	橙	
21	SA1	土	甕	口縁				横方向の刷毛目	横方向の刷毛目	5mm以下の茶・灰白色粒 微細な茶褐色粒	良好	橙 黒褐	橙	
22	SA1	土	甕	口縁				ナデ	ナデ 一部スス付着	4mm以下の赤褐・褐灰色粒	良好	橙	橙	
23	SA1	土	甕	口縁～ 頸部				横方向のナデ	横方向のナデ	2～5mmの褐・灰・白色粒を多く含む	良好	橙	橙	
24	SA1	土	甕	口縁				上位:横方向のナデ 下位:斜め方向のナ デ	横方向のナデ	6mm以下の茶褐色粒 微細な黒色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
25	SA1	土	壺	口縁～ 胴部	11.6			ナデ(粗い調整)	上位:横ナデ 刻目突帯(布目圧 痕)　下位:ナデ	2～5mmの褐色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
26	SA1	土	甕	胴部～ 底部				上位:横・斜め方向 の刷毛目 下位:ナデ	上位:縦方向の刷毛 目　スス付着 下位:ナデ後、放射 状の刷毛目	5mm以下の褐・灰白色粒 1mm以下の透明光沢粒	良好	にぶい黄橙	橙	
27	SA1	土	甕	胴部下 ～底部		6.8		ナデ	ナデ	2～6mmの暗赤褐色粒 1～5mmの極暗褐色粒	良好	黄灰	にぶい黄橙	

第２表　A区出土遺物観察表（２）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内面	外面	胎土（混和材・混入物）	焼成	色調 内面	外面	備考
28	SA1	土	甕	底部			10.5	ナデ 一部指ナデ 一部黒変	ナデ	1mm～1.2cmの暗赤褐・褐・赤灰・灰・灰白・黒・にぶい橙色粒	良好	にぶい黄橙	橙	木の葉底
29	SA1	土	甕	底部			10.3	横・斜め方向のナデ 工具痕	ナデ	3～6mmの暗褐・黄灰色粒 微細な透明光沢粒	良好	にぶい褐	橙 にぶい褐	木の葉底
30	SA1	土	甕	底部			10.5	工具によるナデの後、指ナデ（下→上）	工具によるナデ（下→上） 底部：スス付着	2～3mmの灰白色粒 2～5mmの褐色粒 2～4mmの灰色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	木の葉底
31	SA1	土	甑	口縁～底部	24.4		21.7	ナデ 下位：指頭痕 黒変	ナデ	6mm以下の褐色・赤褐色粒 3mm以下の白色粒	良好	橙 褐灰	明赤褐 橙	蒸気孔径：2.7cm
32	SA1	土	甑	口縁～底部	23.6	9.4		ナデ 下位：黒変	ナデ 底部：指おさえ ナデ	5mm以下の灰・にぶい橙・灰褐黒・灰白色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
33	SA1	土	甑	胴部下～底部			7.1	上位：斜め方向のナデ 下位：工具によるナデ	上位：ナデ 下位：工具状による横ナデ	1～4mmのにぶい黄褐色粒 2～3mmの灰色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	蒸気孔径：3.4cm
34	SA1	土	甑	胴部下～底部			8.8	上位：縦・斜め方向の工具によるナデ 下位：横ナデ	ナデ スス付着	1～5mmの暗赤褐・灰褐色粒	良好	橙	にぶい黄橙	
35	SA1	土	甑	口縁～底部	20.9	7.4	19.9	丁寧なナデ 黒変	丁寧なナデ 底部：ナデ　一部スス付着	4mm以下の赤褐・灰褐・浅黄色粒	良好	橙 黒褐	にぶい橙	蒸気孔径：2.4cm
36	SA1	土	甑	胴部～底部				ナデ（調整が粗い）	上位：ナデ 下位：強いナデで凹凸が見られる	1～4mmの赤褐・灰・灰白・黒色粒	良好	橙	橙	蒸気孔径：1.8cm
37	SA1	土	甑	胴部中～底部			6.8	工具によるやや斜め方向のナデ	一部工具痕 ナデ（下→上） 底部：ナデ	1～3mmの半透明・灰・黒・褐色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	蒸気孔径：3.0cm
38	SA1	土	高坏	坏底部～脚部				ナデ	ナデ	微細～1.5mmの赤褐・黒褐・黒色光沢粒　無色透明粒	良好	橙	橙	
39	SA1	土	高坏	坏底部～脚部				ミガキ？（単位不明）	調整不明	0.5～4.5mmの浅黄・灰・灰赤・赤褐色粒	良好	にぶい黄橙	橙	内外面：風化著しい
40	SA1	土	高坏	坏底部～脚部				調整不明	ナデ	微細～1mmの灰白・灰・黒・赤褐色、無色透明粒 2mm大の黒色角柱状光沢粒	良好	にぶい黄橙	橙	内面：風化著しい
41	SA1	土	高坏	坏底部～脚部				ナデ 指頭痕	ナデ？	微細な半無透明光沢粒 2mm以下の灰・褐色粒	良好	明赤褐	橙	外面：風化気味
42	SA1	土	高坏	坏～脚部				上位：ミガキ 下位：ナデ　指押さえ痕	上位：ナデ 下位：縦方向のナデ 横ナデ	1.5mm以下の無色透明光沢・黒色柱状光沢・白色半透明光沢粒	良好	橙	橙	
43	SA1	土	高坏	脚部				ミガキ	縦方向のナデ	微細な透明光沢粒 5mm程の茶色粒 2mm以下の灰・黄灰・褐色粒	良好	橙	橙	
44	SA1	土	高坏	基部～脚部				ミガキ（単位不明）	ミガキ（単位不明）	精良	良好	橙	橙	内外面：風化著しい
45	SA1	土	高坏	裾部			14.9	ナデ 横方向に浅い工具状のナデ	ミガキ（単位不明）	精良	良好	橙	明赤褐	外面：風化気味
46	SA1	土	高坏	脚部～裾部			16.5	ミガキ	ミガキ	1mm以下の灰・にぶい橙・灰赤色粒	良好	明赤褐	明赤褐	
47	SA1	土	坏蓋	口縁～天井部	14.2		4.3	ミガキ	ミガキ	3.5mm以下の赤褐色粒	良好	橙	橙　褐灰	内外面ともに赤色顔料を施す 風化気味
48	SA1	土	坏蓋	口縁～天井部	15.0		4.3	ミガキ	ミガキ	1mm以下の赤褐色粒	良好	明赤褐	明赤褐	内外面ともに赤色顔料を施す
49	SA1	土	坏蓋	口縁～天井部	14.5		3.9	ミガキ（単位不明）	ミガキ 一部黒変	精良	良好	にぶい赤橙	にぶい赤橙	内外面ともに赤色顔料を施す？ 内面：風化著しい
50	SA1	土	坏蓋	口縁～天井部	14.7		4.7	上位：調整不明 下位：横方向のナデ	横方向のナデ 僅かにスス付着	2～3mmの茶褐色粒	良好	橙	橙	風化著しい
51	SA1	土	坏蓋	口縁～天井部	15.4			ミガキ（単位不明）	ミガキ（単位不明） 口唇部：ナデ	精良	良好	橙	赤褐色	内外面：風化気味
52	SA1	土	坏身	口縁～体部	14.0			横方向のミガキ	横方向のミガキ	3mm以下の黒・褐色粒を少量	良好	にぶい黄橙	明褐色	内外面ともに赤色顔料を施す
53	SA1	土	坏身	口縁～底部	13.7		5.2	ミガキ（単位不明）	ミガキ（単位不明）	微細な無色透明光沢・黒色光沢粒	良好	橙	橙	内外面ともに赤色顔料を施す 外面：風化著しい
54	SA1	土	坏身	口縁～底部	12.3		4.4	横方向のナデ　ミガキ（ミガキの単位不明）	ミガキ（単位不明）	1mm以下の赤褐色粒 微細な無色透明光沢・黒色柱状光沢粒	良好	橙	橙	内外面ともに赤色顔料を施す

第３表　A区出土遺物観察表（３）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内　面	外　面	胎　土（混和材・混入物）	焼成	色調 内　面	外　面	備　考
55	SA1	土	坏身	口縁～体部	13.2			上位:横方向ヘラミガキ 下位:横・斜め方向のヘラミガキ	上位:横方向のヘラミガキ(単位不明) 下位:横・斜め方向のヘラミガキ	1mm以下の茶褐色粒	良好	橙	橙	
56	SA1	土	坏身	口縁～体部	14.0			ナデ	ナデ	1mm以下の黒褐・無色透明光沢粒 2mm～4mmの暗赤褐色	良好	明赤褐	明赤褐	内外面:風化著しい
57	SA1	土	坏身	口縁～底部	15.3		5.8	上位:横方向のナデ 下位:調整不明	上位:横方向のナデの後、ミガキ 下位:ミガキ	1～3mmの暗赤褐・黒褐色粒	良好	浅黄橙	浅黄橙	内面:風化著しい
58	SA1	土	坏身	口縁～底部	13.0			横・斜め方向のミガキ	ミガキ(単位不明)	1～3mmの褐・白色粒	良好	明赤褐	明赤褐	外面:風化気味
59	SA1	須	坏蓋	口縁～天井部	13.8		4.2	ナデ	上位:ヘラ削り　ヘラ切り後調整なし 下位:ナデ	3mm以下の灰白色粒	良好	灰	灰	外面には自然釉
60	SA1	須	坏蓋	口縁～体部	12.0			横方向のナデ	上位:ヘラ削り 下位:横方向のナデ	精良	良好	灰	灰	
61	SA1	須	坏蓋	口縁～天井部	12.2			回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:ナデ	1.5mmの無色透明光沢・灰白色粒	良好	灰	灰 灰白	
62	SA1	須	坏身	口縁～体部	13.3			回転ナデ	回転ナデ	1mm以下淡黄色粒	良好	灰黄	灰オリーブ	
63	SA1	須	坏身	口縁～底部	12.8		4.2	ナデ	上位:ナデ 下位:ナデ　ヘラ削りヘラ切り後、調整なし	3mm以下灰白色粒	良好	灰	灰	
64	SA1	須	坏身	口縁～体部	13.1			横方向のナデ	横方向のナデ	精良	良好	灰	灰	外面に自然釉
65	SA1	須	坏身	口縁～底部	11.0		4.0	回転ナデ	回転ナデ 底部:ヘラ削り	精良	良好	灰	灰 灰白	
66	SA1	須	甕	頸部～胴部中				上位:横方向のナデ 下位:同心円状のあて具痕	横方向のカキ目	2mm以下の灰白・浅黄色粒	良好	灰白	灰白	外面に自然釉
67	SA1	須	ハソウ	口縁				ナデ	ナデ 櫛描波状文(同じ工具による連続刺突文)	精良	良好	灰オリーブ	オリーブ黒	
68	SA1	土	ミニチュア土器	口縁～底部	8.3	3.9	5.2	斜め・横方向のミガキ	斜め・横方向のミガキ	精良	良好	にぶい赤褐	にぶい橙 にぶい赤褐	内外面ともに赤色顔料を施す
76	SA2	土	甕	口縁～頭部	21.9	16.8	6.8	上位:横方向のナデ 下位:工具によるナデ　黒変	上位:横方向のナデ 下位:縦方向のナデ スス付着	6mm以下の茶褐・灰褐色粒 2mm以下の白色粒	良好	灰褐　黒褐	にぶい橙 灰褐	
77	SA2	土	甕	口縁～胴部	16.6			横方向のナデ 工具痕	上位:横方向のナデ スス付着 下位:斜め方向のナデ　工具痕	1.5～6mmの赤褐・灰白色粒、黒色光沢粒	良好	橙	橙	
78	SA2	土	甕	口縁～胴部	16.6			上位:横方向のナデ 下位:ナデ　炭化物付着	上位:横方向のナデ 下位:ナデ　炭化物付着	1.5～5mmの褐・灰白色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
79	SA2	土	ミニチュア土器	口縁～底部	8.2	7.3		上位:ナデの後、横方向のミガキ 下位:ナデ　ミガキ指押痕	上位:横・斜め・縦方向のミガキ 下位:ミガキ(単位不明)	4mm以下の茶褐色・黒色光沢粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
80	SA2	土	坏蓋	口縁～体部	16.8			ミガキ(単位不明)	ミガキ(単位不明) スス付着	精良	良好	橙	橙	内外面:風化著しい
81	SA2	土	身蓋	口縁～体部	17.3			上位:やや斜め方向のミガキ 下位:横方向のミガキ	上位:横方向のミガキ 下位:やや斜め方向のミガキ	精良	良好	明赤褐	明赤褐	外面:風化気味
82	SA2	土	坏身	口縁～体部				ヘラミガキ	ヘラミガキ	精良	良好	赤褐	明赤褐	
83	SA2	須	坏蓋	口縁～体部	13.2			回転ナデ	回転ナデ	1～2mmの白・灰色粒	良好	灰	灰	
84	SA2	須	坏身	口縁～体部				回転ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	精良	良好	灰	灰	外面に自然釉
85	SA2	須	坏身	口縁～底部	11.3			回転ナデ	回転ナデ	1～4mmの白色粒	良好	灰	灰	
86	SA2	土	埦	口縁～体部	14.5			ミガキ	ミガキ	精良	良好	明赤褐	明赤褐	
87	SA2	土	坏身	底部				ミガキ(単位不明)	スス付着 上位:ミガキ 下位:ナデ	1～3mmの極暗褐色粒(数個) 1mm以下の透明光沢粒	良好	橙	明赤褐	
88	SA2	土	高坏	完形	12.6	8.5	9.9	上位:ヨコナデ 中～下位:横・斜め方向のミガキ	上～中位:横・斜め方向のミガキ 下位:強いナデ 僅かにスス付着	微細な無色透明光沢・黒色柱状光沢粒	良好	橙	橙	

第４表　A区出土遺物観察表（４）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内　面	外　面	胎　土（混和材・混入物）	焼成	色調 内　面	外　面	備　考
89	SA2	土	高坏	坏底部～脚部				ナデ	ナデ	1～4mmの茶褐・黒・白色粒	良好	橙	橙	
90	SA2	土	高坏	基部～裾部			9.1	ナデ	上位：ナデ　指押さえ 下位：横方向のナデ	1mm以下の茶褐色粒を少量	良好	明褐 明赤褐	橙 明褐	
91	SA2	土	高坏	脚部～裾部			18.1	横方向のナデ	一部スス着 上位：縦方向のミガキ　下位：ミガキ（単位不明）	精良	良好	橙	橙	内面：風化気味
92	SA2	土	甑	底部				ナデ	ナデ	1mm以下の浅黄橙色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	穿孔（8個）
93	SA3	土	甕	口縁	19.5			上位：工具による横方向のナデ 下位：ナデ	スス付着 上位：横方向のナデ 下位：ナデ	4mm以下の褐色・黒色柱状光沢粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
94	SA3	土	甕	口縁	18.8			ナデ	ナデ 指頭痕 スス付着	2mm以下の茶褐色粒 1mm以下の無色透明光沢粒・黒色光沢粒	良好	暗灰黄	にぶい黄橙 黒褐	
95	SA3	土	甕	口縁				横方向のナデ	横方向のナデ 一部スス付着	2.5mm以下の茶褐・灰褐色粒 1mm以下の無色透明	良好	にぶい橙	にぶい橙	
96	SA3	土	壺	口縁～頸部				ナデ	丁寧なナデ	精良	良好	にぶい橙	にぶい黄	内面：風化気味
97	SA3	土	甕	頸部				ナデ	貼付刻目突帯	2mm以下の茶褐色粒 1mm以下の無色透明光沢粒	良好	橙	橙	
98	SA3	土	甑	胴部～底部			7.8	工具による横・斜め方向のナデ	ナデ 一部指押さえ痕 スス付着	1～3mmの赤褐色粒	良好	黄橙	黄橙 橙	
99	SA3	土	高坏	坏底部～脚部				ナデ 指頭痕	ナデ	微細な透明・半透明光沢粒 1mm以下の灰・褐色粒	良好	橙	橙	
100	SA4	土	甕	口縁				ナデ	ナデ	2mm以下の浅黄・褐色粒	良好	橙	にぶい橙	
101	SA4	土	壺	口縁	13.3			ナデ	ナデ	2mm程の赤褐・白・褐色粒	良好	にぶい黄橙	浅黄	内外面：風化気味
102	SA4	須	坏身	口縁～底部	12.1	3.0		ナデ	ナデ	精良	良好	灰	灰	外面底部に釜印 外部に自然釉
103	SA4	土	坏	口縁～胴部	14.0			ナデ	ナデ	微細な褐・にぶい赤褐・灰褐・黒色粒、黒・褐色光沢粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
104	SA4	須	甕	胴部下～底部				上位：横方向のナデ 下位：指ナデ	横方向のナデ	3mm以下の灰白粒	良好	灰白	灰白	木の葉底
106	SE1	土	甕	口縁～底部	18.2			ナデ	ナデ 下位：スス付着	5mm以下の黒・褐色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
107	SE1	土	甕	胴部～底部			9.7	ナデ 斜め方向の刷毛目（単位不明）	ナデ 薄くスス付着	3.5mm以下の白灰・灰褐色粒	良好	黒	暗灰黄 灰黄	
108	SE2	須	坏身	口縁～体部	12.8			回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の白色粒	良好	オリーブ灰	オリーブ灰	外面：自然釉
109	SE2	土	高坏	坏底部～脚部				ナデ	ナデ	微細な透明粒	良好	橙	橙	
110	包含層	須	壺	口縁～胴部	22.2			上位：ナデ 中～下位：同心円状叩き	上位：ナデ 中～下位：格子目状の叩き後、ナデ	精良	良好	灰 オリーブ灰	灰	
111	包含層	須	坏蓋	つまみ				—	上部：回転ナデ 側面部：ナデ	精良	良好	灰	灰	擬宝珠つまみ
112	包含層	須	坏蓋	口縁～体部	11.4			回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の白色粒	良好	灰	灰	
113	包含層	須	坏蓋	口縁～体部	15.5			回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	
114	包含層	須	坏蓋	口縁～天井部				回転ナデ	回転ナデ 上位：ヘラ削り	精良	良好	灰	灰	外面に自然釉
115	包含層	須	坏身	口縁～底部	10.8			回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	オリーブ	灰	
116	包含層	須	坏身	口縁～体部	11.8			回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	灰オリーブ	にぶい黄	

第５表　A区出土遺物観察表（５）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内　面	外　面	胎　土（混和材・混入物）	焼成	色調 内　面	外　面	備　考
117	包含層	須	坏身	口縁～体部	10.0			回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の白色粒	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	
118	包含層	須	高坏	脚部～裾部		9.2		回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	黄灰	灰白	外面:自然釉
119	包含層	土	坏蓋	口縁～体部	15.2			斜め方向のヘラミガキ	横方向のヘラミガキ	2mm以下の赤褐・灰白灰色粒	良好	橙	橙	内面:風化著しい
120	包含層	土	坏蓋	口縁～天井部	15.5			上位:ミガキ 下位:横方向のミガキ　一部黒変	上位:ミガキ 下位:横方向のミガキ　一部黒変	精良	良好	橙	橙	
121	包含層	須	坏身	口縁～天井部	14.7	4.0		ミガキ(単位不明)	横・斜め方向のミガキ	精良	良好	オリーブ灰	オリーブ灰	内外面ともに赤色顔料を施す
122	包含層	土	坏身	口縁～体部	10.5			ミガキ(単位不明)	丁寧なナデ	1mm以下の茶褐・黒色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
123	包含層	土	甕	底部			10.7	縦方向のナデ 黒変	ナデ スス付着	1.5～5mmの褐・灰白色粒	良好	灰	橙	木の葉底
124	包含層	土	甕	底部			9.0	ナデ	スス付着 上位:ナデ 下位:指頭痕	1.5～4mmの褐・黒・灰白色粒	良好	浅黄	橙	木の葉底
125	包含層	土	甕	底部			10.4	ナデ 炭化物付着	ナデ 一部スス付着	1～3mmの灰白・極暗褐・灰黄褐色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	木の葉底
126	包含層	土	甕	底部			8.3	ナデ	ナデ スス付着	1～7mmの黒・灰・灰白・灰赤・暗赤褐色粒微細な透明光沢粒	良好	にぶい橙	にぶい黄橙	木の葉底
127	包含層	土	甕	底部			9.3	ナデ	上位:縦方向の工具によるナデ 下位:横方向のナデ	1～4mmの褐色、黒色光沢粒	良好	橙	橙	木の葉底
128	包含層	土	高坏	底部			8.2	ナデ	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	2mm以下の褐色粒	良好	橙	橙	外部:風化気味
129	包含層	土	ミニチュア土器	口縁～底部	10.4	4.0	3.6	ナデ	上位:横方向のナデ 下位:回転ナデ	4.5mmの茶褐色粒 3mm以下の灰褐・赤褐色粒・無色透明粒	良好	にぶい橙	にぶい橙 黄灰	
130	包含層	土	ミニチュア土器	口縁～底部		4.5	3.0	ナデ 指による調整痕	ナデ	精良	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	外部:風化気味
131	包含層	土	ミニチュア土器	口縁～底部	6.4	4.0	4.2	指ナデ後、工具状のナデ 口唇部は指つまみ	ナデ 一部スス付着	精良	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
132	包含層	土	ミニチュア土器	口縁～底部		2.7	3.6	指ナデ	指ナデ	1～3mmの茶褐・黒色粒	良好	橙	橙	
141	SA5?	土	甕	口縁～胴部	25.3			ナデ 僅かに炭化物付着	ナデ 薄くスス付着	1.5～4mmの褐色粒 微細な無色透明光沢・黒色柱状光沢粒	良好	橙	橙	内面:風化気味
142	SA5?	土	甕	口縁～胴部	18.1			ナデ	スス付着 上位:横方向のナデ 下位:斜め方向のナデ	3mm以下の褐・黒色粒・無色透明粒	良好	橙	明赤褐	内面:炭化物付着
143	SA5?	土	甕	口縁～胴部	17.1			ナデ 指押さえ痕	ナデ	1.5mm以下の灰褐色粒 2mm以下の茶褐色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙 灰黄橙	
144	SA5?	土	甑	口縁～底部	26.1	27.7	7.3	上位:指押さえ 下位:ナデ	上位:斜め方向のナデ 下位:ナデ　スス付着	2mm以下の褐・赤褐色粒	良好	にぶい橙 褐灰	にぶい橙 黒褐	蒸気孔径:6cm
145	SA5?	土	坏身	口縁～胴部	15.2			ナデ	横・斜め方向のナデ スス付着	精良	良好	橙	橙	内面:スス付着
146	SA5?	土	鉢	胴部～底部				斜め方向のナデ	ナデ	2mm以下の灰褐・赤褐・白灰色粒	良好	褐灰	にぶい橙 褐灰	底部に穿孔
147	SA5?	土	高坏	脚部～底部				ナデ	上位:ナデ 中位:縦方向のヘラミガキ 下位:丁寧なナデ・ミガキ	精良	良好	橙	橙	
148	SA5?	土	高坏	脚部～裾部				調整不明	上位:調整不明 下位:ミガキ (単位不明)	精良	良好	橙	橙	内外面:風化気味

第２節　Ｃ区の調査（第23図）

１　調査の概要

調査面積は550㎡である。北東から南西方向に緩く傾斜しており、標高は10.0～12.0ｍを測る。

古墳時代の竪穴住居跡３軒、中世の土壙墓４基、時期不明の溝状遺構１条・土坑５基・ピット５基が確認されている。検出面はすべて第Ⅲ層の褐色砂質土層である。調査区東側で検出された竪穴住居跡３軒は調査区東側に設定したトレンチを掘り下げた際にいずれもプランの東側を失っている。

出土遺物は、土師器、須恵器、洪武通宝、人骨の一部、玉、軽石製品、鉄製品(？)の破片である。

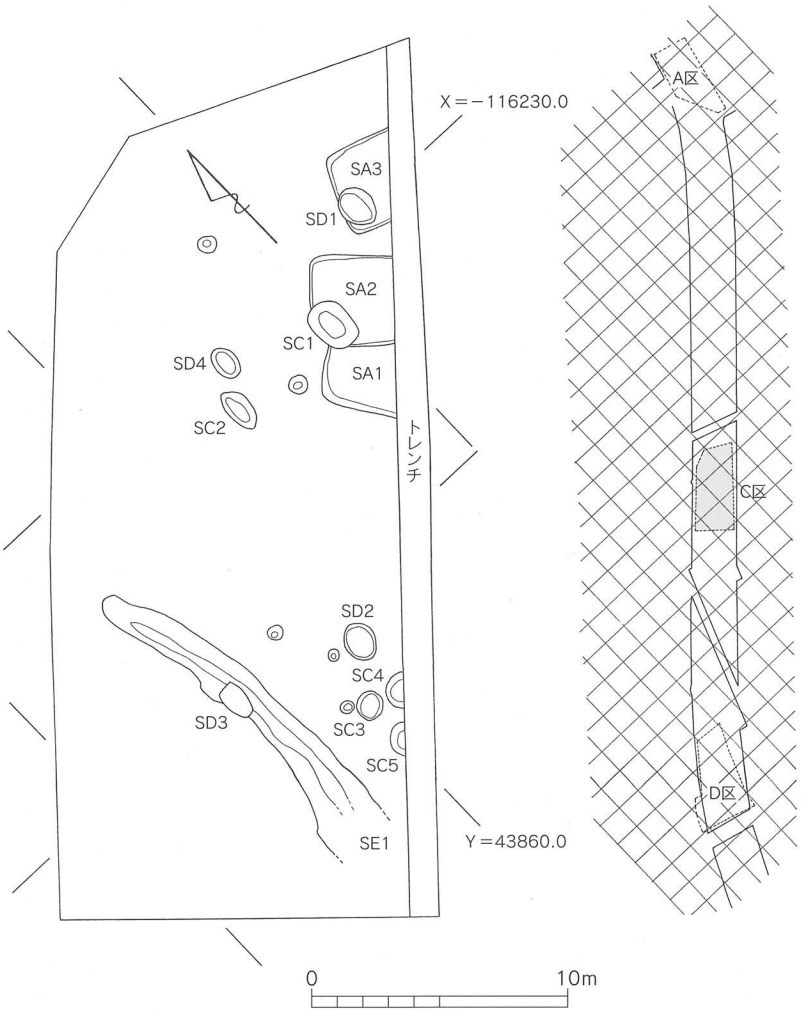
２　遺構と遺物

(１)竪穴住居跡(SA)

SA１（第24図）

ＳＡ２に北側を切られている。平面プランは約４ｍ×約４ｍの隅丸方形を呈するものと推定される。検出面からの深さ約15㎝を測る。遺構に伴う主柱穴は確認できていない。遺物は土師器、須恵器等が約300点が検出面から床面の間で出土しており、北東部分で遺物の集中域が確認された。

【出土遺物】第29図ＳＡ１～３出土遺物実測図　１～４(Ｃ区出土遺物観察表)



第23図　C区 遺構分布図(Ｓ＝１／300)

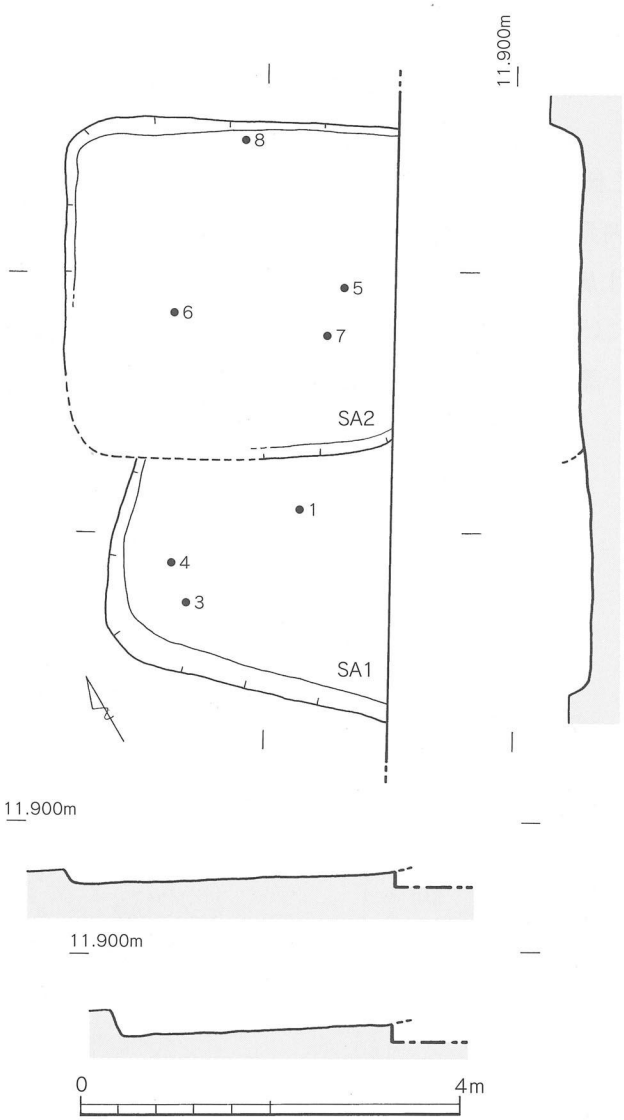
SA２（第24図）

ＳＡ１の北側に位置する。ＳＣ１によって西南部を切られている。規模は約3.5ｍ×約3.5ｍの隅丸方形プランになると推定される。検出面からの深さは約15～20㎝である。遺構に伴う主柱穴は確認されていない。遺物は土師器、須恵器を中心に約70点で検出面から床面の間で出土している。

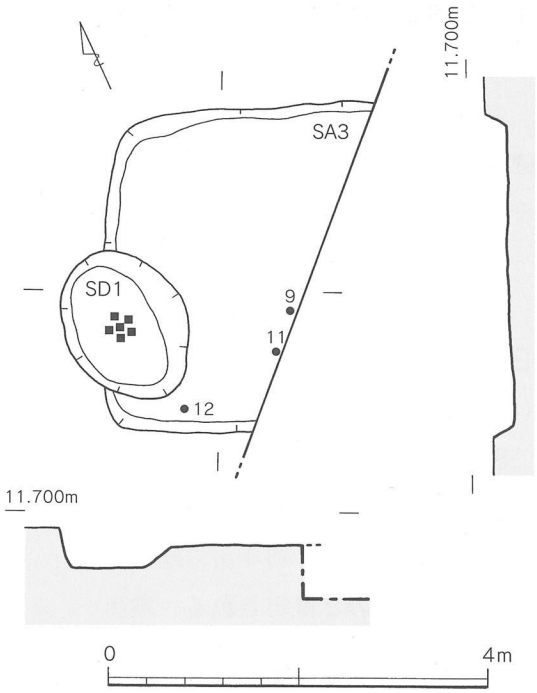
【出土遺物】第29図ＳＡ１～３出土遺物実測図　５～８(Ｃ区出土遺物観察表)

SA３（第25図）

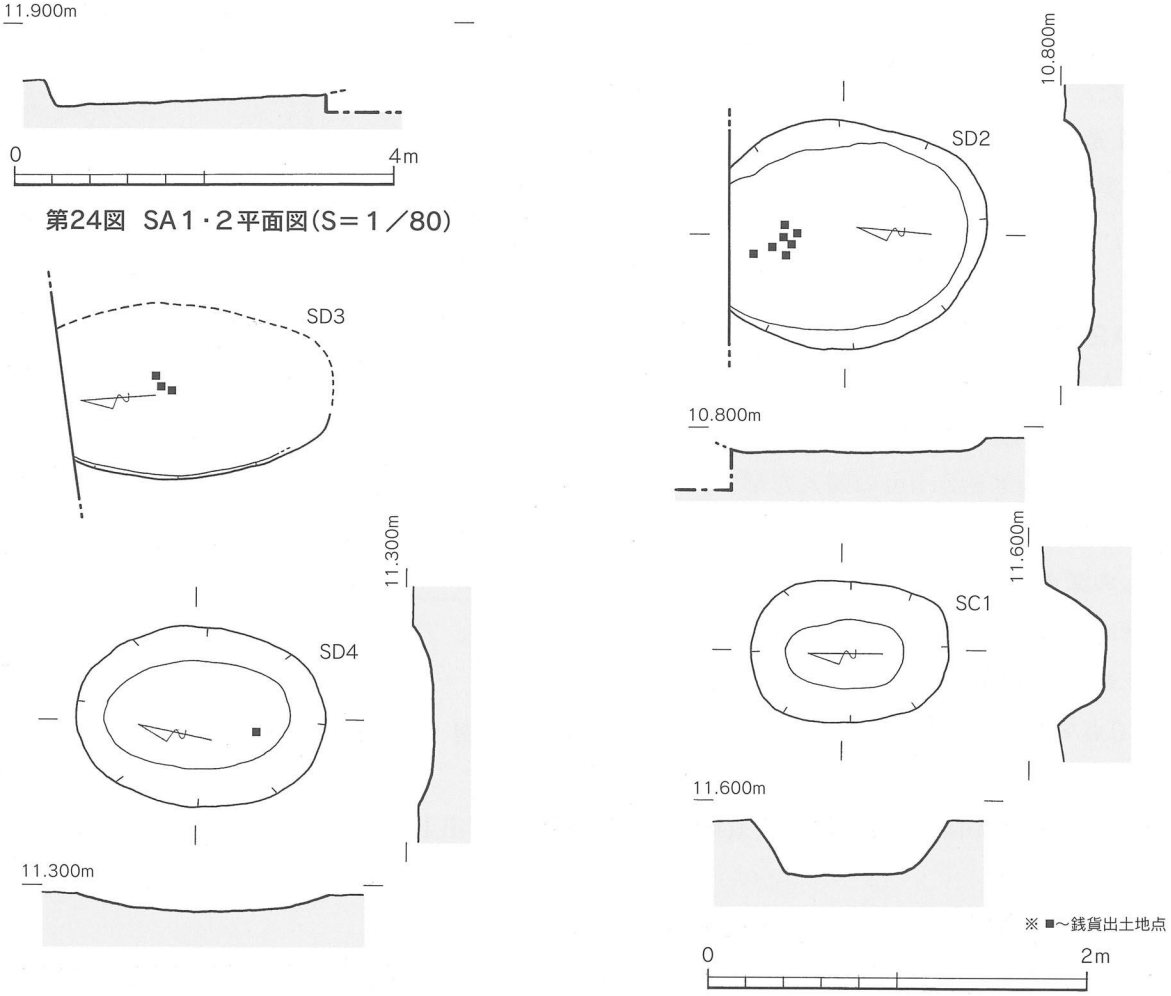
ＳＡ２の１ｍ北側に位置する。中世の土壙墓(ＳＤ１)により西壁の一部を切られている。推定で約3.5ｍ×約3.5ｍの隅丸方形プランになると思われる。検出面からの深さ約10㎝を測る。住居跡中央で甕が



第24図　SA１・２平面図(S＝１／80)



第25図　SA３及びSD１平面図(S＝１／80)



第26図　SD２～４及びSC１平面図(S＝１／40)

埋設されているのが確認されている。出土遺物は40点程で検出面から床面の間で確認されている。
【出土遺物】第29図ＳＡ１～３出土遺物実測図 ９～13(Ｃ区出土遺物観察表)

(３)土壙墓(SD)

SD１(第25図)

ＳＡ３の西壁を切るかたちで検出した。長軸約1.7m、短軸約1.3m、検出面からの深さ約30cmの楕円形プランを呈する。長軸の方向はＮ－７°－Ｅを指し、床面から約15cmの所で洪武通宝６枚、土師器４点、頭蓋骨の破片と足の骨の一部が出土している。

SD２(第26図)

長軸約1.3＋αm、短軸約1.2m、検出面からの深さ約15cmの楕円形プランを呈する。長軸の方向はＮ－９°－Ｅを指し、遺物は床面から10cm程の所で洪武通宝７枚、鉄製品(?)の破片１点、玉１点が出土している。玉については第30図『ＳＤ２及び包含層出土遺物実測図』及び第８表『山崎上ノ原第２遺跡出土装飾具計測表』を参照いただきたい。

SD３(第26図)

ＳＥ１により削平を受けているため床面のみの検出となった。長軸約1.4＋αm、短軸約0.9＋αmの楕円形プランを呈すると思われる。検出面からの深さは約10cm(残存部)を測る。遺物は洪武通宝５枚、鉄製品(?)の破片５点、人間の歯数本が出土している。

SD４(第26図)

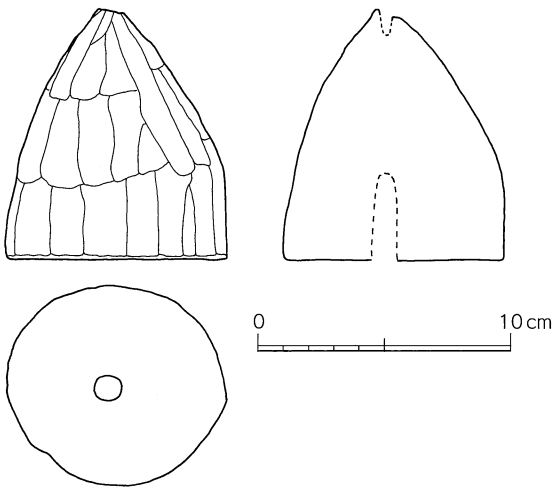
長軸約1.3m、短軸約0.95m、検出面からの深さ約20cmを測り、楕円形プランを呈する。長軸の方向はＮ－14°－Ｅを指し、ほぼ床面で銭貨、鉄製品(?)の破片４点、人骨の一部(?)が出土した。銭貨は錆により著しく錆着(しゅうちゃく)したうえに繊維質と木質が固着した状態で確認されている。また、繊維には布目が明瞭に残っていることから頭陀袋(ずだぶくろ)と思われる。銭貨は６～８枚と推定され、ＳＤ１～３と同じように洪武通宝ではないかと考える。

なお、ＳＤ１～ＳＤ４内から出土した銭貨についての詳細は第６表『Ｃ区土壙墓内出土銭貨計測表』を参照いただきたい。

(４)土坑(SC)

SC１(第26図)

ＳＡ２の南西隅で検出され、ＳＡ２の南西壁の一部を切っている。長軸約2.1m、短軸約1.5m、検出面からの深さ約60cmを測る、楕円形プランである。長軸の方向はＮ－２°－Ｗを指す。埋土は４層に分けられ、レンズ状に堆積している。床面から約40cmの所で円錐状の軽石製品が出土している。底経8.7cm、高さ9.9cm、穿孔径4.5mm(上位)・10.5mm(下位)を測る。



第27図 SC1出土軽石製品実測図(S＝1／3)

周囲が削られ、上部及び底面の中心には未貫通の穿孔が施されているが、その用途等については不明である。出土遺物については、第27図『ＳＣ１出土軽石製品実測図』を参照いただきたい。

なお、ＳＣ２～５については第７表『Ｃ区土坑計測表』を参照いただきたい。

(5)溝状遺構(SE)

SE１(第23図)

調査区中央から調査区外の南東方向へ走行している。残存部は長さは約14.0m、幅は約1.2～2.6mを測る。溝の断面形態はＵ字状を呈している。構築時期については、中世の土壙墓(ＳＤ３)を切っており、中世の所産と思われるが、出土遺物がなく詳細な時期については不明である。

(6)包含層

包含層からは少量の土師器が出土している。詳細は、第30図『ＳＤ２及び包含層出土遺物実測図』及び『Ｃ区出土遺物観察表』の15・16を参照いただきたい。

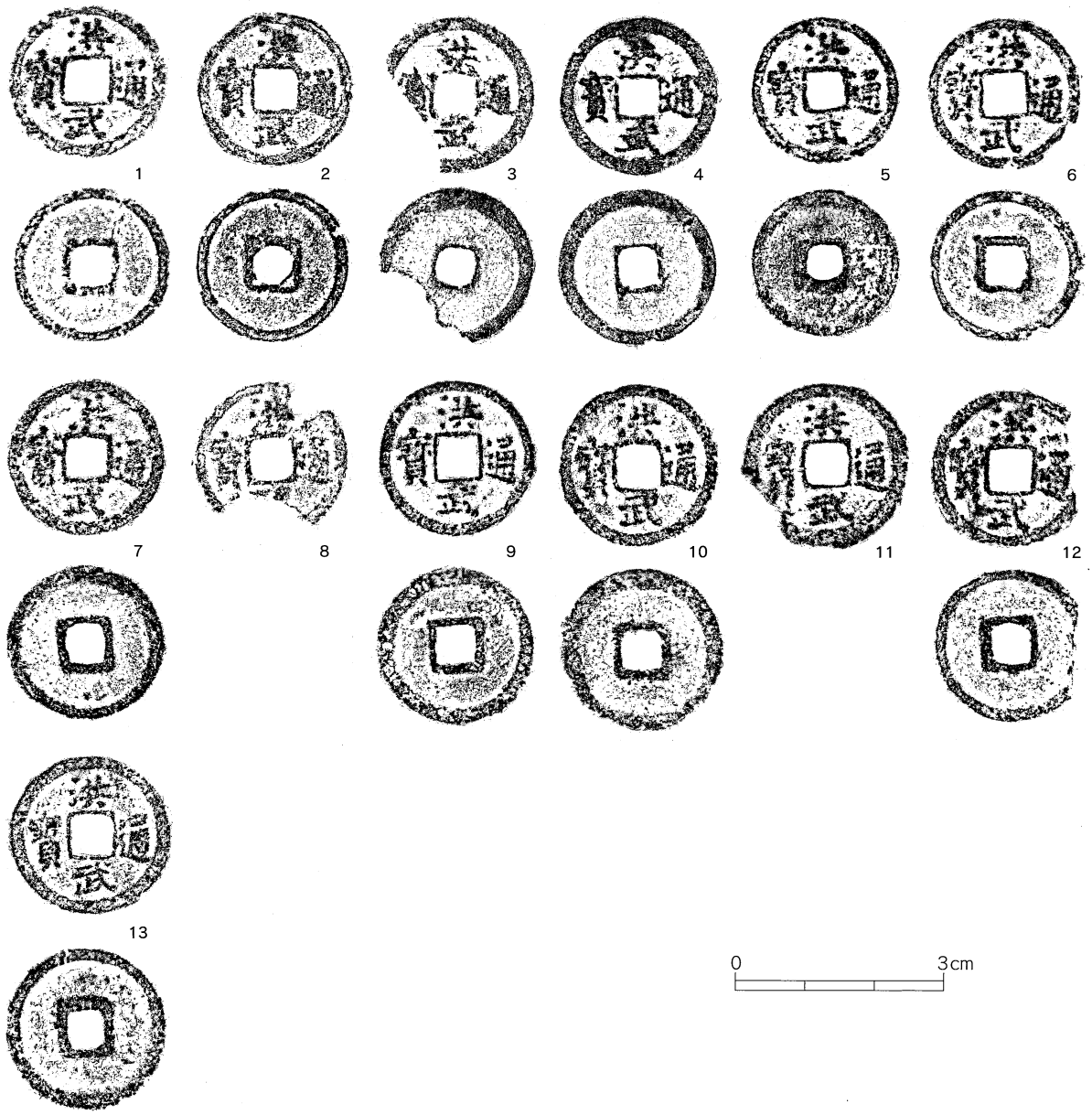
第６表 Ｃ区土壙墓出土銭貨計測表

出土遺構	挿図番号	銭貨名	王朝	初鋳年	外形(mm)	内形(mm)	重量(g)	備　　考
ＳＤ１	1	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.2	
ＳＤ１		洪武通宝	明	1368年	—	—	2.0	一部欠損　ヒビのため拓影なし
ＳＤ１	2	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.0	一部欠損
ＳＤ１	3	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	1.7	4分の1欠損
ＳＤ１	4	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.8	2.1	
ＳＤ１		洪武通宝	明	1368年	—	—	0.9	4分の3欠損　拓影なし
ＳＤ２	5	洪武通宝	明	1368年	2.1	1.8	2.1	
ＳＤ２	6	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.0	一部欠損
ＳＤ２	7	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.8	1.9	一部欠損
ＳＤ２		洪武通宝	明	1368年	—	—	2.0	ヒビのため拓影なし
ＳＤ２	8	洪武通宝	明	1368年	2.1	1.9	0.9	３分の１欠損　拓影（表のみ）
ＳＤ２		洪武通宝	明	1368年	—	—	0.6	4分の3欠損　拓影なし
ＳＤ２	9	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	2.1	
ＳＤ３	10	洪武通宝	明	1368年	2.3	2.0	2.2	
ＳＤ３	11	洪武通宝	明	1368年	2.3	1.9	1.7	8分の1欠損　拓影（表のみ）
ＳＤ３		洪武通宝	明	1368年	—	—	1.9	8分の1欠損　ヒビのため拓影なし
ＳＤ３	12	洪武通宝	明	1368年	2.2	1.9	1.9	8分の1欠損
ＳＤ３	13	洪武通宝	明	1368年	2.3	1.9	2.1	
ＳＤ４		(洪武通宝)	(明)	(1368年)	—	—	—	錆による銹着が著しい（６～８枚？）

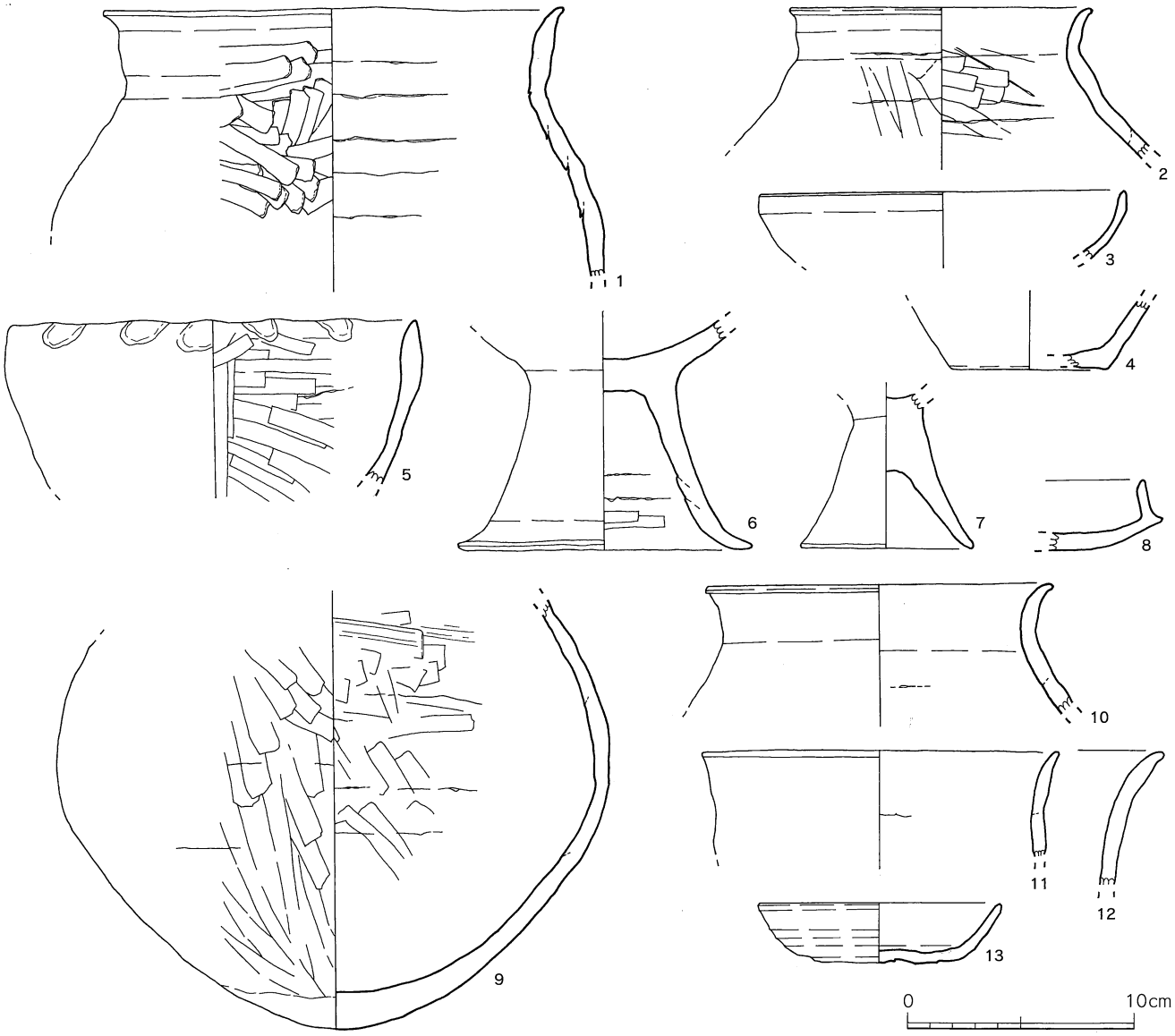
第７表 Ｃ区土坑計測表

土坑番号	主軸方位	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土状況	遺物の有無
ＳＣ２	Ｎ－10°－Ｅ	楕円形	1.80	1.00	0.56	4層	無
ＳＣ３	Ｎ－47°－Ｅ	楕円形	1.20	1.05	0.30	―	無
ＳＣ４	Ｎ－38°－Ｅ	楕円形	1.35	(0.6)	0.09	―	無
ＳＣ５	Ｎ－40°－Ｅ	楕円形	1.30	(0.6)	0.13	―	無

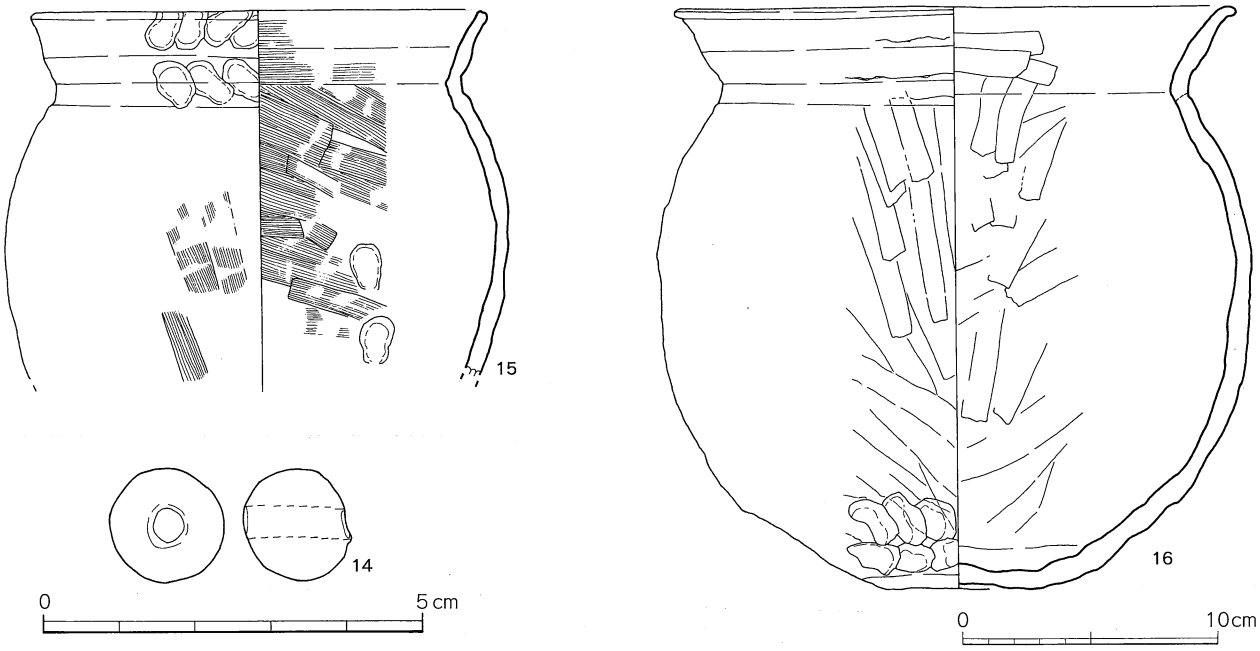
＊（　　）は現存の長さを示す。



第28図　SD１～４出土銭貨拓影(S＝１／１)



第29図　SA1～3出土遺物実測図(S＝1／3)



第30図　SD2及び包含層出土遺物実測図(14 S＝1／1　15･16 S＝1／3)

第８表　山崎上ノ原第２遺跡出土装飾具計測表

調査区	遺物番号	径(mm)	幅(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備　　考
A区	73	41.00	5.20	1.50	10.30	滑石製
A区	74	26.00(長さ)	13.02	3.83	3.95	滑石製　緑色
A区	133	7.40	6.92	1.50	0.83	滑石製
A区	134	8.32	4.93	1.66	0.31	滑石製
A区	135	6.11	3.04	1.76	0.16	滑石製
A区	136	4.95	2.16	2.10	0.07	滑石製
A区	137	4.60	3.05	1.27	0.08	ガラス製　紺色
A区	138	5.14	3.59	2.05	0.31	滑石製
A区	139	3.38	2.03	1.20	0.03	ガラス製　青色
A区	140	2.74	0.90	1.12	0.01	ガラス製　赤色
C区	14	15.37	13.02	3.83	3.95	滑石製　暗緑灰色

第９表　C区出土遺物観察表

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内面	外面	胎土(混和材・混入物)	焼成	色調 内面	外面	備考
1	SA1	土	甕	口縁～胴部	25.5			横方向のナデ	横方向のナデ	1～6mmの暗赤褐・赤灰色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
2	SA1	土	甕	口縁～胴部	13.5			上位:ナデ 下位:斜め方向のナデ	ナデ(下→上) 上位:スス付着	1～4mmのにぶい黄橙・黒褐・暗褐色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	
3	SA1	土	坏身	口縁～体部	16.5			ミガキ	横方向のナデ	微細な褐色粒	良好	明黄褐	明黄褐	
4	SA1	土	甕	底部		6.2		丁寧なナデ	斜め方向のナデ	精良	良好	橙	橙	
5	SA2	土	甕	口縁～胴部				ナデ	ナデ スス付着	1～3mmの褐・灰褐・黒色粒	良好	橙	橙	
6	SA2	土	高坏	坏部～裾部		12.6		ミガキ 横方向のナデ	ミガキ(単位不明)	1mmの暗褐色粒	良好	にぶい橙 橙	橙	外面:風化気味
7	SA2	土	高坏	坏部～裾部		7.6		横方向の指ナデ	ナデ	1～2mmの白・灰白色粒 1mmの透明光沢粒	良好	橙	橙	
8	SA2	土	坏身	口縁～底部				ナデ	ナデ	1.5mm以下の茶褐色粒 微細な透明光沢粒	良好	橙	橙	
9	SA3	土	甕	頸部～底部				工具による横方向のナデ　一部黒変	ナデ(下→上) 下位:薄くスス付着 底部:円を描くようなナデ	2～6mmの褐・灰・白色粒	良好	明黄褐	明黄褐	
10	SA3	土	甕	口縁～頸部	15.5			上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	2.5mm以下の灰褐・赤褐色粒 3mm程の黒色光沢粒	良好	にぶい黄橙	明褐灰	
11	SA3	土	甕	口縁	15.8			横方向のナデ	ナデ	3.5mm以下の白灰・灰褐・赤褐色粒	良好			外面:風化気味
12	SA3	土	甕	口縁～頸部				上位:横方向のナデ 下位:斜め方向の刷毛目(単位不明)	上位:横方向の刷毛目(単位不明) 下位:横・縦方向のナデ	3mm以下の赤褐・灰褐・浅黄色粒	良好	灰褐 橙	にぶい橙	
13	SA3	土	皿	口縁～底部	11.7		2.7	横方向のナデ	横方向のナデ	微細な赤褐色粒	良好	にぶい褐	にぶい褐	切り離し技法:ヘラ切り
15	包含層	土	甕	口縁～胴部	17.6			上位:横方向の刷毛目 下位:斜め方向の刷毛目	上位:指押さえ 下位:斜め方向の刷毛目　スス付着	1～3mmの赤褐・灰褐・黒色粒 5mm程の赤褐色粒	良好	橙	橙	
16	包含層	土	甕	口縁～底部	21.7		23.0	上位:横ナデ 下位:ナデ	ナデ 一部黒変	2～8mmの暗褐色粒	良好	橙	橙	

第３節　Ｄ区の調査（第31図）

１　調査の概要

調査面積は720㎡である。標高約9.0ｍの平坦な地形である。

古墳時代の竪穴住居跡９軒・土壙墓２基、時期不明の溝状遺構２条・土坑５基・ピット７基が確認されている。検出面はすべて第Ⅲ層の褐色砂質土層面である。竪穴住居跡９軒は調査区中央から西側で検出されている。何れからも遺構に伴う主柱穴は確認されていない。土壙墓は住居の床面を掘り込むかたちで１基、住居の床面と壁を切るかたちで１基が確認されている。

主な出土遺物は土師器、須恵器、刀子(２点)である。

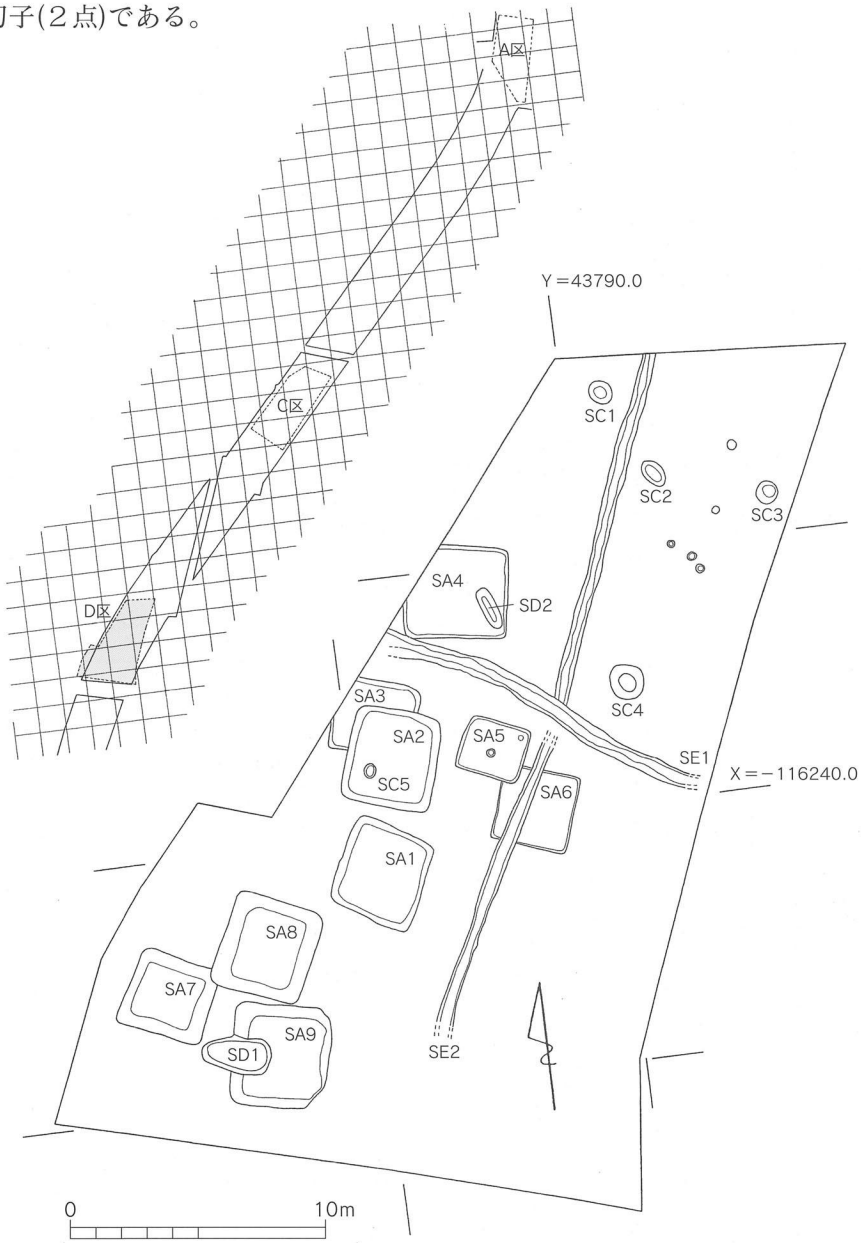
２　遺構と遺物

(１)竪穴住居跡(SA)

SA１（第32図）

調査区ほぼ中央で検出した。長軸約3.6ｍ、短軸約3.3ｍの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約40㎝を測る。床面積は約10.6㎡である。長軸方向はＮ―17°―Ｅを指す。出土遺物は土師器が殆どで検出面から床面の間で約60点が出土している。

【出土遺物】第44図ＳＡ１出土遺物実測図　23～25(Ｄ区出土遺物観察表)



第31図　D区 遺構分布図(Ｓ＝１／300)

SA２（第32図）

ＳＡ１の北側でＳＡ３を切るかたちで確認した。長軸約3.8ｍ、短軸約3.6ｍの隅丸方形プランで、検出面からの深さ約50㎝、床面積は約12.3㎡を測る。長軸方向はＮ―16°―Ｅを指す。南西隅に長軸約59㎝、短軸約48㎝、深さ約25㎝の時期不明の土坑(ＳＣ５)を検出した。住居内及び土坑からの出土遺物は確認されていない。

SA３（第32図）

ＳＡ２により住居の南東部は切られており、北西側は調査区外に延びている。現存の形状から判断すると約2.9ｍ×約3.2ｍの隅丸方プランを呈するものと思われ、床面積は約7.2㎡である。検出面から床

面までの深さ約40㎝を測り、長軸方向はN―74°―Wを指す。出土遺物はない。

SA4（第33図）

長軸約4.0m、短軸約3.6mの隅丸方形プランを呈し、北西側は調査区外に延びる。検出面からの深さは約40㎝、床面積は約13.4㎡を測る。長軸方向はN―78°―Wを指す。遺構に伴う主柱穴等は検出できなかった。なお、南東隅では土壙墓(ＳＤ２)が確認されており、ＳＤ２については(2)土壙墓で述べている。また、南西隅には完形の壺が立位の状態で出土しており、別の壺の底部が口縁部にはめられており蓋として用いられていたものと思われるが、調査時点では破損しており、甕の中には土砂が流入していた。なお、甕の中の土を篩にかけたところ刀子１本が出土している。遺物は土師器を中心にほぼ床面で約300点が出土している。

【出土遺物】第40・41図ＳＤ２出土遺物実測図(1)(2)　第42・43図ＳＡ４出土遺物実測図(1)(2)　６・８・９・14・16～22(D区出土遺物観察表) 刀子(15)；(第11表『山崎上ノ原第２遺跡出土金属製品計測表』)

SA5（第33図）

ＳＡ６の北西端部を切ったかたちで検出された。長軸約2.5m、短軸約2.2mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約40㎝、床面積約4.8㎡を測る。長軸方向はN―63°―Wを指す。C区で検出された住居では最小である。中央と北東部でピット２基を確認している。北東隅では床面で押しつぶされた状態の甑１個体分と須恵器の坏身が２個出土している。

【出土遺物】第45図ＳＡ５出土遺物実測図　26～29(D区出土遺物観察表)

SA6（第33図）

長軸約３m、短軸約2.9mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約15㎝、床面積約7.6㎡を測る。長軸方向はN―14°―Wを指す。住居の北端部をＳＡ５に切られ、さらに北から南に走行する溝(ＳＥ２)により中央から西側を幅約40～60㎝にわたり切られている。出土遺物はない。

SA7（第33図）

北東端部がＳＡ８により切られている。長軸約3.2m、短軸約3.0mの隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さ約60㎝、床面積約7.8㎡を測る。長軸方向はN―60°―Wを指す。出土遺物はない。

SA8（第33図）

長軸約3.7m、短軸約3.6㎝の隅丸方形プランで、床面積約12.0㎡を測り、検出面からの深さは約60㎝である。長軸方向はN―30°―Eを指す。ＳＡ７の北隅部を切っている。出土遺物はない。

SA9（第34図）

北端部はＳＡ８と接し、長軸約4.0m、短軸約3.8㎝の隅丸方形プランを呈し、検出面からの深さは約45㎝、床面積約14.2㎡を測る。長軸方向はN―11°―Eを指す。住居の床面と西壁は土壙墓(ＳＤ１)により切られている。また、南東端部は現代の攪乱を受けている。ＳＤ１については(2)土壙墓で述べている。

【出土遺物】第35図ＳＡ９出土遺物実測図　30(D区出土遺物観察表)

(2)土壙墓(SD)

SD1(第34･36図)

調査区南端で検出されたＳＡ９の中央から西側の壁を切るようなかたちで検出されている。長軸約2.7m、短軸約1.4mの楕円形プランを呈し、長軸の方位はＮ－78°－Ｗである。壙底は最大長約2.1ｍ、幅約1.1～0.6ｍの東側が膨らむ卵形を呈し、砂に黄褐色粘土を混ぜた土を用いて整地し平らにしている。さらに、東側は須恵器の坏身と土師器の坏身を伏せて並べ高くしている。また、東側と西側は砂に黄褐色粘土が混ざった土で壙底より約10cm程高くしており、棺の押さえとしての役割があったものと思われる。人骨は消滅していたが、刀子１点がちょうど腰にあたる部分で出土している。東側が広く造ってあることから推測すると東側が頭になると考える。

【出土遺物】第37図ＳＤ１出土遺物実測図　31・32(Ｄ区出土遺物観察表) 刀子(33)；(第８表『山崎上ノ原第２遺跡出土金属製品計測表』)

SD2(第38図)

調査区の東端に位置するＳＡ４の南東隅で確認されている。長軸の方位はＮ－８°－Ｗを指す。規模は長軸約1.7m、短軸約0.6mの楕円形プランである。床面を砂で平らにし、その上に主軸から左右約10cm程空け土師器の甕の口縁部と胴部のみを使い、外器面を上にした状態で並行にならべ約１ｍの土器列を形成している。県内では例を見ないものであろう。甕の破片の組み合わせについては第39図『ＳＡ４・ＳＤ２出土遺物接合関係図』を参照されたい。また、北側には須恵器の坏蓋と土師器の坏身が伏せて置かれ、両脇は土師器の片口鉢の一部を使って押さえがしてある。埋葬者の頭を乗せる「枕」として用いられたのではないかと推察される。さらに、枕の上に伏せて置かれている土師器の坏身と須恵器のハソウは、当初は頭の横に置かれていたが、横転したものと思われる。足元にあたる南側には、副葬品として土師器の高坏と須恵器の高坏と壺が置かれていた。遺構の規模から成人が埋葬されていたと推測される。

なお、この土壙墓の土壌については自然科学分析を実施している。内容は、内部床面(３地点)、土器直下(12地点)、遺構外(16地点)の計31点の試料を採取し、リン酸・カルシウム分析を行うものである。その結果、内部の床面でリン酸・カルシウム含量が比較的高い値が観測され、生物遺体が存在していた可能性が考えられる。しかし、地表面から比較的浅いことや、遺構埋土の上位層についての分析が行われていないことから、後世の農耕に伴う施肥などの影響が否定できないという結果であった。

【出土遺物参照】第40・41図ＳＤ２出土遺物実測図(1)(2) １～13(Ｄ区出土遺物観察表)

(3)土坑(SC)

調査区内でＳＣ１～５の５基の土坑が確認されている。規模等については下記の第10表『Ｄ区土坑計測表』を参照いただきたい。

第10表　D区土坑計測表

土坑番号	主軸方位	平面プラン	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	埋土状況	遺物の有無
SC1	N－63°－W	正円形	0.90	0.90	0.36	3層	無
SC2	N－42°－W	楕円形	1.20	0.75	0.28	3層	無
SC3	N－37°－W	楕円形	1.00	0.85	0.28	3層	無
SC4	N－50°－W	楕円形	1.50	1.40	0.24	3層	無
SC5	N－32°－E	楕円形	0.59	0.48	0.25	－	無

(4)溝状遺構(SE)

SE１(第31図)

調査区中央部を西から東へ走行し、途中でＳＥ２を切っている。両端は調査区外に延びるため不明である。規模は幅は約50～70㎝、深さは約30㎝を測る。溝の断面形態はＵ字状を呈し、西から東へ緩やかに傾斜している。埋土は３層に分層できる。出土遺物はなく構築時期等については不明である。

SE２(第31図)

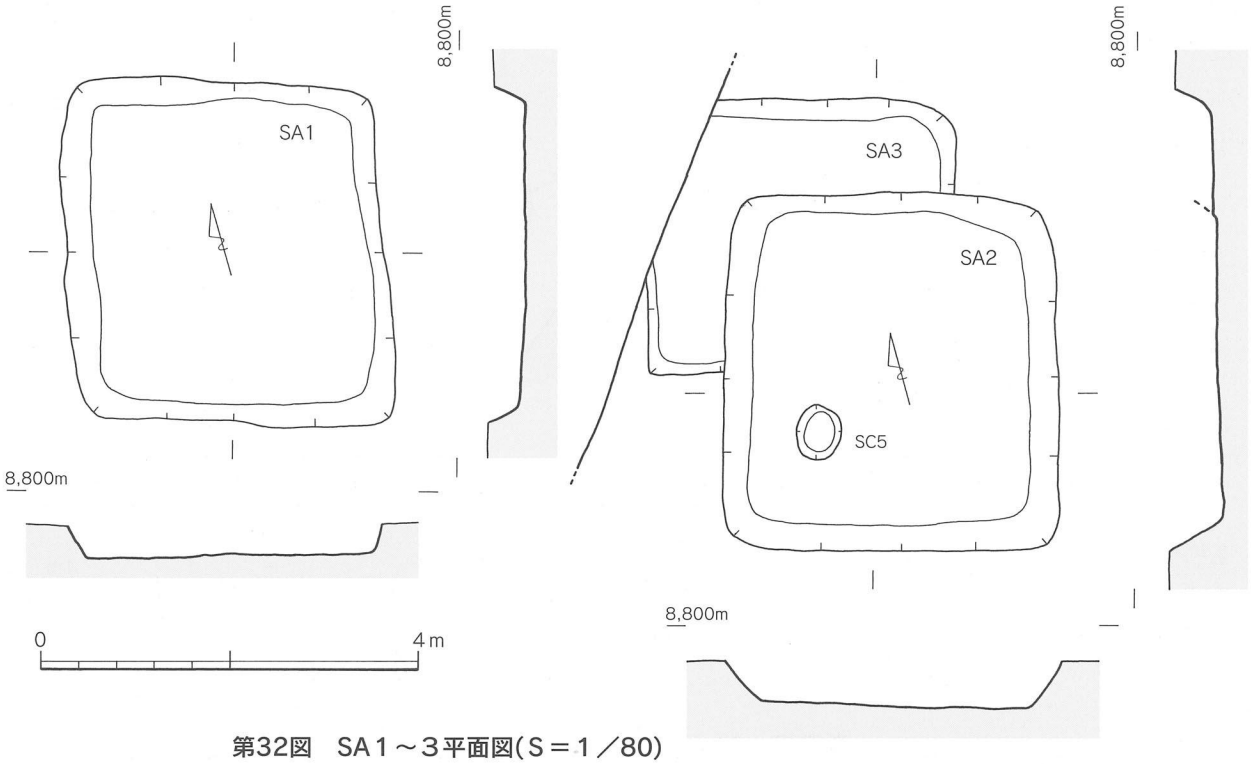
調査区北から南へ向かって走行する。北側は調査区外に延び南側は約40ｍの地点から不明である。幅は約60～75㎝、深さは約30～40㎝を測る。溝の断面形態はＵ字を呈している。北東から南西へ向かって緩やかに傾斜しながら調査区のほぼ中央を縦断する。埋土は２、３層に分層できる。出土遺物はなく構築時期等については不明である。

(4)包含層

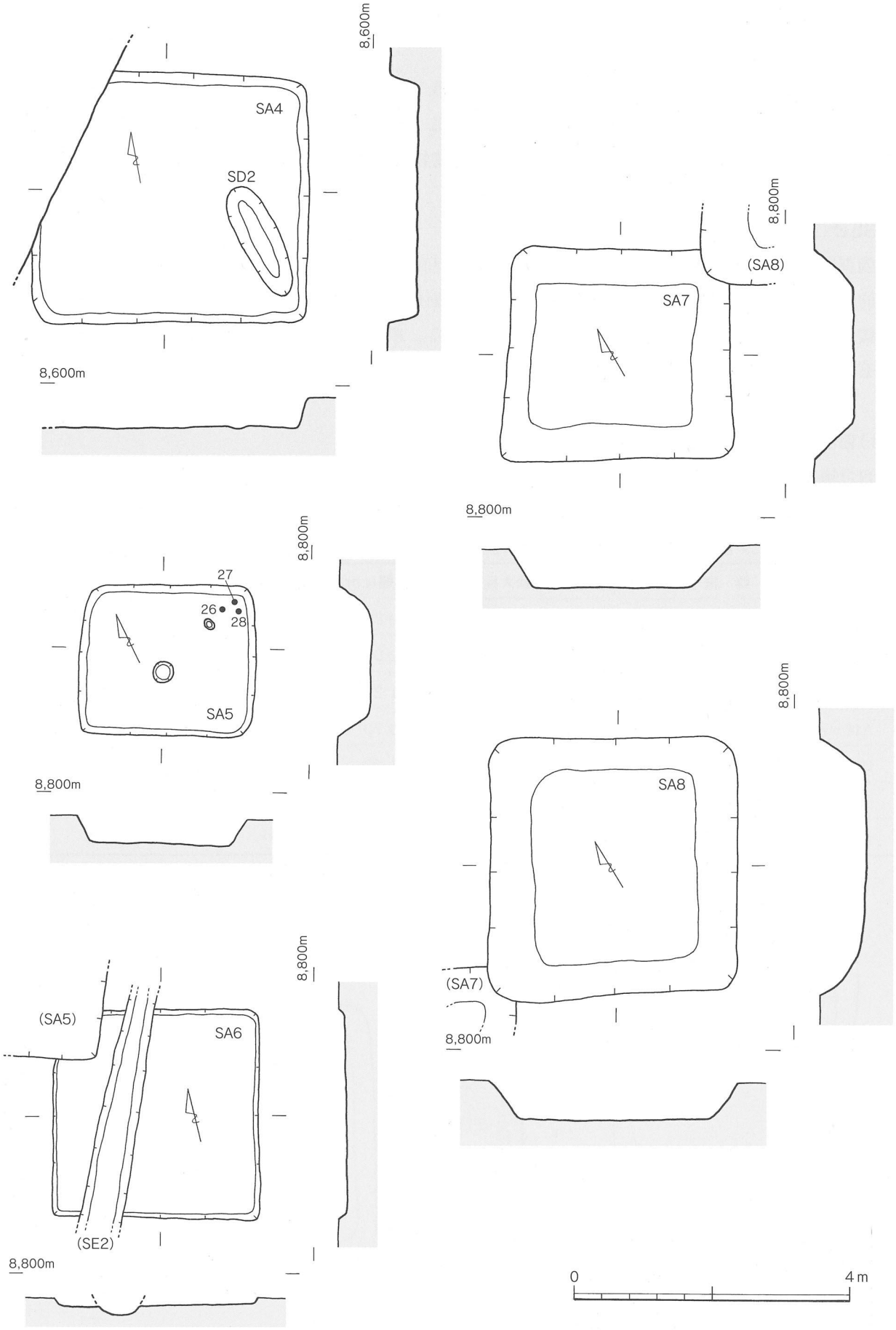
包含層出土遺物は土師器、須恵器の小破片のみであったため、図化は行っていない。

第11表　山崎上ノ原第２遺跡出土金属製品計測表

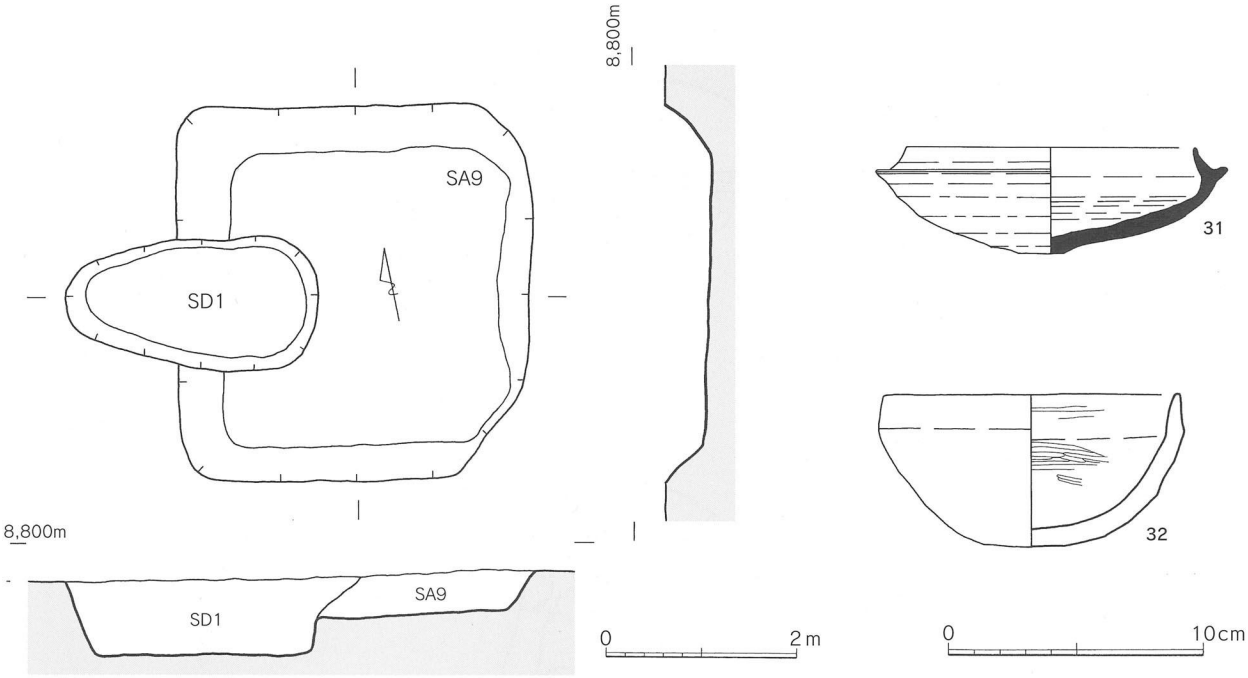
遺物番号	器　種	出土位置	最大長(cm)	最大幅(cm)	厚さ(cm)	備　　考
A区－69	刀子	包含層	4.3	0.80	0.3	－
A区－70	圭頭鏃	包含層	4.8	2.00	0.4	－
A区－71	刀子	包含層	5.8	1.20	0.2	－
A区－72	刀子	包含層	6.9	0.70	0.4	－
D区－15	刀子	ＳＡ４出土壺(14)	12.7	1.20	0.2	－
D区－33	刀子	ＳＤ１	17.2	1.15	0.2	副葬品
E区－16	刀子	ＳＤ１	7.0	1.25	0.2	副葬品



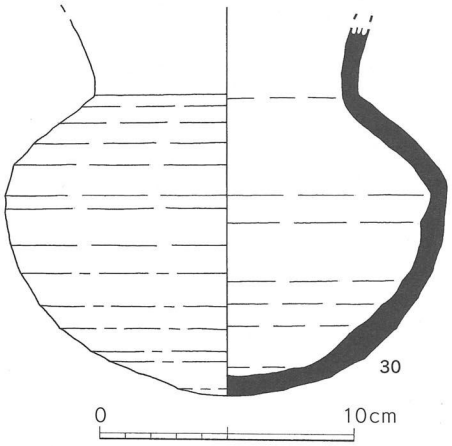
第32図　SA１～３平面図(Ｓ＝１／80)



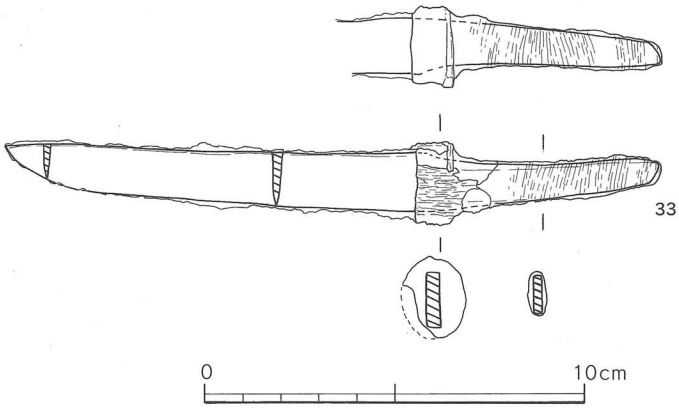
第33図　SA4～8平面図(S＝1／80)



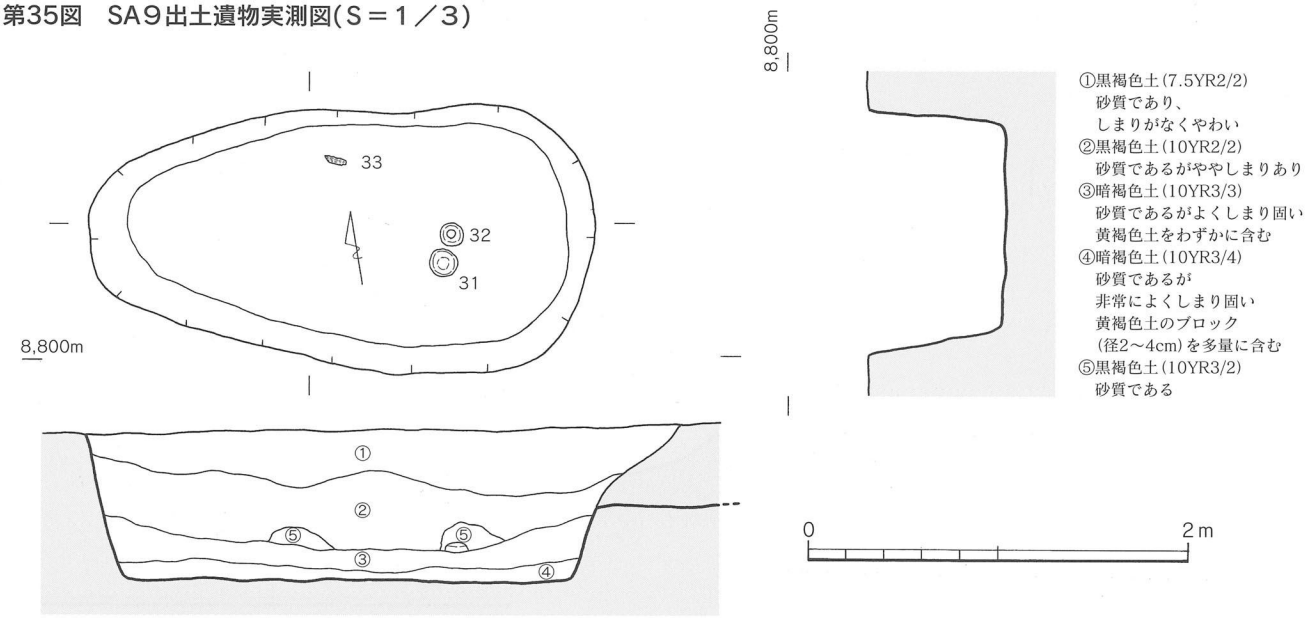
第34図　SA９及びSD１平面図(S＝１／80)



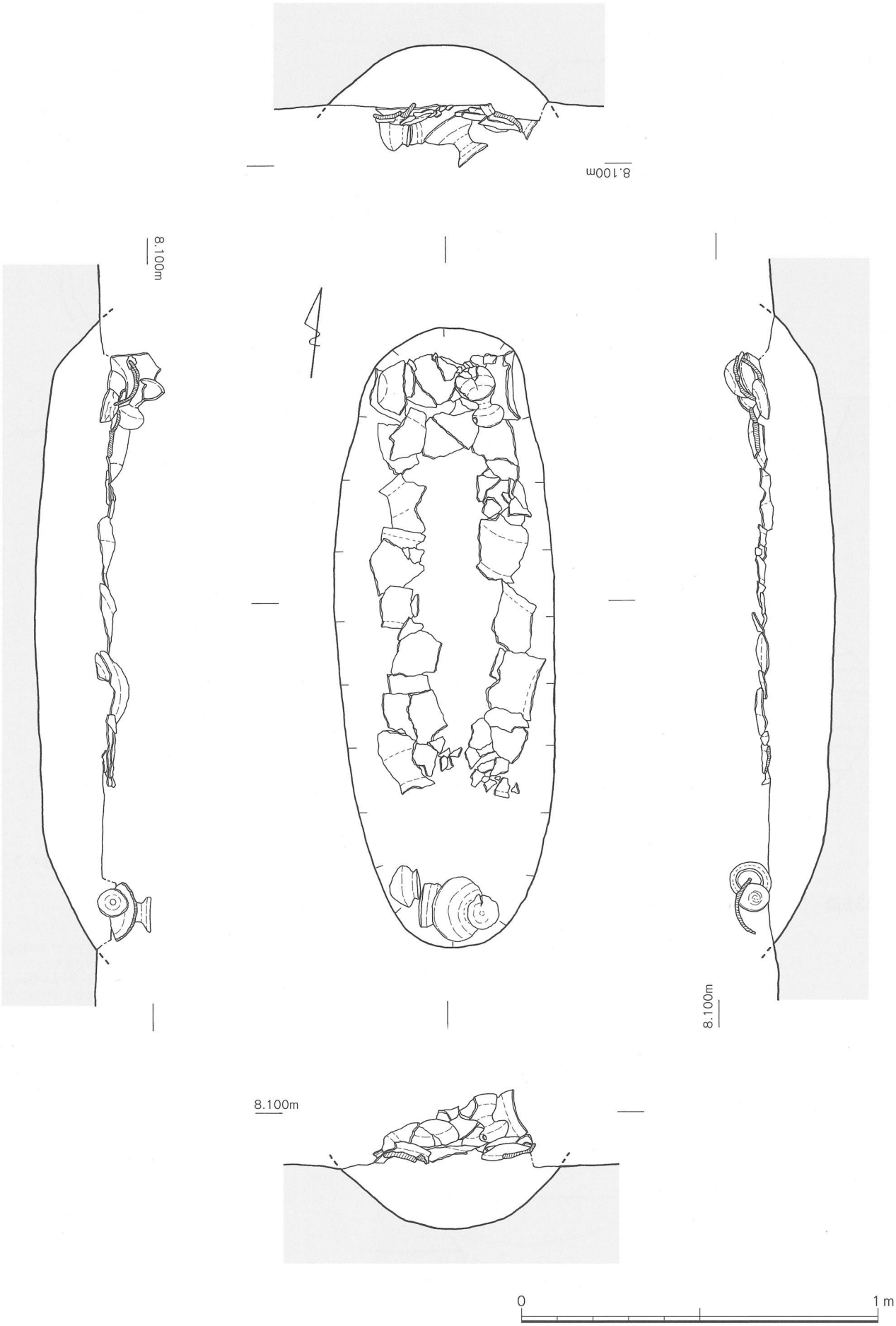
第35図　SA９出土遺物実測図(S＝１／３)



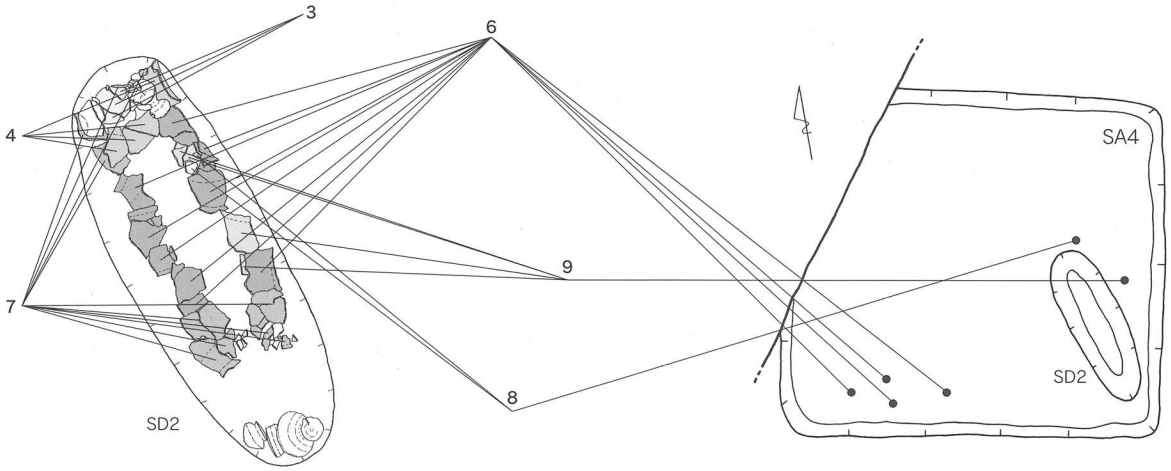
第37図　SD１出土遺物実測図(31･32 S＝１／３　33 S＝１／２)



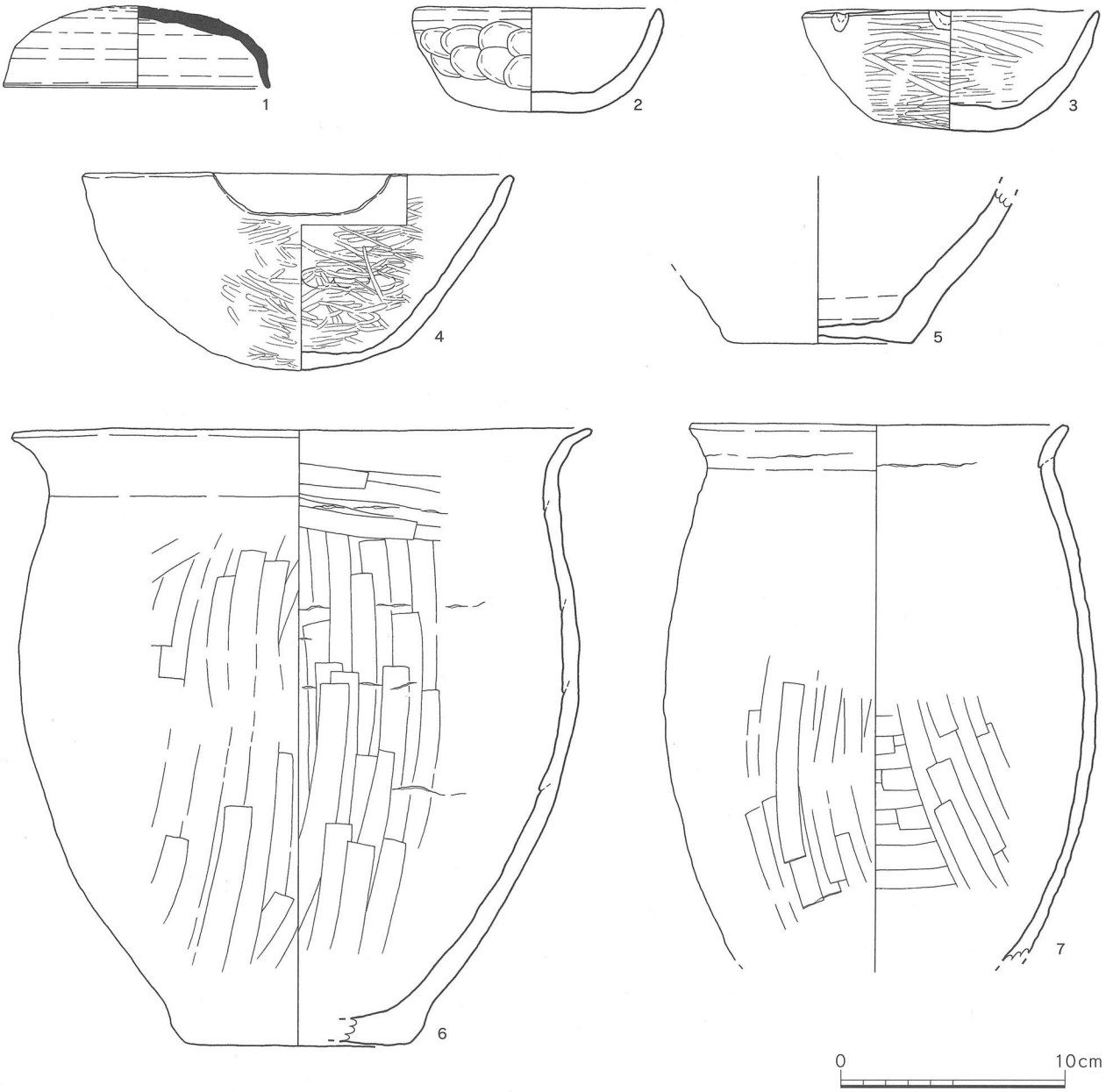
第36図　SD１平面図及び土層断面図(S＝１／40)



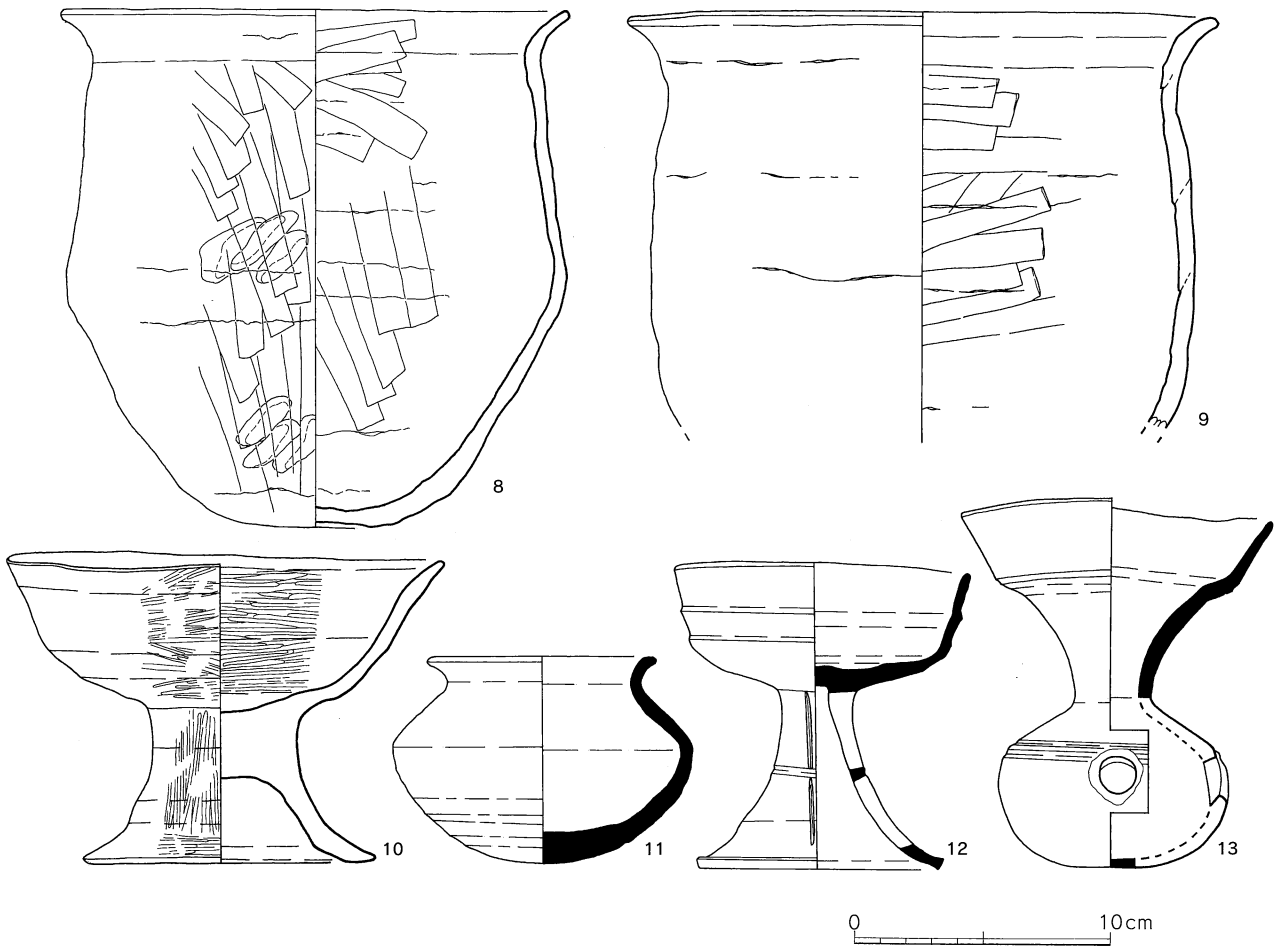
第38図　SD２平面図・見透断面図(Ｓ＝１／15)



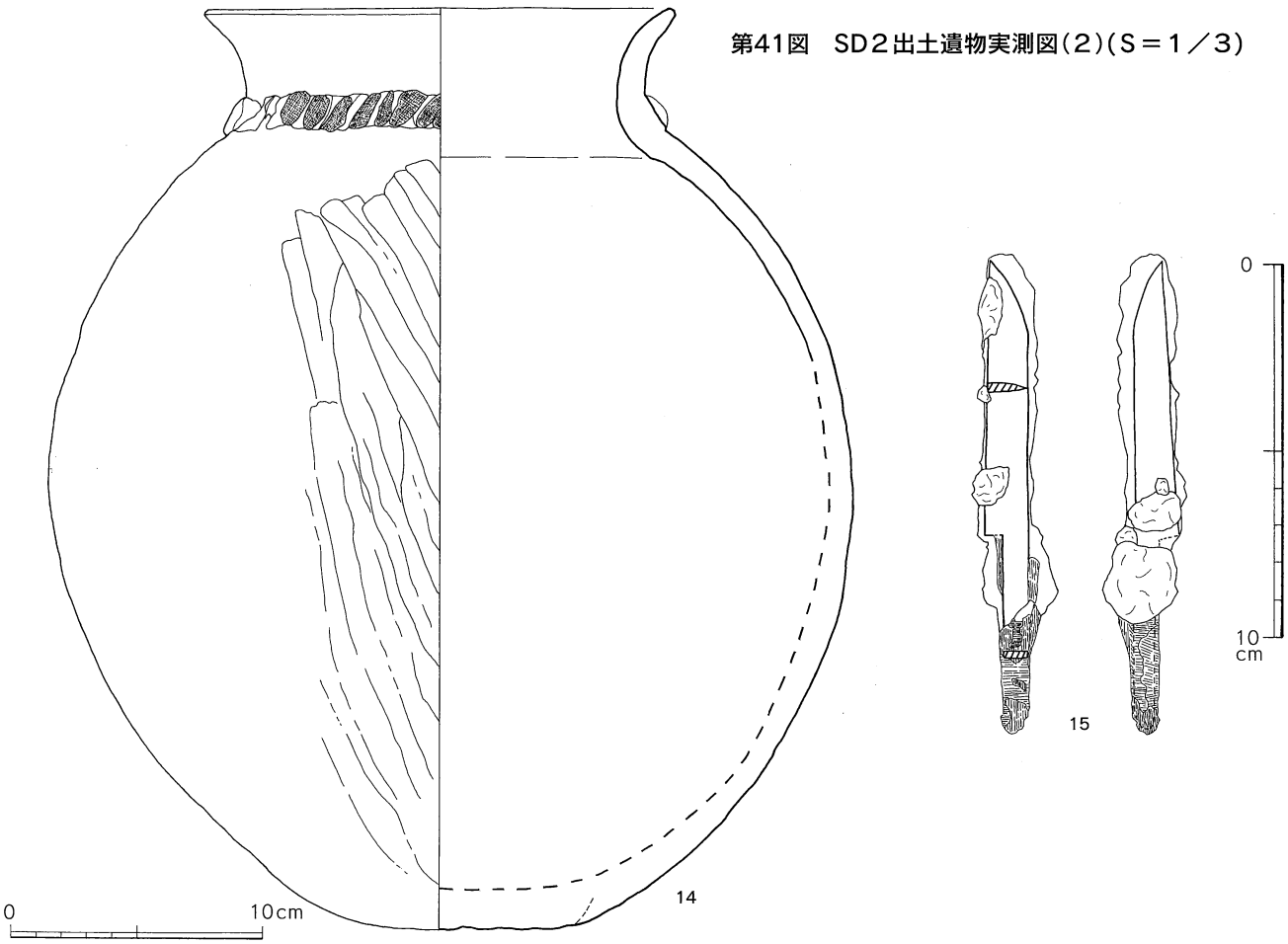
第39図　SA4・SD2出土遺物接合関係図



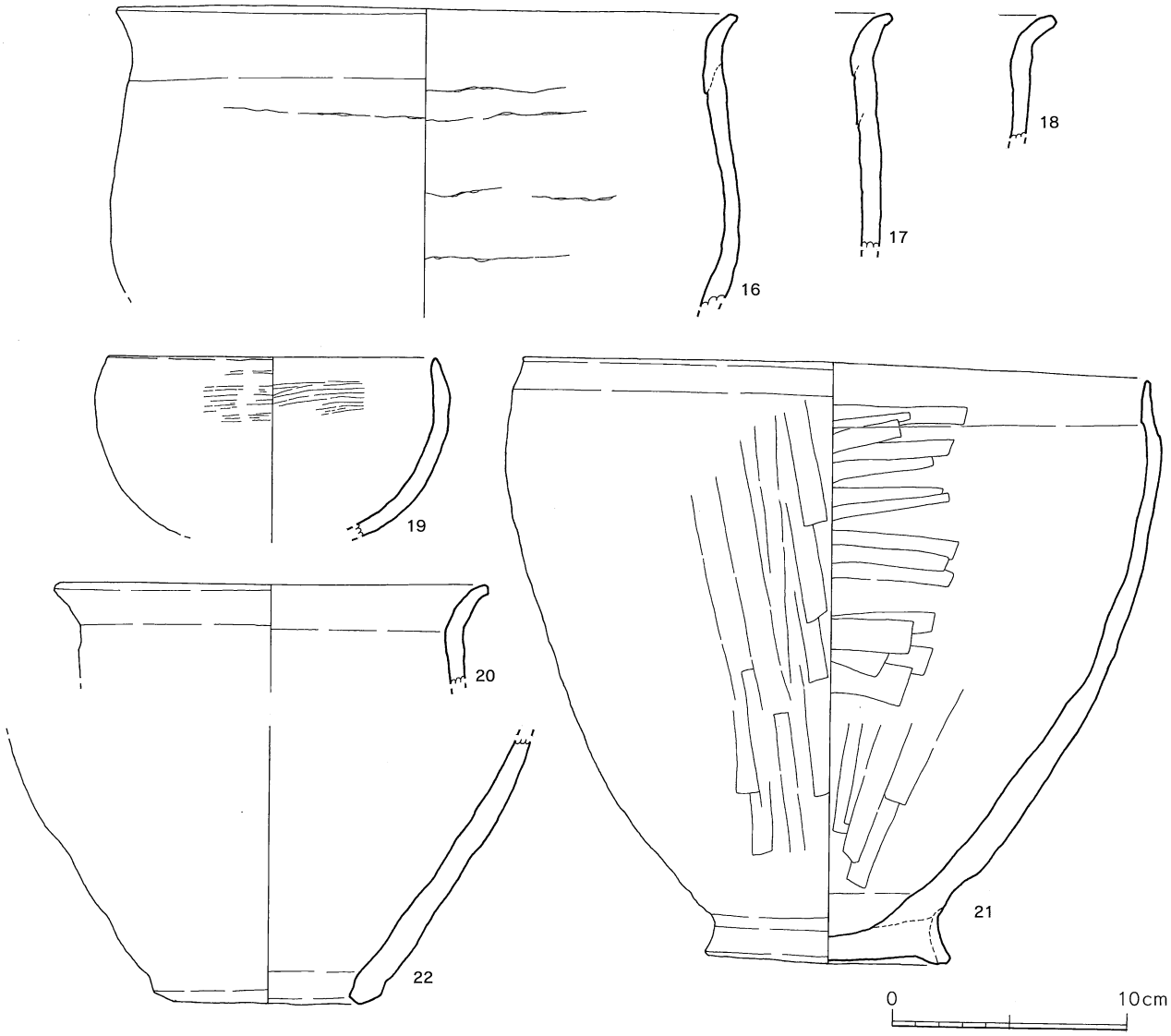
第40図　SD2出土遺物実測図(1)(S＝1／3)



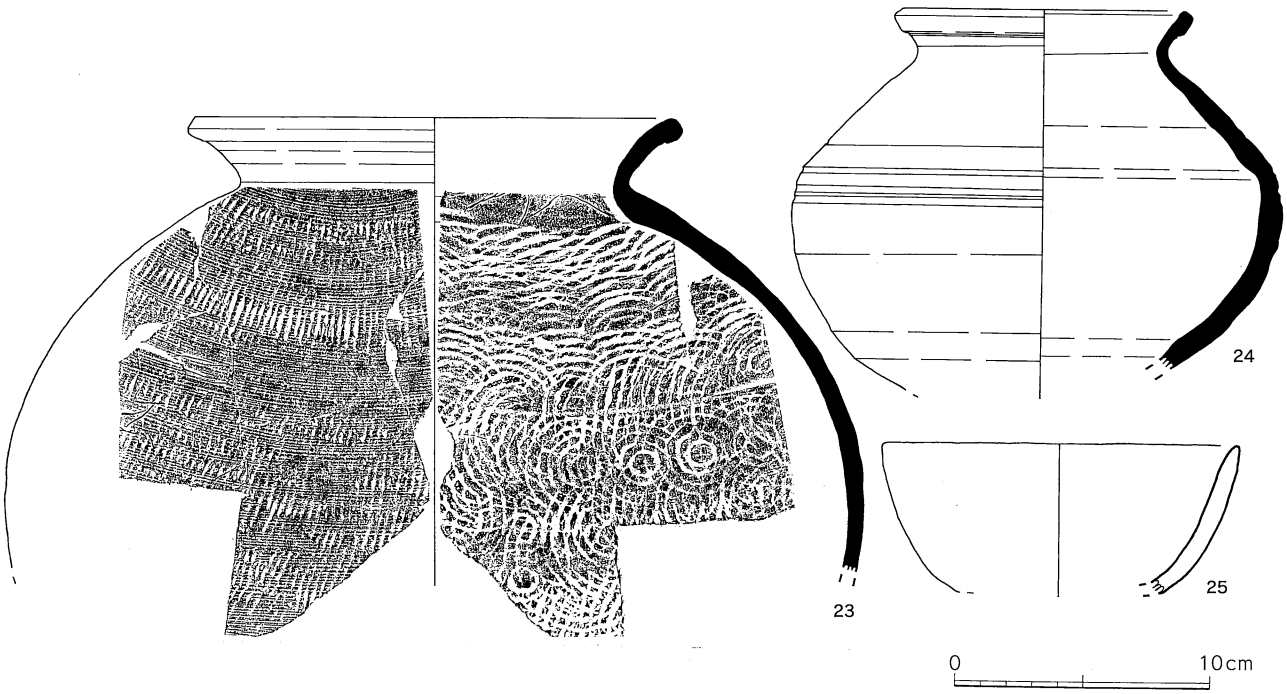
第41図　SD２出土遺物実測図(２)(S＝１／３)



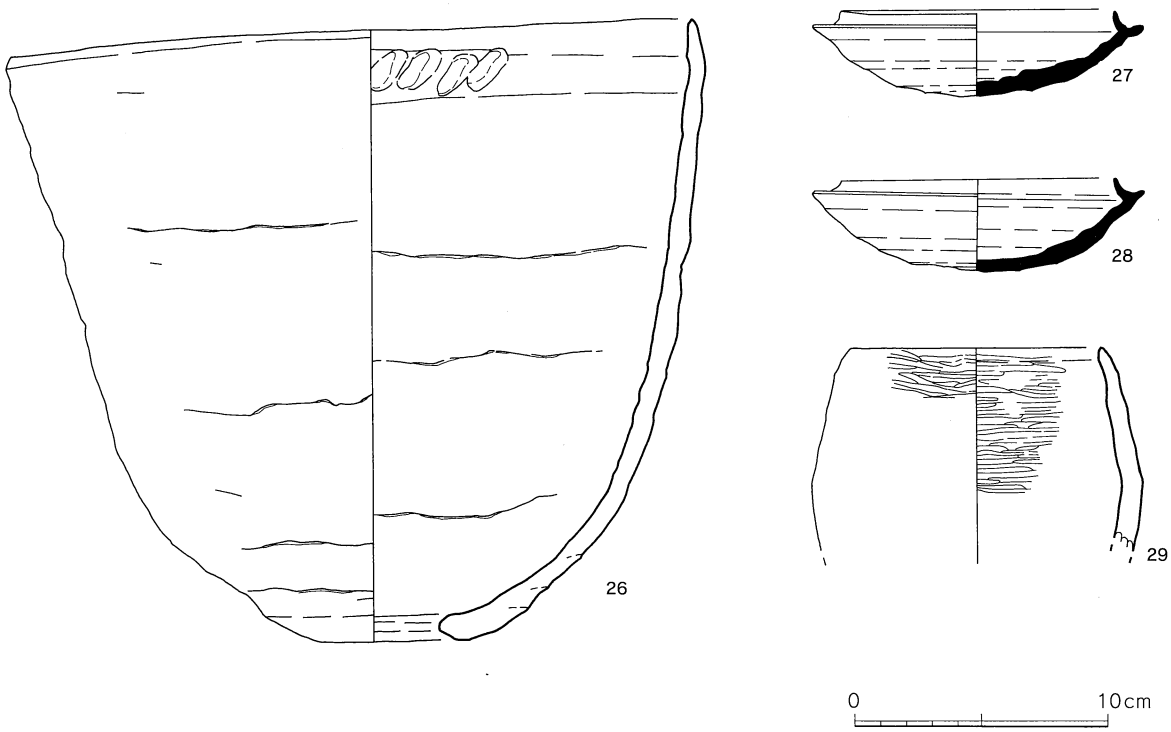
第42図　SA４出土遺物実測図(１)(14 S＝１／３　15 S＝１／２)



第43図　SA4出土遺物実測図(2)(S＝1／3)



第44図　SA1出土遺物実測図(S＝1／3)



第45図　SA5出土遺物実測図(S＝1／3)

第12表　D区出土遺物観察表(1)

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内面	外面	胎土(混和材・混入物)	焼成	色調 内面	外面	備考
1	SD2	須	坏蓋	完形	12.1			上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	上位:指ナデ 下位:回転ナデ	1～2mmの白色粒 1mm以下の黒色粒	良好	灰オリーブ 灰	灰オリーブ	
2	SD2	土	坏身	完形	10.9	11.2	4.7	丁寧なナデ	丁寧なナデ 指頭痕 底部:ナデ	2mm以下の褐色粒	良好	にぶい黄橙	橙 灰	
3	SD2	土	坏身	完形	13.2	4.0	5.4	上位:ミガキ 下位:ナデ	ヘラミガキ	精良	良好	橙	橙	口縁部に3カ所、打ち欠き痕
4	SD2	土	片口鉢	完形	19.4		8.9	ヘラミガキ 指頭痕	ミガキ	5mm以下の茶褐・褐色粒 0.5mm以下の無色透明光沢粒	良好	橙	にぶい黄橙 にぶい橙	
5	SD2	土	甕	底部		8.2		上位:工具による横方向のナデ 下位:斜め方向の工具ナデ	工具ナデ 一部スス付着	2～7mmの黒褐・黄灰色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
6	SD2 SA4	土	甕	口縁～底部	26.1	10.1	28.5	上位:ナデ　工具痕(単位不明) 中～下位:ナデ	上位:横方向のナデ 中位:工具痕(単位不明) 下位:ナデ　黒変	3～5mmの灰褐・暗褐色粒、半透明粒	良好	橙	橙	SD2と接合
7	SD2	土	甕	口縁～胴部下	17.1			横方向のナデ	上位:横方向のナデ 中～下位:ナデ	3.5mm以下の灰褐・灰・茶褐色粒	良好	にぶい橙 黄灰	にぶい黄橙 褐灰	
8	SD2 SA4	土	甕	完形	19.5			上位:横方向のナデ 中～下位:斜め・縦方向のナデ	上～下位:横方向のナデ 中位:斜め方向のナデ　スス付着	2～7mmの褐色粒	良好	明黄褐	明黄褐	
9	SD2 SA4	土	甕	口縁～胴部下	23.3			上位:横方向のナデ 下位:工具によるナデ	ナデ	2～7mmの黒褐・黄灰色粒	良好	橙	橙	外面:風化著しい
10	SD2	土	高坏	口縁～底部	17.2	10.5	12.3	ミガキ	上位:ミガキ(単位不明) 下位:ヘラ削り(単位不明)	精良	良好	橙	橙	
11	SD2	須	壺	口縁～底部	9.1		8.3	ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	5mm以下の灰白色粒	良好	黄灰	灰黄 黄灰	
12	SD2	須	高坏	口縁～底部	11.5	11.4	12.3	回転ナデ	回転ナデ	1～2mmの灰・白色粒	良好	灰	灰	内外面ともに自然釉

第13表　D区出土遺物観察表（2）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内　面	外　面	胎　土（混和材・混入物）	焼成	色調 内　面	外　面	備　考
13	SD2	須	ハソウ	口縁～底部	12.4		14.8	回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の灰白色粒 微細な黒色粒	良好	灰白	灰	内外面ともに自然釉 切り離し技法:ヘラ切り
14	SA4	土	壺	口縁～底部	18.5			上位:ナデ 頸部:刻目突帯 中～下位:工具によるナデ	横方向のナデ	5mm以下の赤灰・褐灰にぶい橙・黒・灰白・赤褐色粒、透明光沢粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙 黄灰	
16	SA4	土	甕	口縁～胴部	26.5			ナデ	ナデ 下位:僅かにスス付着	2～5mmの褐・灰褐色粒 1.5～2mmの黒色粒	良好	明褐	橙	
17	SA4	土	甕	口縁～胴部				上位:僅かに炭化物付着　中位:横方向のナデ　下位:斜め方向のナデ	上位:横方向のナデ 僅かにスス付着 下位:縦方向のナデ	2～8mmの暗赤褐・灰褐色粒	良好	明褐	橙	
18	SA4	土	甕	口縁～胴部				上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:横方向のナデ スス付着 下位:斜め方向の強いナデ	1.5～6mmの褐灰色粒	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	
19	SA4	土	坏身	口縁～胴部	13.9			横・斜め方向のヘラミガキ 下位:単位不明	横・斜め方向のヘラミガキ 下位:単位不明	2mm以下の赤褐色粒	良好	橙	橙	
20	SA4	土	甕	口縁	18.3			ナデ	横方向のナデ	5mm以下ににぶい赤褐色粒 2～8mmの暗褐色粒	良好	にぶい黄橙	橙	
21	SA4	土	甕	口縁～底部	26.8	7.3	26.2	上位:刷毛目 下位:ナデ　黒変	上位:指押さえ　斜め方向のナデ 中～下位:縦方向のナデ	2mm以下の白色粒 4mm以下の赤褐・橙色粒	良好	黄橙 橙	橙	
22	SA4	土	甑	胴部～底部		7.9		ナデ	ナデ 薄くスス付着	1.5～6mmの茶褐・黒・白色粒	良好	明褐	にぶい褐	
23	SA1	須	壺	口縁～胴部	18.6			上位:ナデ 中～下位:あて具痕(同心円)	上位:ナデ 中～下位:平行叩き後、カキ目	精良	良好	灰	灰	
24	SA1	須	壺	口縁～底部	11.5			横方向のナデ	横方向のナデ	1～4mmの灰白色粒	良好	灰	灰	
25	SA1	土	坏身	口縁～底部	14.2			ナデ	ナデ	精良	良好	灰黄褐	橙	内面:風化著しい
26	SA5	土	甑	口縁～底部	27.1	6.8	24.6	上位:横方向のナデ(単位不明) 下位:ナデ	ナデ	1～7mmの白・灰白・灰・橙・赤褐・暗褐・黒色粒	良好	橙	橙	外面:風化気味 蒸気孔径:6cm
27	SA5	須	坏身	口縁～底部	10.9		3.4	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1～5mmの白色粒	良好	灰	灰	内外面ともに赤色顔料を施す
28	SA5	須	坏身	口縁～底部	10.8		3.8	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	2.5mm以下の白色粒	良好	灰	灰	
29	SA5	土	鉢	口縁～胴部	9.7			横・斜め方向のヘラミガキ	上位:指押さえ後、ミガキ 下位:斜め方向のヘラミガキ　スス付着	1～3mmの赤褐色粒	良好	橙	橙	
30	SA9	須	壺	頸部～底部				上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	精良	良好	オリーブ灰	灰 灰白	
31	SD1	須	坏身	口縁～底部	11.5		4.2	回転ナデ 下位:斜め方向のナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1mm以下の灰白色粒	良好	灰	灰	
32	SD1	土	坏身	口縁～底部	11.6		6.1	ミガキ 黒変	上位:ミガキ 下位:ミガキ(単位不明)	2mm以下の茶・淡黄色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	内外面:風化著しい 部分的に赤色顔料のあと

第４節　E区の調査（第46図）

１　調査の概要

調査面積は420㎡である。北から南に傾斜する傾斜地に位置し、標高約9.0～10.5ｍを測る。

古墳時代の土壙墓１基、古代の竪穴住居跡２軒・土坑１基、時期不明の土坑３基・溝状遺構３条が確認されている。検出面はすべて第Ⅲ層の褐色砂質土層面である。住居に伴う主柱穴は確認されていない。

遺物は土師器(墨書土器５点を含む)、須恵器、刀子１点、土錘20点が出土している。

なお、土錘については第14表『山崎上ノ原第１遺跡出土土錘計測表』及び第56図『山崎上ノ原第２遺跡出土土錘実測図』を参照いただきたい。

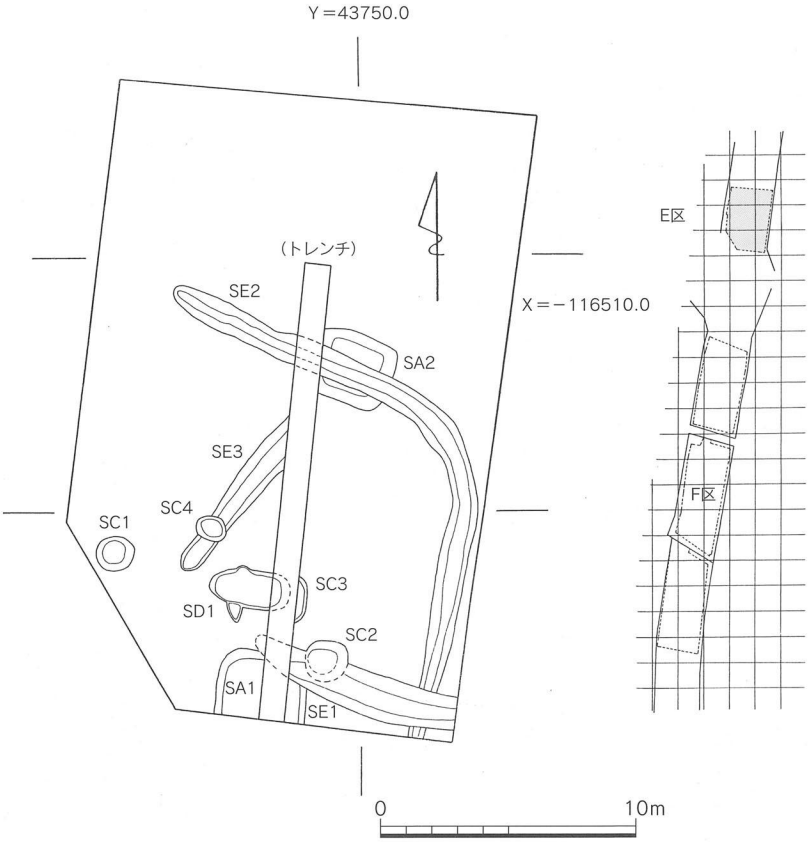
２　遺構と遺物

(１)竪穴住居跡(SA)

SA１（第47図）

調査区の南端に位置し、南側は調査区外に延びる。さらに、北東部もＳＥ１により幅約１ｍにわたり切られている。南北に約２＋αｍ、東西は約3.7ｍ、検出面からの深さ約40㎝を測り、隅丸方形プランになると思われる。遺物は土師器を中心に約50点が検出面から床面の間で出土している。

【出土遺物】第50図ＳＡ１出土遺物実測図　１～７(Ｅ区出土遺物観察表)



第46図　E区 遺構分布図(Ｓ＝１／300)

SA２（第47図）

調査区のほぼ中央で検出され 南北に約2.8＋αｍ、　東西は約2.8＋αｍ、検出面からの深さ約45～55㎝を測り、隅丸方形プランになると思われる。住居のほぼ中央を東西に縦断する溝状遺構(ＳＥ２)により幅約90㎝、深さ約30㎝にわたって切られている。出土遺物は殆どが土師器で約40点が検出面から床面の間で出土している。

【出土遺物】第51図ＳＡ２出土遺物実測図　８～14(Ｅ区出土遺物観察表)

(２)土壙墓(SD)

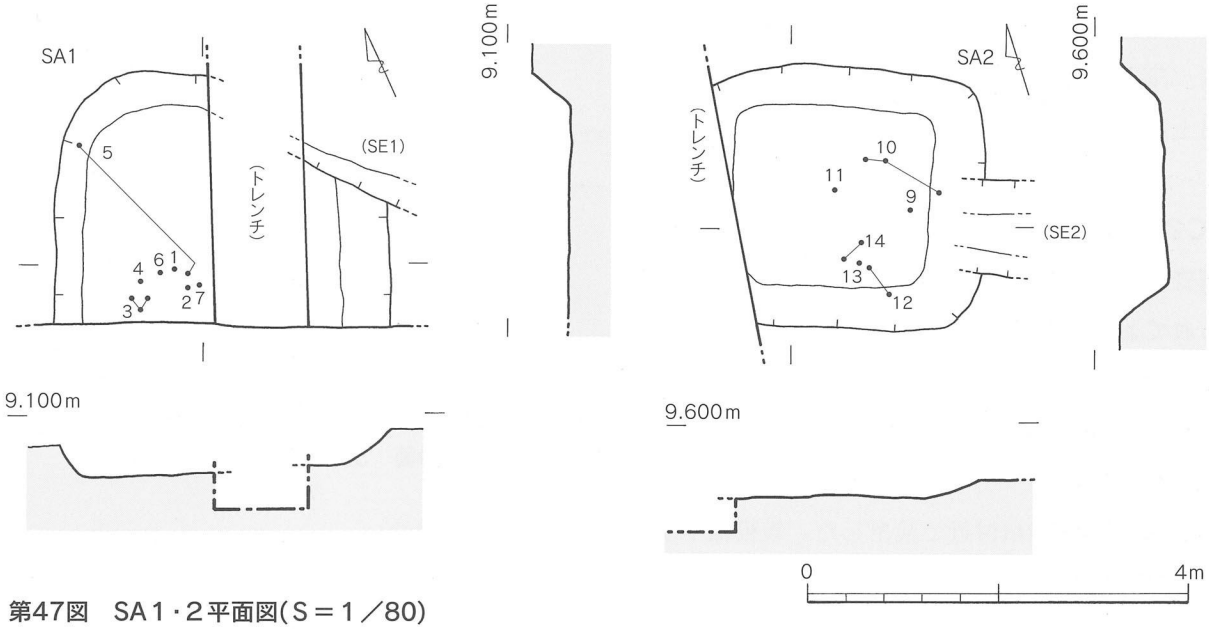
SD１（第48図）

ＳＡ１の北側で検出した。平面プランは楕円形であり、長軸約2.4＋αｍ、短軸約1.5ｍ、検出面からの深さ約50㎝を測る。長軸方向はＮ－80°－Ｗを指す。床面も楕円形(長径約2.1ｍ、短径約1.2ｍ)を

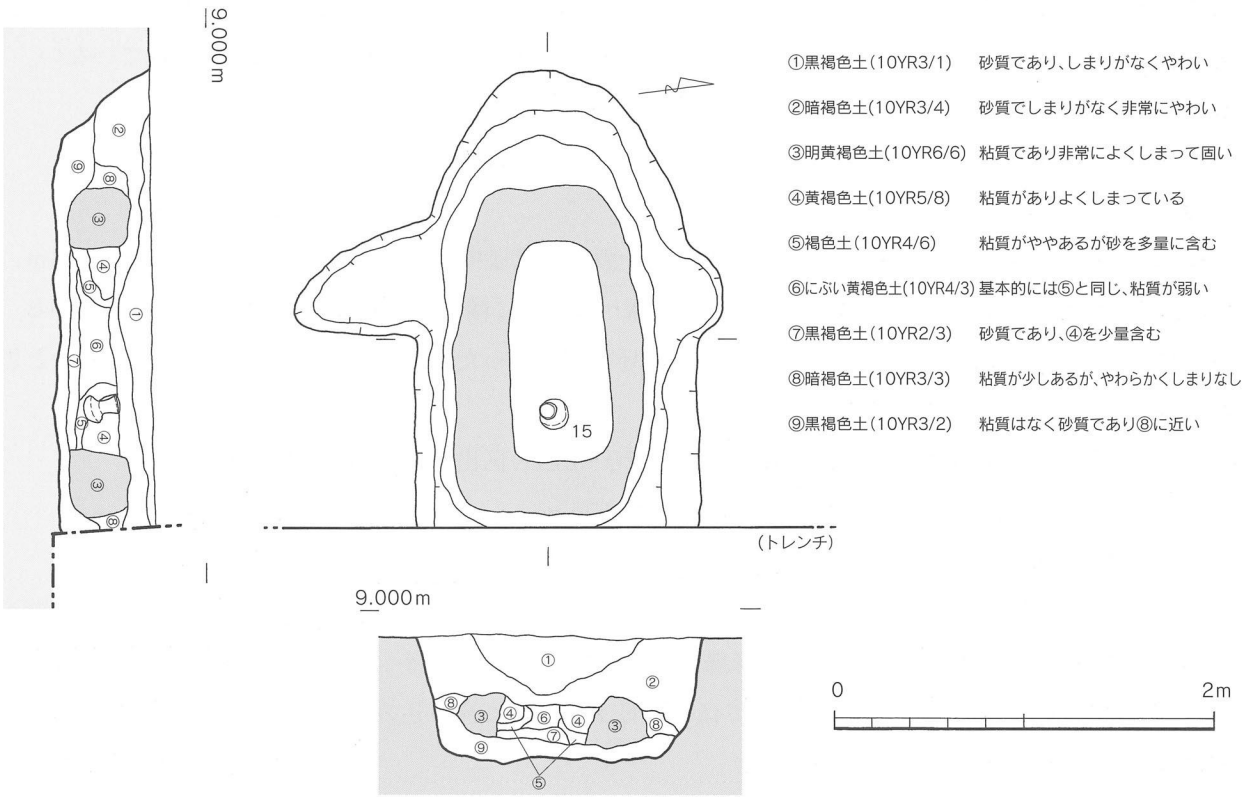
呈し、僅かに粘質土を混ぜた砂で平坦化した後、中央に約1.1ｍ×約0.5ｍのスペースを残し、周辺を囲うように幅約20～30㎝、厚さ約30㎝の規模で砂を混ぜた黄褐色粘土を積み上げていた。さらに、積み上げられた黄褐色粘土の内外面は丁寧に成形がなされていた。構築時は、中に木棺を納めその上を粘土で被覆していたものと想定される。副葬品として、刀子１本、土師器の長頸壺１個が出土している。なお、内部の土を篩(ふるい)にかけたが、人骨、釘等は発見できなかった。

【出土遺物】長頸壺(15)刀子(16)；第52図ＳＤ１及びＳＣ１出土遺物実測図

15(Ｅ区出土遺物観察表)　16(第11表『山崎上ノ原第２遺跡出土金属製品計測表』)



第47図　SA１・２平面図(Ｓ＝１／80)



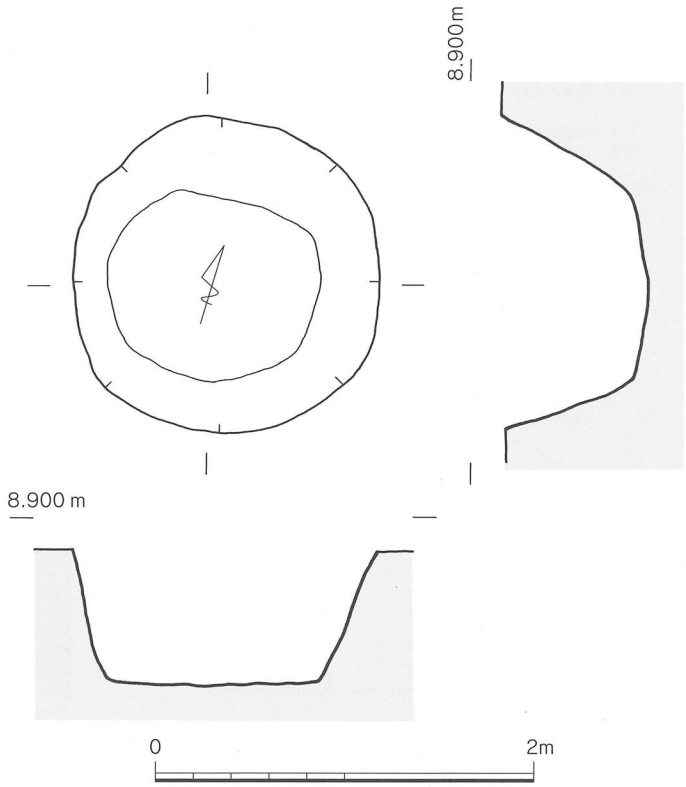
第48図　SD１平面図及び土層断面図(Ｓ＝１／40)

(3)土坑(SC)

SC1(第49図)

調査区西側で検出した。長軸約1.7m、短軸約1.6mの正円形プランで、検出面からの深さは約70cmを測る。長軸方向はN—10°—Eを指す。壁面は摺り鉢状に斜めに掘り込まれ、底面は中央部を僅かに凹ませている。出土遺物は、土師器(墨書土器2点を含む)が折り重なる様に約50点出土している。

【出土遺物】第52図ＳＤ１及びＳＣ１出土遺物実測図　第53図ＳＣ１出土遺物実測図　17～19(E区出土遺物観察表)



第49図　SC1平面図(S=1／40)

SC2(第46図)

調査区南側に位置し、ＳＥ１により南側半分を切られており、規模は不明である。検出面からの深さは約50cmを測る。遺物は出土していない。

SC3(第46図)

ＳＣ２の北側1.3m付近で検出した。規模は不明であり、出土遺物はない。

SC4(第46図)

ＳＤ１の北西に１mに位置し、ＳＥ３を切っている。長軸約1.25m、短軸約1.0mの楕円形プランで、検出面からの深さは約10～20cmを測る。長軸方向はN—50°—Wを指す。遺物は確認されていない。

(4)溝状遺構(SE)

SE1(第46図)

調査区南側中央から東へ直線的に走行しており、調査区ほぼ中央で集束している。幅約1.3～1.8m、検出面からの深さ約40～60cmを測る。溝は西から東へ緩やかに傾斜し、断面形態はU字状を呈している。埋土は５層に分類できる。出土遺物は、土師器の坏数点であったが、いずれも流れ込みによるものと思われる。構築時期については不明である。

【出土遺物】第54図ＳＥ１・２出土遺物実測図　20～22(E区出土遺物観察表)

SE2(第46図)

調査区西側から南側へ「コ」の字状に走行し、さらに調査区外に延びる。幅約75～100cm、検出面からの深さ約20～40cmを測る。溝の断面形態は箱形を呈し、北から南へ向かって緩やかに傾斜する。埋土は３層に分類できる。出土遺物については、ＳＥ１と同様に流れ込みによるものと思われる。構築時期については不明である。

【出土遺物】第54図ＳＥ１・２出土遺物実測図　23(E区出土遺物観察表)

SE３（第46図）

調査区北西から南東方向へ走行する。溝の両端は集束しており、北側は走行不明である。幅は約0.9～1.3m、検出面からの深さは約10cmを測る。溝の断面形態はU字状を呈し、北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。埋土は２層に分類できる。遺物の出土はなく、構築時期については不明である。

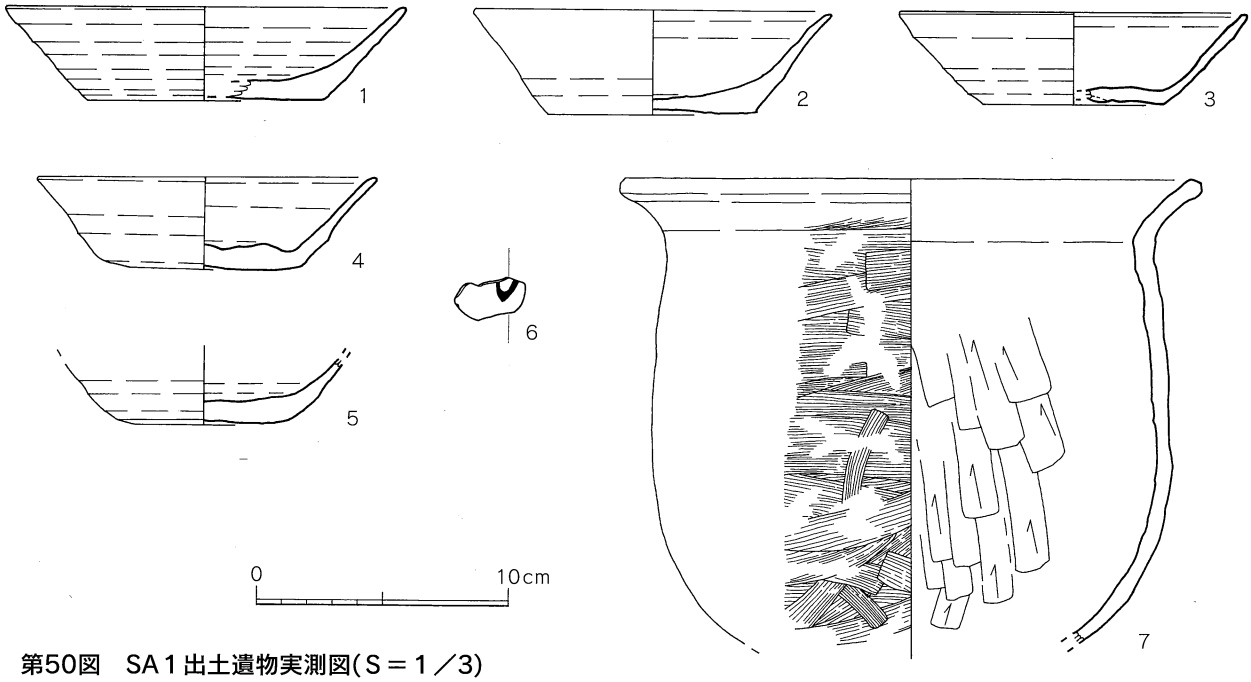
（4）包含層

出土遺物は土師器の坏・埦・小型の羽釜、布痕土器、墨書土器等である。詳細については、第55図『包含層出土遺物実測図』及び第16表『Ｅ区出土遺物観察表』の24～36を参照いただきたい。

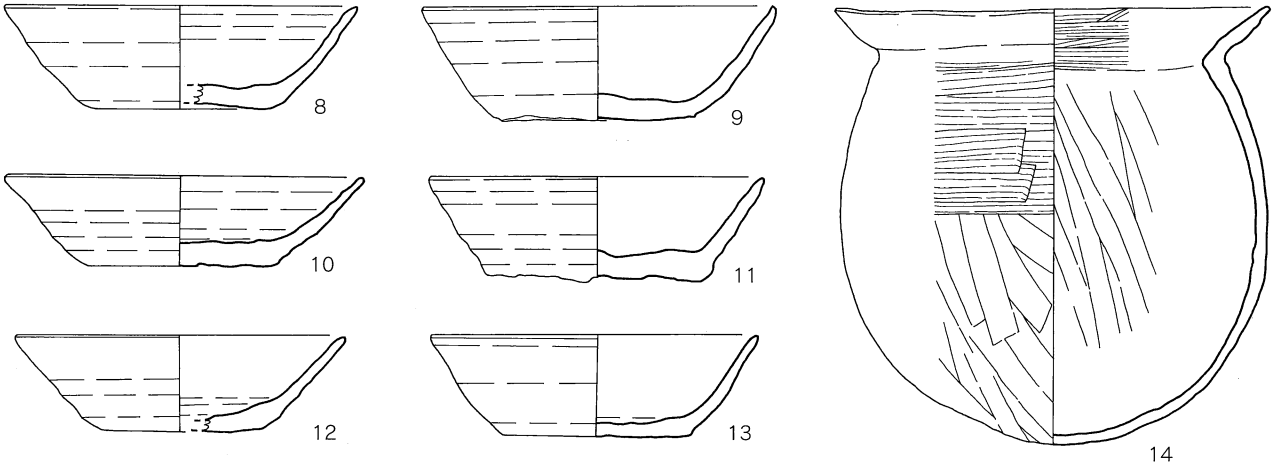
第14表 山崎上ノ原第２遺跡出土土錘計測表

遺物番号	区	出土地(遺構)	最大長	最大幅(径)	最小径	最大厚	穿孔径	重　量
A区－105	A区	ＳＡ４	2.7	1.6	1.5	—	0.3	6.3
1	E区	ＳＥ２	5.9	2.7	1.1	—	0.8	29.2
2	E区	表採	5.7	2.5	1.3	—	0.8	26.5
3	E区	表採	5.2	2.7	1.3	—	0.8	31.1
4	E区	表採	6.6	2.4	1.4	—	0.8	24.0
5	E区	表採	5.3	2.2	1.1	—	0.8	23.6
6	E区	表採	(5.3)	2.0	0.9	—	0.5	10.9
7	E区	ＳＥ２	5.1	2.1	1.0	—	0.7	19.5
8	E区	表採	5.2	2.7	1.3	—	0.8	25.3
9	E区	表採	(4.5)	2.3	1.3	—	0.5	20.0
10	E区	表採	5.4	2.0	1.4	—	0.8	12.1
11	E区	ＳＡ１	4.0	1.9	1.3	—	0.9	10.6
12	E区	表採	(3.9)	2.1	1.0	—	0.5	16.4
13	E区	ＳＡ１	3.1	2.6	1.2	—	0.7	15.7
14	E区	表採	8.6	5.8	—	3.3	1.1	149.9
15	E区	表採	8.8	5.5	—	2.4	1.0	139.4
16	E区	表採	(8.2)	(5.4)	—	2.7	1.2	144.7
17	E区	表採	7.4	5.2	—	1.9	1.2	77.8
18	E区	表採	(6.9)	(5.2)	—	(2.0)	0.8	76.3
19	E区	表採	(5.9)	4.9	—	1.9	1.0	63.4
20	E区	表採	(7.0)	4.6	—	2.3	1.0	76.6

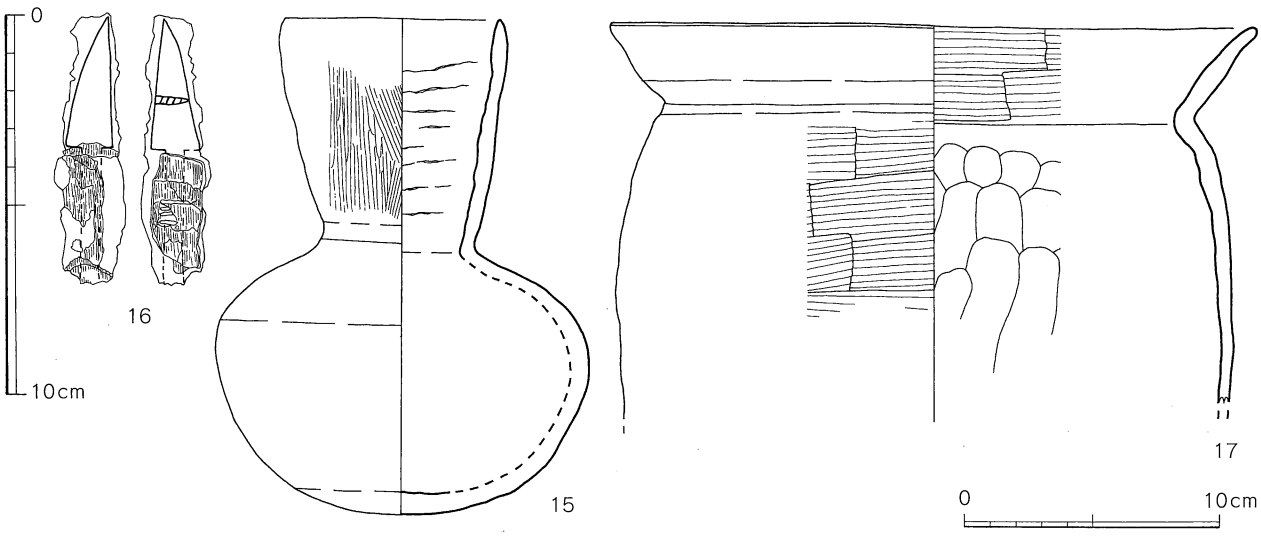
（単位：cm・g）



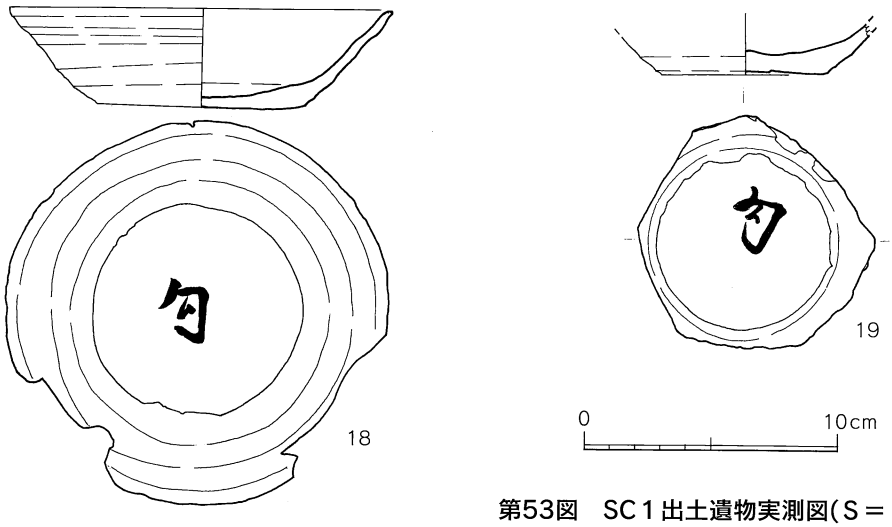
第50図　SA１出土遺物実測図(S＝１／3)



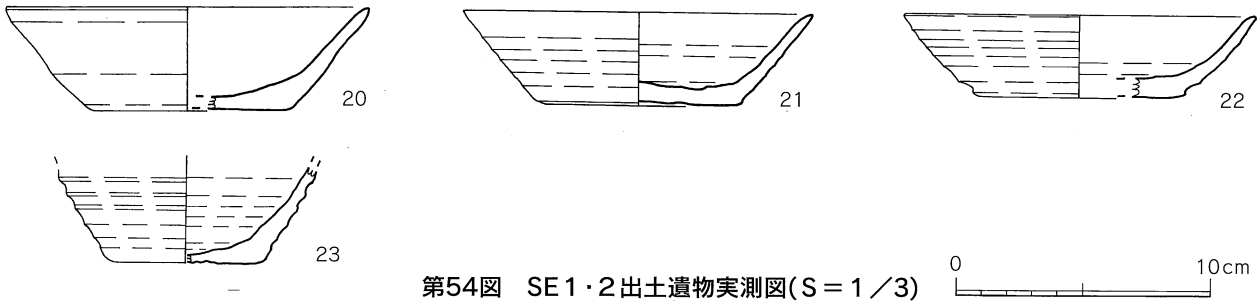
第51図　SA２出土遺物実測図(S＝１／3)



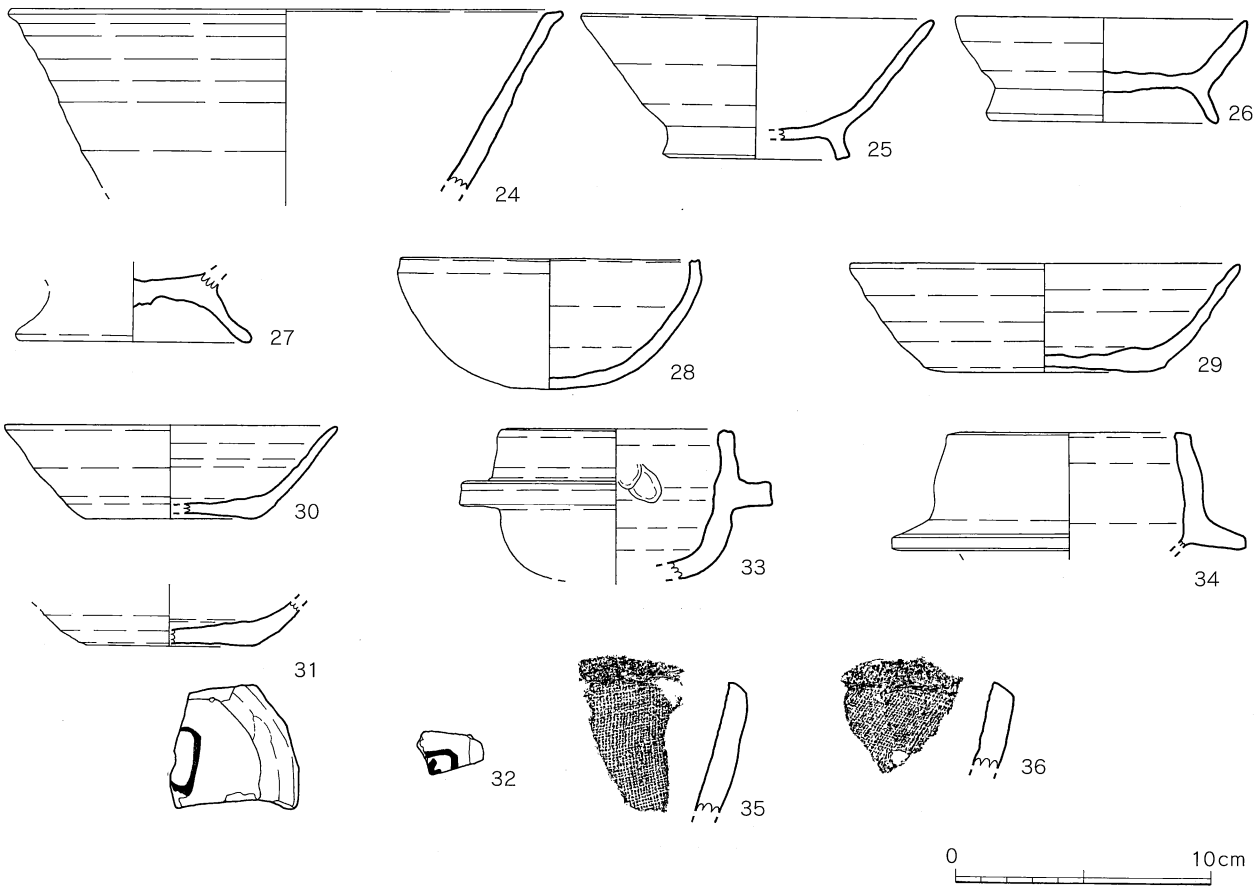
第52図　SD１及びSC１出土遺物実測図(15･17 S＝１／３　16 S＝１／２)



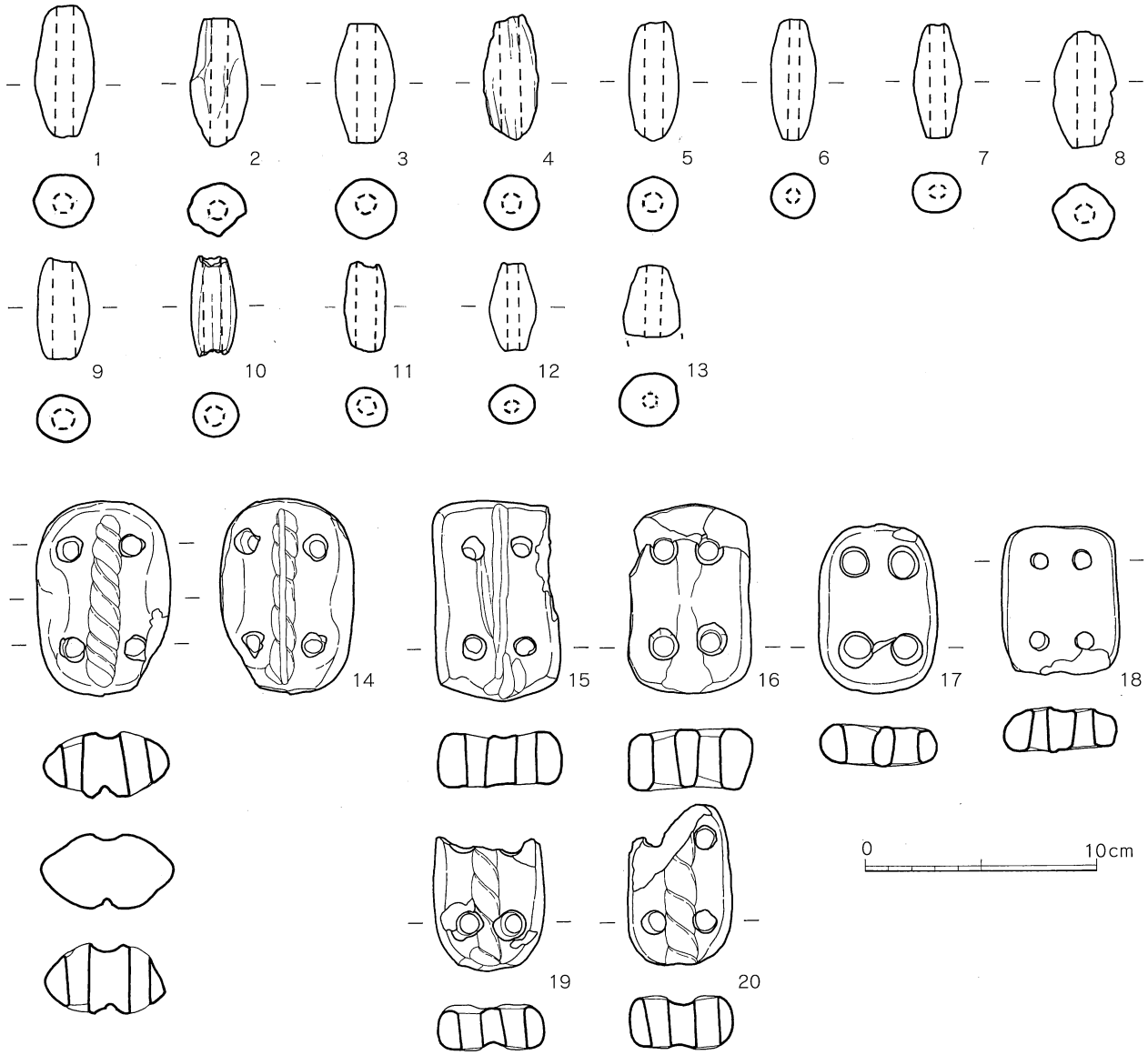
第53図　SC１出土遺物実測図(Ｓ＝１／3)



第54図　SE１・２出土遺物実測図(Ｓ＝１／3)



第55図　包含層出土遺物実測図(Ｓ＝１／3)



第56図　山崎上ノ原第2遺跡出土土錘実測図(S＝1／3)

第15表　E区出土遺物観察表(1)

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内面	外面	胎土(混和材・混入物)	焼成	色調 内面	外面	備考
1	SA1	土	杯	口縁～底部	15.8	9.4	3.7	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の黒色粒	良好	橙	橙	切り離し技法:ヘラ切り
2	SA1	土	杯	口縁～底部	13.5	8.1	4.2	回転ナデ 一部黒変	回転ナデ	3.5mm以下の灰白色粒 2mm以下の黒色粒 1mm以下の白色光沢粒	良好	淡黄	灰白	切り離し技法:ヘラ切り
3	SA1	土	杯	口縁～底部	13.6	7.2	3.6	回転ナデ	回転ナデ	精良	良好	にぶい褐	にぶい褐	切り離し技法:ヘラ切り
4	SA1	土	杯	口縁～底部	13.3	7.8	3.6	回転ナデ	回転ナデ	微細な黒・赤褐色、白色半透明光沢粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	切り離し技法:ヘラ切り
5	SA1	土	杯	体部～底部		6.8		回転ナデ	回転ナデ	微細な透明光沢粒	良好	橙	橙	切り離し技法:ヘラ切り
6	SA1	土	坏	口縁部付近				—	—	微細な灰・褐色、半透明・黒色光沢粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	墨書「匂」の一部
7	SA1	土	甕	口縁～胴部下	22.9			上位:ナデ 下位:ヘラ削り(下→上)	上位:横方向のナデ 中～下位:刷毛目 スス付着	微細な透明・半透明・黒色光沢粒 8mm以下の茶・灰・褐色粒	良好	橙	橙	
8	SA2	土	杯	口縁～底部	14.0	7.5	4.1	回転ナデ	回転ナデ	微細な茶褐・黒・灰色粒	良好	橙	橙	切り離し技法:ヘラ切り
9	SA2	土	杯	口縁～底部	13.9	7.5	4.3	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の灰褐・褐色粒	良好	にぶい橙 灰褐	にぶい橙 灰褐	切り離し技法:ヘラ切り

第16表　E区出土遺物観察表（2）

番号	出土地 遺構	種類	器種	部位	法量(mm) 口径	底径	高さ	調整等 内　面	外　面	胎　土（混和材・混入物）	焼成	色調 内　面	外　面	備　考
10	SA2	土	杯	口縁～底部	14.1	7.6	3.6	回転ナデ	回転ナデ	微細な灰・褐色粒	良好	橙	橙	切り離し技法：ヘラ切り
11	SA2	土	杯	口縁～底部	13.3	8.9	4.1	回転ナデ	回転ナデ	4mm以下の黒褐・灰・褐色粒	良好	橙	明黄褐	切り離し技法：ヘラ切り
12	SA2	土	杯	口縁～底部	13.0	6.4	3.9	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の灰褐・黒色粒	良好	橙 にぶい橙	橙 にぶい橙	切り離し技法：ヘラ切り
13	SA2	土	杯	口縁～底部	13.0	7.5	4.0	回転ナデ	回転ナデ	微細な半透明光沢粒、灰・灰白・褐色粒	良好	橙	橙	切り離し技法：ヘラ切り
14	SA2	土	甕	口縁～底部	17.3		17.4	上位：横方向のナデ 下位：ナデ	工具ナデ 上位：横方向の刷毛目 下位：スス付着	5mm以下の褐・灰白色粒 微細な黒色光沢・透明光沢粒	良好	橙	橙	
15	SD1	土	長頸壺	口縁～底部	8.5		19.7	ナデ 一部ミガキ	ナデ 一部黒変	2mm以下の褐・黒色粒、透明光沢粒 3mm以下の赤褐色粒	良好	明黄褐	橙 明黄褐	内外面：風化気味 赤色顔料を施す
17	SC1	土	甕	口縁～胴部	25.3			上位：横方向の刷毛目 下位：ナデ	炭化物付着 上位：ナデ 下位：横方向の刷毛目	2～4mmの茶褐色粒 2mmの赤・白色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
18	SC1	土	杯	口縁～底部	15.1	8.3	4.0	ナデ	回転ナデ	1.5mm以下の灰白・明赤褐色粒 1mm以下の無色透明光沢・黒色光沢粒、灰白・明赤褐色粒	良好	橙	橙	切り離し技法：ヘラ切り 墨書「匂」
19	SC1	土	杯	底部		6.9		回転ナデ	回転ナデ	1mm程の橙色粒 1mm以下の灰白・明赤褐色粒微細な透明光沢粒、灰白・橙色粒	良好	橙	橙 にぶい橙	墨書「匂」の一部
20	SE1	土	杯	口縁～底部	14.4	8.2	4.1	回転ナデ	回転ナデ	4mm以下の茶褐・黒・灰色粒	良好	橙	橙	切り離し技法：ヘラ切り
21	SE1	土	杯	口縁～底部	13.7	8.0	3.7	ナデ	ナデ	3mm以下の褐色粒 2mm以下の黒・灰白色粒	良好	にぶい橙 橙	橙	切り離し技法：ヘラ切り
22	SE1	土	杯	口縁～底部	13.9	8.4	3.3	ナデ 一部黒変	ナデ 全体的に黒変	微細な黒・灰白色粒	良好	橙 灰褐	橙 灰黄褐	切り離し技法：ヘラ切り
23	SE2	土	杯	胴部～底部		6.4		横方向のナデ	横方向のナデ	1mm以下の黒褐色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	切り離し技法：ヘラ切り
24	包含層	土	鉢	口縁～胴部上	22.0			回転ナデ	回転ナデ	4mm以下の黒灰色粒 3mm以下の赤褐色粒	良好	浅黄	浅黄	
25	包含層	土	高台付坏	口縁～高台付底部	14.0	7.4	5.6	回転ナデ	回転ナデ	1.5mm以下の灰・黒色粒　1mm以下の褐灰・にぶい黄橙・黒・橙色粒	良好	黄灰 淡黄	黄灰 灰白	切り離し技法：ヘラ切り
26	包含層	土	高台付坏	口縁～底部	11.4	9.2		ナデ	ナデ	3mm以下の灰・褐灰・赤褐・にぶい赤褐色粒 1.5mm以下の褐灰・黒・灰白色粒、無色透明光沢粒	良好	橙	橙	切り離し技法：ヘラ切り
27	包含層	土	高台付坏	底部		9.3		ナデ	回転ナデ	3mm以下の赤褐色粒 2mm以下の褐灰色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙 にぶい黄橙	切り離し技法：ヘラ切り
28	包含層	土	坏	口縁～底部	11.8		5.2	上位：丁寧なナデ 下位：ナデ？	横方向のミガキ （単位不明）	1mm以下の白・褐・黒色粒 1mm以下の透明光沢粒	良好	黒褐 にぶい黄橙	灰黄褐	
29	包含層	土	杯	口縁～底部	15.5	9.6	3.8	横方向のナデ	横方向のナデ	1mm以下の茶褐・黒・灰色粒	良好	橙	橙	
30	包含層	土	杯	口縁～底部	13.2	7.0	3.6	横方向のナデ	横方向のナデ	微細な黒・灰色粒	良好	にぶい橙	橙	
31	包含層	土	杯	底部		6.8		丁寧なナデ	ナデ	1mm以下の灰白・黒・明赤褐色粒 微細な無色透明光沢粒	良好	橙	橙	
32	包含層	土	杯	口縁付近				回転ナデ	回転ナデ	微細な灰白・にぶい橙・橙色粒、無色透明光沢粒	良好	橙	橙	墨書「匂」の一部
33	包含層	土	羽釜	口縁～胴部	9.4	4.9	5.9	横方向のナデ	横方向のナデ	微細な黒・灰色粒	良好	灰黄	灰黄	
34	包含層	土	羽釜	口縁～胴部	9.6			回転ナデの後、ナデ	横方向のナデ	1mm以下の灰・茶褐・黒色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
35	包含層	土	鉢	口縁～胴部				布目痕	ナデ	5mm以下の褐色粒 微細な灰白・白色粒	良好	にぶい橙	にぶい橙	布痕土器
36	包含層	土	鉢	口縁～胴部				布目痕	ナデ	6mm以下の褐色粒 微細な灰・黒色粒	良好	橙	橙	布痕土器

第５節　まとめ

山崎上ノ原第２遺跡は日向灘から内陸へ約1.4㎞、標高９～12ｍの砂丘上に立地している。宮崎市の海岸付近には日向灘に沿って４列の砂丘列(海岸から内陸へ第１～第４砂丘)が走行している。これらの砂丘列は縄文時代早期の海進現象以来の海退現象と大淀川の流路変化に伴う海岸の堆積作用によって形成されたものと考えられ、本遺跡は第２砂丘上に位置している。この砂丘列には前述した石神遺跡・猿野遺跡が所在するほか、いくつかの古墳も確認されている。本遺跡の隣接地にも２基の円墳が存在し、北から「檍５号墳」・「檍６号墳」と呼称されている。

今回の山崎上ノ原第２遺跡(平成13年度実施　第１次調査)の調査では、古墳時代の竪穴住居跡16軒・土壙墓３基、古代の竪穴住居跡２軒・土坑１基、中世の土壙墓４基が検出されている。古墳時代の竪穴住居跡についてはＡ区４軒、Ｃ区３軒、Ｄ区９軒が確認されている。Ａ区南側に接するＢ区(平成14年度実施　第３次調査)においても古墳時代の竪穴住居跡が９軒検出されていることから、Ｄ区から北側に延びる微高地には大規模な集落が形成されていたものと考えられる。また、Ｆ区から南側に位置する山崎下ノ原第１遺跡では古墳(檍５・６号墳の周濠の一部、滅失古墳３基)及び土壙墓(５基)等が検出されている。本調査によってＥ区とＦ区の間は谷地形であることが確認されており、自然地形を利用して北側は生活域、南側は墓域としていたと考えられる。

以下、調査で確認された遺構と遺物について各時代毎にまとめてみたい。

【古墳時代】

Ａ区の遺構・遺物

SA１　遺構内からは土師器の甕・甑・高坏、坏(身・蓋)、須恵器の甕・ハソウ・坏(身・蓋)、金属製品、石製品等が出土している。１～30は甕である。28～30は底部片で平底を呈し、裾部が広がり木葉痕がのこる。31～37はいずれもつつぬけタイプ把手無大型甑である。31は鉢型を呈し、口縁部が内湾しており口唇部はややシャープである。36は31と同タイプと思われる。32は鉢型を呈しており、底部から口縁に向かってやや丸みを帯びながら立ち上がり、底部の裾部が広がる。33・37は孔部内面が「く」の字状を呈している。35は胴部から口縁部にかけて真っ直ぐに立ち上がる鉢形であり、口縁端部が外反し、底部の裾部が広がる。38～46は高坏である。47～58は模倣坏であり、47～49、52～54には内外器面に赤色顔料が施されている。59～65は須恵器の坏(身・蓋)である。59は天井部が平坦で上面はヘラ切り後、未調整である。Ⅱ形式５段階(ＴＫ209)頃で６世紀末から７世紀前半に比定される。62は立ち上がりが内傾し、口縁端部に内傾する明瞭な段が見受けられる。Ⅱ形式１段階(ＭＴ15)、６世紀前半に比定される。63は底部はヘラ切り後、未調整である。Ⅱ形式４段階(ＴＫ43)頃で、６世紀後半に比定される。64は底部はヘラ切り後、未調整である。立ち上がり部に消滅化傾向がみられる。Ⅱ形式５段階(TK209)頃で、６世紀末から７世紀前半に比定される。65は小型であり、立ち上がり低く強く内傾している。Ⅱ形式５段階(ＴＫ209)～６段階(ＴＫ217)、６世紀後半～７世紀前半と思われる。67はハソウであり、Ⅱ形式１段階(ＭＴ15)頃で６世紀末から７世紀前半頃に比定されると思われる。70は方頭鏃の鏃身部で６世紀中～７世紀前半頃と思われる。遺構の年代は出土遺物より６世紀から７世紀と考えられる。

また、遺構の性格付けとして、遺物の出土状況おいて①管玉・ガラス小玉・滑石製小玉・勾玉の滑石

製模造品がまとまって出土していること。②遺構内と遺構外の特定の場所での土器片の接合関係が多々みられること(第６・７図)。③鉄滓及び粒状滓・鍛造剥片が多量に確認されたこと。の３点が挙げられる。①・②の事実より住居廃絶時に何らかの祭祀儀礼行為が行われていたと思われる。また③の事実は粒状滓及び鍛造剥片が鍛冶段階を証明する有力な遺物であることから、鍛冶関連施設の存在が考えられたが、調査区内では炉跡及び焼土何れも確認できなかった。しかしながら、周辺で鍛冶が行われていたことは間違いないであろう。

SA2　遺構内からは土師器の甕・甑・高坏、坏(身・蓋)、須恵器の坏(身・蓋)等が出土している。83は須恵器の坏蓋であり、II形式５段階(ＴＫ209)、６世紀末から７世紀前半に比定される。84は須恵器の坏身であり、口径11.2㎝と小径で、口縁端部に内傾する明瞭な段が見受けられる。Ｉ形式５段階(ＴＫ47)、６世紀初頭である。85は須恵器の坏身であり、口径11.3㎝と小径であり、立ち上がり部が消滅化傾向である。II形式６段階(ＴＫ217)頃で、７世紀前半と思われる。92は多孔タイプ甑の底部片である。遺構の年代としてはＳＡ１と同じように６世紀から７世紀と考えられる。

SA3　遺構内からは土師器の甕・甑・高坏等が出土している。98はつつぬけタイプ把手無大型甑である。

SA4　遺構内からは土師器の甕、鉢、須恵器の坏身、土錘等が出土している。102は口径12.1㎝と小径であり、器高も３㎝と低く、立ち上がり部も短く内傾している。105は土錘であり穿孔が２つみられる。

ＳＡ１～３の年代観は切り合い関係より古い順に３→２→１であるが、本遺跡が砂丘上に立地していること、調査中にも遺構の壁面が崩壊することが度々あったこと、などから推察して、当時の住居の耐用期間はかなり短かったと思われ、頻繁に建て替えが行なわれていたものと考えられる。

包含層　包含層からは土師器の甕・坏(身・蓋)、ミニュチュア土器、須恵器の甕・坏(身・蓋)等が出土している。112は須恵器の坏蓋であり、天井端部に沈線が巡り、口縁端部内面に段を有する。II形式２段階(ＴＫ10)、６世紀前半である。115は須恵器の坏身である。Ｉ形式５段階(ＴＫ47)、６世紀初頭である。123～127は甕の底部片で平底を呈し、裾部が広がり木葉痕がのこる。

C区の遺構・遺物

SA1　遺構内からは土師器の甕・坏身等が出土している。

SA2　遺構内からは土師器の坏身・高坏等が出土している。８は模倣坏である。

SA3　遺構内からは土師器の甕・坏等が出土している。９は土師器の甕であり、遺構内のほぼ中央に正立した状態で埋められていた。13は土師器の皿で底部の切り離し技法はヘラ切りによるものである。

ＳＡ１～３は出土遺物等から構築時期は古墳時代と思われる。

D区の遺構・遺物

SA1　遺構内より土師器の坏、須恵器の甕・壺等が出土している。

SA2・3　出土遺物はない。

SA4　遺構内より土師器の甕・甑・坏、刀子等が出土している。15は刀子(第11表)で14の中に納められた状態で出土した。刃関がなく刃と茎が一体化している特異なタイプである。22はつつぬけタイプ把手無大型甑である。

SA5　遺構内より土師器の甑、須恵器の坏身等が出土している。26はつつぬけタイプ把手無大型甑である。27・28はいずれも須恵器の坏身であり、口径11.3cmと小径で、立ち上がり部が消滅化傾向である。II形式－６段階(TK217)、７世紀前半と思われる。

SA6～8　出土遺物はない。

SA9　遺構内より須恵器の壺等が出土している。切り合い関係から遺構の年代は７世紀前半以前と思われる。

SD1　SA９の床面と西壁をきるかたちで掘りこまれており、遺構内からは土師器の坏、須恵器の坏身、刀子１点が出土している。31は須恵器の坏身であり、口径11.3cmと小径で、立ち上がり部が消滅化傾向である。II形式－６段階(TK217)、７世紀前半と思われる。33の刀子(第11表)は副葬品であろう。

SD2　遺構内からは土師器の甕・高坏・坏、須恵器の坏蓋・壺・高坏・ハソウ等が出土している。１は須恵器の坏蓋であり、II形式－５段階(TK209)、６世紀末から７世紀前半と思われる。13は須恵器のハソウでII形式－６段階(TK217)、７世紀前半と思われる。

本遺構はSA４の南東隅で確認されており、現存で長軸約1.7m、短軸約0.6m、深さ約20cmの楕円形プランである。床面を砂で平らにし、その上に主軸から左右10cm程空け土師器の甕の口縁部と胴部のみを使い、外器面を上にした状態で約１mの平行に並べられた土器列を形成しており、一部の土器片についてはSA４内床面で出土した土器片との接合関係(第39図)が確認された。また、北側には須恵器の坏蓋(1)と土師器の杯身(2)が伏せて置かれ、両脇は土師器の片口鉢(4)の一部を使って押さえがしてある。埋葬者の頭を乗せる「枕」として用いられたのではないかと推察される。さらに、枕の上に伏せて置かれている土師器の坏身(3)とハソウ(13)は、当初は頭の横に置かれていたが、横転したものと思われる。足元にあたる南側には、副葬品として土師器の高坏(10)と須恵器の高坏(12)と壺(11)が置かれていた。遺構の規模から成人が埋葬されていたと推測される。このような古墳時代の埋葬事例は県内では初例であろう。

なお、この土壙墓の土壌については自然科学分析を実施している。土器床内の床面でリン酸・カルシウム含量が比較的高い値が観測され、生物遺体が存在していた可能性が考えられたが、地表面から比較的浅いことや、遺構埋土の上位層についての分析が行われていないことから、後世の農耕に伴う施肥などの影響が否定できないという結果であった。

ＳＤ２とＳＡ４との関係については、①竪穴住居(SA４)の埋没後、土壙墓(SD２)が掘り込まれた可能性。②竪穴住居(SA４)の廃絶時に土壙墓(SD２)を掘り込んだ可能性。③竪穴住居(SA４)は土壙墓(SD２)の埋葬儀式・儀礼に伴う遺構である可能性。以上３点が考えられる。

上記に述べた両遺構内出土遺物の接合関係が確認されたことより①の可能性はない。②ないし③については、SA４内から煮炊き具である甕(外器面にススの付着がみられる)及び甑が床面直上から出土していることから②の可能性が高いと考えられる。しかし、③の可能性もまったく否定はできない。今回の調査では他に事例がなく結論を導き出すには至らなかったが、今後、同様の事例が増えることを期待したい。

Ｅ区の遺構・遺物

SD１　長軸約2.4＋αｍ、短軸約1.5ｍ、検出面からの深さ約50㎝を測り、楕円形プランを呈する。底面を僅かに粘質土を混ぜた砂で平坦化した後、中央にスペースを空けた状態で周辺を砂を混ぜた黄褐色粘土で囲んでいた。構築時には、中に木棺を納めその上は粘土で被覆されていたのであろう。この粘土は山崎下ノ原第1遺跡Ｇ・Ｈ区に隣接する檍５・６号墳周壕内でも確認しており、本遺跡周辺が砂丘地形であることから他所で採取され搬入されたものであろう。遺構内からは、土師器の長頸壺と刀子1点が出土している。15は外器面に赤色顔料が塗布されていた。16は刀子(第11表)であり、胸部あたりから出土しており副葬品として埋納されたものであろう。

【古代】

遺構としてはＥ区で竪穴住居跡２軒(ＳＡ１・２)、土坑１基(ＳＣ１)が確認されている。出土遺物は、土師器の甕・壺・坏・埦・鉢・墨書土器・布痕土器等である。

E区の遺構・遺物

SA１　遺構内からの出土遺物としては土師器の甕・坏、墨書土器等である。１～５は坏であり、底部の切り離し技法はすべてヘラ切りによるものである。２～４は口径13.3～13.6㎝、底径7.2～8.1㎝、器高3.6～4.2㎝の範疇に収まる。６は墨書土器であり、「匂」の一部と思われる墨書が施されている。７は甕であり、外器面にススの付着が認められ、内器面には上方向へのヘラ削り痕跡を明瞭にのこす。遺構年代は不詳である。

SA２　遺構内からの出土遺物としては土師器の甕・坏等である。８～13は坏であり、底部の切り離し技法はすべてヘラ切りによるものであり、12は底部の立ち上がり部をヘラ削りによって仕上げられている。８・９・11・13は口径13.0～14.0㎝、底径7.5～8.9㎝、器高4.0～4.3㎝の範疇に収まる。14は甕であり、外器面にススの付着が認められ、内器面には上方向へのヘラ削りの痕跡を明瞭にのこす。遺構年代は不詳である。

SC１　遺構内からの出土遺物としては土師器の甕・坏(墨書土器)等である。17は甕であり、外器面にススの付着が認められ、内器面にはヘラ削りの痕跡をのこす。18・19は墨書土器であり、いずれも坏の底部外面に「匂」の墨書が施されている。遺構年代は不詳である。

SE１　遺構内からの主な出土遺物に土師器の坏があるが、これは流れ込みによるものと思われるため、構築時期については不明である。

SE２　遺構内からの主な出土遺物に土師器の坏があるが、SE１と同様に流れ込みによるものと思われ、構築時期については不明である。

包含層　包含層内からは、土師器の鉢・坏・埦・羽釜、墨書土器・布痕土器等が出土している。25・27は高台付埦であり、底部の切り離し技法はヘラ切りによるものである。26は高台付坏であり器高が低いのが特徴である。33・34は羽釜であるがいずれも極小であり実用品とは考えにくい。31・32は墨書土器であり、31は坏の底部外面に墨書が施されており、「匂」の一部と思われる。32も同様に「匂」の一部と思われる墨書が施されている。35・36は布痕土器であり、Ⅲｄ類(?)に属するものと思われる。

【中世】

遺構としてはＣ区で土壙墓４基(ＳＤ１～４)が確認されている。出土遺物は洪武通宝、玉である。

C区の遺構・遺物

SD１　遺構内より頭蓋骨と足の骨の一部、洪武通宝６枚(第６表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD２　遺構内より玉1点(第８表・第30図)と洪武通宝７枚(第６表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD３　遺構内より人間の歯数本と洪武通宝５枚(第６表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

SD４　人骨の一部と洪武通宝６～８枚(第６表・第28図)が出土している。遺構の年代は14世紀以降である。

ＳＤ１～４については遺構内より出土の洪武通宝は何れも同規格であることから、同時期に構築されたものと考える。

〈参考文献〉

大阪府教育委員会「陶邑」Ⅰ～Ⅳ 1976 ・1977・1978・1979

宮崎県宮崎市教育委員会「浄土江遺跡」宮崎市文化財報告書第６集 1981

田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981

宮崎県教育委員会「宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第２集」1985

保育社「日本の古代遺跡」25　宮崎県 1985

宮崎県新富町教育委員会「上薗遺跡Ｆ地区・溜水第２遺跡」1995

宮崎県宮崎市教育委員会「猿野遺跡」宮崎市文化財報告書第23集　1996

九州歴史資料館　研究論集21「製塩土器からみた律令期集落の様相」 九州歴史資料館 1996

宮崎県教育委員会「祇園原地区遺跡」宮崎県教育委員会　1996

宮崎県史「通史編　原始・古代Ⅰ」1997

雄山閣「古墳時代の研究 10地域の古墳Ⅰ 西日本」 1998

雄山閣「古墳時代の研究 ６土師器と須恵器」1998

宮崎県宮崎市教育委員会「東宮遺跡」宮崎市文化財報告書第39集 1999

鹿児島県知覧町教育委員会「厚地松山製鉄遺跡」鹿児島県知覧町埋蔵文化財報告書第９集 2000

松井和幸「日本古代の鉄文化」雄山閣 2001

第Ⅲ章　山崎下ノ原第１遺跡の調査

第１節　調査の概要

前述したようにＦ～Ｉ区は山崎下ノ原第１遺跡と呼称する。本遺跡は宮崎市山崎町大字下ノ原に所在し、隣接して檍古墳群下原地区の円墳(檍５・６号墳)の２基が存在している。古墳時代になると生目古墳群や下北方古墳群といった台地上に築造された古墳が一般的であるのに対し、檍古墳群は最も海岸線に近い平野部に下りてきた古墳群として注目されている。調査は都合上、Ｆ～Ｉ区に区切って実施したが、位置関係や築造時期などが重要と考え、一括して山崎下ノ原第１遺跡として報告する。そのため、今回の調査で確認できた遺構は北から遺構番号をつけ、滅失古墳についても北から山崎下ノ原第１遺跡第１号墳、第２号墳、第３号墳とした。(図57･58参照)

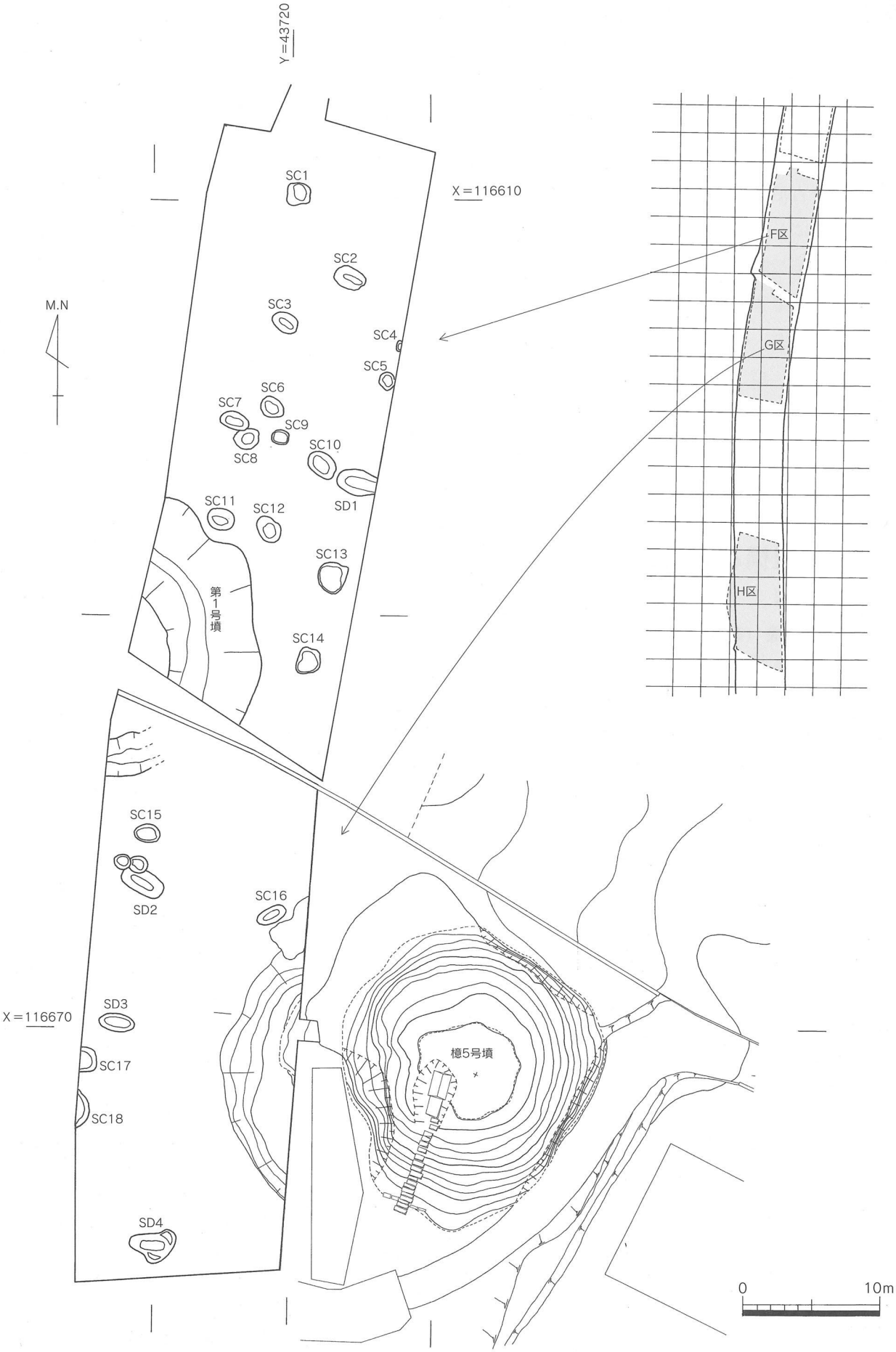
調査の結果、檍５・６号墳の周濠の一部、滅失古墳の周濠(３基)、土壙墓(５基)、馬埋葬土坑(６基)を確認することができた。出土遺物は土師器、須恵器、鉄鏃、大刀、馬具、銅鏡などが出土している。住居址などの居住空間が確認できなかったことからいわゆる墓域と考えられる。本遺跡の立地条件や墓域内での位置関係、殉葬馬の観点からも好例な遺跡である。

第２節　遺構と遺物

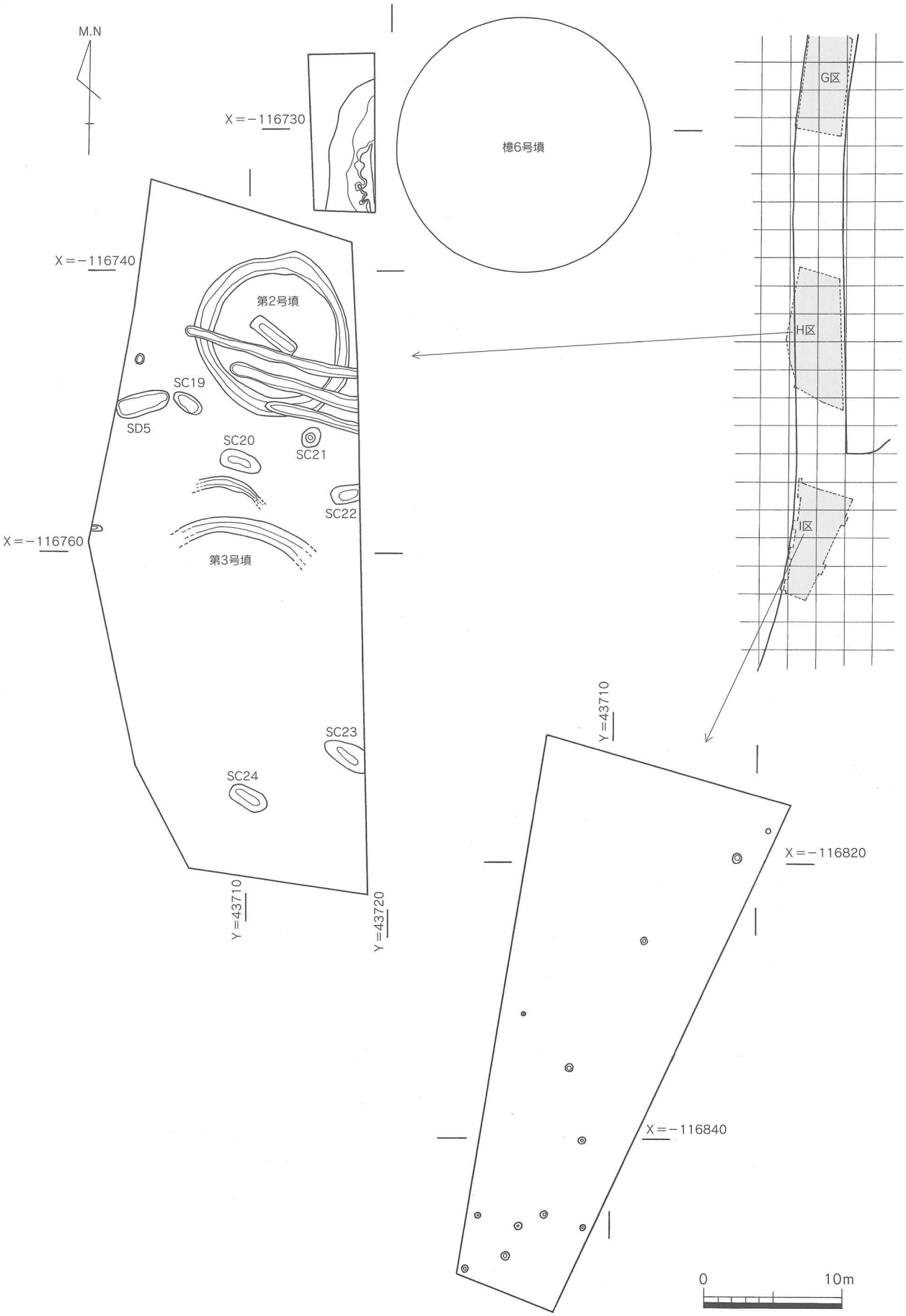
１ 周濠の調査

■ 檍５号墳周濠（第59～60図）

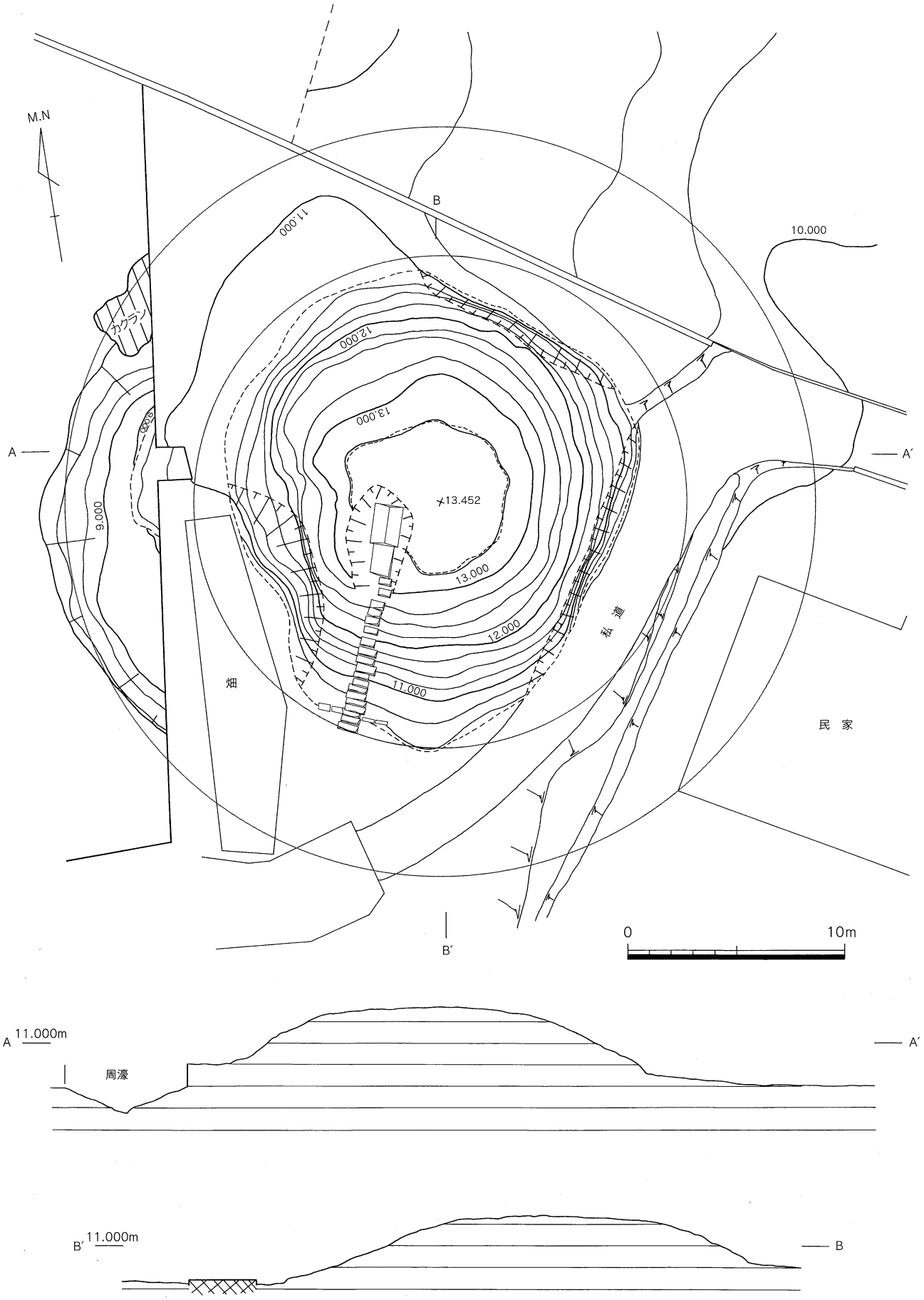
周濠の一部分のみが調査対象となり、調査を実施したが出土遺物はなく築造時期など詳細は不明である。そのため檍５号墳の地主である井野範男氏の許可を得て墳丘測量を実施した。墳丘測量と調査で確認できた周濠から墳丘の復元を試みると直径が約23m、周濠を含めた直径は約35m、周濠の幅は約６mと推測する円墳と考えられる。調査により周濠の幅の約５mは確認できたが、墳丘側は調査区外ということもあり確認できず、復元から考えるとあと１mは墳丘側ということになる。深さは1.14mと確認できたが、周濠を検出できたところから上層は撹乱を受けていた。周濠の周囲に存在する土壙墓が現地表面から約0.6mのところで遺構が検出でき、SD２の粘土が検出面で見えていたこと、その検出面からさらに約0.8m下がったところで周濠を確認することができた。これらのことなどから考えると周濠の深さは確認できた深さよりも１～２mほど深くなり、周濠の深さは２～３mになると推測する。周濠の底から墳丘頂までの高さは約4.5mとなる。これほどの墳丘を築くのに周濠や周囲の砂ではすぐに崩落しないのか、なぜ墳丘を築けたのかなどが疑問であったが、調査が進むにつれ解明された。周濠の墳丘側からは厚さが約0.4mで乾燥すると非常にしまり、硬くなる明黄褐色粘土が周濠の墳丘側に流れ落ちた様子ではなく、墳丘側にきちんと貼り付けているのが確認できた。そして墳丘の西側の一部が崩落しているところを観察してみると乾燥して硬くなり白くなっていたが、同じ明黄褐色粘土が存在することが確認できた。墳丘は調査範囲外であり断定はできないが、これらのことから考えると砂丘上という特異な立地に墳丘を築くことができ、今日までなぜ崩落しないのかは墳丘を明黄褐色粘土で固めながら墳丘を築き、墳丘全体を被覆していたからと考え、周濠の外側の立ち上がりが緩やかになっているのは粘土を貼りつけていないために埋没と同時に崩落が進んだから緩やかになっていると推測する。



第57図　山崎下ノ原第１遺跡遺構分布図Ⅰ　（S＝1／400）



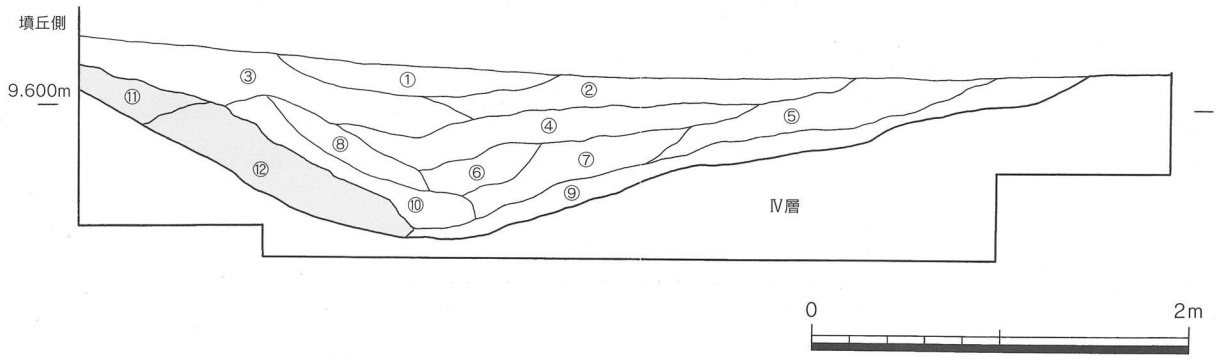
第58図　山崎下ノ原第１遺跡遺構分布図Ⅱ　（S＝1／400）



第59図　檍５号墳墳丘測量図　（S＝1／250）

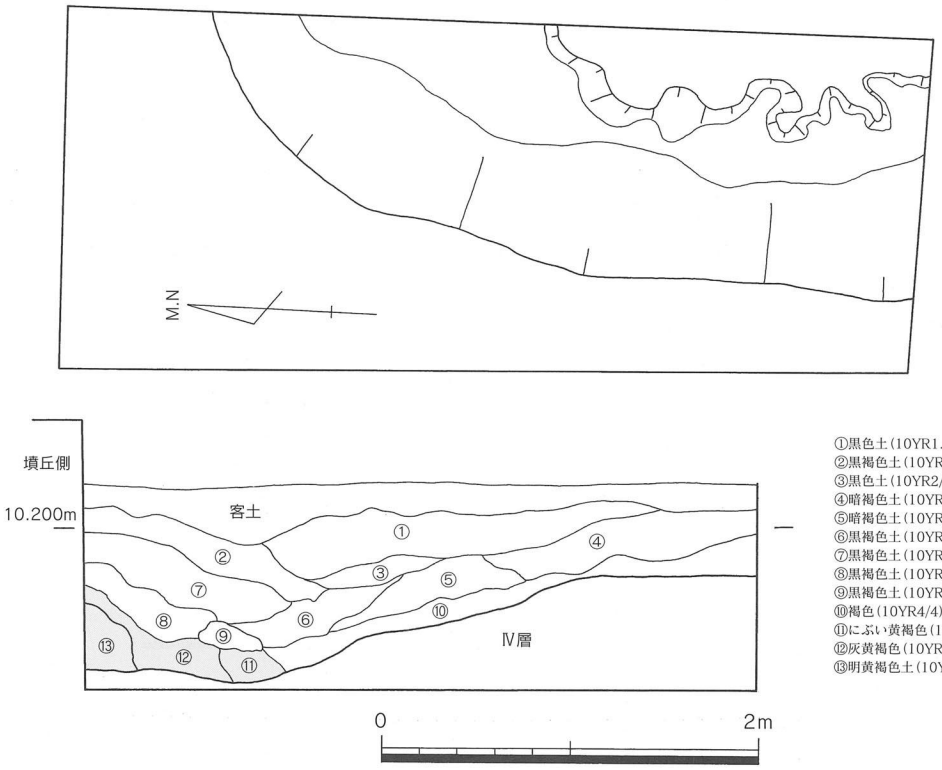
■ 檍６号墳周濠（第61図）

檍６号墳の周濠の一部を確認することができた。周濠の墳丘側は調査区外ということもあり、周濠の明確な幅を確認することはできなかったが、約４mと考えられる。出土遺物がなく築造時期など詳細は不明である。６号墳でも５号墳と同じ乾燥すると硬くしまる明黄褐色粘土が墳丘側で確認できた。流れ落ちた様子ではなく綺麗な明黄褐色粘土であるため、この粘土も墳丘を被覆し固めていたものと考えられることから、檍５・６号墳は同じ構築方法と考えることができる。このことから檍５・６号墳は同じ工人集団により墳丘を造営され、ほぼ同時期の墳丘と考えられ、墳丘の規模も檍５号墳と同じぐらいになるか一回り小さい円墳ではないかと考えられる。



①黒褐色土（10YR2/3）砂質であるがややしまる
②黒色土　（10YR2/1）砂質であるがややしまりがある
③暗褐色土（10YR3/4）砂質であるが黄褐色粘土が多量に混じりしまる
④黒褐色土（10YR3/2）砂質であるがしまりがあり黄褐色粘土がごくごく微量に混ざる
⑤黒褐色土（10YR2/3）砂質が強いがしまりがありやや明るい
⑥黒褐色土（10YR3/2）砂質であるがしまりがやや強く明黄褐色粘土がややごく微量に混ざる
⑦黒褐色土　（10YR2/2）砂質であるがややしまりがありやや暗くごくごく微量に明黄褐色粘土が混ざる
⑧黒褐色土　（10YR3/2）砂質であるがしまり明黄褐色粘土を微量に混ざる
⑨黒褐色土　（10YR2/3）砂質が強くしまりがあり基本層序第Ⅳ層を少量含む
⑩暗褐色　（10YR3/4）やや明るく明黄褐色粘土を含みしまりがある
⑪黄褐色粘土（7.5YR4/3）粘質で非常にしまり硬く墳丘を被膜している粘土だがやや崩落が混じる
⑫明黄褐色粘土（10YR6/8）粘質が強く非常によくしまり硬く粘土を被膜している粘土

第60図　檍５号墳周濠土層断面図　（S＝1／40）



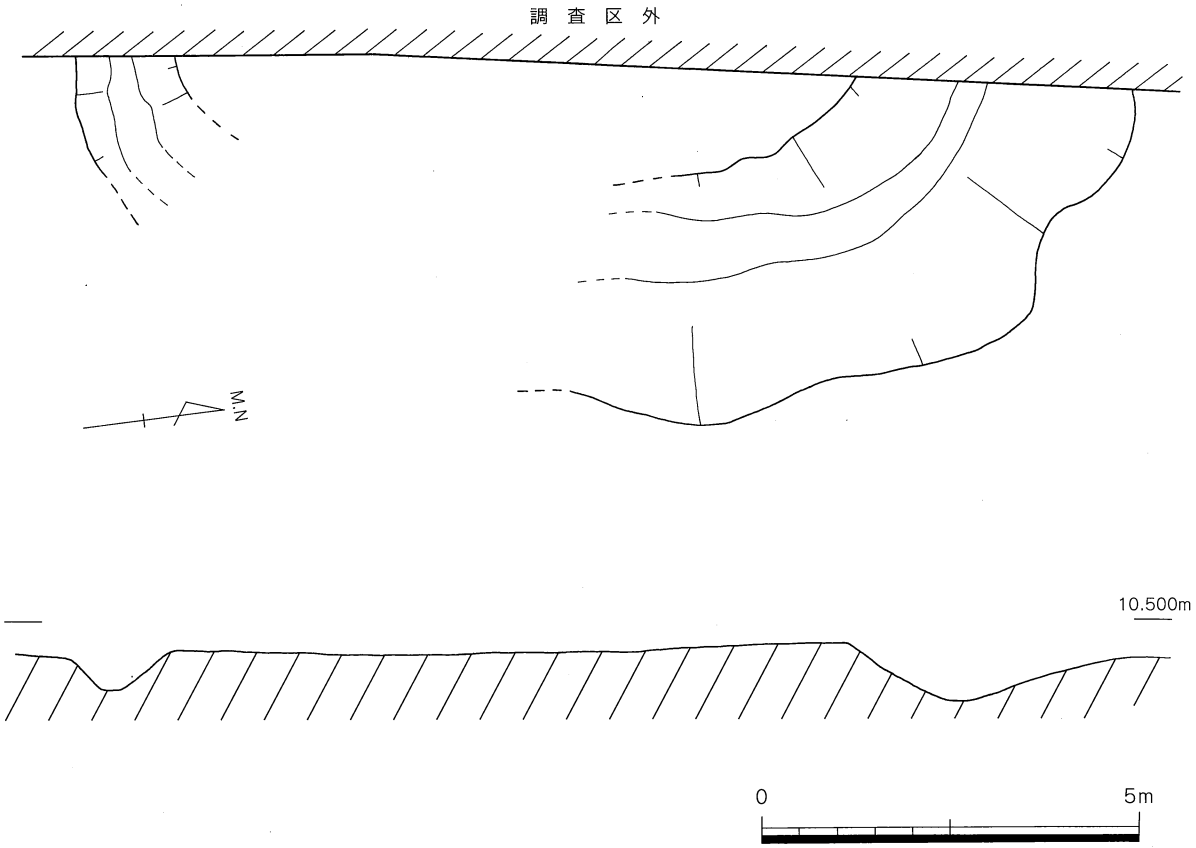
①黒色土（10YR1.7/1）砂質でかなり弱くやや柔い
②黒褐色土（10YR2/2）砂質でありやや明るく基本層序第Ⅲ層を多量に含む
③黒色土（10YR2/1）　砂質が弱くややしまりにぶい黄褐色の1cm前後のブロックをやや少量含む
④暗褐色土（10YR3/4）砂質が弱く基本層序第Ⅲ層を多量に含みややしまる
⑤暗褐色土（10YR3/3）砂質であり基本層序第Ⅲ層を少量含みしまる
⑥黒褐色土（10YR2/3）砂質が弱くにぶい黄褐色のブロックと基本層序第Ⅲ層を含みしまる
⑦黒褐色土（10YR3/2）砂質が強くややしまりがありにぶい黄褐色の1cm前後のブロックを少量含む
⑧黒褐色土（10YR3/2）砂質が強くしまりがありにぶい黄褐色の1cm前後のブロックをやや多量含む
⑨黒褐色土（10YR3/1）砂質でありやや暗くにぶい黄褐色の1cm前後のブロックを多量含む
⑩褐色（10YR4/4）　砂質で非常に柔く基本層序第Ⅲ層を微量含み基本序第Ⅳ層は多量に含む
⑪にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質がありしまりがあるが墳丘を被覆していた粘土の崩落である
⑫灰黄褐色（10YR4/2）にぶい黄褐色粘土を多量に含みしまりがあり硬い基本序第Ⅳ層を少量含む
⑬明黄褐色土（10YR6/8）粘質が強く非常によくしまり硬い墳丘を被覆していた粘土

第61図　檍６号墳周濠平面図・土層断面図　（S＝1／40）

2 滅失古墳の調査

■ 第１号墳 (第62図)

今回の調査で本遺跡周辺では初めて滅失古墳を確認した。周濠が円を描くように確認でき、墳丘側からは檍５・６号墳と同じ乾燥すると非常にしまり、固くなる明黄褐色粘土が貼り付けてあるために、第１号墳も同じ構築方法だったと考えられることから滅失古墳の周濠と考えられる。周濠の約1/2が確認できたが出土遺物がないために、築造時期など詳細は不明である。同じ構築方法であるため檍５・６号墳とほぼ同時期ぐらいではないかと推測する。しかし墳丘が残存していないのは、後世による削平ではないかと考えられる。周濠の土層から明黄褐色粘土が流れ込む前に若干ではあるが堆積した砂を確認できたが、少ししか堆積していないことから周濠を掘削し粘土を貼るまでにも崩落が進んでいたのか、時間が空いたのではないかと推測できるが、砂丘上という立地から考えると時間を空けて墳丘を築くというのは考えにくく、掘削し粘土を貼るまでにも崩落が進んでいったのではないかと考える。しかし崩落といっても砂丘上であり風が吹けば砂は動き、掘削時にやや崩れ堆積することから、そのような堆積ではないかと考えられる。北側の周濠の外側の立ち上がりが緩やかなのは埋没とともに崩落し、緩やかになったと考えられる。検出面からの深さは約0.6mである。墳丘の復元径は約20mぐらいの円墳になるのではないかと推測する。



第62図　第１号墳周濠平面図・断面図　(S＝1／100)

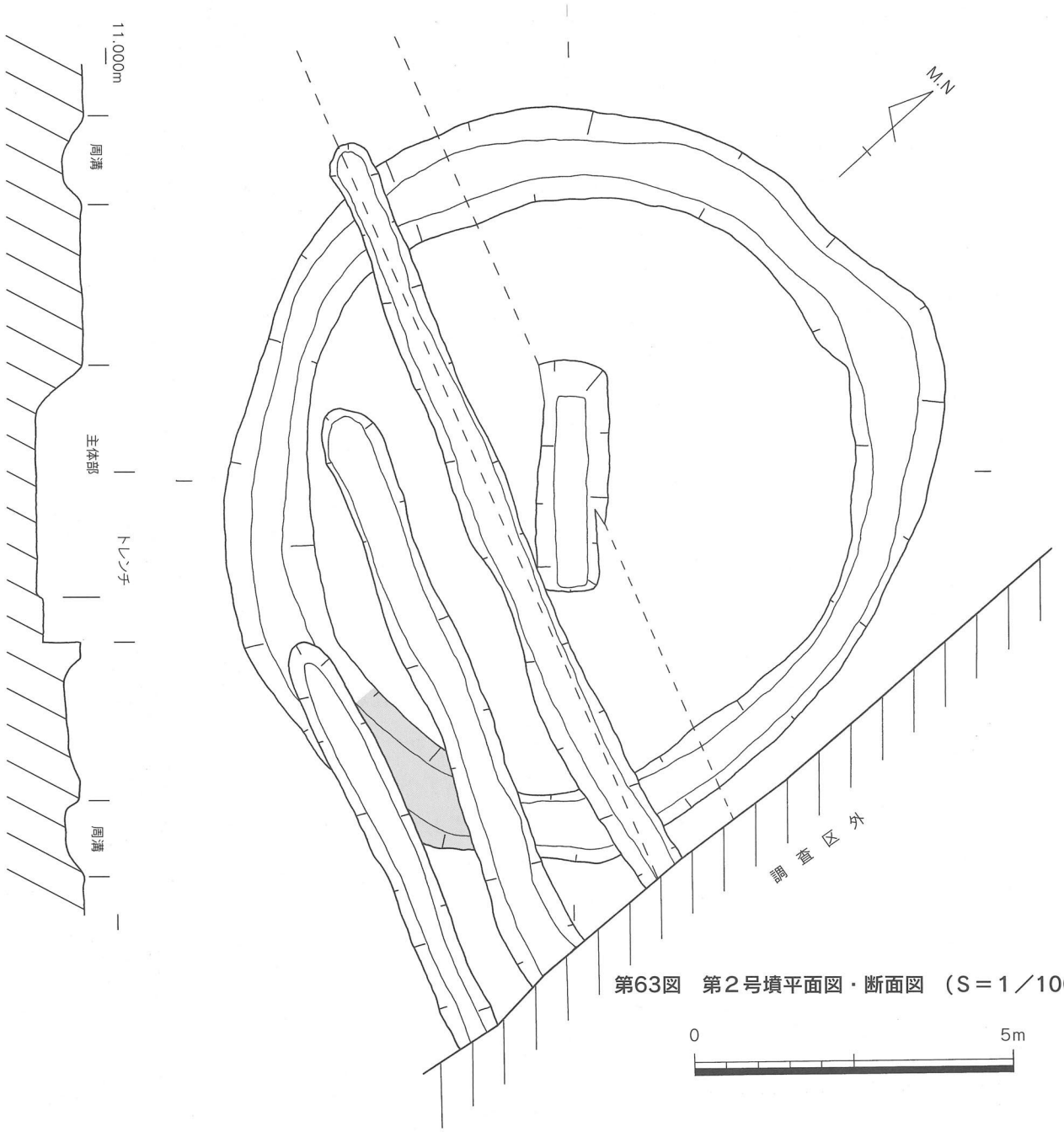
■ **第２号墳** (第63～68図)

墳丘の有無は確認できなかったが周溝と主体部を検出できたために滅失古墳と考えられる。直径約10mの小形の円墳で、検出面からの周溝の深さは西側が約0.3m、東側は約0.15mと非常に浅く、主体部の床面の深さは検出面から0.7mで周溝よりも深い位置に存在した。そのために主体部が残存していたと考えられる。主体部の主軸はＳ-53°-Ｅ方向で頭の位置は南東側と考えられる。主体部は砂丘という立地から検出にかなり困難を極めたためトレンチをいれて主体部の存在が確認できた。墳丘の有無は確認できなかったが、低墳丘が存在したのではないかと推測する。墳丘に主体部を造らず、地山を掘り下げて主体部を築いていることから、主体部を造ったのち墳丘を築いたのではないかと考えられる。

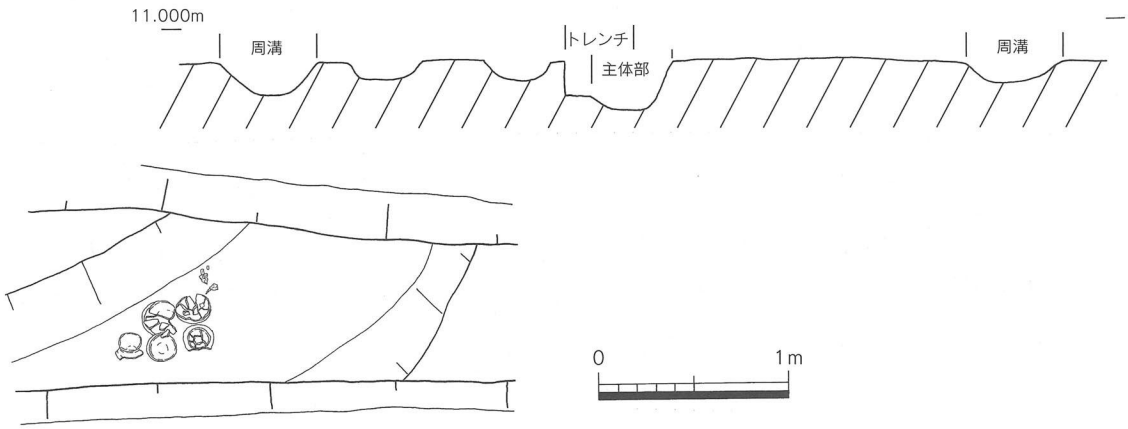
主体部は検出面で長軸４.08m、短軸1.5m、深さ0.7mの隅丸長方形プランを呈している土壙墓状で、埋葬方法は木棺直葬と考えられる。木棺の推定の長さは約3.08m、幅は約0.5mで、釘などは出土していない。主体部からは乳文鏡(１点)･大刀(１振)･鉄鏃(７点)･ガラス小玉(161点)が出土している。乳文鏡(1)は裏面を下、表面を上にした状態で出土し、直径は8.7㎝で、紐部分に有機質物質が付着しており、独立行政法人奈良文化財研究所の高妻洋成氏に分析を依頼し、布繊維であること、その布繊維は平織りで原料は苧麻(ちょま)であることが判明し、表面にも繊維らしきものがあるが規則性が無いので布繊維ではないことが判明した。大刀(2)は全長１m、刃部長83㎝、幅3.7㎝、厚さ0.6㎝、茎部長17㎝、幅1.9㎝、厚さ0.6㎝、茎尻幅1.4㎝の直刀である。刃部と茎部分には木質が残存し、刃部は鞘、茎部分は柄の残存と考えられる。茎の背部分には紐で巻いたような痕跡が確認できた。これはＵ字型の木の柄に大刀の茎部をはめこみ、紐で巻いて固定した痕跡ではないかと考えられる。直径0.3㎝の目釘孔が３つあけられている。鉄鏃は７本出土し、長頸鏃の系統をひく圭頭鏃(５～９)と三角形鏃(３)で、７本とも残存長は８㎝前後で、茎部には木質が良好な状態で残存し、７本すべてに樹皮で巻いている痕跡が残存している。きちんとまとめて鋒を足元側(北西側)に向けて置いてあり、それが錆で７本ともかたまり、くっついて、大刀の背部分の錆ともかたまりはずれない状態で出土した。ガラス小玉は大きく分けると青･紺･緑･黄色で、主体部の南東側に散らばって出土している。大刀、鉄鏃ともに鋒は北西方向を向けて置かれていること、ガラス小玉が南東側で出土していることから頭の位置は南東側と考えられる。

周溝の南南東の底から須恵器の坏蓋(１点)、土師器の壺(１点)･坏(５点)･鉄鏃(３点)が出土している。綺麗に土師器の坏と須恵器の坏蓋の７点を二組ずつ重ね並べ、破砕しているが東側に壺を立て、西側に鉄鏃を置いた状態で出土しており、埋葬時に周溝内で祭祀を行ったと考えられる。土師器の壺(11)は胴部が球胴でもそろばん玉状でもない扁球胴で、口縁部と体部の長さが近似している。胴部には破砕行為を行った痕跡が見受けれる。その場で破砕行為を行ったようで、完形に復元できている。土師器の坏は口径が大きく深さがあり器高が高く、口縁部は内湾するもの(12～15)と、外反するもの(16)があり、底部はいずれも丸底である。土師器の壺と坏の６点すべてには赤色顔料が塗布されている。須恵器の坏蓋は口径11.8㎝と小さく、受け部がないことからTK47型式(５世紀期末)に相当すると考えられる。鉄鏃は長頸鏃の系統を引く三角形鏃(19)と圭頭鏃(17)、木で鉄鏃を挟み込んでいる無茎鏃(18)が出土している。

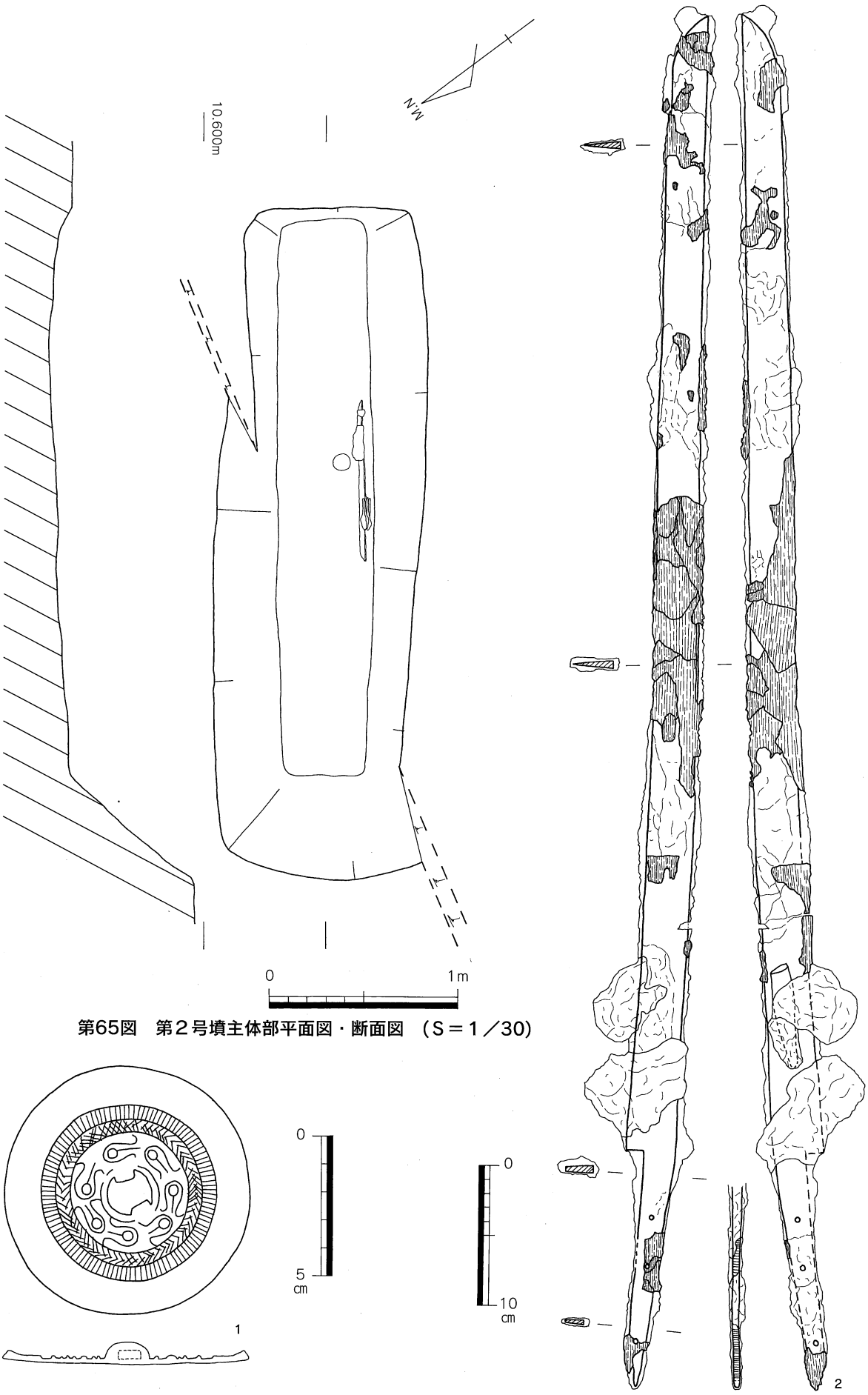
これらのことから第２号墳の築造時期を考えると、主体部から出土している鉄鏃は長頸鏃の系統を引いていること、周溝の底から出土した須恵器の坏蓋がTK47型式に相当すると考えられること、土師器の壺や坏は今塩屋毅行氏(今塩屋2002)の編年によると５期の初め頃に相当すると考えられることなどから、第２号墳の築造時期は５世紀末頃と考えられる。



第63図　第２号墳平面図・断面図　（S＝1／100）

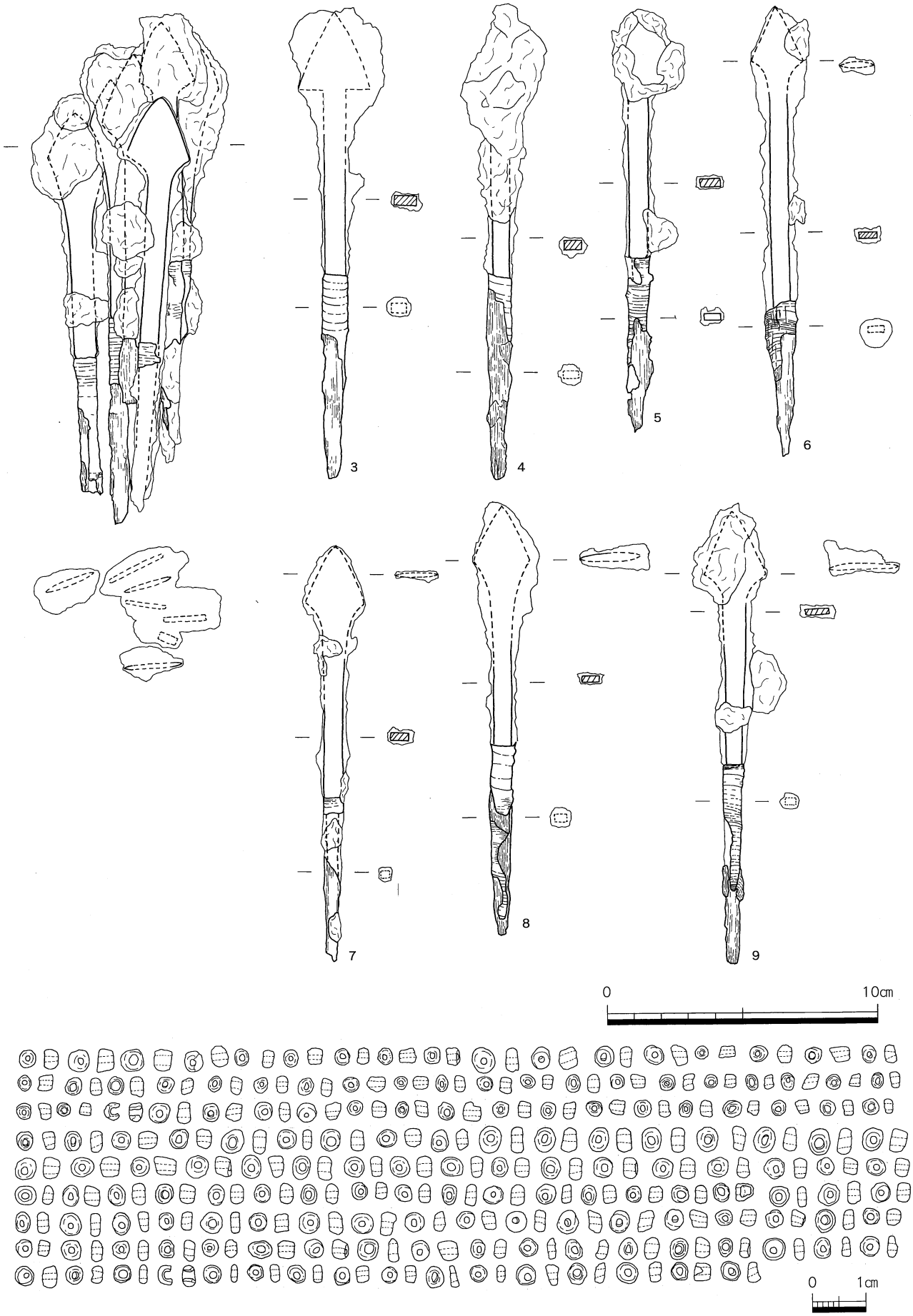


第64図　第２号墳周溝内遺物出土状況　（S＝1／40）

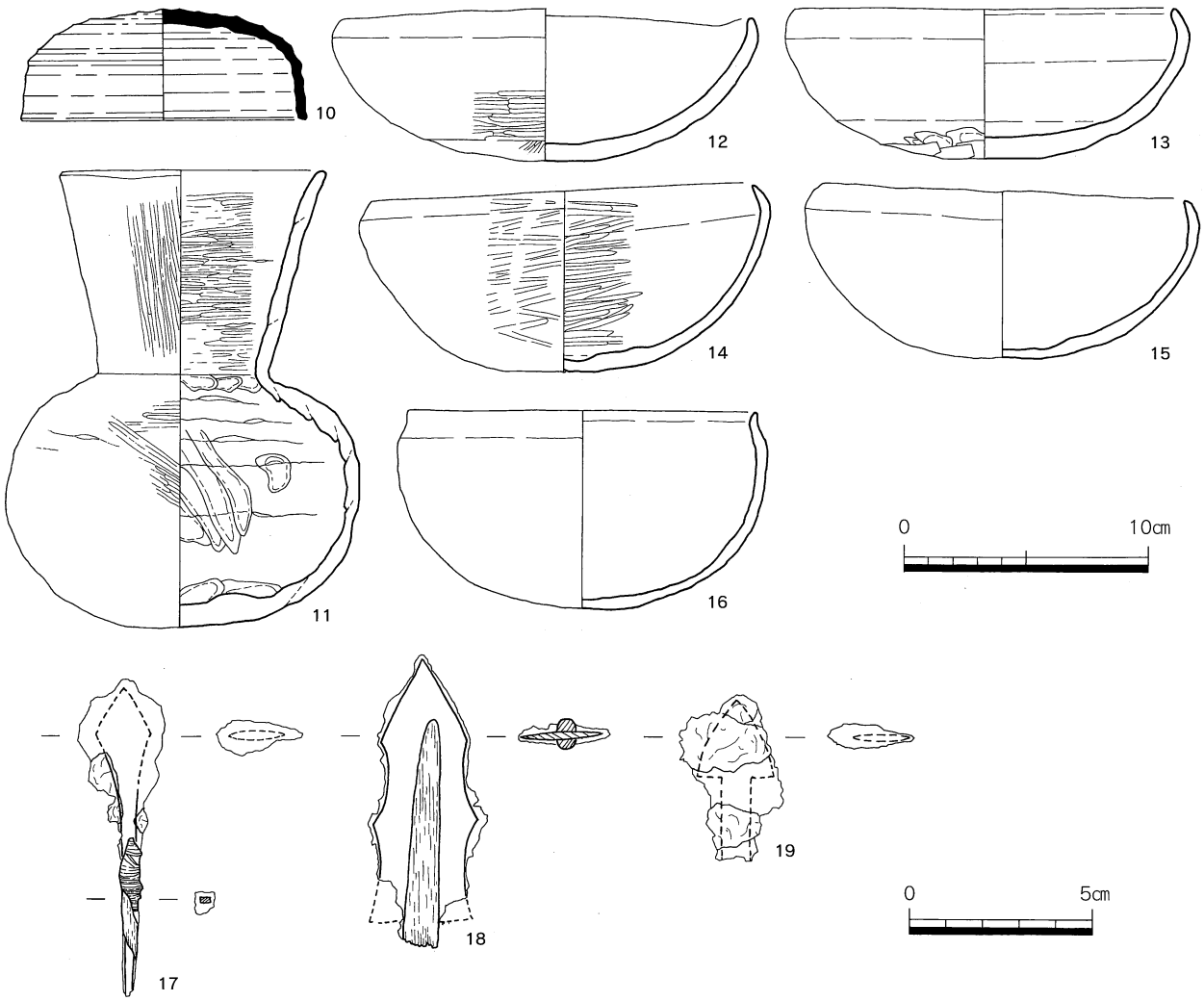


第65図　第２号墳主体部平面図・断面図　（S＝1／30）

第66図　第２号墳主体部出土遺物実測図Ⅰ　（1.S＝1／2　2.S＝1／4）



第67図　第２号墳主体部出土遺物実測図Ⅱ　（３～９.Ｓ＝１／２　ガラス小玉Ｓ＝１／１）



第68図　第２号墳周溝出土遺物実測図　（10～16.S＝1／3　17～19.S＝1／2）

■ 第３号墳

家屋建設などにより約2/3以上が撹乱を受けていたが、溝の幅が１～1.3m、深さが約0.3mで円を描くように確認できたことから、滅失古墳の周溝と考えられる。復元径は10m前後で、第２号墳と同様のものではないかと考えられることから、周溝よりも低い位置で主体部が残存している可能性があるためにトレンチをいれたが、遺構や遺物を確認できなかった。第３号墳の周溝の外側にも溝がめぐっており、２重目の周溝ではないかと考えられる。確認できた２重目の周溝の幅は0.7～0.9m、深さは約0.15mである。２重目を含めると復元径は15m前後になると推測する。第２・３号墳の周辺に５基の土坑が確認できたが出土遺物もなく不明であるが、馬埋葬土坑や土壙墓の可能性もあるのではないかと推測する。第３号墳の周溝の南西方向は遺構が確認できなかったが須恵器のハソウ、土師器の坏が出土しており、祭祀が行われていたのではないかと考えられるが撹乱を受けており不明である。祭祀を行ったと考えられるが第３号墳に対しての祭祀か、それとも周囲に別の滅失古墳が存在し、その古墳に対してのものなのかなど詳細は不明である。

	径	幅	孔径	色彩	重量
1	3.47	2.02	0.77	黄色	0.05
2	4	3.12	1.18	黄色	0.06
3	4.5	3.22	1.57	黄色	0.08
4	4.05	2.96	1.29	黄色	0.06
5	3.19	2.08	0.88	黄色	0.03
6	3.12	2.91	0.66	黄色	0.03
7	3.2	2.14	0.85	黄色	0.03
8	3.52	2.96	0.75	黄色	0.04
9	3.15	3.34	1.21	青色	0.05
10	4.61	2.36	1.24	青色	0.07
11	3.85	3.48	1.12	青色	0.07
12	3.69	2.38	1.08	青色	0.04
13	3.78	2.61	1.1	青色	0.05
14	2.75	3.03	0.59	青色	0.03
15	3.57	2.68	0.89	青色	0.03
16	3.36	3.24	1.2	青色	0.05
17	3.22	1.94	1.02	青色	0.04
18	2.72	2.69	0.95	青色	0.03
19	3.43	2.25	1.05	青色	0.03
20	3.47	2.22	1.64	青色	0.03
21	3.12	2.4	0.93	青色	0.03
22	3.14	2.22	0.88	青色	0.02
23	3.11	2.14	0.74	青色	0.04
24	3.21	2.35	0.92	青色	0.03
25	2.78	2.95	0.68	青色	0.03
26	2.82	2.72	0.63	青色	0.02
27	3.03	2.09	0.83	青色	0.02
28	3.28	2.09	1	青色	0.02
29	2.9	1.97	0.94	青色	0.03
30	3.14	2.1	1.34	青色	0.03
31	2.94	2.51	0.77	青色	0.03
32	3.04	1.97	0.91	青色	0.02
33	2.77	2.03	0.81	青色	0.02
34	2.65	1.82	1.1	青色	0.02
35	3.12	3.09	0.94	青色	0.03
36	2.78	2.25	0.88	青色	0.02
37	2.91	1.83	1.1	青色	0.01
38	2.79	2.36	0.71	青色	0.02
39	0.58	2.04	0.99	青色	0.01
40	3.73	2.54	1.14	青色	0.02
41	4.14	2.24	1.29	紺色	0.06
42	3.46	3.9	0.94	紺色	0.05
43	3.62	2.39	1	紺色	0.03
44	3.25	3.01	0.76	緑色	0.04
45	3.03	2.83	0.83	緑色	0.03
46	3.13	2.52	1.09	緑色	0.02
47	3.51	3.06	1.2	緑色	0.05
48	3.3	2.29	1.03	緑色	0.02
49	3.26	2.47	0.92	緑色	0.04
50	2.83	2.81	0.96	緑色	0.03
51	3.21	2.05	1.05	緑色	0.02
52	3.3	2.14	0.85	緑色	0.02
53	3.1	2.22	1.02	緑色	0.02
54	3.06	2.37	0.93	緑色	0.02
55	3.18	1.89	1.18	緑色	0.03
56	3.21	1.67	0.94	緑色	0.02
57	3.41	2.35	0.96	緑色	0.02
58	4.01	2.09	1.05	緑色	0.03
59	3.84	3.22	1.1	青色 半透明	0.06
60	3.58	2.58	1.09	青色 半透明	0.05
61	4.21	2.11	1.84	青色 半透明	0.05
62	3.64	1.45	1.05	青色 半透明	0.03
63	3.83	2.55	1.44	青色 半透明	0.04
64	3.67	2.8	1.2	青色 半透明	0.04
65	4	2.14	1.14	青色 半透明	0.04
66	4.83	2.53	1.49	青色 半透明	0.07
67	4.46	2.89	1.57	青色 半透明	0.06
68	4.38	2.58	1.28	青色 半透明	0.06
69	4.37	2.27	1.29	青色 半透明	0.06
70	4.42	2.34	1.36	青色 半透明	0.06
71	4.44	2.22	1.35	青色 半透明	0.05
72	4.5	2.52	1.41	青色 半透明	0.06
73	4.24	2.73	1.33	青色 半透明	0.05
74	4.12	2.92	1.19	青色 半透明	0.05
75	3.86	3.42	1.49	青色 半透明	0.06
76	3.36	3.85	0.86	青色 半透明	0.06
77	3.86	3	1.1	青色 半透明	0.06
78	3.99	2.8	1.38	青色 半透明	0.04
79	4.11	2.53	1.28	青色 半透明	0.05
80	4.13	2.19	1.47	青色 半透明	0.04
81	3.71	2.49	1.21	青色 半透明	0.05
82	3.91	1.96	1.22	青色 半透明	0.04
83	3.54	2.74	0.92	青色 半透明	0.04
84	3.95	3.21	1.29	青色 半透明	0.04
85	3.68	2.39	1.06	青色 半透明	0.04
86	3.79	2.41	1.23	青色 半透明	0.05
87	3.82	2.1	1.18	青色 半透明	0.04
88	3.72	2.23	0.97	青色 半透明	0.04
89	3.03	2.67	0.87	青色 半透明	0.03
90	3.57	2.24	1.04	青色 半透明	0.04
91	3.75	1.97	1.18	青色 半透明	0.03
92	3.45	2.92	1.74	青色 半透明	0.05
93	3.83	2.4	1.13	青色 半透明	0.04
94	3.54	2.49	1.35	青色 半透明	0.03
95	3.47	2.45	1.18	青色 半透明	0.04
96	3.41	2.07	1.05	青色 半透明	0.03

第17表　第２号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅰ　　（単位mm、重量g）

97	3.72	2.09	1.25	青色 半透明	0.03
98	3.24	2.17	0.68	青色 半透明	0.03
99	3.53	2.1	1.05	青色 半透明	0.03
100	3.72	1.84	1.2	青色 半透明	0.03
101	3.65	2.08	0.86	青色 半透明	0.04
102	3.56	2.02	0.9	青色 半透明	0.04
103	3.59	2.06	0.91	青色 半透明	0.03
104	3.1	2.47	0.97	青色 半透明	0.04
105	3.31	2.21	1.17	青色 半透明	0.02
106	3.33	3.1	1.29	青色 半透明	0.03
107	3.78	1.68	1.15	青色 半透明	0.03
108	4.31	3.39	1.01	青色 半透明	0.06
109	3.71	2.74	0.85	青色 半透明	0.05
110	3.94	2.27	1.23	青色 半透明	0.06
111	4.14	2.1	1.02	青色 半透明	0.03
112	3.89	1.85	1.2	青色 半透明	0.03
113	3.21	2.21	1.05	青色 半透明	0.05
114	4.01	1.52	1.51	青色 半透明	0.04
115	3.38	3.12	0.96	青色 乳白	0.05
116	4.18	2.28	0.9	青色 乳白	0.05
117	3.96	2.58	1.32	青色 乳白	0.05
118	3.47	2.21	1.03	青色 乳白	0.03
119	3.33	2.38	0.99	青色 乳白	0.03
120	3.92	3.29	1.19	青色 乳白	0.05
121	4.07	2.64	1.09	青色 乳白	0.05
122	4	2.61	1.06	青色 乳白	0.05
123	3.58	3.35	0.86	青色 乳白	0.05
124	3.11	2.73	0.78	青色 乳白	0.03
125	3.16	2.64	0.84	青色 乳白	0.04
126	4.06	2.05	1.24	青色 乳白	0.04
127	3.31	2.49	1.12	淡い青色 半透明	0.03
128	3.12	2.28	1.02	淡い青色 半透明	0.03
129	3.97	1.92	1	淡い青色 半透明	0.04
130	3.49	1.94	0.94	淡い青色 半透明	0.03
131	3.27	2.06	0.82	淡い青色 半透明	0.04
132	3.47	2.02	0.79	淡い青色 半透明	0.03
133	3.81	3.17	0.13	淡い青色 半透明	0.06
134	3.34	2.79	0.96	淡い青色 半透明	0.04
135	4.16	1.81	1.34	淡い青色 半透明	0.04
136	3.52	3.38	0.96	淡い青色 半透明	0.04
137	3.43	2.1	0.94	淡い青色 半透明	0.03
138	3.48	1.71	1.17	淡い青色 半透明	0.02
139	3.53	1.81	0.99	淡い青色 半透明	0.03
140	3.97	2.58	1.22	淡い青色 半透明	0.05
141	3.9	2.4	1.22	淡い青色 半透明	0.04
142	3.37	1.79	1.1	淡い青色 半透明	0.02
143	3.88	1.77	0.96	淡い青色 半透明	0.04
144	3.64	1.62	0.72	淡い青色 半透明	0.02
145	4.02	1.89	1.12	淡い青色 半透明	0.03
146	3.85	2.87	0.95	淡い青色 半透明	0.06
147	3.35	1.93	1.14	淡い青色 半透明	0.03
148	2.23	1.41	0.31	淡い青色 半透明	0.02
149	3.65	2.13	1.08	淡い青色 半透明	0.02
150	3.64	1.48	1.04	青緑色 半透明	0.03
151	3.13	1.75	0.97	青緑色 半透明	0.03
152	3.4	1.53	1.02	青緑色 半透明	0.02
153	3.06	2.48	0.84	青緑色 半透明	0.03
154	3.23	1.86	1.03	青緑色 半透明	0.02
155	3.92	1.74	1.29	青緑色 半透明	0.03
156	2.96	1.41	0.82	青緑色 半透明	0.02
157	3.79	1.96	0.98	青緑色 半透明	0.03
158	3.64	1.75	1.22	青緑色 半透明	0.03
159	4.03	2.31	1.17	青緑色 半透明	0.05
160	3.15	2.94	1.16	青緑色 半透明	0.04
161	3.61	2.01	1	青緑色 半透明	0.03

＊図66のガラス小玉は左上から右に番号をつけている

第18表　第２号墳主体部出土ガラス小玉計測表Ⅱ　　（単位mm、重量g）

３ 土壙墓の調査(ＳＤ)

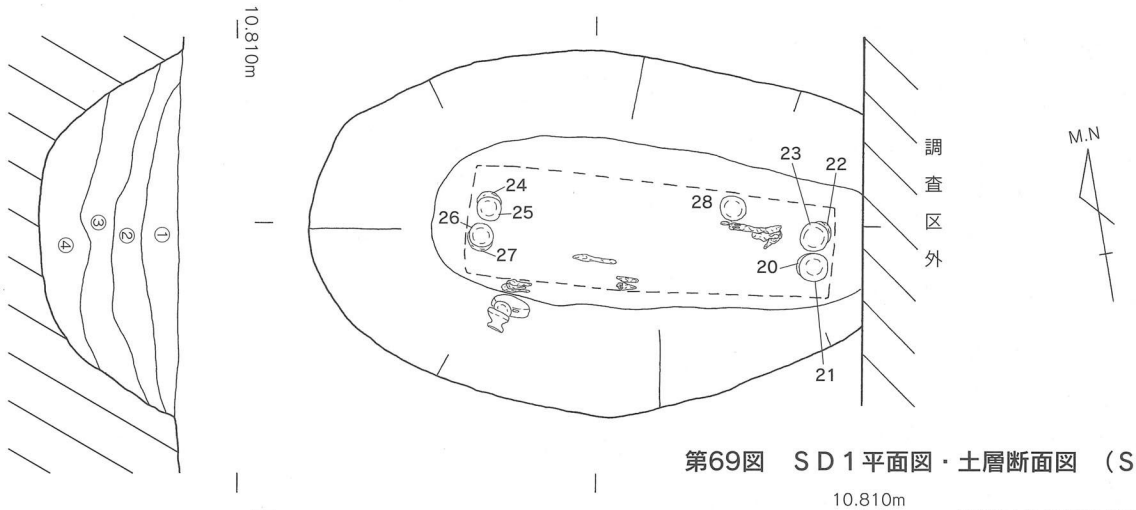
■ ＳＤ１ (第69～71図)

長軸が約３m、短軸1.9m、深さ約１mの楕円形ないし隅丸長方形プランを呈し、主軸はN-75°-W方向の土壙墓である。東側の立ち上がりは調査区外となるために確認することはできなかったが、土層観察により明黄褐色粘土が存在していることが確認でき、反対側でも同じ粘土が存在していたことから、棺の長軸の両端の押さえに使われた粘土であると考えられる。これらのことから木棺墓であると考えられる。この明黄褐色粘土は、檍５・６号墳の周濠で確認できた粘土と同じ粘土と推測する。

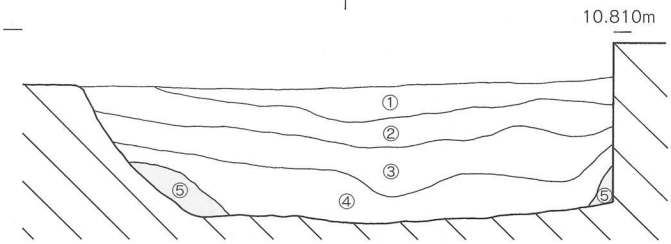
出土遺物は須恵器の坏のセットをなすものが４組(８点)・提瓶(１点)・土師器の高坏(１点)・須恵器の坏身(１点)・鉄鏃(８点)・鉄刀(１点)・刀子(１点)・鐙(２点)である。須恵器の坏のセットの３組(20～25)は坏身を反対にして伏せその上に坏蓋を伏せて重ね、１組(26、27)は坏蓋を伏せてその上に坏身を反対にして伏せて重ねてあり、床面の両端付近に二組ずつ並べて置いてあり、ちょうど頭と足元付近である。これらのことから須恵器の坏身と坏蓋のセットは枕など台の役割をしていたと考えられる。中央の南側で元位置を保っていると考えられる鉄刀(32)・鉄鏃(34～37)・刀子(39)は棺内の副葬品と考えられる。鉄鏃は方頭鏃(36)・圭頭鏃(34～35)・三角形鏃(37)で、茎部分には良好な状態で木質が残存し、樹皮で巻いている痕跡が残存している。鉄刀は残存長21.4㎝、刃部長15.4㎝、幅1.7㎝、厚さ0.3㎝、茎部長６㎝、幅1.1㎝、厚さ0.3㎝である。刃部全体に布繊維が付着し、２枚は重なっていると観察できることから２重に布繊維を巻いていたと考えられる。茎部には木質が残存しているが、布繊維が付着していないことから柄を装着した状態で鞘のない刃部にのみ布繊維を巻きつけたのではないかと推測する。

土師器の高坏(30)・須恵器の提瓶(29)・坏身(31)が南西側で出土しているが、提瓶は立った状態で出土し、その外側で倒れた高坏と坏蓋が、内側で鉄鏃４本(33、38)が置かれ、床面よりやや高い位置で出土していることから棺外の副葬品と考えられる。須恵器の提瓶は口縁部内側にヘラ記号があり、坏身は内面の底に、渦状の縄目文様が見られる。これは外面に削りを施す際に乗せた台に縄が巻きつけられていたのではないかと考えられるが不明である。鉄鏃は４本とも三角形鏃で、茎部分には良好な状態で木質が残存し、樹皮で巻いている痕跡が残存する。馬具である鐙(40～41)も出土しているが、床面より40㎝ほど高い位置で出土しているために、棺の上に置いて埋葬されたものが棺の腐敗により落ちた状態ではないかと考えられる。鐙の鎖は３連の兵庫鎖で、下部の鎖ほど小さくなる。鐙吊金具は断面が長方形の棒状を兵庫鎖の輪と連結させ、真ん中でＵ字に曲げ、下部はその棒状の断面が長方形の厚みを叩いて薄く延ばし、厚さ0.2㎝で1×８㎝の板状の吊金具を造っている。鋲は片方に２個ずつ打ち、合計４個である。この板状の吊金具で木製の鐙を挟み込んで鋲で留めていたと考える。鐙具は中央部分から上部はやや幅が広くなり、刺金は断面が方形の棒状で、巻きつけて固定し、反対側は叩いて薄く平らにしている。検出面からやや下で土師器の坏蓋(28)が出土しており、埋葬して埋めた後に納めたものではないかと考えられる。口縁部にはヘラ工具による圧痕が施されている。棺内外の鉄鏃の鋒は西を向き、鉄刀の鋒は東を向いているが、若干ではあるが西側のほうの幅が広いことから頭の位置は西側と考えられる。

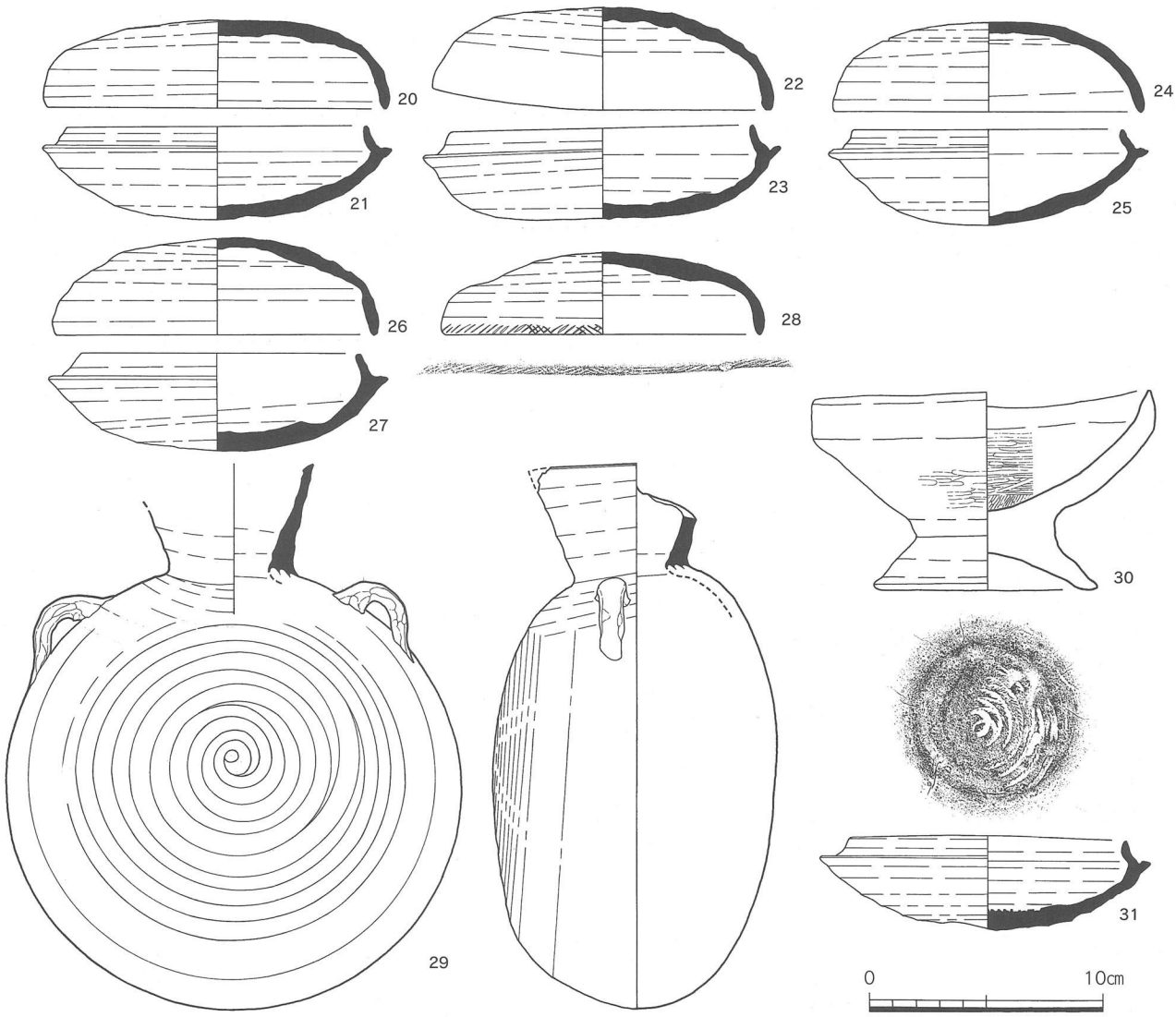
SD１の時期は出土したセット関係をなす４組の須恵器の坏身の口径が12㎝前後、坏蓋の口径が14㎝前後で、頭の位置にあると考えられる二組の須恵器の口径はやや小さいが、TK209型式の古段階の６世紀末頃に相当すると考えられる。



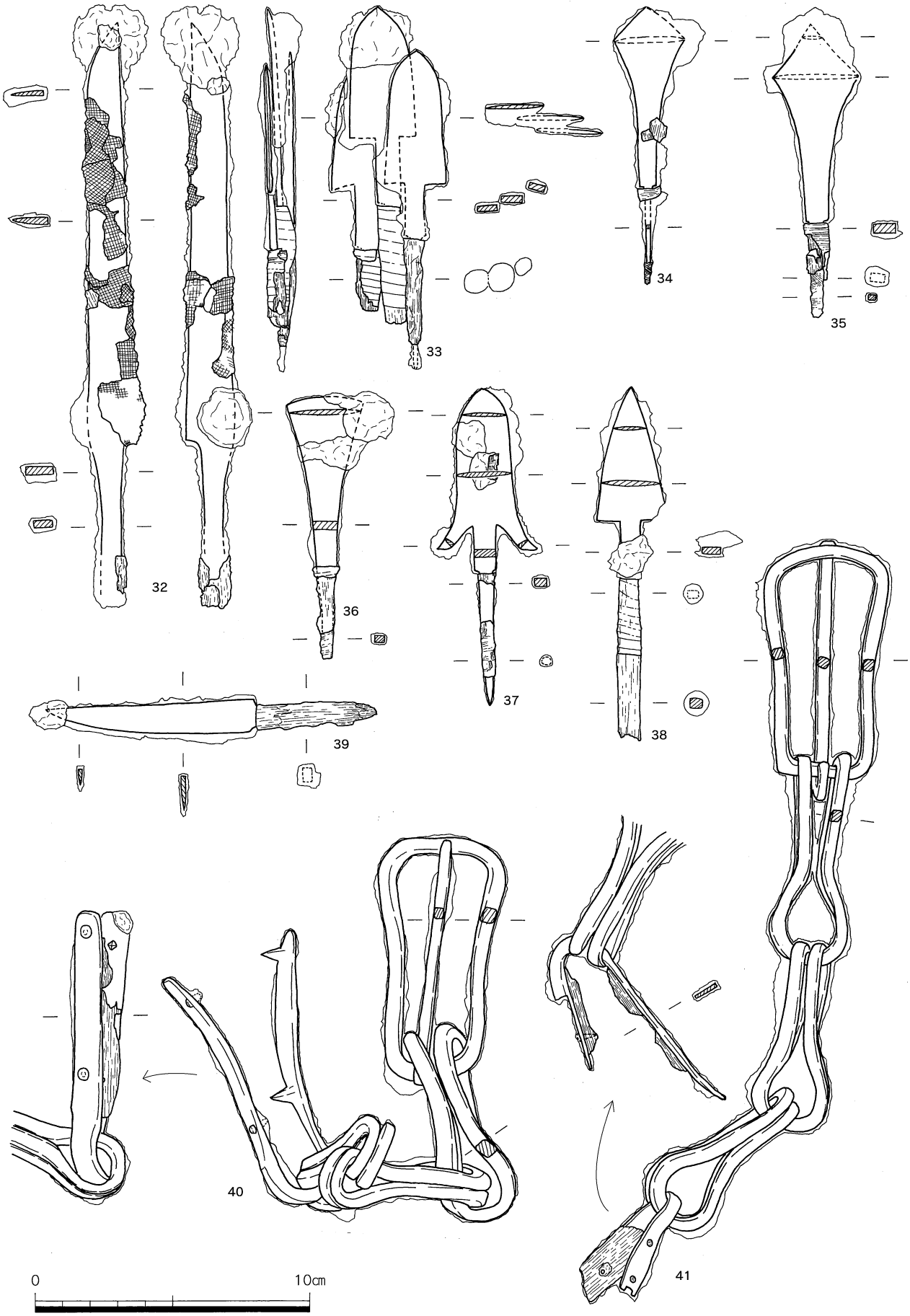
第69図　ＳＤ１平面図・土層断面図　（Ｓ＝１／40）



①暗褐色土(7.5YR3/3)　砂質であるがやや土が混ざりややしまる
②暗褐色土(10YR3/3)　砂質であり①層よりやや柔い
③黒褐色土(10YR3/2)　砂質が強くやや暗くしまるがやや強い
④暗褐色土(10YR3/4)　砂質でややしまりがあり基本層序第Ⅳ層を微量含む
⑤明黄褐色土(10YR6/8)　粘質が強く非常にしまり硬い粘土である



第70図　ＳＤ１出土遺物実測図Ⅰ



第71図　ＳＤ１出土遺物実測図Ⅱ　（Ｓ＝１／２）

■ＳＤ２ (第72～73図)

検出面で長軸3.12m、短軸1.64m、深さ0.46mの隅丸長方形プランを呈し、主軸はＳ-60°-W方向の土壙墓で、主軸方向は檍５号墳の墳丘の中心を向いている。出土遺物は須恵器の坏蓋(１点)･坏身(４点)･鉄鏃(３点)･刀子(１点)である。土壙墓の北西の隅に楕円形の土坑が２基、存在しているが遺物などは出土していなく詳細は不明である。しかし埋土状況などから比較的新しい時期の撹乱と考えられる。

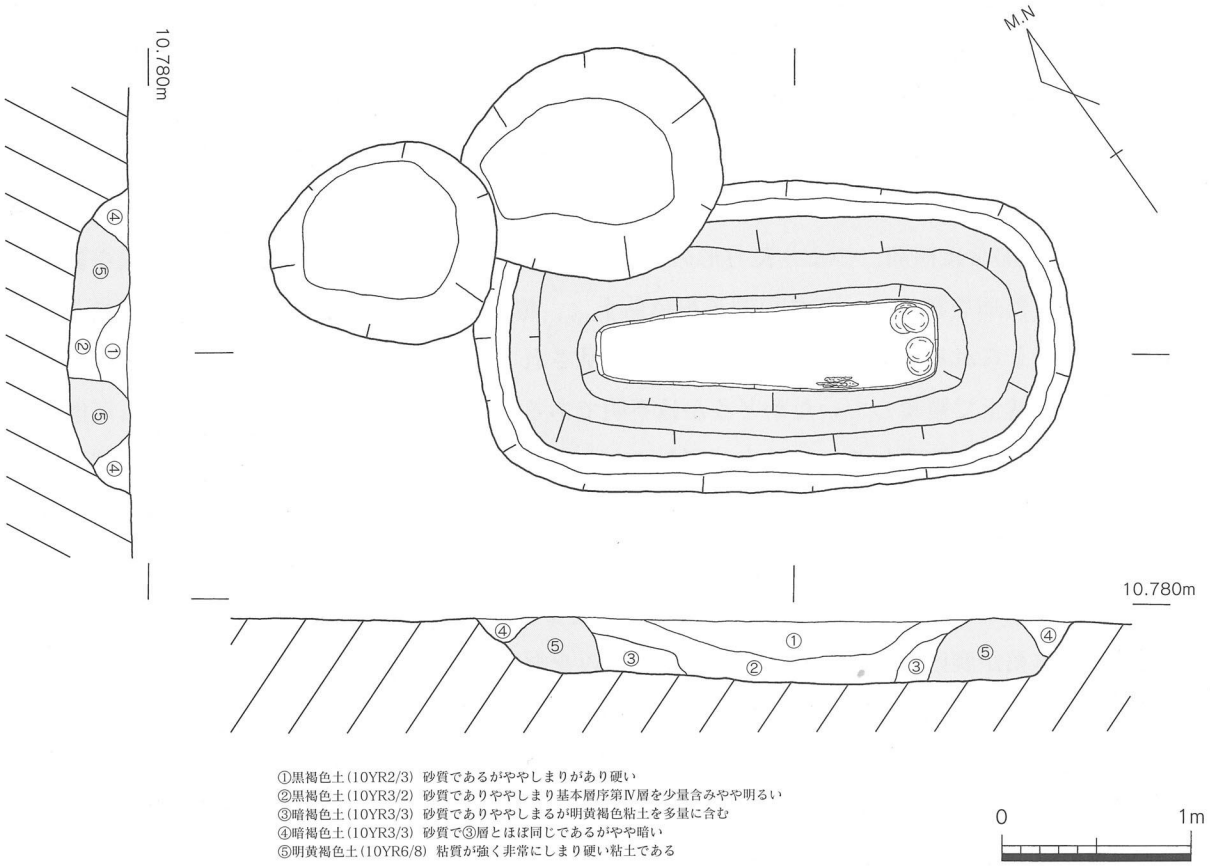
SD２は明黄褐色粘土が四周を覆い、棺を押さえる役割をしていると考えられる。SD１は長軸の両端だけであったが、SD２は四周、つまり長方形の木棺の４辺とも厚さ約0.4mの粘土で覆い、棺を押さえているのである。四周を覆っているこの明黄褐色粘土は、檍５･６号墳の周濠の墳丘側で確認できた粘土と同じものと考えられる。上層は家屋建設などで撹乱されており、検出面ですでに粘土が見えていたことから棺の上を粘土で被覆していたかどうかは不明である。そのため粘土槨と考えることも可能であるが、内側には棺の上を被覆していた粘土が落ちていた痕跡はない。若干ではあるが長軸の両端に崩れ落ちている粘土が確認できたが、これは棺が腐敗して倒れたときに長軸の両端の粘土が崩落したものであると考えられることから、棺の上には被覆していないと推測する。土壙を掘り、木棺を置いて明黄褐色粘土を四周に被覆し埋葬していたと考えられる。四周を覆っている粘土の長軸が約2.6m、短軸が約1.24mである。木棺が腐敗して崩れ、埋没した部分のみを掘削した結果、木棺の部分は全長1.76m、最大幅0.48m、最小幅0.3m、残存高0.3mであることが判明した。やや幅が狭く、木棺の板の厚さも考えると、大人一人が入るかどうかという感じである。釘などが出土していないことや、木棺が存在した粘土の部分の側板の部分が垂直に近いことなどから箱式の組合せ木棺と推測する。

土壙の東側には須恵器の坏身と坏蓋が伏せて重ねた状態で北側に３点(上43、中42、下44)、南側に２点(上45、下46)出土し、北側と南側で重ねている須恵器の点数が違うが、高さはほぼ同じであり意図的に揃えていると考えられることから、枕など台の役割を果たしていたのではないかと考えられる。須恵器の坏身の口径が11.5～12.1㎝で、坏蓋の口径が13.3㎝とやや大きい。

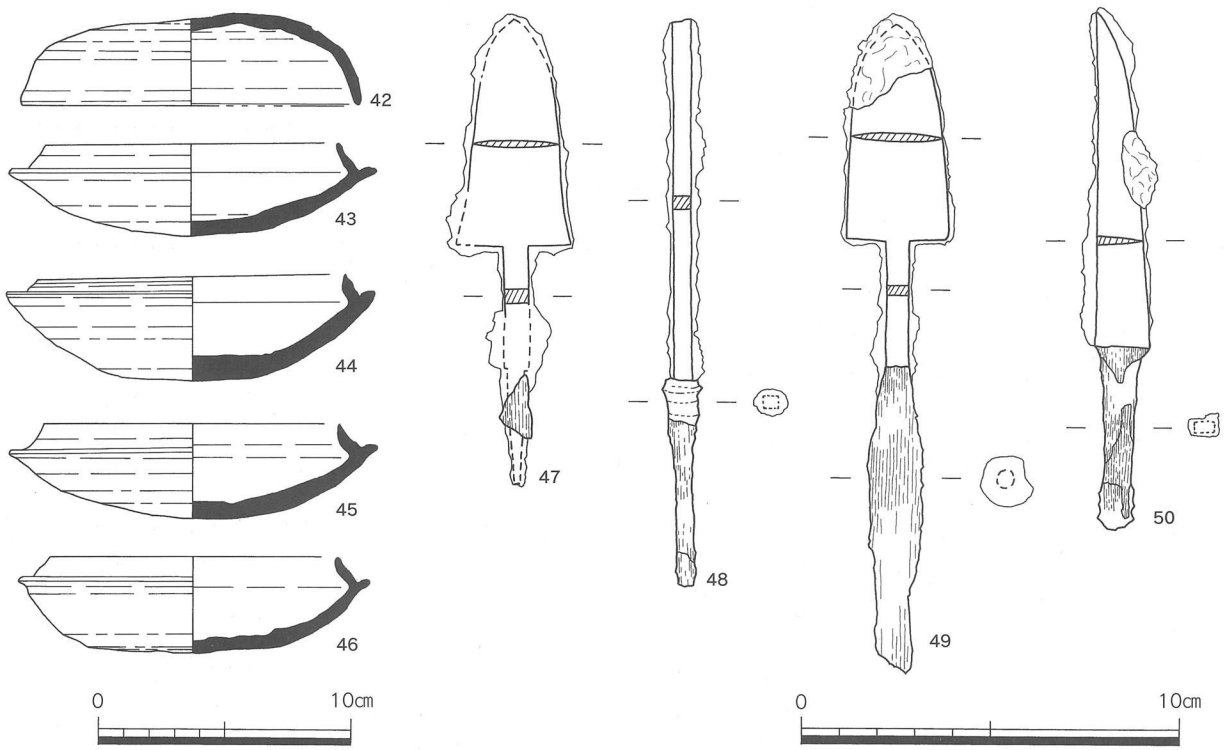
主軸から考えると、木棺の存在していた部分の南側の側板付近のやや東よりに刀子(50)、鉄鏃(47～49)が出土し、刀子の鋒は西側、鉄鏃の鋒は東側を向いていた。刀子は、茎部に柄と思われる木質が良好な状態で残存している。残存長は13.8㎝で、刃部長8.8㎝、刃部幅1.2～1.5㎝、刃部厚0.2㎝である。鉄鏃は三角形鏃(47、49)で茎部分には木質が残存し、48は鉄鏃の頸部から茎部分のみが残存しているが、長頸鏃と考えられる。少しではあるが茎部の上部に樹皮で巻いている痕跡が残存する。残存長は13.0㎝である。47、49の鉄鏃の茎部分には木質が良好な状態で残存しているが樹皮で巻いてある痕跡は残存していない。49の鉄鏃は茎部分の錆により木質はふくらでいる。鉄鏃は３本とも関部は角関で、頸部の断面は方形、茎部の断面は折れた部分での観察により円形と判明した。

重ねられて出土している須恵器が枕の役割をしていると考えられること、鉄鏃の鋒は東側を向いていることや木棺の幅が東側の方はやや広いことなどから、頭の位置は東側(檍５号墳側)と考えられる。

時期については出土した須恵器の坏身の口径が11.5～12.1㎝、坏蓋の口径が13.3㎝であることからTK209型式の古段階の６世紀末頃に相当すると考えられる。



第72図　ＳＤ２平面図・土層断面図　（Ｓ＝１／40）

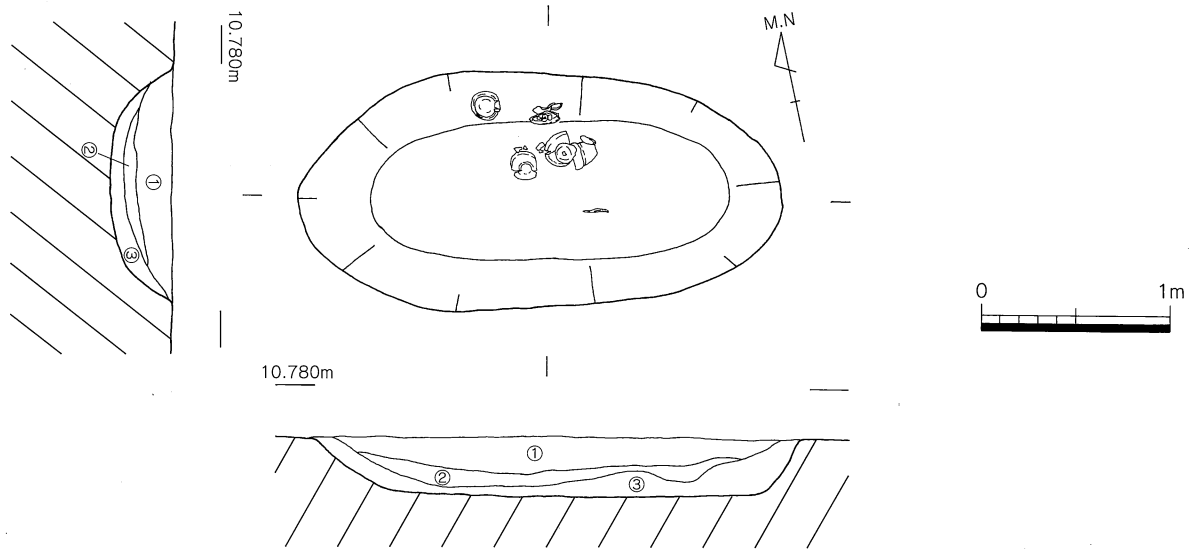


第73図　ＳＤ２出土遺物実測図　（42～46.Ｓ＝１／３　47～50.Ｓ＝１／２）

■ ＳＤ３ (第74～75図)

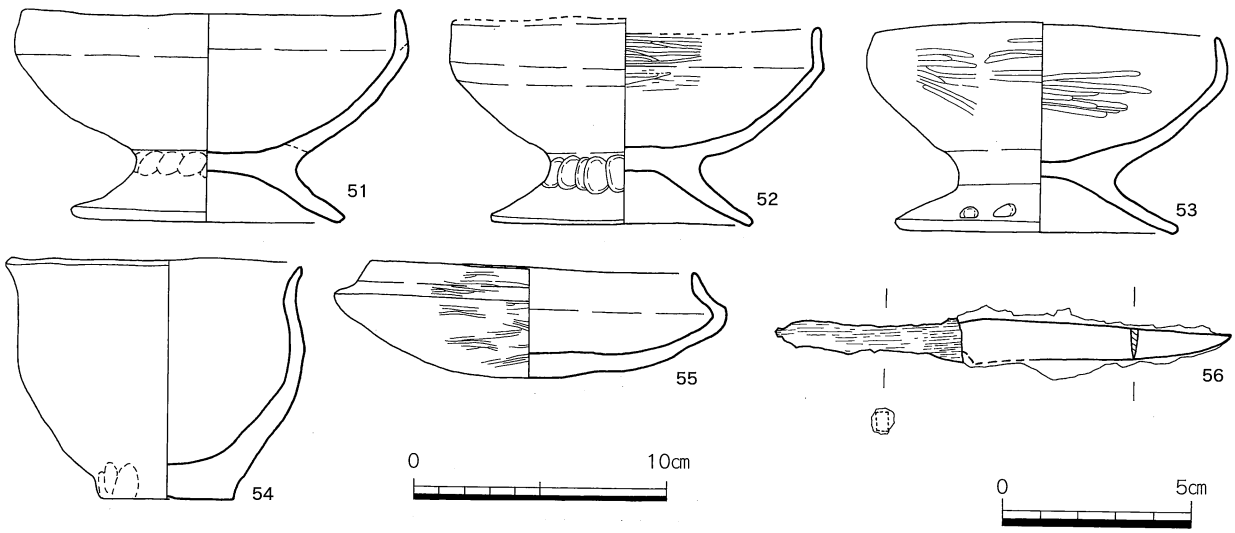
長軸2.54m、短軸1.26m、深さ0.4mの楕円形を呈し、主軸はＳ-81°-Ｅ方向の土壙墓で、主軸方向は檍５号墳の墳丘の中心を向いている。頭位は幅が東側のほうが広いこと、刀子の鋒が西側を向いていることから東側(檍５号墳側)が頭の位置と考えられる。土師器の高坏(51～53)･甕(54)･模倣坏(55)が出土し、床面で刀子(56)が１点出土した。土師器は床面ではなくやや浮いた状態で、中央の北側で出土していることから棺外に副葬されたものではないかと考えられる。甕はミニュチアである。高坏、甕、模倣坏すべてに赤色顔料が塗布されている。棺内の遺物に関しては刀子１点と考えられる。

時期については高坏が３点とも今塩屋編年によると高坏Ｅの７期終わりから８期初めの６世紀末から7世紀初頭と考えられる。



①黒褐色土(7.5YR3/1) 砂質でありしまりがなく非常に柔い
②黒褐色土(7.5YR2/2) 砂質でありしまりがあり硬い基本層序第Ⅲ層を少量含みやや明るい
③暗褐色土(7.5YR2/3) 砂質でありややしまりがありやや硬く基本層序第Ⅲ層を多量に含み明るい

第74図　ＳＤ３平面図・土層断面図　(Ｓ＝１／40)



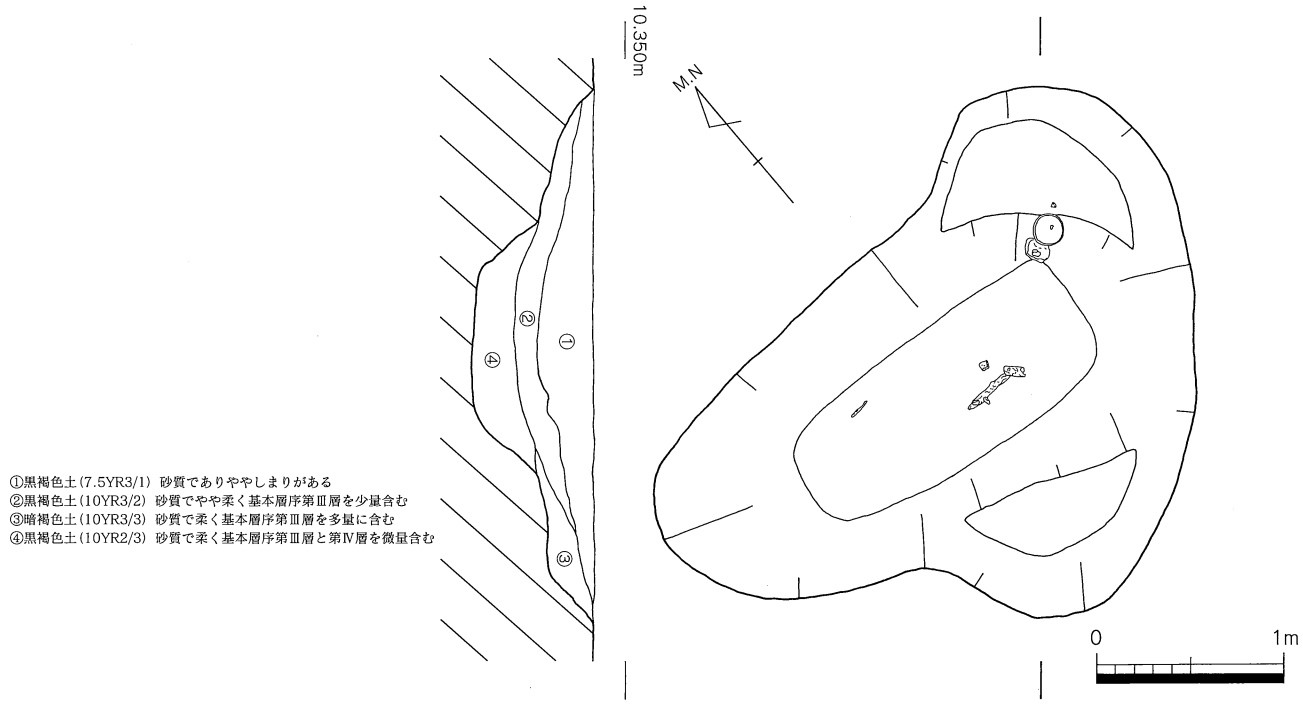
第75図　ＳＤ３出土遺物実測図　(51～54.Ｓ＝１／３　56.Ｓ＝１／２)

■ ＳＤ４ (第76～77図)

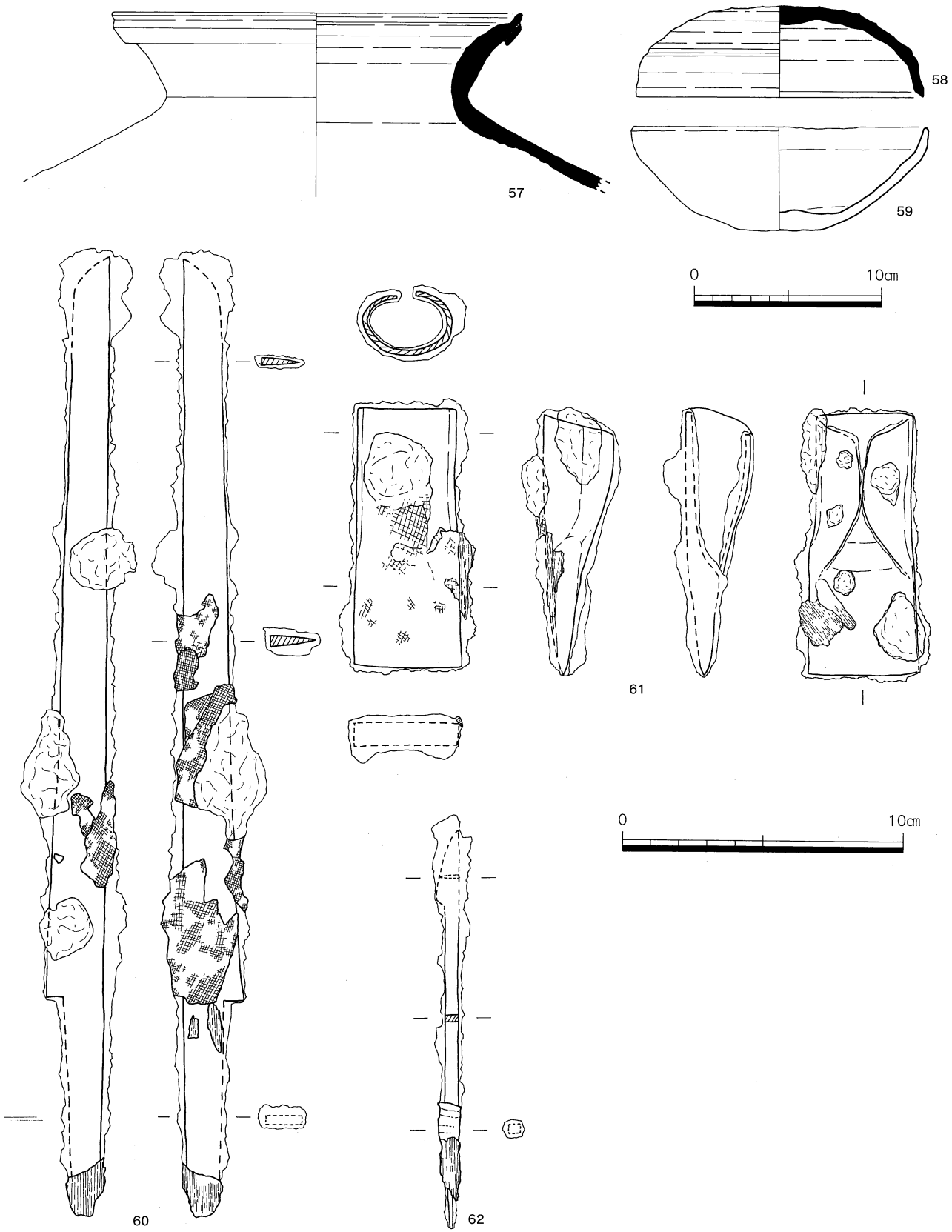
長軸3.12m、短軸1.44m、深さ0.7mの楕円形プランを呈し、主軸はＳ-85°-W方向の土壙墓で、主軸方向を檍５号墳の墳丘の中心に向けていると考えられる。頭の位置は幅が東側のほうがやや広いこと、鋒はそれぞれ西側を向いていることから東側(檍５号墳側)と考えられる。頭の位置付近の南に長さ約0.8m、幅約1.24m、北に約0.61ｍ、幅約1.24mの突出している部分があるが、この部分は作業場的なものではないかと考えられる。

SD４の検出面付近から土師器の坏･須恵器の甕(57)･坏蓋などが出土し、床面からは鉄刀･鉄斧･鉄鏃が出土している。土師器の坏(59)は底部が丸底で、口縁部はやや内湾し、器高が高い。須恵器の坏蓋(58)は口径が15.3cmと大きく、器高は4.9cmである。鉄刀(60)は全長34.6cm、刃部長26.9cm、幅2.0cm、厚さは背部0.5cm、茎部長7.7cm、幅1.5cm、厚さ0.3cmで直刀である。両面に布繊維が付着し２枚は重なっていると考えられることから布を２回は巻いていると考えられる。関部は直角で、胴部は茎尻に向けて幅がやや狭くなる。茎尻部分の形状は不明である。茎部分には木質が残存していることから柄の残存と考えられる。鉄斧(61)は袋状鉄斧で、全長9.3cm、基部幅3.5cm、刃部幅3.8cm、折り返し部の長さ1.8cm、基部の厚み0.2cm、最大厚1.0cmである。木質や布繊維が付着している。平面形態は基部から刃部へほぼ直線的にのびる長方形を呈し、片方にわずかに肩が存在する。基部から刃部に至る際に明瞭な段を持つ袋部は一部が接するのみで完全には閉じていない。断面は楕円形を呈する。袋部の折り返しの下方や側面は叩打によって面を持つ。付着している木質は鉄刀と密着した状態で出土していることから、鉄刀の鞘が鉄斧に付着している可能性がある。鉄鏃(62)は錆がひどく不鮮明ではあるが、長頸鏃で鏃身部は片刃で、全長14.4cm、鏃身部長2.8cm、頸部長7.2cm、茎長4.4cmである。茎部には木質が残存し、茎の上部には樹皮で巻いている痕跡が残存している。

時期については須恵器の甕や坏から、TK43型式の古段階に相当すると考えられること、土師器の坏は今塩屋編年の坏Ｂの７期の前半段階に相当すると考えられることから６世紀後半と考えられる。



第76図　ＳＤ４平面図・土層断面図　(Ｓ＝１／40)

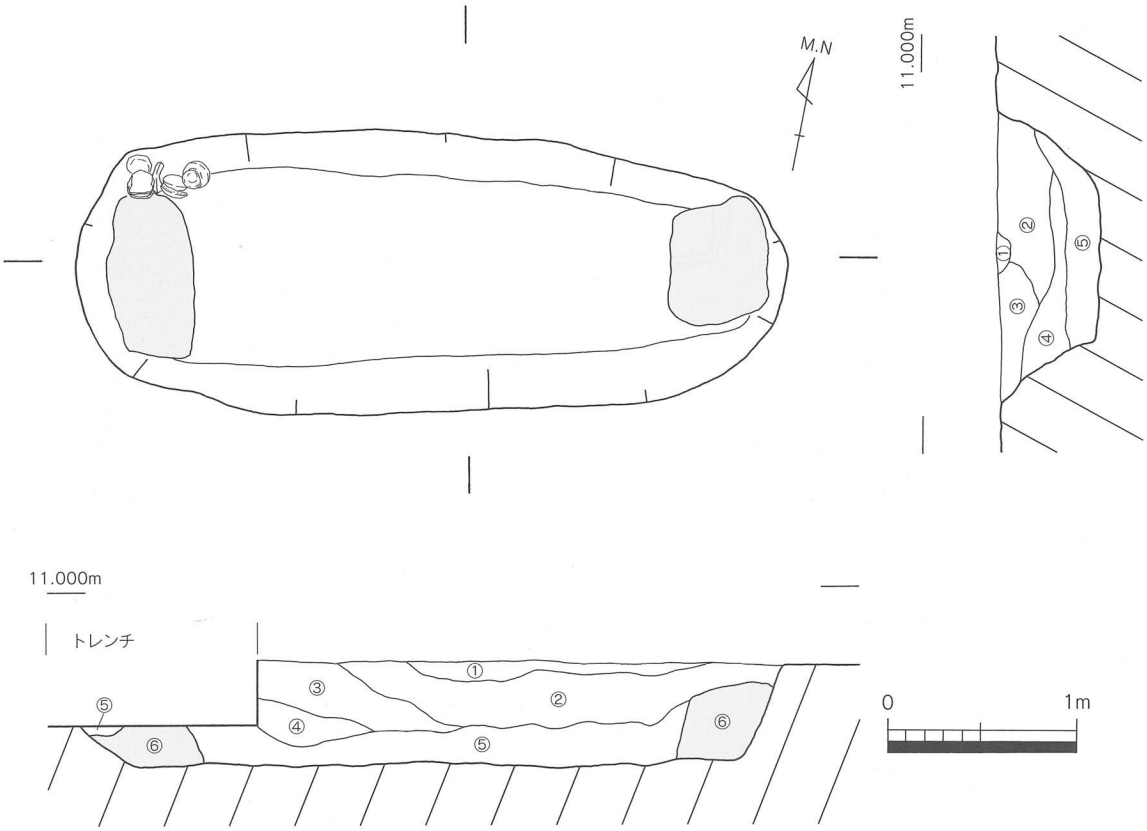


第77図　ＳＤ４出土遺物実測図　（57～59.Ｓ＝１／３　60～62.Ｓ＝１／２）

■ ＳＤ５ (第78～79図)

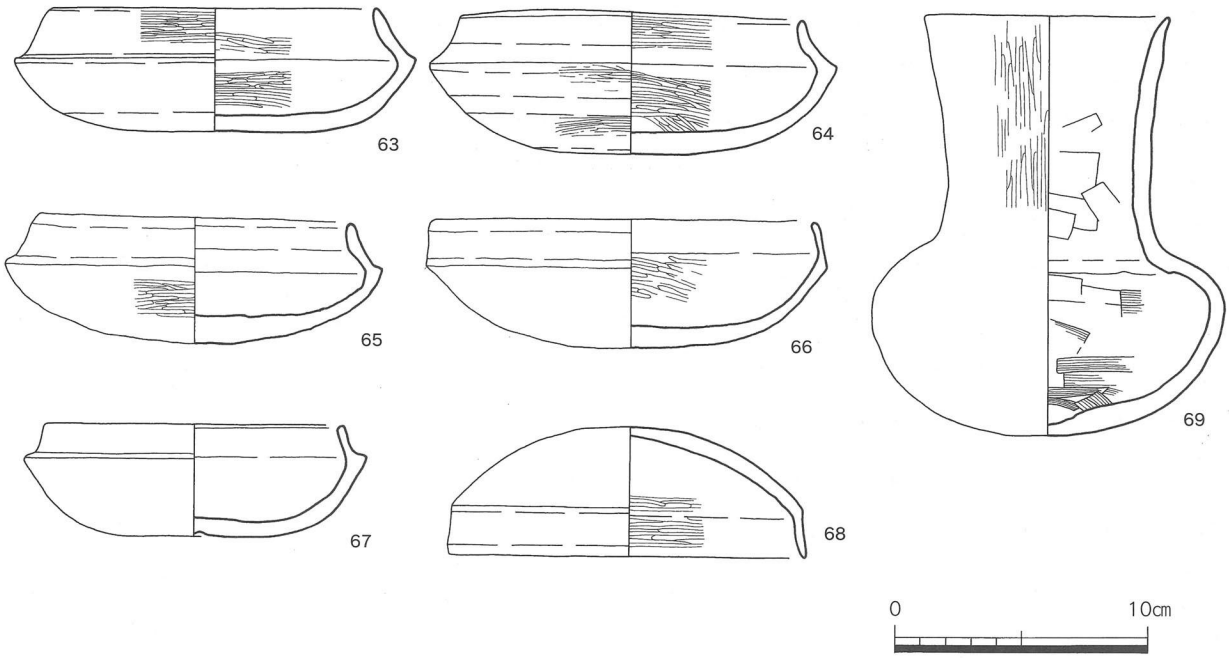
長軸3.74m、短軸1.46m、深さ0.5mの隅丸長方形ないし楕円形プランを呈し、主軸はＳ-73°-Ｅ方向の土壙墓である。出土遺物は土師器の模倣坏(６点)･小形壺(１点)である。長軸の両端に明黄褐色粘土が存在しており、棺の押さえに使用していた粘土と考えられることから木棺墓であると考えられる。棺の押さえに使用していた明黄褐色粘土は槵５･６号墳の周濠の墳丘側で確認できた粘土と同じと考えられる。木棺の規模は推定で長さ2.5m、最大幅0.8m、最小幅0.5mと考えられる。土壙墓の形態が西側の方の幅が広いために、頭の位置は西側と考えられる。出土した土器はその西側の頭の北側にあり、模倣坏や小形壺が立ってやや傾いた状態で、棺の押さえに使用していた明黄褐色粘土に立てかけるような状態で出土していることから、棺外に立てかけていた副葬品と考えられる。釘などは確認できなかった。模倣坏の身は口縁部の立ち上がりが内傾するもの(63～65，68)、立ち上がりが直立するもの(66)があり、小形壺(69)はやや口縁部が外反し、体部はソロバン球状で胴部高に比して口縁部高がやや長くなっている。模倣坏と小形壺すべてに赤色顔料が塗布されている。

時期については模倣坏が今塩屋編年の７期の前半段階に相当すると考えられることから６世紀後半と考えられる。



①黒褐色土(10YR3/2) 砂質でやや柔くしまりがない
②黒褐色土(10YR2/3) 砂質であるがしまりがややあり基本層序第Ⅲ層を多量に含む
③黒褐色土(10YR2/3) 砂質であり基本層序第Ⅲ層を少量含みややしまりがある
④黒褐色土(10YR2/2) 砂質でありしまりがあるが弱く柔い基本層序第Ⅲ層を微量に含む
⑤灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質で基本層序第Ⅲ層と第Ⅳ層が混ざりややしまりやや硬い
⑥明黄褐色土(10YR6/8) 粘質が強く非常にしまり硬い粘土である

第78図　ＳＤ５平面図・土層断面図　(Ｓ＝１／40)



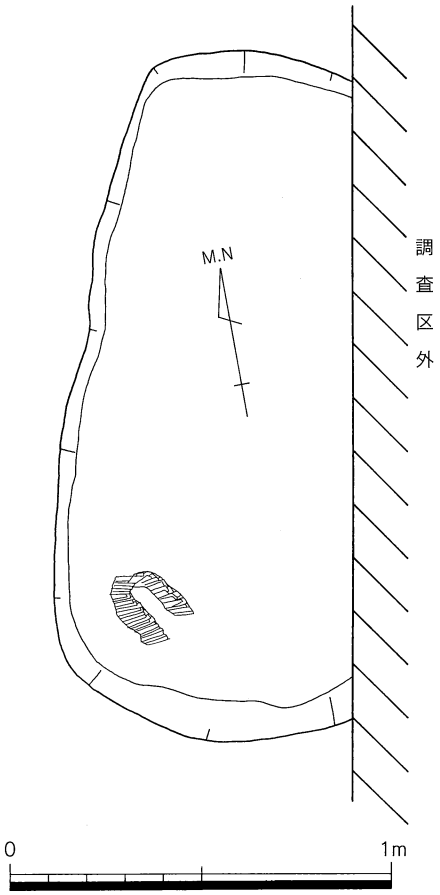
第79図　ＳＤ５出土遺物実測図　（Ｓ＝１／３）

図版１　山崎下ノ原第１遺跡遠景

4　馬埋葬土坑の調査(ＳＣ)

■ ＳＣ４ (第80図)

馬歯が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。馬具類は出土せず、馬歯のみであることから装着していた馬具をはずして埋葬したものと考えられる。大きさから考えると、馬が一頭分は入る大きさと考えられる。馬の頭の位置は馬歯の出土位置から南側である。



第80図　ＳＣ４平面図　(Ｓ＝１／20)

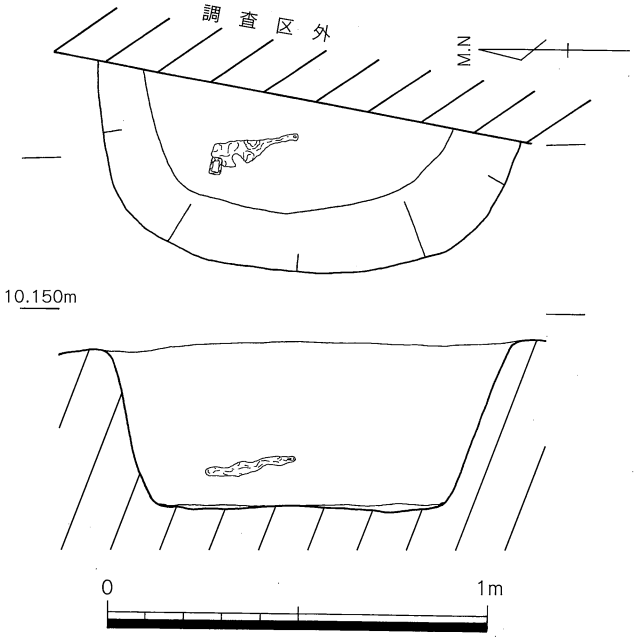
■ ＳＣ５ (第81～82図)

馬歯・轡(１点)・鋲(10点)・責金具(２点)・鉸具(２点)が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。轡(85)は立聞が別造りの素環状鏡板付轡で、片方の立聞は消失している。引手と鏡板、鏡板と銜は連結し、引手と銜は連結していない。馬歯のすぐ近くで轡・鋲(71～80)・責金具(81～82)・鉸具(83～84)が出土していることから装着したまま埋葬されたと考えられる。81・82の責金具は消失している立聞についていた１つの責金具の可能性もある。鏡板は直径5.2cmの円形で綱と考えられる有機質物質が付着している。引手は長さ14cmで棒状の引手を直径が約２cmの引手壺を曲げて造り、反対側は180°逆方向に環を造っている。引手壺にも綱と考えられる有機質物質が残存している。銜は１つが同方向に環を造り、もう１つは90°捻り環を造っている２連の銜である。鋲は0.8×1.1cmの長方形の薄い板状のものに直径約0.4cmの鋲を１つ打っている。長さは1cmである。立聞は別造りで薄い板状のものを鏡板に回して責金具で固定し、面繋を挟みこみ固定するために鋲を1つ打ってある。須恵器(70)の坏身は検出面付近から出土し、口径は12cmとやや大きいことからTK209型式の古段階と考えられる。このことからSC５の時期は６世紀末から７世紀初頭頃と考えられる。

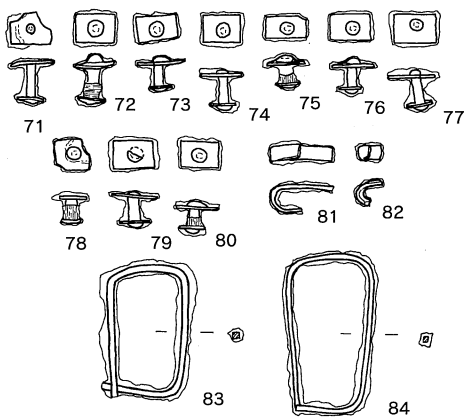
第19表　馬埋葬土抗計測表　(単位　m)

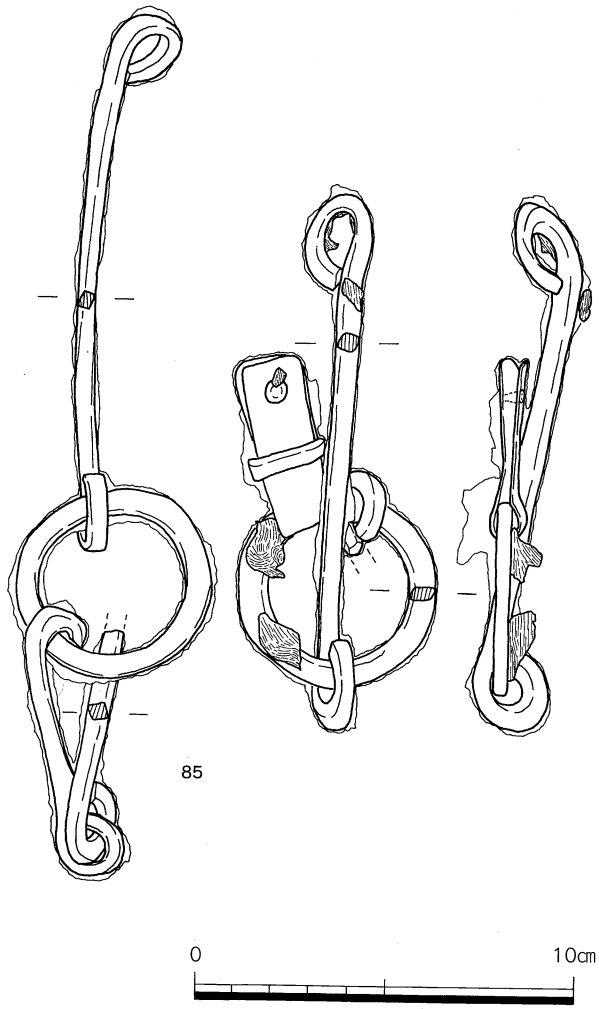
遺構番号	長軸	短軸	深さ	遺構形態	出土遺物	備考
SC4	(1.8)	(0.76)	0.65	隅丸長方形	馬歯(1)	F区
SC5	(1.12)	(0.46)	0.33	楕円形	馬歯(1)・轡(1)・鉸具(2)・鋲(10)・責金具(2)	F区
SC8	1.86	1.54	0.89	楕円形	馬歯(1)・轡(1)・鐙(2)	F区
SC15	1.92	1.4	0.67	楕円形	轡(1)	G区
SC16	2.18	1.12	0.4	隅丸長方形	馬歯(1)・轡(1)・杏葉(7)・雲珠(1)・辻金具(14)・鋲(7)・鉸具(1)	G区 鉄地金銅張製
SC19	2.14	1.12	0.86	隅丸長方形	馬歯(1)・轡(1)	H区

＊カッコ表記については調査区外に延びるため、調査区内で検出した値である。
＊計測値は検出面からの値である。



第81図　ＳＣ５平面図・断面図　（Ｓ＝１／20）

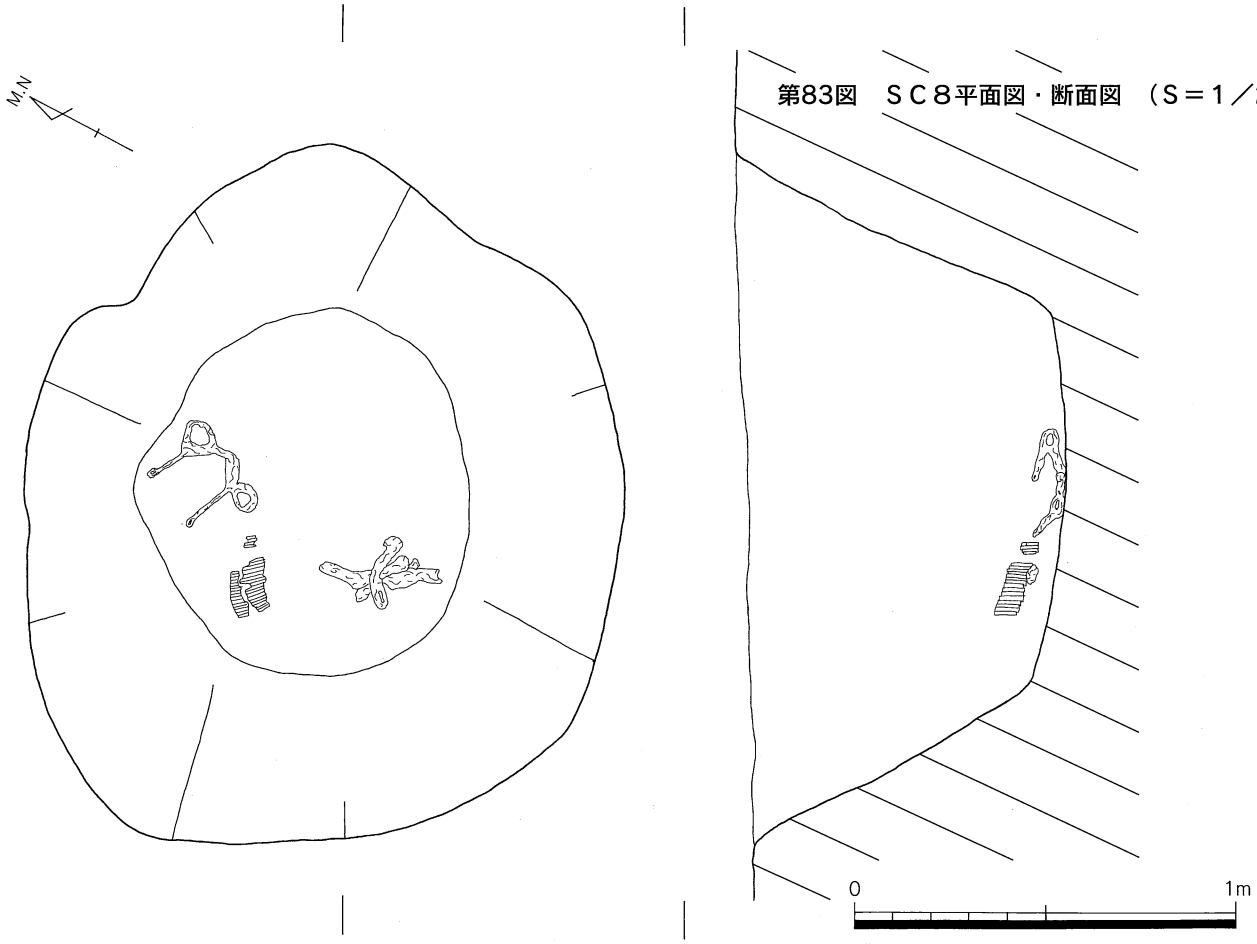




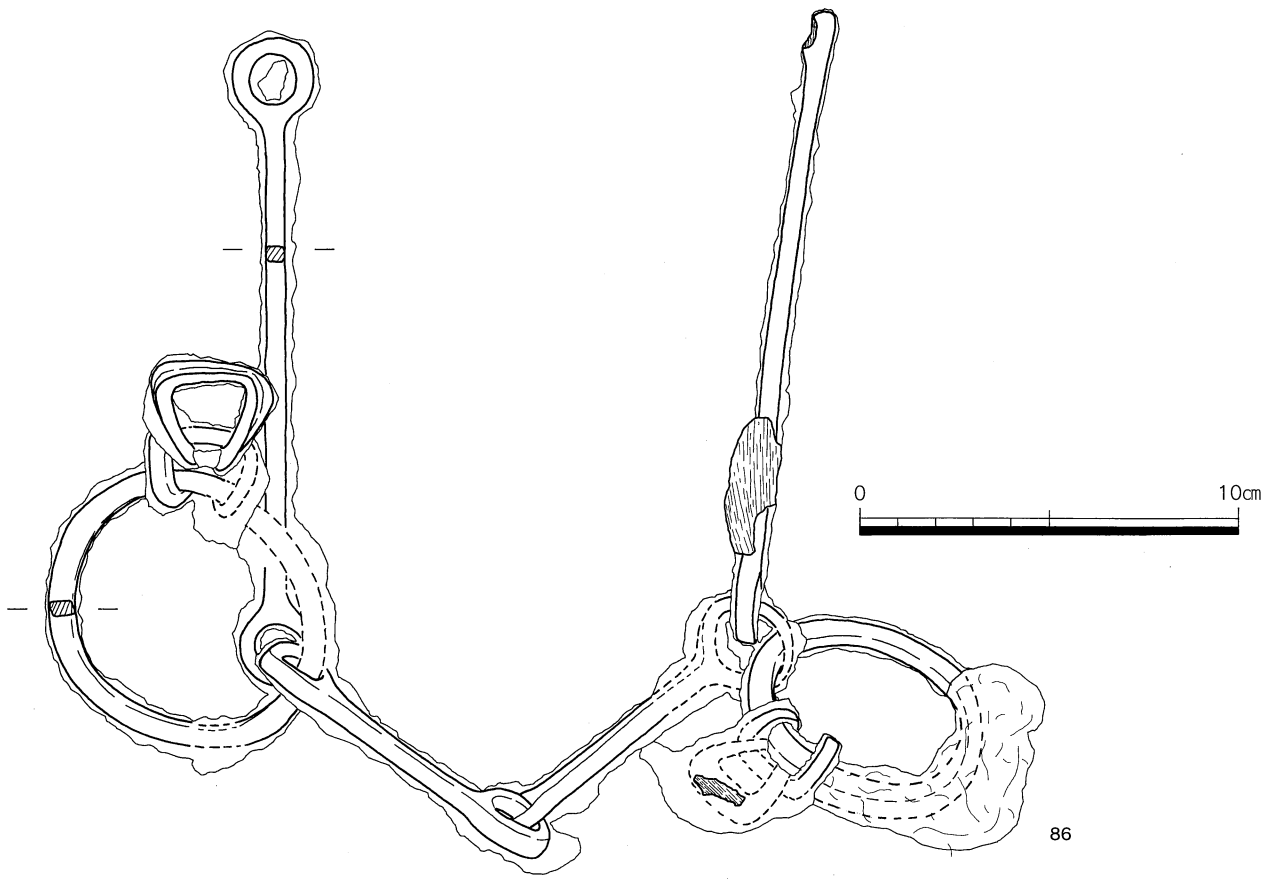
第82図　ＳＣ５出土遺物実測図　（70.Ｓ＝１／３　71～85.Ｓ＝１／２）

■ ＳＣ８ (第83～85図)

馬歯･轡(１点)･鐙(２点)が出土しているために馬埋葬土坑と考えられる。轡･馬歯と鐙がかなり隣接して出土していることや、土坑の規模などから頭部を切断して入れられたのではないかと推測する。轡(83)は立聞が別造りの素環状鏡板付轡である。やや錆がひどく不鮮明な部分もあるが鏡板は直径7.4cmの円形で、立聞は別造りの連結式で２連の兵庫鎖系立聞である。引手は長さ17.2cmで壺の付け根を屈曲させていなく柄に強い捻りを施さない。引手の一部には有機質物質が付着している。２連の銜の１つは同方向に環を造り、もう１つは90°捻って環を造っている。引手と銜はともに棒状の先端を割り開いて環を成形している。引手と銜が連結し、銜と鏡板が連結している。鐙(87)は３連の兵庫鎖で鉸具がある方から一連目とすると１･２連目はほぼ同様の大きさであるが、やや２連目が小さく３連目はさらに小さくなる。鐙吊金具は長さ9.3cmで、断面が長方形の棒状を真ん中でＵ字に曲げ兵庫鎖の輪と連結させ、



第83図　ＳＣ８平面図・断面図　（Ｓ＝１／20）

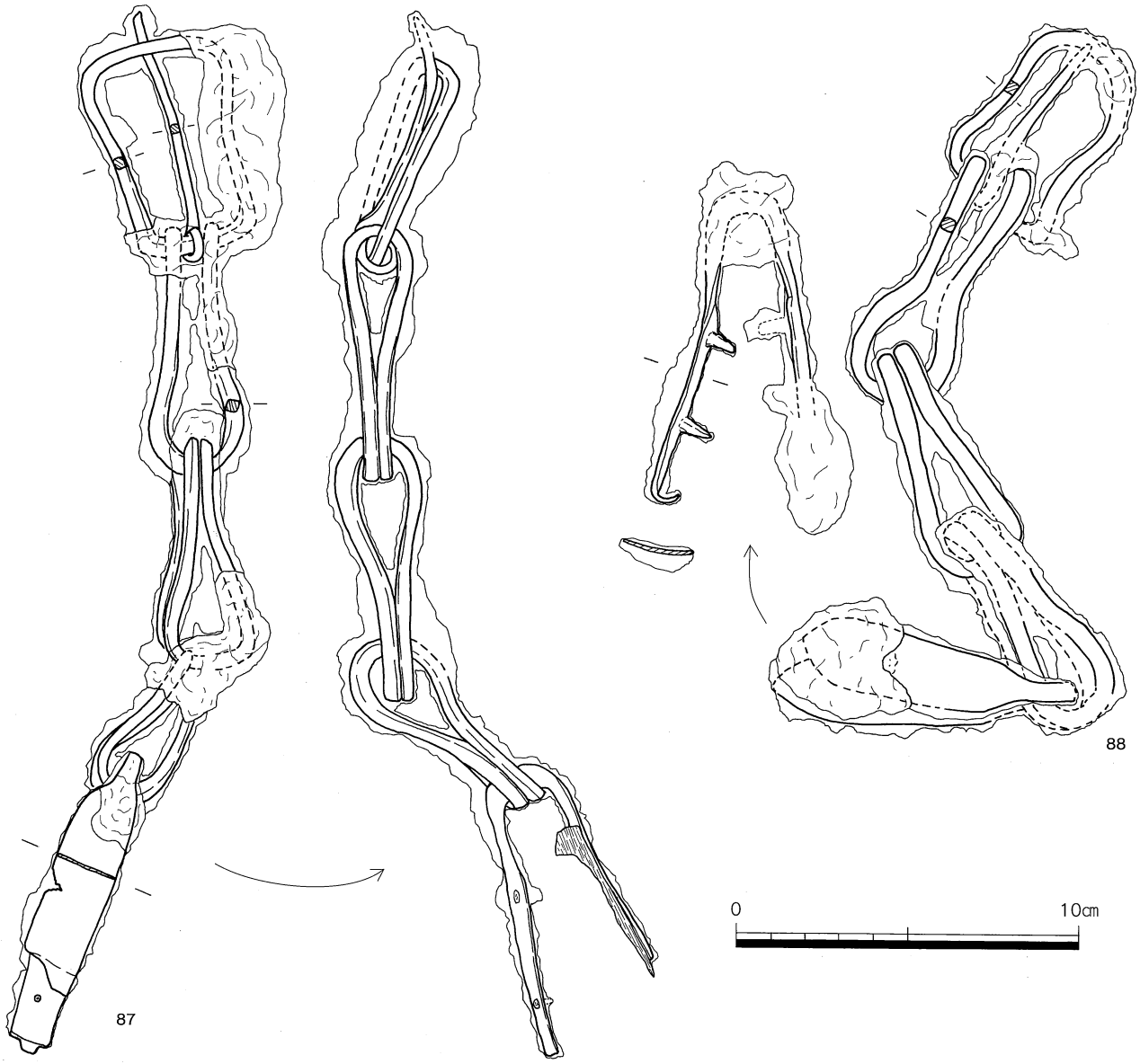


第84図　ＳＣ８出土遺物実測図Ⅰ　（Ｓ＝１／２）

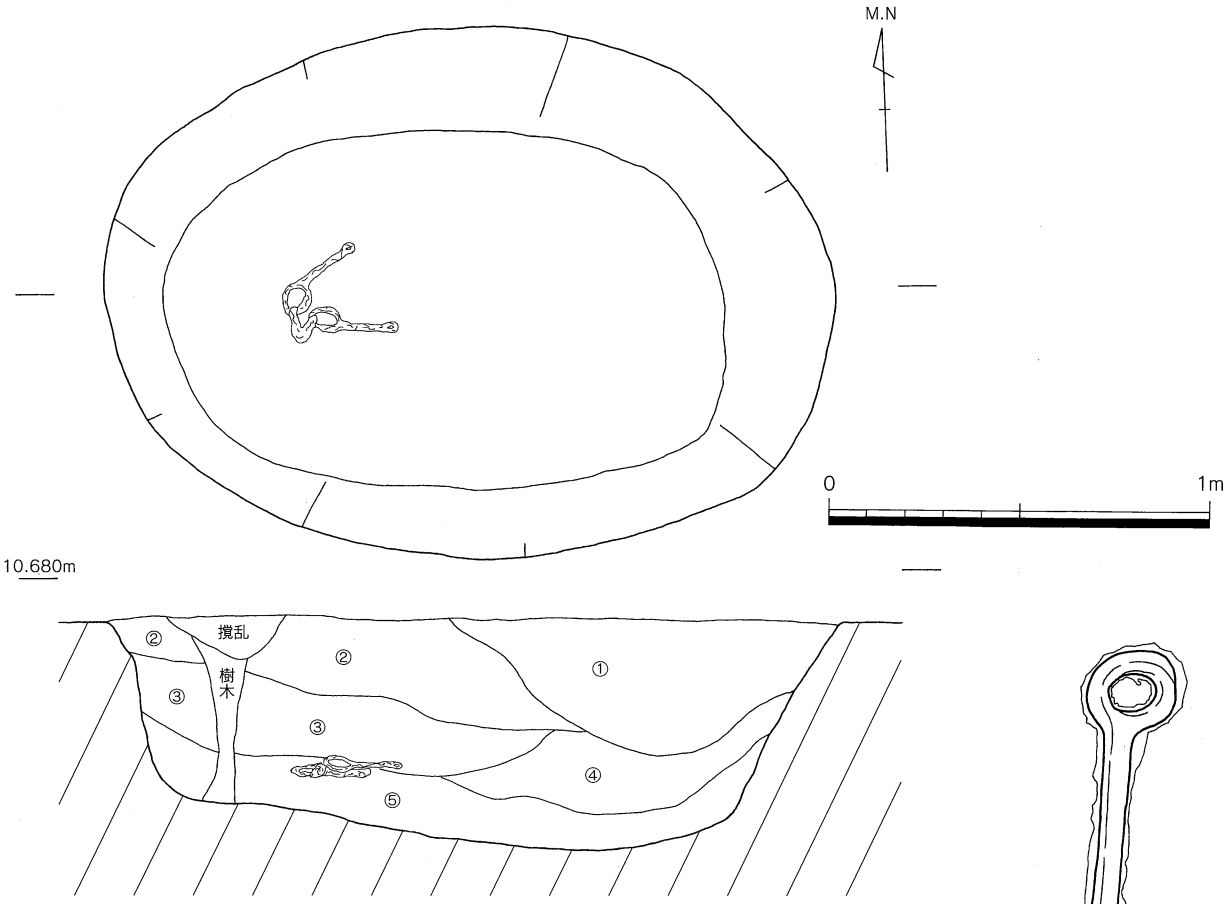
下部はその棒状の厚みを叩いて薄く延ばしている。鐙を留めるためのトゲ状の金具が２つ存在する。鐙吊金具には木質が残存していることから、木製と推測できる鐙を挟み込んでいたと考えられる。叩き延ばして薄くしているために先の厚みは1㎜とかなり薄く、幅が狭くなる。鉸具は中央よりややずれた位置で幅が狭くなり、刺金は鎖で挟み込んで巻きつけ、巻き込んだ先端を叩いて固定している。反対の端部は叩いて薄くしている。鐙(88)は87とほぼ同様であるが鐙吊金具の先端が三角形を呈している。

■ ＳＣ１５ (第86～87図)

床面からやや浮いた状態で立聞を造りつけている環状鏡板付轡(89)が出土しているために馬埋葬土坑と考えられる。主軸方向はＳ-80°-Ｅで楕円形を呈し、鐙の出土位置から頭位は東側と考える。環状鏡板付轡以外は出土していない。鏡板は直径が約８㎝の楕円形を呈し、引手は引手壺をくの字に曲げ、鏡板と連結している環は曲げてなく、立聞は矩形で鏡板に造りつけている。２連の銜の１つは同方向に環を造り、もう１つは90°捻って環を造っている。引手と鏡板が連結し、鏡板と銜が連結しており引手と銜は連結していない。引手と銜はともに棒状の先端を割り開いて環を成形している。

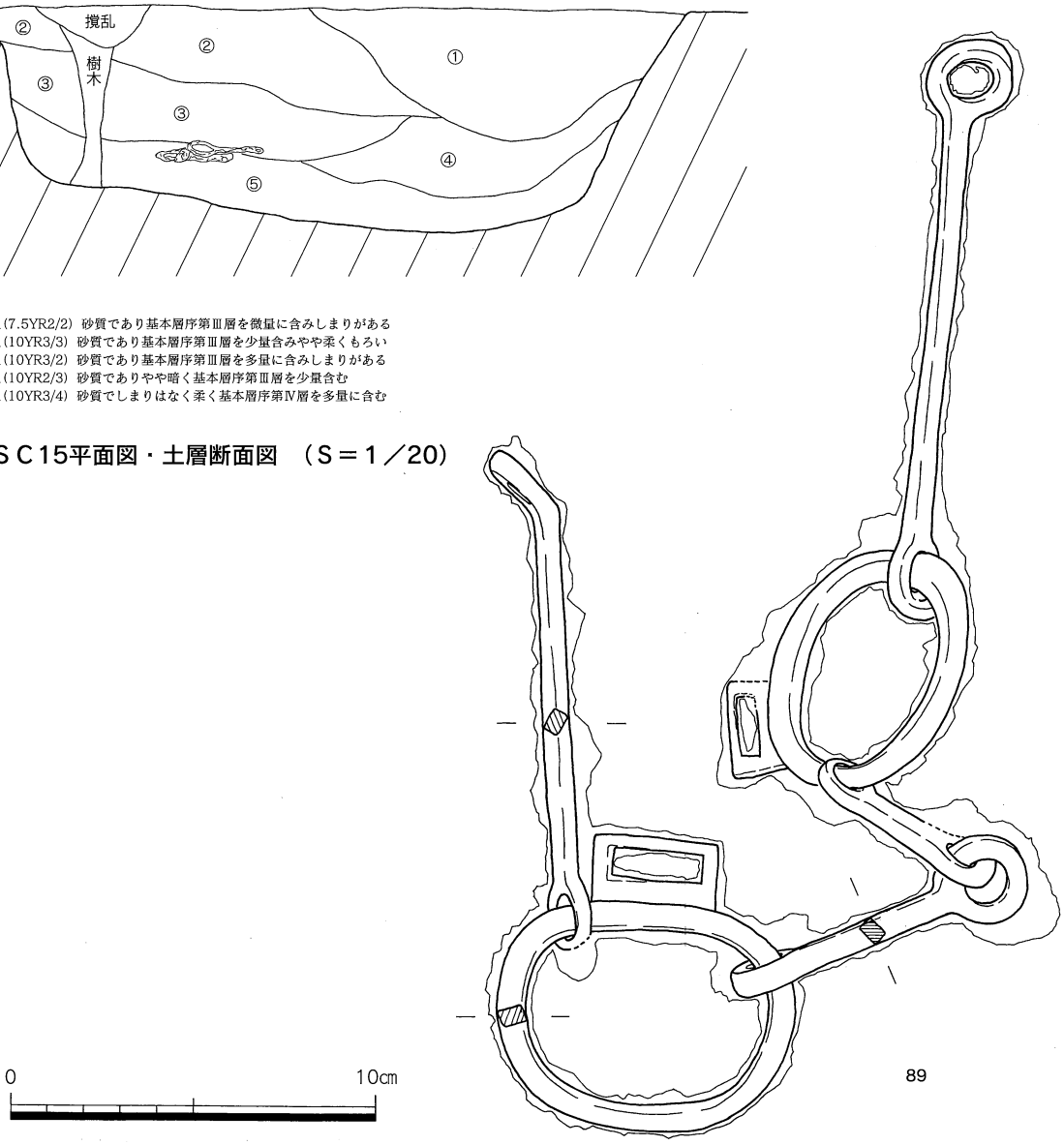


第85図　ＳＣ８出土遺物実測図Ⅱ　(Ｓ＝１／２)



①黒褐色土(7.5YR2/2) 砂質であり基本層序第Ⅲ層を微量に含みしまりがある
②暗褐色土(10YR3/3) 砂質であり基本層序第Ⅲ層を少量含みやや柔くもろい
③黒褐色土(10YR3/2) 砂質であり基本層序第Ⅲ層を多量に含みしまりがある
④黒褐色土(10YR2/3) 砂質でありやや暗く基本層序第Ⅲ層を少量含む
⑤暗褐色土(10YR3/4) 砂質でしまりはなく柔く基本層序第Ⅳ層を多量に含む

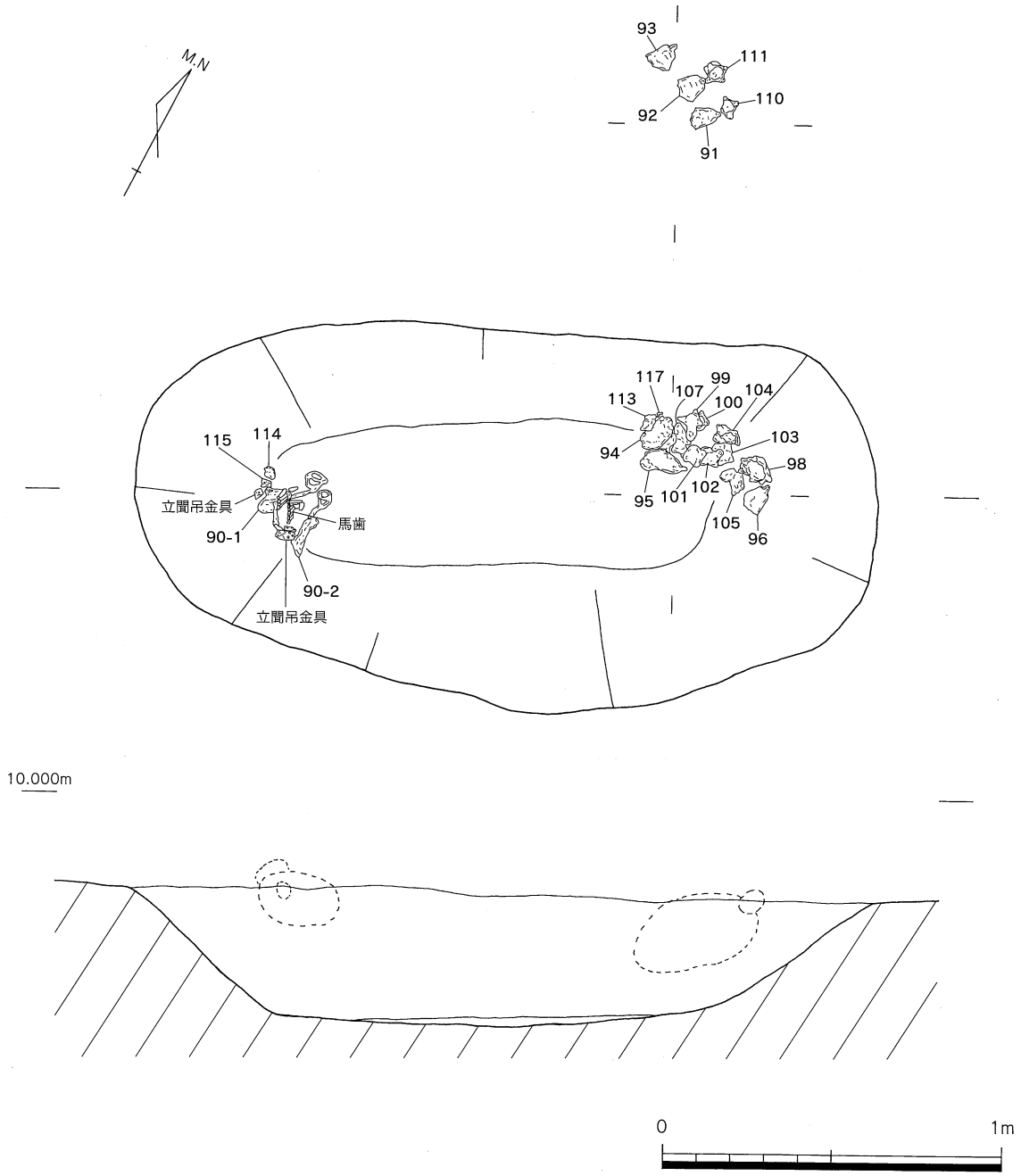
第86図　ＳＣ15平面図・土層断面図　（Ｓ＝１／20）



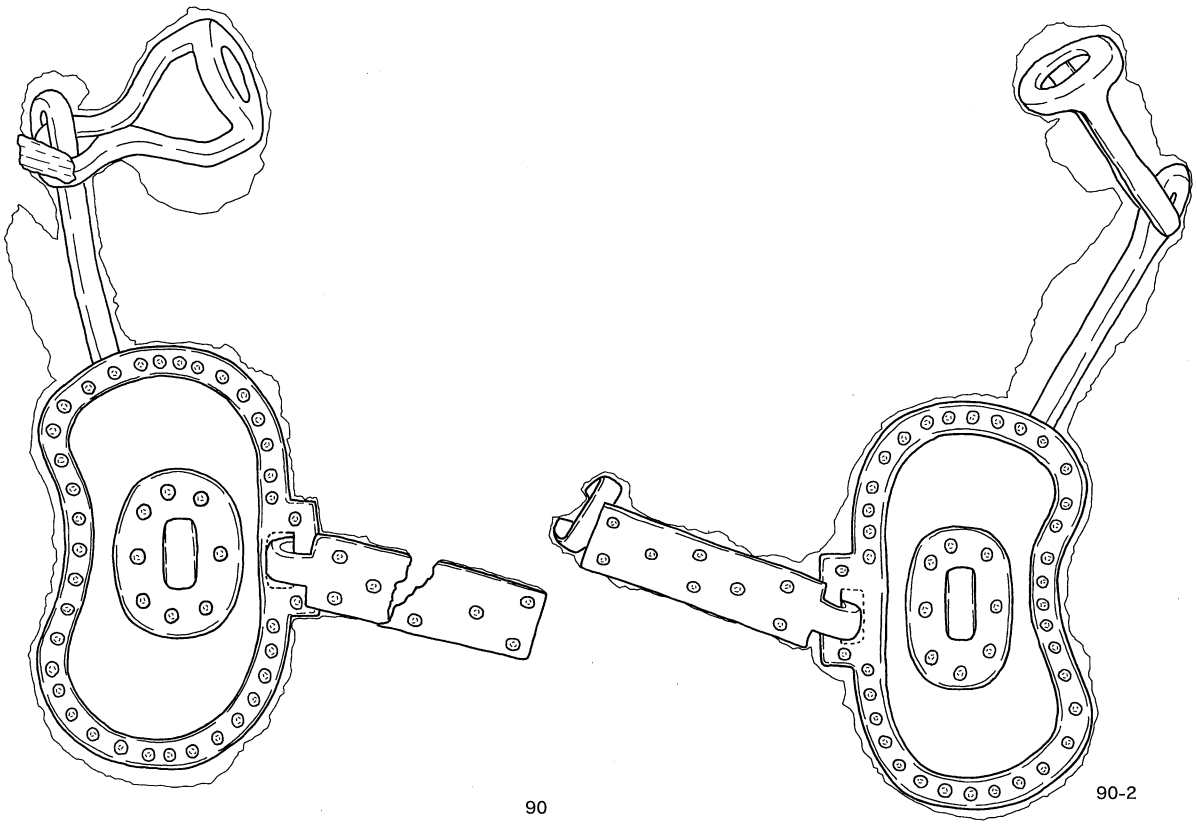
第87図　ＳＣ15出土遺物実測図　（Ｓ＝１／２）

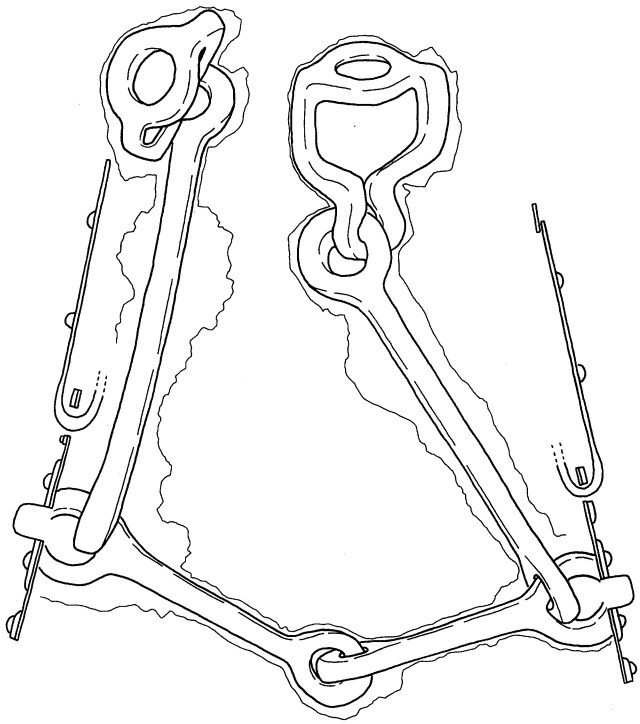
■ ＳＣ１６ (第88～93図)

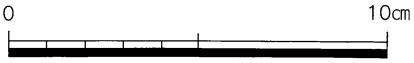
轡(１点)・杏葉(７点)・雲珠(１点)・辻金具(14点)・鋲具(１点)・鋲(７点)・馬歯の一部が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。檍５号墳の周濠に接する位置で、周濠の円に沿うように造られ営まれた馬埋葬土坑で、金銅装馬具装着の殉葬馬である。現地表面より約1.4m掘り下げた位置で検出できた。檍５号墳の周濠を検出した面と同じである。検出面より上層は撹乱を受けており不明であるが、掘り方はかなり大きくなると推測できることから、馬一頭が入る大きさであると考えられる。詳細は後述するが馬具の出土状態や分析結果などから、装着したまま埋葬し、元位置をとどめていると考えられる。鞍や鐙などは出土していないことから鞍と鐙ははずされ、受け継がれたのではないかと推測する。主軸方向はＳ-60°-Ｅで、馬具や馬歯の出土位置から考えると馬の頭の位置は西側で、足は南側、背は北側、



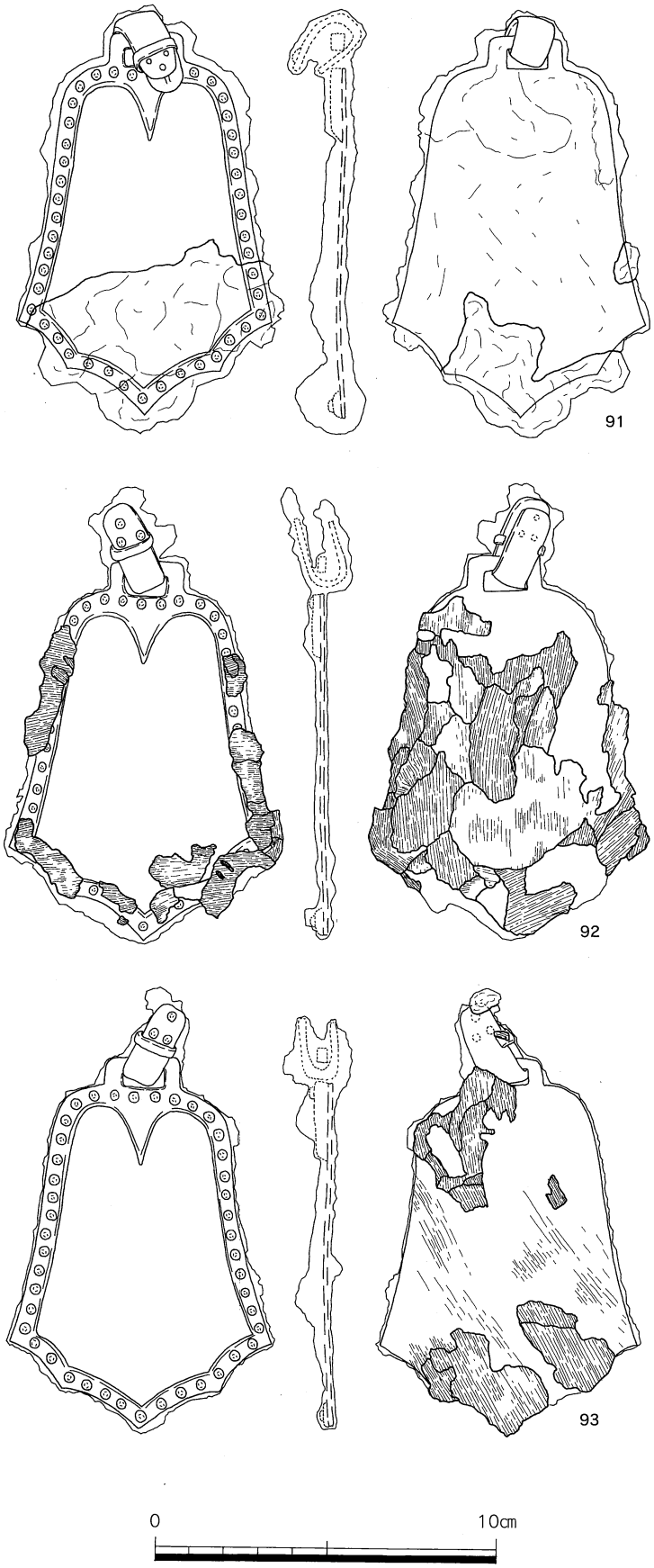
第88図　ＳＣ16平面図・断面図　(Ｓ＝１／20)







第89図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅰ　（Ｓ＝１／２）



第90図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅱ　（Ｓ＝１／２）

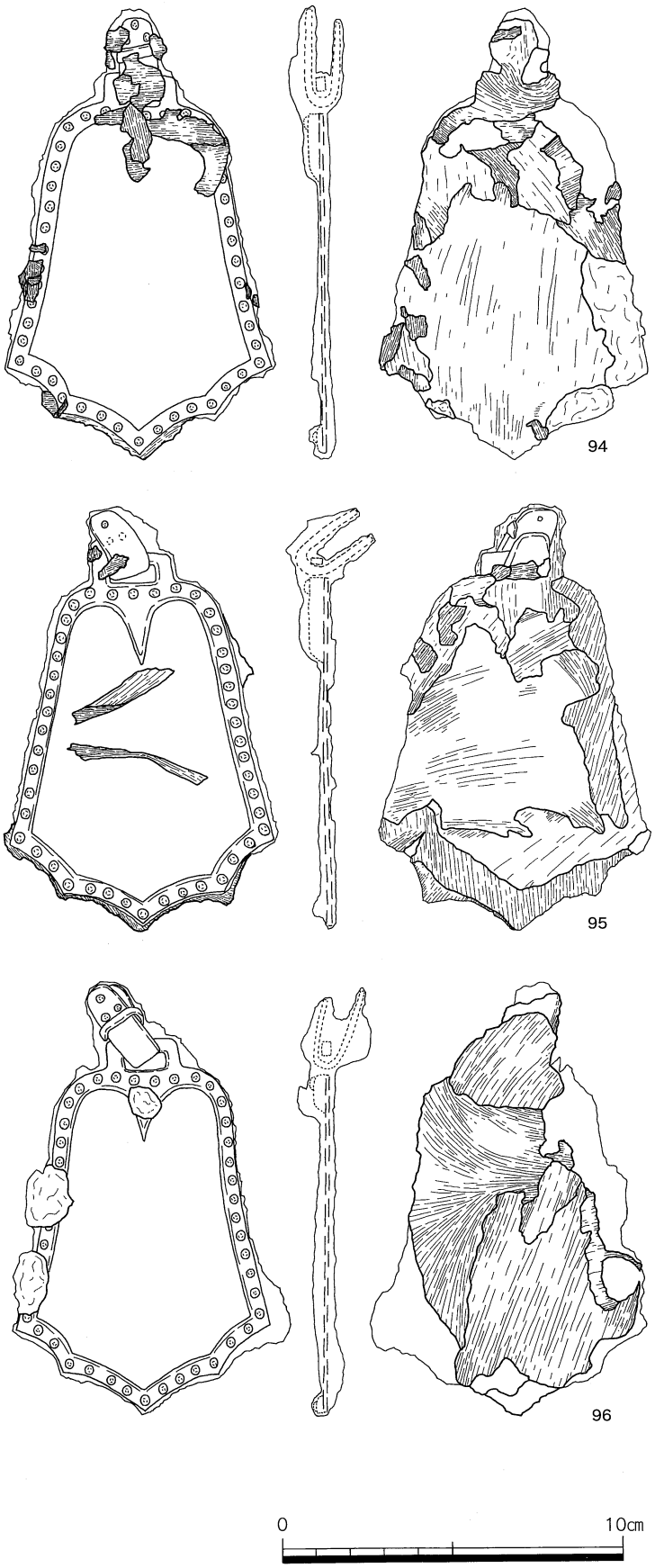
尻は東側と考えられる。出土した馬具は鍍金･鍍銀部分なども良好な状態で出土し、鉄地金銅張製である。

轡(90)は内湾楕円形鏡板付轡で、左右の鏡板に打たれている鋲の数が違い、形態もやや相違する。内湾楕円形鏡板は縁金を伴う空豆形で90-１は鋲が35個で鏡板自体もやや大きく、90-２は鋲が34個で鏡板はやや小さい。鋲の数などはＸ線による観察でも何回も確認したが、同じ結果であった。鋲は鉄製で銀被せである。全体的には形態は同じで、90-１の鏡板は最大長11.1㎝、最大幅が6.5㎝、90-２の鏡板は最大長10.8㎝、最大幅6.2㎝であり、それほど変わりはないが、下部の凹みの屈曲の仕方が90-１はややきつく、90-2はやや緩やかという差が、鏡板の縦幅が相違し、覆い部になるかは錆がひどく不明であるが、この部分の形態の相違にもつながったのであろう。覆い部は90-1が4.5×3.4㎝の楕円形で、90-２は4.3×2.8㎝の楕円形である。長さは変わらないが幅が0.6㎝も違い全体的に90-1のほうが大きく見えると考えられる。90-１･２ともに矩形の立聞を造り、立聞には断面が長方形の棒状を通して曲げ、薄く叩き延ばし６×２㎝の薄い板状の立聞吊金具が伴っている。立聞吊金具には２個、１個と規則正しく、合計８個の鋲を交差に打っている。引手と銜は連結しており、鏡板の内側で銜外環に直接連結している。引手壺は別造りの瓢形引手壺を伴っている。引手と銜はともに棒状

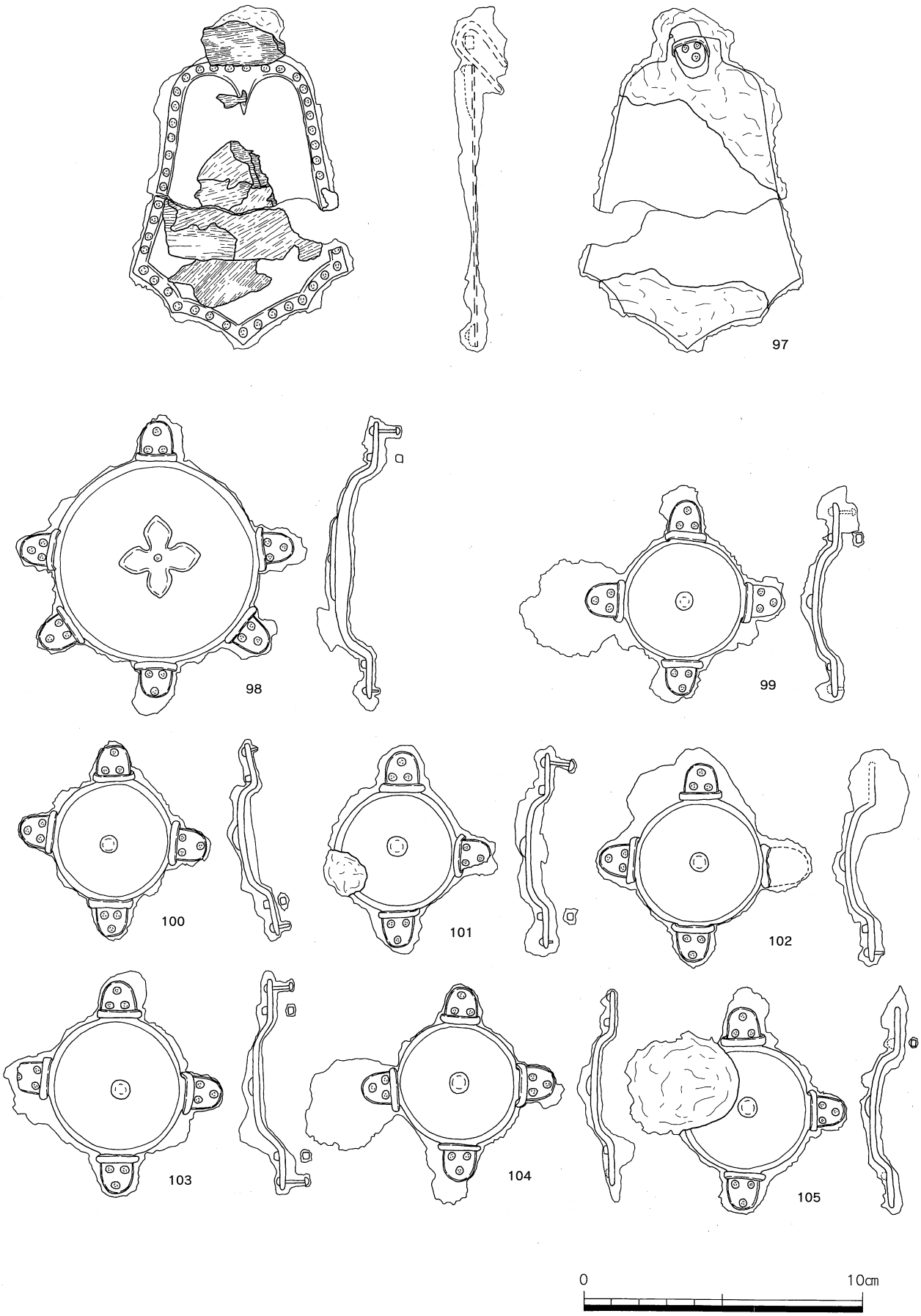
の先端を割り開いて環を成形している。90-2には立聞吊金具の上部端に責金具が残存し、付着していることから、立聞吊金具の上部で責金具によって固定していたと考える。轡には有機質物質と馬歯の一部が付着している。

杏葉(91～97)は棘葉形杏葉で7点が出土し、5棘形で鉄製の縁金を伴っている。縁金内部には文様はない。鋲はほぼ等間隔に44個を打っている。鉄製で銀被せである。ほぼすべてが最大長11.2cm、最大幅7.7cmである。吊金具の垂下方式は、長さ5cm、幅1cm、厚さ0.2cmの細い舌状で、立聞に通して長さがほぼ真ん中のところでU字に曲げて連結させ、3鋲を3角に打ち、責金具を伴う。杏葉(94～96)と辻金具(110～111)は表面を下にして並んだ状態で出土している。杏葉(92～97)の裏面には有機質物質が付着していることから独立行政法人奈良文化財研究所の高妻洋成氏に分析を依頼し、動物性もしくは植物性の有機質物質が付着しており、獣毛が付着していた可能性が高いが、錆の進行に伴いそれらが解けて中が空洞化した管状の錆のみが残存していること、95の表面には木材(針葉樹木)が付着しているということが判明した。

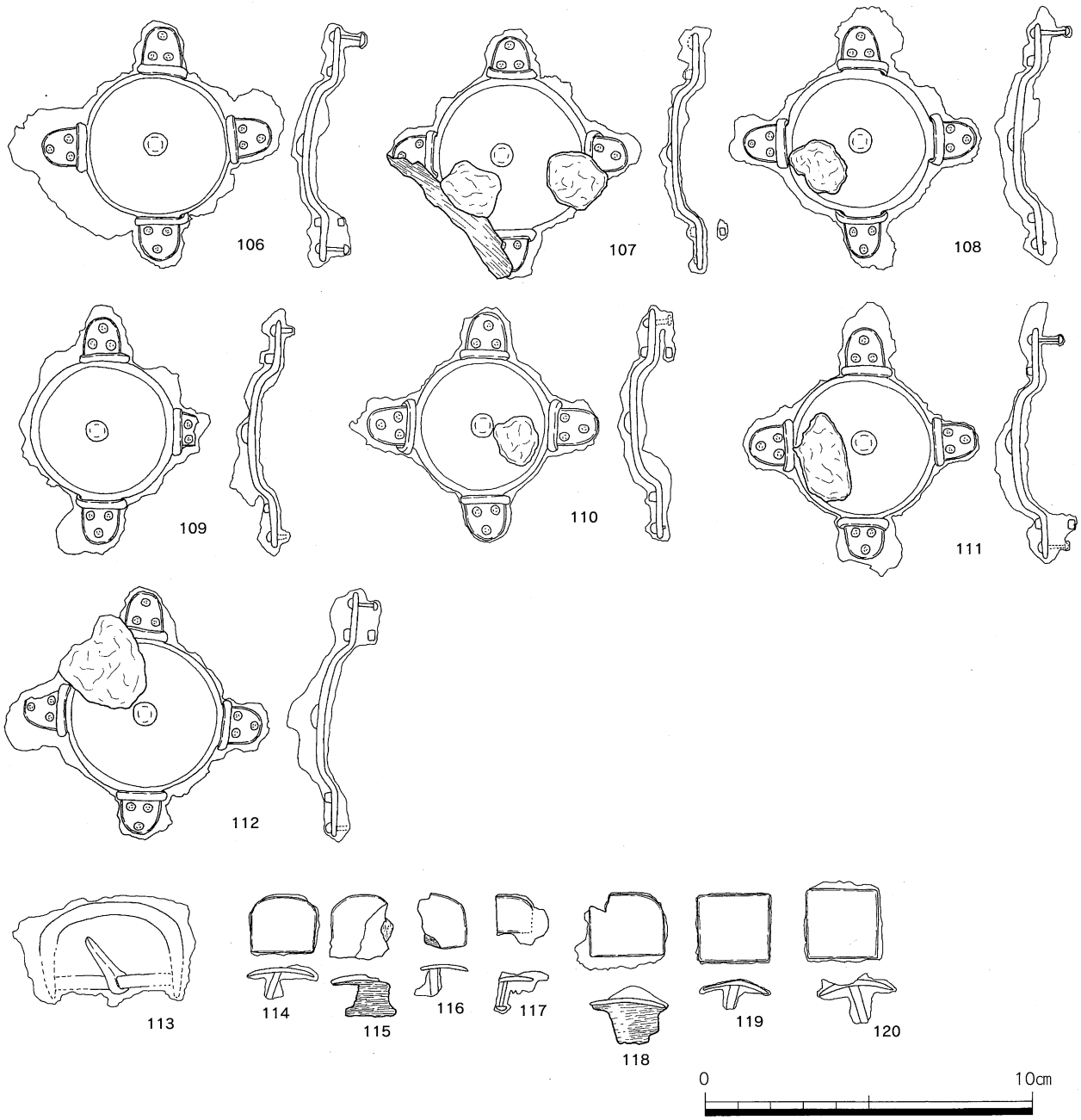
雲珠(98)は全長10cmの鉄製で、低い鉢形を呈し、前方に1脚、後方に5脚を配する偏在配置六脚鉢状雲珠である。細い半円形の脚部に3鋲を3角に打ち、責金具を伴う。本体の鍛造は脚部分を切り出してから鍛造して折り曲げたのでは無く、半球形の開口部円周状を全ての脚部分を一体として麦藁帽子状に折り返し、その後1脚ずつ切り出した



第91図　SC16出土遺物実測図Ⅲ　(S＝1／2)



第92図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅳ　（Ｓ＝１／２）



第93図　ＳＣ16出土遺物実測図Ⅴ　（Ｓ＝１／２）

のではないかと推測する。この方法だと脚の角度も、接続する革帯や杏葉などの位置に合わせて設定することが可能と考えられる。頂部には四葉の飾りがついている。脚部の鋲、責金具、頂部の四葉は鉄製で銀被せである。

辻金具(99～112)は14点が出土し、すべてが尻繋に用いられたものである。低い鉢形を呈し、４脚を均等間隔に配置している鉢状辻金具で、細い半円形の脚部に３鋲を打ち、責金具を伴う。頂部には半円球状の飾りを施す。脚部の鋲･責金具･頂部の半円球状の飾りは鉄製で銀被せである。

鋏具(113)は錆がひどく不明な部分が多いが、刺金は棒状の先端を割り開いて環を成形して連結させ、反対の先端は叩いて薄くしている。鉄地金銅装である。鋏具は尻側から出土している。

鋲は爪形(114～118)、方形(119～120)が出土し、鉄地金銅装で115と118には有機質物質が付着している。すべての鋲は中心がややへこみ緩やかなくの字状の断面になる。鋲は114～117、119～120は頭の轡が出土している周辺から出土し、117、118は尻側から出土している。

馬歯の一部や動物性もしくは植物性の有機質物質が轡や杏葉に付着し、その分析結果や馬具の出土状態などから面繋･尻繋を装着したまま埋葬されたと考える。

時期については、棘葉の形態や鋲の多さなどから考えると６世紀前半頃のものと考えられるが検討の余地は残る。

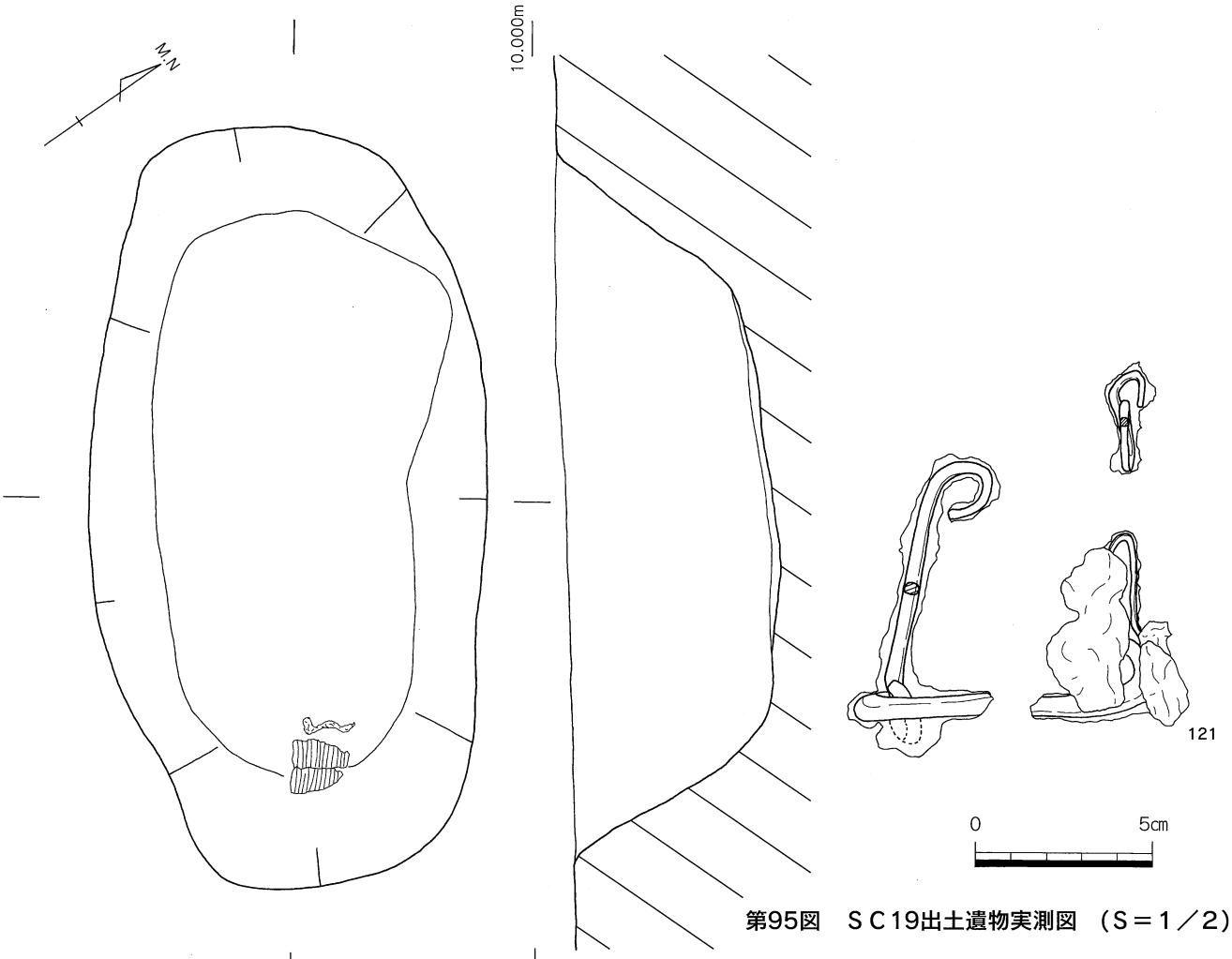
第20表　ＳＣ16出土遺物計測表　　(単位cm　重量g)

番号	種別	器種	長さ	幅		重量	備考
90	馬具	轡(90-1)	19.8	14	－	287.5	鍍金製、馬歯が付着 動物性or植物性の有機質物質が付着
		轡(90-2)	20.8	15	－	308.8	
91	馬具	杏葉	12.9	7.7	－	65.1	鍍金製、鋲･責金具は鍍銀製 動物性or植物性の有機質物資が付着
92	馬具	杏葉	12.2	7.7	－	74.8	鍍金製、鋲･責金具は鍍銀製 動物性or植物性の有機質物資が付着
93	馬具	杏葉	12.4	7.4	－	82.2	鍍金製、鋲･責金具は鍍銀製 動物性or植物性の有機質物資が付着
94	馬具	杏葉	11.8	7.4	－	107.6	鍍金製、鋲･責金具は鍍銀製 動物性or植物性の有機質物資が付着
95	馬具	杏葉	12.7	7.7	－	78.5	鍍金製、表面に針葉樹木が付着 動物性or植物性の有機質物資が付着
96	馬具	杏葉	12.4	7.7	－	82.0	鍍金製、鋲･責金具は鍍銀製 動物性or植物性の有機質物資が付着
97	馬具	杏葉	11.8	7.7	－	82.0	鍍金製、鋲･責金具は鍍銀製 動物性or植物性の有機質物資が付着
98	馬具	雲珠	10	9.8	直径7.4	95.8	鋲･責金具部分は鍍銀製
99	馬具	辻金具	7.1	7	直径4.4	59.7	鋲･責金具部分は鍍銀製
100	馬具	辻金具	6.8	6.8	直径4.4	52.2	鋲･責金具部分は鍍銀製
101	馬具	辻金具	7.1	(5.6)	直径4.4	52.8	鋲･責金具部分は鍍銀製
102	馬具	辻金具	7.2	(6.1)	直径4.7	75.9	鋲･責金具部分は鍍銀製
103	馬具	辻金具	7.6	(7.4)	直径4.8	61.9	鋲･責金具部分は鍍銀製
104	馬具	辻金具	7	7	直径4.5	48.2	鋲･責金具部分は鍍銀製
105	馬具	辻金具	7.2	(5.8)	直径4.7	55.6	鋲･責金具部分は鍍銀製
106	馬具	辻金具	7.1	7	直径4.5	62.4	鋲･責金具部分は鍍銀製
107	馬具	辻金具	7.2	7.1	直径4.8	57.6	鋲･責金具部分は鍍銀製
108	馬具	辻金具	7.2	7.2	直径4.5	47.9	鋲･責金具部分は鍍銀製
109	馬具	辻金具	7	(5)	直径4.4	41.7	鋲･責金具部分は鍍銀製
110	馬具	辻金具	7	7	直径4.5	50.0	鋲･責金具部分は鍍銀製
111	馬具	辻金具	7.1	7	直径4.5	43.6	鋲･責金具部分は鍍銀製
112	馬具	辻金具	7.5	7.3	直径4.8	64.2	鋲･責金具部分は鍍銀製
113	馬具	鉸具	4.4	2.9	－	26.0	鍍金製
114	馬具	鋲	1.8	2×1.2	－	3.0	鍍金製
115	馬具	鋲	1.9	(1.6×1.4)	－	3.0	鍍金製、有機質物資が付着
116	馬具	鋲	1	(1.5×1.7)	－	0.99	鍍金製
117	馬具	鋲	1.2	(1.1×1.2)	－	1.7	鍍金製
118	馬具	鋲	1.9	2.3×2	－	6.7	鍍金製、有機質物資が付着
119	馬具	鋲	1	2.1×2.1	－	2.9	鍍金製
120	馬具	鋲	1.3	2.1×2.2	－	5.5	鍍金製

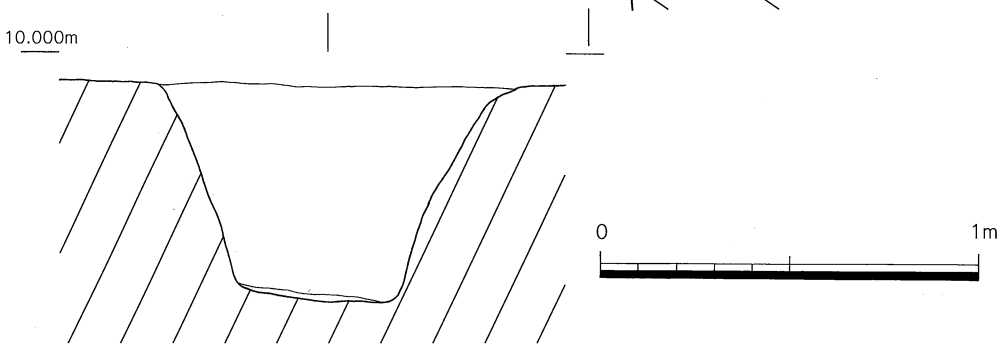
＊カッコ表記は欠損しているために残存値である

■ ＳＣ１９ (第94～95図)

馬歯と轡と考えられる鉄器が出土していることから馬埋葬土坑と考えられる。主軸方向はＳ-55°-Wである。121は轡と考えられるが、錆がひどく不明な部分が多く、非常に雑な造りで引手壺なども曲げて造っただけであり、しかも非常に細く轡として機能していたのか、本当に轡なのか判断しがたいが、馬歯の横で出土していること、形状的に轡としか考えることができないことから素環轡と考えられる。



第95図　ＳＣ19出土遺物実測図　(Ｓ＝１／２)

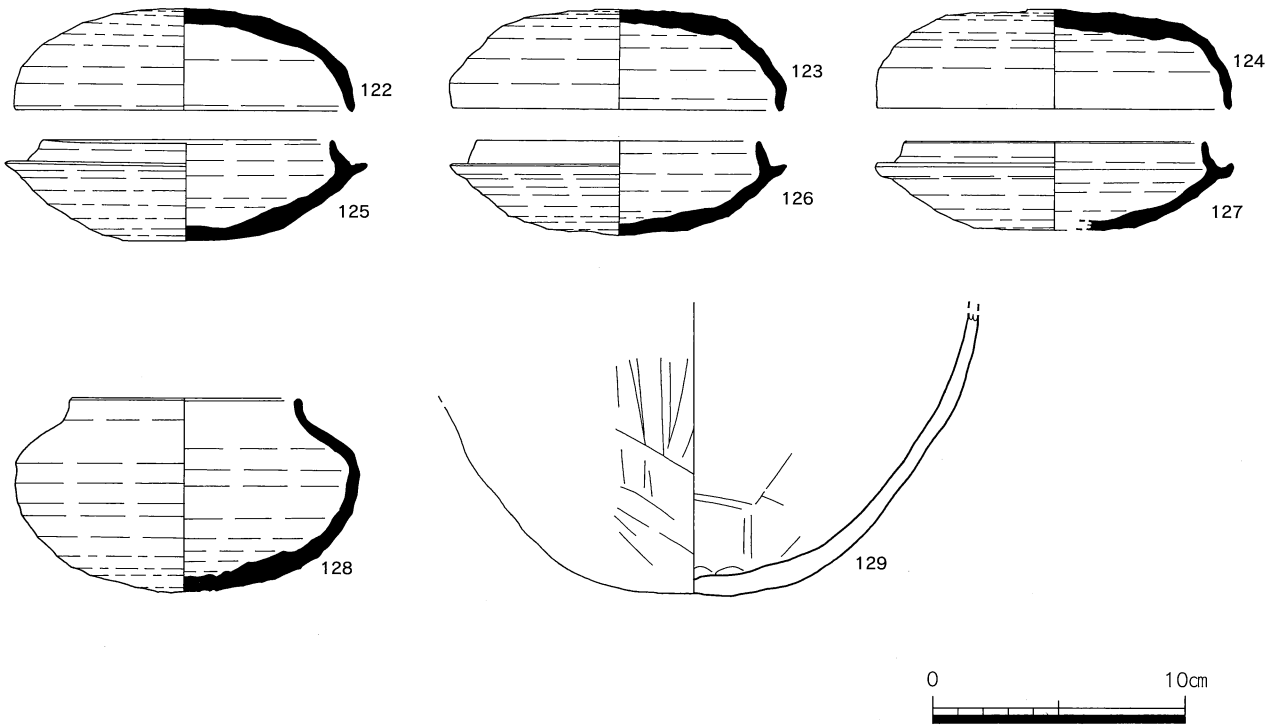


第94図　ＳＣ19平面図・断面図　(Ｓ＝１／20)

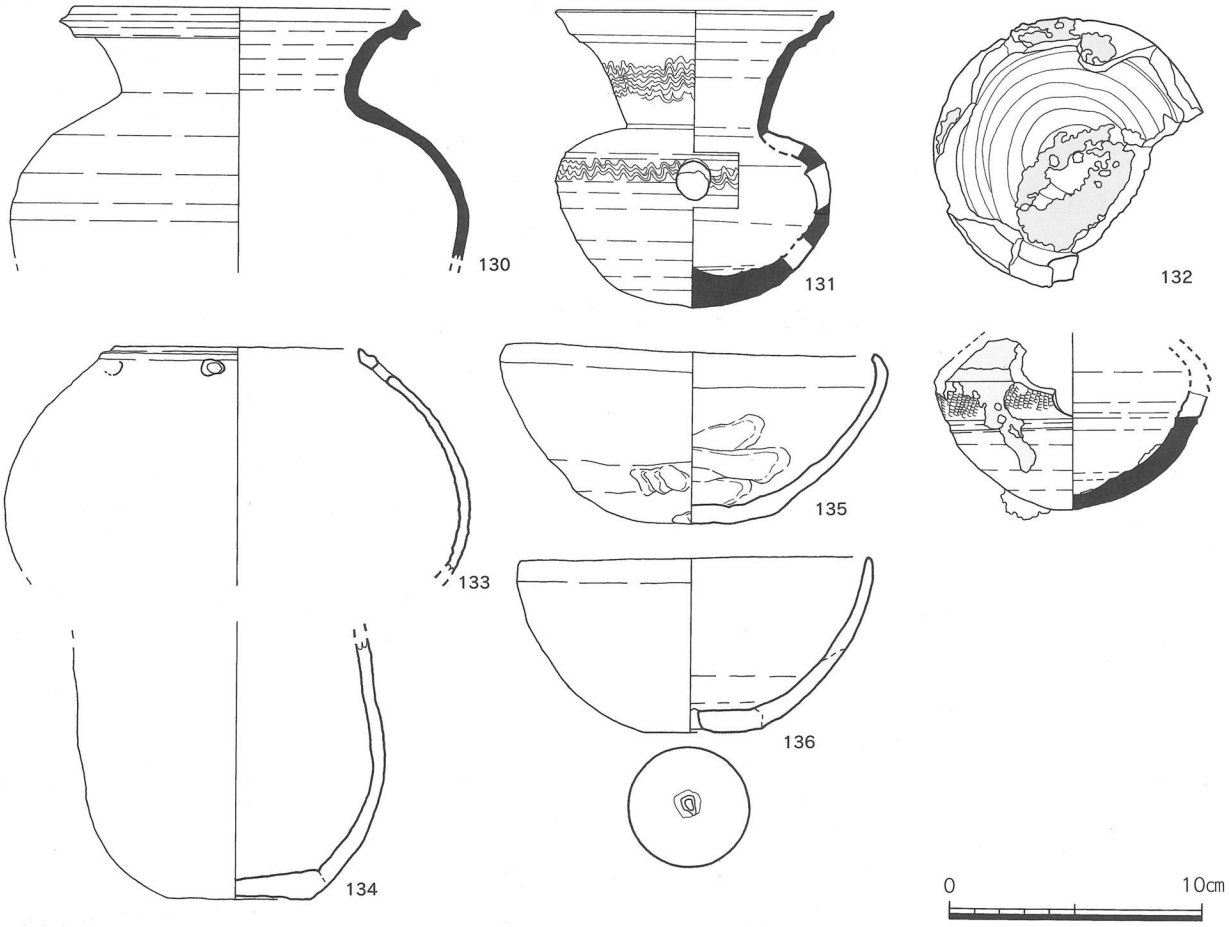
■ **一括遺物** (第96～97図)

調査区の一括遺物である。122～129の須恵器や土師器はＦ区で出土している。須恵器の坏身(126～127)はそれぞれ口径が約11.5cm前後で、坏蓋(122～124)はそれぞれの口径が約14cm前後でTK209型式の古段階と考えられる。128は須恵器の無頸壺である。129は土師器の甕の体部から底部である。130～136の須恵器や土師器はＨ区で出土している。130は須恵器の甕である。131は須恵器のハソウである。頸部と胴部に櫛描波状紋を施す。外面には部分的に自然釉が付着し、内面は同心円の叩きである。132は須恵器のハソウの胴部から底部である。内外面のアミ掛け部分は鉄分が付着していることから転用されたものと推測する。133は土師器の無頸壺で口縁部付近に焼成前に穿孔を施している。1/3しか残存していないが２ヵ所の穿孔を確認できた。その穿孔の上には突帯がみられる。134は土師器の深鉢で胴部から底部のみが残存している。底部はやや上げ底気味である。135、136は土師器の坏である。135は全体的に指頭痕が顕著である。口縁部は内湾し、器高が高い136の口縁部はやや内傾しながら直立気味に立ち上がり、器高が高い。底部は外面から穿孔している。

Ｆ区の一括遺物は須恵器がTK209型式の古段階の６世紀末頃に相当すると考えられる。SD１と時期的に同じであり、遺構に関しても全体的にこの時期に相当していると考えられる。一方、Ｈ区の一括の出土遺物は須恵器や坏から考えると５世紀末から６世紀初頭と考えられる。ほとんどの遺物が第３号墳の周辺の生きている層から出土していることから考えると第３号墳も第２号墳とほぼ同時期といえるのではないかと考えられる。



第96図　山崎下ノ原第１遺跡出土遺物実測図Ⅰ　(S＝1／3)



第97図　山崎下ノ原第１遺跡出土遺物実測図Ⅱ　（S＝1／3）

第21表　山崎下ノ原第１遺跡土坑計測表　（単位cm）

遺構番号	長軸	短軸	深さ	遺構形態	出土遺物
SC1	1.92	1.74	0.59	楕円形	無
SC2	2.4	1.68	0.47	楕円形	無
SC3	1.86	1.39	0.37	楕円形	無
SC6	1.89	1.42	0.6	楕円形	無
SC7	20.8	1.28	0.48	楕円形	無
SC9	1.3	1.04	0.35	楕円形	無
SC10	2.24	1.68	0.37	楕円形	無
SC11	2.0	1.56	0.53	楕円形	無
SC12	2.01	1.52	0.62	楕円形	無
SC13	2.36	2.06	0.37	楕円形	無
SC14	2.2	1.84	0.58	楕円形	無
SC17	－	－	0.27	楕円形	無
SC18	－	－	0.26	楕円形	無
SC20	2.86	1.2	0.44	楕円形	無
SC21	1.5	1.3	0.81	楕円形	無
SC22	－	－	0.45	楕円形	無
SC23	－	－	0.46	楕円形	無
SC24	2.54	1.35	0.7	楕円形	無

＊SC17、18、22、23については調査区外に延びるため計測不能である。
＊計測値は検出面からの値である。

第22表　山崎下ノ原第１遺跡出土鉄器計測表

（単位cm）

番号	遺構	種別	器種	最大長		厚さ		備考
1	2号墳主体部	銅鏡	乳文鏡	8.7		0.2		裏・布繊維（苧麻） 不明な錆を残す
番号	遺構	種別	器種	最大長		厚さ		備考
2	2号墳主体部	大刀		100		0.6		木質残存
32	SD1	鉄刀		21.4		0.3		布繊維付着
39	SD1	刀子		12.1		0.2		木質残存
50	SD2	刀子		13.8		0.2		木質残存
56	SD3	刀子		11.9		0.2		木質残存
60	SD4	鉄刀		34.6		0.5		木質残存・布繊維付着
番号	遺構	種別	器種	最大長				備考
61	SD4	鉄斧	袋状鉄斧	9.3	3.8	1		木質・繊維付着
番号	遺構	種別	器種	最大長	鏃身長	頸部長	茎部長	備考
3	2号墳主体部	鉄鏃	三角形鏃	17.5			7.6	木質・樹皮残存
4	2号墳主体部	鉄鏃	圭頭鏃	18.1			7.7	木質・樹皮残存
5	2号墳主体部	鉄鏃	圭頭鏃	15.7			6.6	木質・樹皮残存
6	2号墳主体部	鉄鏃	三角形鏃	17.1	2.0	6.7	7.8	木質・樹皮残存
7	2号墳主体部	鉄鏃	三角形鏃	15.3	2.1	7.2	6.1	木質・樹皮残存
8	2号墳主体部	鉄鏃	圭頭鏃	16.0	2.0	6.7	7.1	木質・樹皮残存
9	2号墳主体部	鉄鏃	三角形鏃	17.1		7.0	7.4	木質・樹皮残存
17	2号墳周溝内	鉄鏃	圭頭鏃	8.5	2.8		5.7	一部木質残存
18	2号墳周溝内	鉄鏃	無茎三角形鏃	(8.0)				木質残存
19	2号墳周溝内	鉄鏃	長頸鏃	(4.6)				木質残存
33	SD1	鉄鏃	三角形鏃	11.7	6.8		4.8	3本とも木質・樹皮残存
	SD1	鉄鏃	三角形鏃	(11.6)	7.2		(4.4)	
	SD1	鉄鏃	三角形鏃	(9.6)	6.8		(2.4)	
34	SD1	鉄鏃	圭頭鏃	10.1	6.6		3.6	木質・樹皮残存
35	SD1	鉄鏃	圭頭鏃	10.6	7.2		3.3	木質・樹皮残存
36	SD1	鉄鏃	方頭鏃	(9.7)	6.2		3.5	木質・樹皮残存
37	SD1	鉄鏃	柳葉鏃	11.6	6.0	1.7	4.8	木質・樹皮残存
38	SD1	鉄鏃	三角形鏃	(12.9)	4.4	2.1	(6.0)	木質・樹皮残存
47	SD2	鉄鏃		(12.3)	6.1			木質残存
48	SD2	鉄鏃	三角形鏃	(15.1)				木質木質・樹皮残存
49	SD2	鉄鏃	三角形鏃	(17.2)	5.7		(8.1)	木質残存
62	SD4	鉄鏃	長頸鏃	14.8			4.5	木質木質・樹皮残存

＊カッコ表記は欠損しているために残存値である

第３節　まとめ

山崎下ノ原第１遺跡では直線距離にして約100ｍの範囲内の道路幅の調査で滅失古墳を３基、土壙墓５基、馬埋葬土坑６基を確認することができた。しかも現存している檍４・５・６号墳を含めると古墳は６基ということになる。一つの古墳に対して数基の土壙墓や馬埋葬土坑が存在していると考えられると、周辺地形や確認できた遺構の位置や時期関係などからも本遺跡周辺には他に多数の滅失古墳、土壙墓、馬埋葬土坑が存在する可能性がかなり高いのではないかと考えられる。

檍５号墳は周濠に隣接して確認できたSC16の鉄地金銅張製の馬具から６世紀前半頃ではないかと考えられる。県内でも珍しい鉄地金銅張製の馬具がほぼ一式で出土していることからかなりの有力者と考えられ、この地域を治めていた首長が埋葬されているのではないかと考えられる。その墳丘を中心とし、周濠から一定の間隔をあけて従者などの土壙墓が周濠の円と同じ円を描くように配置、展開され、主軸や頭の位置も檍５号墳の中心を向いていると考えられる。SD２～４の３基の土壙墓は出土遺物などからSD２が６世紀末頃、SD３が６世紀末から7世紀初頭、SD４が６世紀後半に造られたと考えられることから、SD４→SD２→SD３の順に造られたと考えられる。第１号墳にはSD１とSC８・15の土壙墓と馬埋葬土坑が付随すると考えることが可能であるが、SD１は主軸が墳丘を向いていないこと、頭の位置が東側と考えられることなどから考えると、他の滅失古墳が存在し、その滅失古墳に付随する可能性が高い。時期的には出土遺物などからSD３よりやや古い時期に造られたと考えられる。SC８・15は位置関係から第１号墳に付随する馬埋葬土坑と考えられる。ほかにSC１・２が存在するが、やや離れていることなどや付随する馬埋葬土坑は古墳の近くに造られていると考えると、他の滅失古墳が存在し、その滅失古墳に付随する可能性が高い。これらのことから調査区(Ｆ区)のすぐ東側にSD１とSC１・２が付随する滅失古墳が存在する可能性が高いのではないかと推測する。SD５とSC19は位置からみると第２号墳に付随するものと考えられるが、SD５とSC19は６世紀後半、第２号墳は５世紀末と時期が違うことから檍６号墳に付随すると考えられるが、やや離れていることから第２号墳や檍６号墳に付随する可能性は低く、調査区(Ｈ区)の西側に他の滅失古墳が存在するのではないかと推測する。SD５の時期はSD３よりやや古く、SD１よりはやや新しい時期に造られたと考えられる。

本遺跡で確認できた遺構や遺物から考えると、第２・３号墳は５世紀末から６世紀初頭で、初期群集墳的な様相を呈しており、この地域の古墳群で古墳が築造された最初ではないかと考えられる。そのあと６世紀前半頃に檍５号墳が築造され、調査で確実な時期が判明しなかったが、構築方法や規模が檍５号墳とほぼ同じであることから檍６号墳も同時期ぐらいではないかと考えられる。第１号墳からは遺物などが出土していないが、周辺で出土した須恵器や付随すると考えられるSC８・15から出土した馬具からは６世紀後半に築造されたのではないかと考えられる。これらのことから第２・３号墳→檍５号墳→檍６号墳→第１号墳の順に築造されたと考えられる。６世紀後半頃になると土壙墓にも墳丘を築造するのに使用していた明黄褐色粘土が使用されていることから、この時期はある程度容易に粘土が入手できた時期になり、６世紀末から７世紀初頭頃の時期には衰退期になっていくのではないかと考えられる。

これらのことから、山崎下ノ原第１遺跡は５世紀末から６世紀末までの約100年間、墓域として存続した古墳群で、檍４・５・６号墳と第１～３号墳の６基がかなり隣接して造られていること、土壙墓、馬埋葬土坑が切り合うことなく数多く存在することから、本遺跡周辺一帯に古墳群が形成されていた可能

性が高く、官道の近くであることが推測されていることや、昔の大淀川の入り江付近であったという立地条件から考えると、政治的、軍事的様相ではなく、むしろ商業的な様相を呈し、この地域を治め繁栄していた一族の墓域ではないかと推測する。現在は檍古墳群下原地区とされた円墳の３基のみであるが、今回の調査で滅失古墳が３基も確認でき合計６基となり、さらに周辺に滅失古墳が存在する可能性が高いこと、檍古墳群とは江田原･麓地区(檍の地名が存在する所)、村角･大島地区、下原地区の総称であり、距離的に下原地区だけでなく、３地区はいずれもかなり離れていることなどからそれぞれ別々の古墳群として認識したほうが良いのではないかと考えられる。そして、県内で確実に金銅張製の馬具が出土したことが分かっているのは西都原古墳群内、百塚原古墳群内、持田49･56号墳、新田原45号墳、一本木横穴の６遺跡にしか過ぎず、今回のように鉄地金銅張製の馬具がほぼ一式、比較的良好な状態で馬埋葬土坑から出土し、記録保存が確実にできているのは県内で唯一といってよい。しかも分析により、獣毛が付着していた可能性が高いが、錆の進行に伴いそれらが解けて中が空洞化した管状の錆のみが残存していることが判明し、装着したまま埋葬されたと考えられ、その他にも馬埋葬土坑が５基も確認できていることから、馬埋葬土坑の観点からみても、好例な遺跡である。近年、県内では馬埋葬土坑や馬具の出土例が増加していることから今後、更なる検討が必要であろう。

砂丘上という特異な立地で調査はかなり困難を極めたが、これだけの遺構や遺物を検出することができた。遺構は想像していたよりも深く、細心の注意は必要だが簡単には崩れないという事がわかり、遺物も立地から考えると塩分が強く鉄器などは残存していないのではないかと考えられていたが、比較的良好な状態で出土した。これは、耕作をするには砂を新たに盛っているために遺構や遺物の破壊が最小限にとどまり、埋まったあと外気に触れることなく何も影響を受けず、一定条件のままいわば保存されていた状態であったからと考えられ、鉄器や銅鏡･有機質物質などの残存状態が比較的良好であったと推測する。このことから、今後、砂丘上だからないのではという先入観を捨て、あるという認識をし、嫌忌せず発掘調査を実施することを提示しておきたい。

＜引用･参考文献＞

・1966 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園クラブ

・1976 『陶邑Ⅰ』大阪府文化財調査報告書第28輯 大阪府教育委員会

・1978 中村浩「和泉陶邑窯の出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会

・1978 『陶邑Ⅲ』大阪府文化財調査報告書第30輯 大阪府教育委員会

・1984 岡安光彦「いわゆる素環の轡について」『日本古代文化研究』古墳文化研究会-ＰＨＡＬＡＮＸ-

・1985 坂本美夫『馬具』考古学ライブラリー34 ニュー・サイエンス社

・1987 千賀久「古墳時代の初期馬葬」『橿原考古学研究所論集』第四 橿原考古学研究所編 吉川弘文館

・1988 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八 吉川弘文館

・1988 千賀久「日本出土の初期馬具の系譜」『橿原考古学研究所論集』第九 吉川弘文館

・1990 財団法人千葉県埋蔵文化財センター『佐倉市大作遺跡』千葉県文化財センター調査報告第172集 千葉県土地開発公社

・1991 『古墳時代の研究』第８巻副葬品 雄山閣出版株式会社

・1992 小野山節「古墳時代の馬具」『日本馬具大鑑』第１巻古代上 日本中央競馬会 吉川弘文館

・1992 日本馬具大鑑編集委員会『日本馬具大鑑』第１巻古代上 日本中央競馬会 吉川弘文館

・1993 桃崎裕輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討」『古文化談叢』第31集 九州古文化研究会

・1988 『宮崎県史』資料編考古2 宮崎県史刊行会

・1994 千賀久「日本出土の初期馬具の系譜２」『橿原考古学研究所論集』第十二 吉川弘文館

・1994 松井章 神谷正弘「古代の朝鮮半島および日本列島における馬の殉殺について」『考古学雑誌』第80巻第１号 日本考古学会

・1995 『北原牧地区遺跡 上園遺跡Ｆ地区』新富町文化財調査報告書第18集 新富町教育委員会

・1995 増田一裕「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号 土曜考古学研究会

・1995 宮代栄一「宮崎県出土の馬具研究」『九州考古学』第70号九州考古学会

・1996 『特別展黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

・1996 宮代栄一「倭人たちの馬装－面繋を中心に－」『特別展黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

・1996 内山敏行「古墳時代の轡と杏葉の変遷」『特別展黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

・1996 宮代栄一「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『特別展黄金に魅せられた倭人たち』 島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

・1996 宮代栄一「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』第9号 肥後考古学会

・1996 『猿野遺跡・萩崎第２遺跡』市道下北方通線改良工事に伴う発掘調査報告書 宮崎市教育委員会

・1997 宮代栄一「古墳時代の面繋構造の復元-Ｘ字脚辻金具はどこにつけられたのか-」『ＨＯＭＩＮＩＤＳ』ＶＯＬＯＯ１ ＣＲＡ

・1997 『宮崎県史』通史編原始･古代1 宮崎県史刊行会

・1998 『大町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第33集 宮崎市教育委員会

・1998 『古墳時代の研究』第６巻土師器と須恵器 雄山閣出版株式会社

・1998 宮代栄一「古墳文化における地域性－九州地方出土の環状鏡板付轡を中心に－」『駿台史学』第102号

・1999 植田隆司「内彎楕円形鏡板轡の馬装」『龍谷史談』第111号

・1999 『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書４ 島根県教育委員会

・2001 松井和幸『日本古代の鉄文化』 雄山閣

・2001 桃崎裕輔「棘葉形杏葉･鏡板の変遷とその意義」『筑波大学先史学･考古学研究』第12号 筑波大学歴史･人類学系

・2001 『間越遺跡』宮崎市文化財調査報告書第48集 宮崎市教育委員会

・2001 『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集 えびの市教育委員会

・2002 今塩屋毅行･松永幸寿「日向における古墳時代中～後期の土師器」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料』 九州前方後円墳研究会実行委員会

・2002 和田理啓「九州における古墳時代の鉄鏃」『考古学ジャーナル』№496 ニュー・サイエンス社

・2002 桃崎裕輔「九州地方における騎馬文化の特質と軍事的背景」『考古学ジャーナル』№496 ニュー・サイエンス社

・2002 『江田原第３遺跡』宮崎市文化財調査報告書第50集 宮崎市教育委員会

・2002 『北中遺跡Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書第51集 宮崎市教育委員会

・2002 甲斐貴充「古墳時代日向の馬埋葬土壙集成」『平成14年度九州考古学会総会 研究発表資料』九州考古学会

・2003 宮代栄一「古墳時代における尻繋構造の復元－馬装が示すもの－」『ＨＯＭＩＮＩＤＳ』ＶＯＬＯＯ３ ＣＲＡ

・2003 橋本達也「副葬鉄器からみる南九州の古墳時代」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会大会事務局

・2003 藤井大祐「南九州鉄鏃集成」『前方後円墳築造周縁域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会大会事務局

第23表　山崎下ノ原第１遺跡出土土器観察表(1)

番号	出土地				法量(cm)		調整等				色調		
	遺構	種類	器種	部位	口経	器高	内面	外面	胎土	焼成	内面	外面	備考
10	2号墳 周濠	須	坏蓋	完形	11.7	4.6	回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	微細な白色粒	良好	灰	灰	
11	2号墳 周濠	土	壺	口縁～底部	11.2	18.8	横方向のミガキ	上位:縦方向のミガキ 下位:斜め方向のミガキ 黒変	5mm程の極暗赤褐色粒 4mm程の浅黄橙粒 1.5mm以下の褐灰浅黄橙色粒 無色透明光沢・黒色柱状光沢粒	良好	橙 にぶい黄橙	橙 にぶい黄橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
12	2号墳 周濠	土	坏	口縁～底部	15.8	7.7	ミガキ	ミガキ(単位不明)	精良	良好	明赤褐	明赤褐	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
13	2号墳 周濠	土	坏	口縁～底部	15.2		ミガキ(単位不明)	ミガキ(単位不明)	精良	良好	橙	橙 褐灰	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
14	2号墳 周濠	土	坏	完形	16.8	6.3	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	上位:ヘラミガキ 下位:横・斜め方向のヘラミガキ	1mm以下の茶褐色、 無色透明光沢・黒色柱状光沢粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
15	2号墳 周濠	土	坏	口縁～底部	17.6	7.7	ヘラ削り	ヘラミガキ	2mm以下の赤褐色粒 微細な黄褐色粒 微細な白色光沢粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
16	2号墳 周濠	土	坏	口縁～底部	14.5	8.2	単位不明	ミガキ(単位不明)　一部黒変	3mm以下の褐色粒・2mm以下の透明光沢粒　微細な黒色光沢粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
20	SD1	須	坏蓋	完形	14.6	3.8	上位:ナデ 下位:回転削り	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	4mm以下の乳白色粒	良好	灰	灰	
21	SD1	須	坏身	完形	12.9	4.0	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	微細～6.5mmの乳白色粒	良好	灰	灰	
22	SD1	須	坏蓋	完形	14.6	4.4	回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	1mm以下の淡黄色粒 2mm以下の白色粒	良好	灰オリーブ	灰	
23	SD1	須	坏身	完形	13.0	4.0	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	2mm以下の乳白色粒	良好	灰	灰オリーブ	
24	SD1	須	坏蓋	完形	13.2	3.9	上位:ナデ 下位:回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	微細～1mmの白色粒 6mmの茶色粒	良好	灰	灰	
25	SD1	須	坏身	完形	11.5	4.2	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	4mm以下の白色粒 2.5mm以下の乳白色粒	良好	灰 灰白	灰 灰白	
26	SD1	須	坏蓋	完形	13.7	4.2	上位:ナデ 下位:回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	1～2mmの灰白粒 4mm程の灰色粒	良好	灰	灰	
27	SD1	須	坏身	完形	12.0	4.2	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	微細～2mmの灰白・乳白色粒	良好	灰	灰	
28	SD1	須	坏蓋	口縁～天井部	13.4	3.5	回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	5mm以下の灰白・淡橙・黒色粒	良好	灰	灰	部分的に赤色顔料 が残る
29	SD1	須	提瓶	口縁～底部				削り　カキ目	5mm以下の灰・灰白色粒	良好	灰黄	灰 浅黄	
30	SD1	土	高杯	口縁～底部	14.3		ミガキ	ミガキ	1mm以下の光沢粒	良好	赤褐	赤褐	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
31	SD1	須	坏身	完形	11.8	4.1	回転ナデ 底部:網目文様	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1～3mmの白色粒	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	
42	SD2	須	坏蓋	口縁～天井部	13.3	3.7	回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	2mm以下の白・黒・茶褐色粒	良好	灰オリーブ 灰	灰オリーブ 灰	

第24表　山崎下ノ原第１遺跡出土土器観察表(2)

番号	出土地				法量(cm)		調整等				色調		
	遺構	種類	器種	部位	口経	器高	内面	外面	胎土	焼成	内面	外面	備考
43	SD2	須	坏身	口縁～底部	11.5	3.8	回転ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1～3mmの白色粒	良好	灰オリーブ オリーブ黒	灰オリーブ オリーブ黒	
44	SD2	須	坏身	完形	12.1	4.3	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	3mm以下の白･灰色粒 2mm以下の暗褐色粒	良好	灰	灰	
45	SD2	須	坏身	完形	11.7	3.6	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	2mm以下の灰褐色粒	良好	灰黄	灰黄	外面:自然釉
46	SD2	須	坏身	完形	11.8	3.8	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1mm以下の黒･白色粒 3mm程の石粒	良好	灰黄	灰黄	
51	SD3	土	高坏	口縁～底部	15.0	10.6	ミガキ	ミガキ	微細な透明光沢粒	良好	橙	橙 にぶい橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
52	SD3	土	高坏	口縁～底部	14.5	8.2	ミガキ	ミガキ		良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
53	SD3	土	高坏	口縁～底部	13.6	8.5	ミガキ	ミガキ　指頭痕	1mm以下の茶褐･黒褐色粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
54	SD3	土	壺	完形	11.5	9.6	上位:横方向のナデ 下位:ナデ	ナデ　スス付着	1mm程の乳白粒 2～4mmの茶褐色粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
55	SD3	土	坏身	口縁～底部	12.7	4.7	上位:ナデの後、ミガキ (単位不明) 下位:ナデ	上位:横方向のミガキ 下位:横･斜め方向のミガキ	3mm以下の茶褐色粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
57	SD4	須	壺	口縁～胴部	21.8	9.7	上位:横方向のナデ 下位:同心円叩き	上位:横方向のナデ 下位:格子目叩き	3mm以下の白色粒	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	内外面:自然釉
58	SD4	須	坏蓋	口縁～天井部	15.3	4.9	回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	1～6mmの灰･灰白色粒	良好	灰	灰	
59	SD4	土	坏	完形	15.5	5.5	横方向のナデ	横方向のナデ	無色透明光沢粒	良好	橙 黄灰	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
63	SD5	土	坏身	口縁～底部	12.9	4.9	ミガキ	ミガキ	2mm以下の褐色粒 微細な透明光沢･黒色粒	良好	にぶい黄橙	明黄褐	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
64	SD5	土	坏身	ほぼ 完形	13.4	5.2	ミガキ	ミガキ	1mm以下の黒･褐色粒	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
65	SD5	土	坏身	口縁～底部	12.2	5	ナデ	上位:ナデ 下位:横･斜め方向のミガキ	1mm以下の黒色粒	良好	橙	橙 オリーブ黒	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
66	SD5	土	坏身	口縁～底部	15.0	5.1	ミガキ	上位:ミガキ 下位:調整不明	2mm以下の褐･茶色粒	良好	橙	黄橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
67	SD5	土	坏身	口縁～底部	11.9	4.5	ミガキ	ミガキ	3.5mm以下の赤褐色粒 4mm以下の褐色粒 1mm以下の透明光沢粒	良好	橙	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
68	SD5	土	坏蓋	口縁～天井部	14.1	5.2	ミガキ	ミガキ	2mm以下の褐色粒	良好	橙 明黄褐	橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す
69	SD5	土	壺	ほぼ 完形	9.6	16.7	工具によるナデ 横･斜めの方向の	上位:縦方向のミガキ 下位:横方向のミガキ 底部:ナデ	1mm以下の黒･褐色粒 微細な光沢粒	良好	淡黄	淡黄橙	内外面:風化著しい 赤色顔料を施す

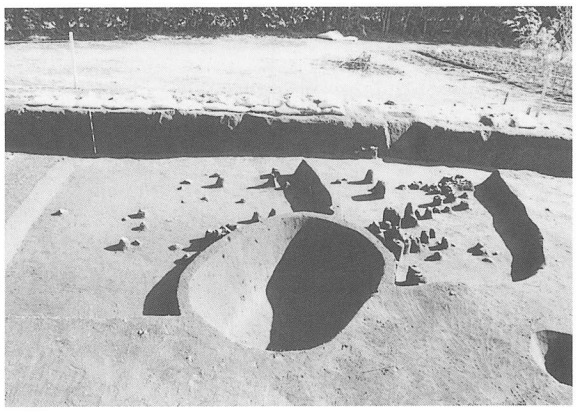
第25表　山崎下ノ原第１遺跡出土土器観察表(3)

番号	出土地				法量(cm)		調整等				色調		
	遺構	種類	器種	部位	口経	器高	内面	外面	胎土	焼成	内面	外面	備考
70	SC5	須	坏身	口縁～底部	12.0	4.0	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	7mm以下の灰白粒(1個) 2.5mm以下の灰白粒	良好	灰	灰	
122	一括	須	坏蓋	口縁～天井部	13.4	4.0	上位:ナデ 下位:回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	3.5mm以下の乳白色粒	良好	灰	灰	ヘラ記号
123	一括	須	杯蓋	口縁～天井部	13.2	4.0	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1mm以下の灰白色粒	良好	灰	灰	
124	一括	須	杯蓋	口縁～天井部	14.0	3.9	回転ナデ	上位:ヘラ削り 下位:回転ナデ	3mm以下の白･灰白色粒	良好	灰	灰	
125	一括	須	坏身	口縁～底部	11.2	3.8	回転ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1mm以下の灰白粒	良好	灰オリーブ	灰	
126	一括	須	坏身	口縁～底部	11.9	3.5	上位:回転ナデ 下位:ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1mm以下の灰白･灰色粒	良好	黄灰	黄灰 灰白	
127	一括	須	坏身	口縁～底部	11.5	4.0	回転ナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	3mm以下の灰白粒	良好	灰	灰オリーブ	外面:自然釉
128	一括	須	壺	完形	9.0	7.7	横方向のナデ	上位:回転ナデ 下位:ヘラ削り	1mm以下の灰白粒	良好	灰	灰白 灰	
129	一括	土	壺	胴部～天底部			斜め方向の工具ナデ	上位:縦方向のナデ 下位:斜め方向のナデ	2～4mmの茶褐･白色粒	良好	灰	灰	
130	一括	須	壺	口縁～胴部上	14.4		上位:回転ナデ 下位:あて具痕(同心円)	回転ナデ	3mm以下の乳白粒	良好	灰オリーブ	灰	内外面(部分的):自然釉
131	一括	須	ハソウ	ほぼ 完形	11.1	11.9	横方向のナデ	横方向のナデ　櫛描波状文	1.5mm以下の黒色粒	良好	黄灰 黄褐	黄灰 黄褐	内外面:自然釉
132	一括	須	ハソウ	底部			横方向のナデ	縦方向のナデ	2.5mm以下の黒色粒	良好	灰	灰黒	内外面(部分的):鉄分付着 外面:自然釉
133	一括	土	壺	口縁～胴部下	9.6		ナデ	ナデ	2mm以下の褐･灰褐･白色粒	良好	黄灰 浅黄橙	にぶい橙	外面:風化著気味 穿孔(2カ所)
134	一括	土	深鉢	胴部～底部			ナデ	ナデ	4mm以下の褐･灰色粒	良好	橙	橙	内外面:風化著気味
135	一括	土	坏	口縁～底部	14.7	7.1	ナデ　指頭痕	ナデ　指頭痕　スス付着	5mm以下の褐･白色粒	良好	橙	橙	内外面:風化著気味
136	一括	土	坏	口縁～底部	13.8	7.2	ナデ　黒変	ナデ　黒変	3mm以下の灰褐･灰色粒 1mm以下の無色透明光沢粒	良好	灰橙	灰橙	外面:風化著気味 穿孔(1カ所)

図版1

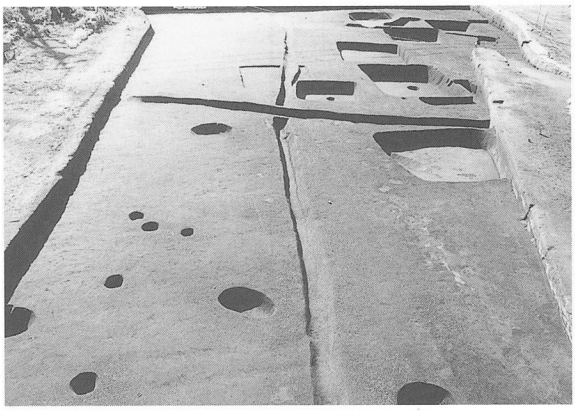
A区完掘状況

C区完掘状況

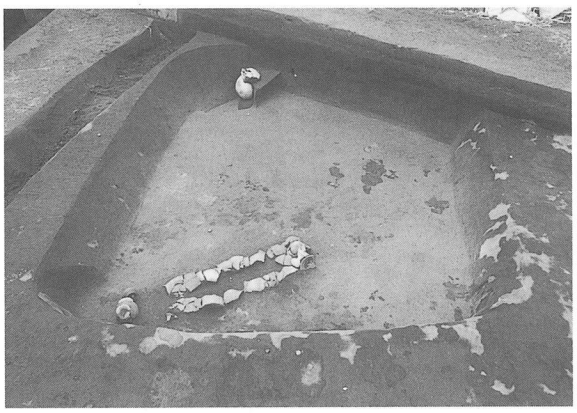


C区SA1・2及びSC1完掘状況

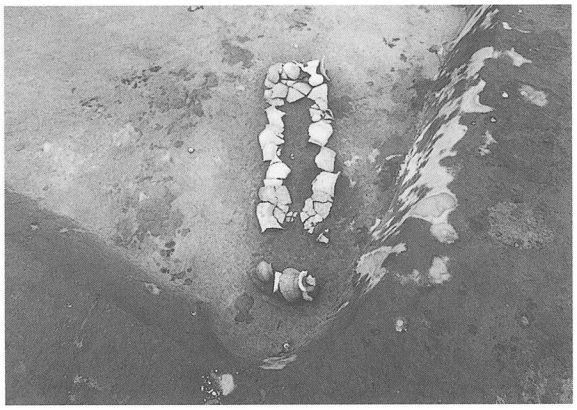
C区SC1遺物出土状況



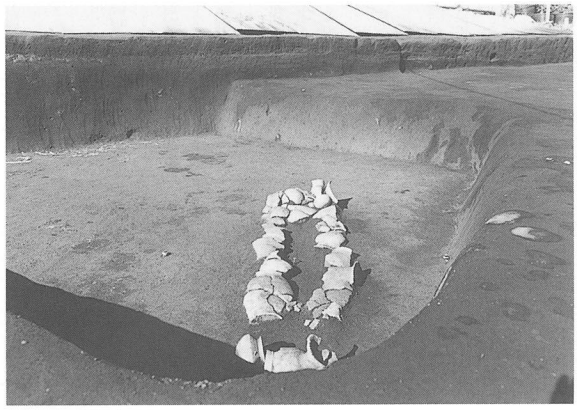
D区完掘状況



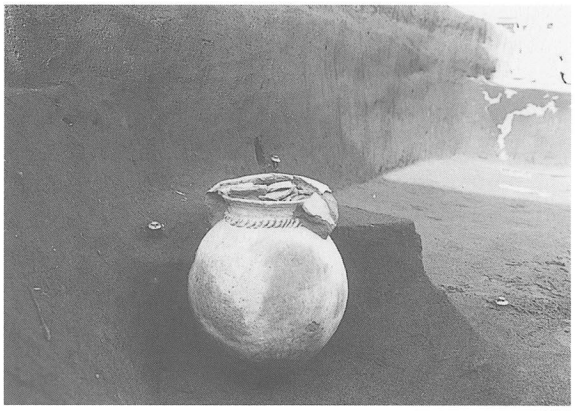
D区SA4(手前:SD2)



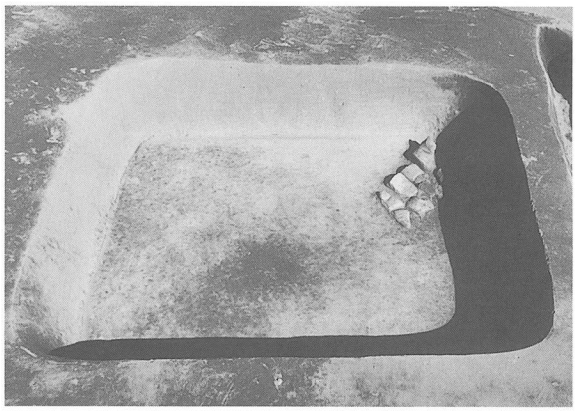
D区SD2検出状況



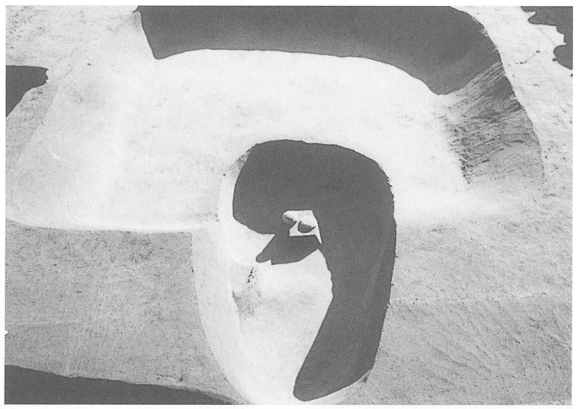
D区SD2検出状況



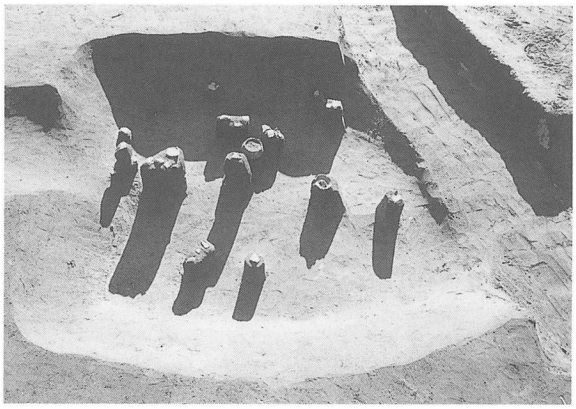
D区埋甕出土状況



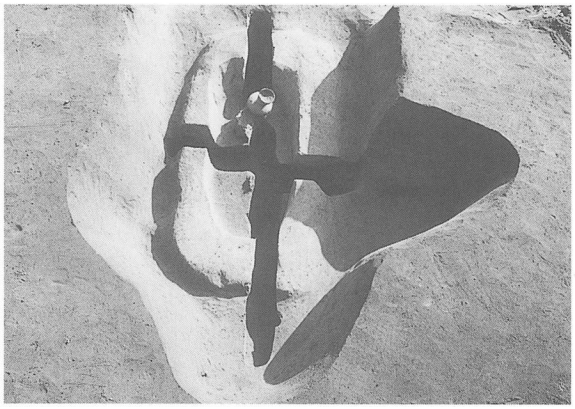
D区SA5遺物出土状況



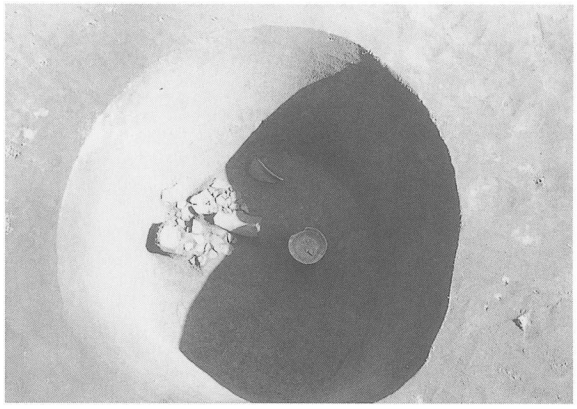
D区SA9完掘状況及びSD1遺物出土状況



E区SA2遺物出土状況

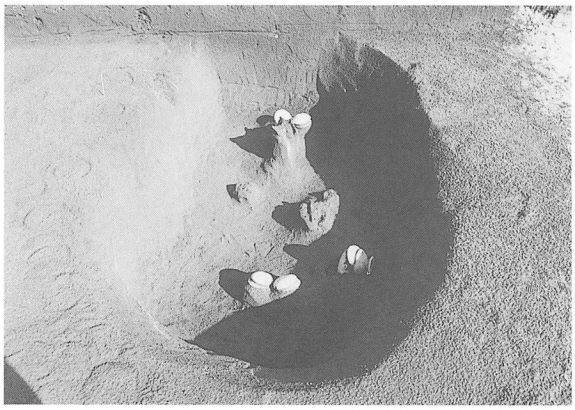


E区SD1遺物出土状況



E区SC1遺物出土状況

F区完掘状況

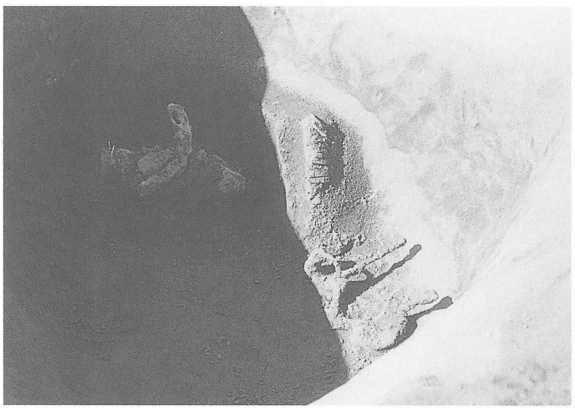


F区SD1遺物出土状況

図版3

F区SC5馬具出土状況

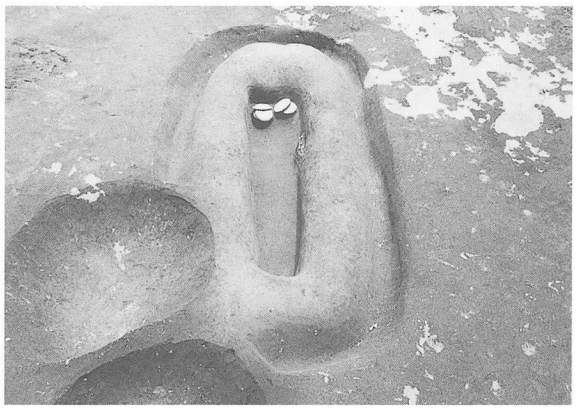
F区SC8馬具出土状況



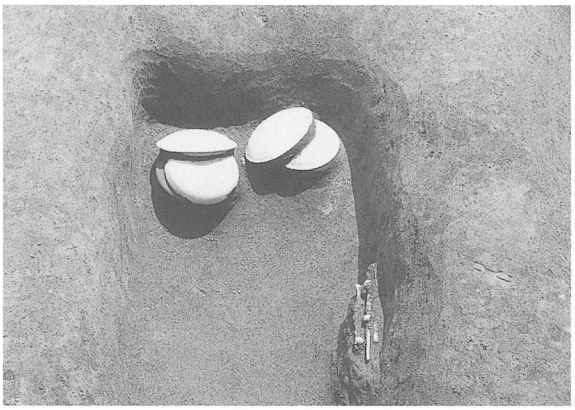
F区SC8馬具出土状況

G区完掘状況

G区檍5号墳周濠完掘状況

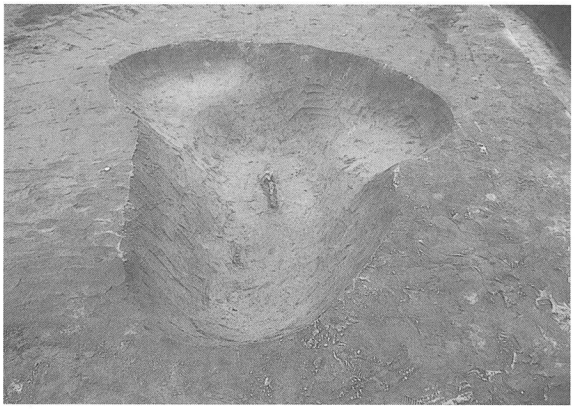


G区SD2完掘状況

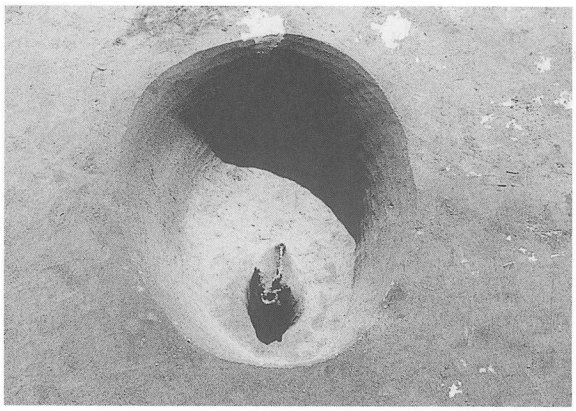


G区SD2遺物出土状況

G区SD3遺物出土状況



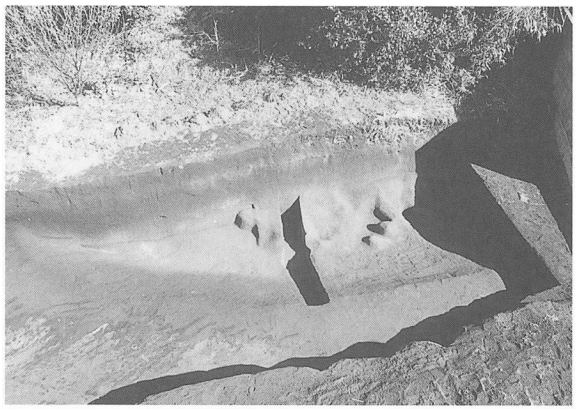
G区SD4遺物出土状況



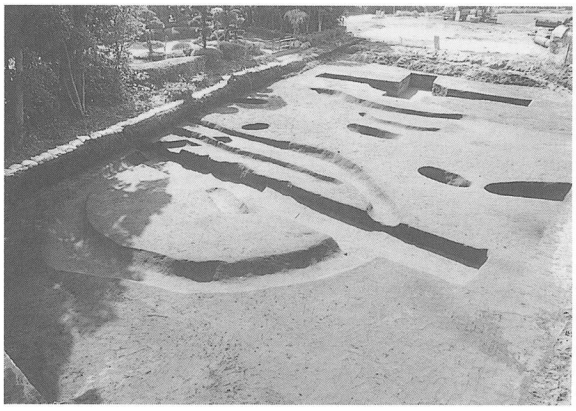
G区SC15馬具出土状況

G区SC16馬具出土状況

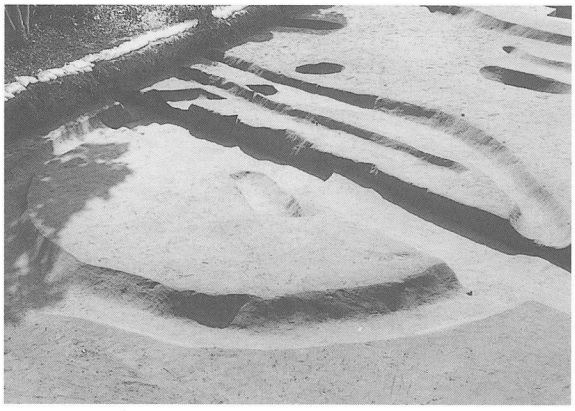
G区SC16馬具出土状況



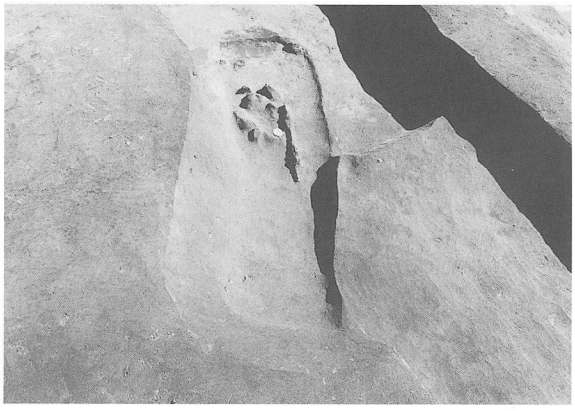
H区檍6号墳周濠完掘状況



H区完掘状況



H区第2号墳完掘状況



H区第2号墳主体部遺物出土状況